
愛知県新城市
新城開府450年記念事業
第33回
全国
山城サミット
新城大会
第３３回全国山城サミット
新城大会
令和８年１１月２８日（土）～２９日（日）

第33回全国山城サミット新城大会の概要

【日時】令和8年11月28日(土)～29日(日)
【会場】新城文化会館、長篠城、亀山城、古宮城、新城城
【主催】新城市、新城市教育委員会、一般財団法人自治総合センター
【開催内容】

11月28日(土)

◎全国山城サミット連絡協議会総会

①オープニングアトラクション
長篠陣太鼓
長篠城学習発表(新城市立鳳来中部小学校)

②基調講演
講師:小和田哲男氏(静岡大学名誉教授)
演題:「三遠南信の戦国時代～今川・武田・徳川の戦い」

③シンポジウム
テーマ:「東三河の山城～新城を中心に」
パネラー:千田嘉博氏(名古屋市立大学高等教育院教授)
平山優氏(健康科学大学特任教授)

11月29日(日)

④お城探訪ツアー
新城城ツアー(新城城⇒大善寺⇒永住寺)
長篠城ツアー(長篠城⇒設楽原馬防柵)
作手ツアー(亀山城⇒古宮城)

④記念講演会
講師:柴裕之氏(東洋大学非常勤講師)
演題:「戦国期奥平家の動向と信昌・亀姫」

⑤記念音楽祭
出演:奥三河音楽連盟

⑥山城など関連ブース出展

⑦演能
出演:新城能楽社

⑧火縄銃演武
出演:長篠・設楽原鉄砲隊

⑨企画展
『しんしろの城～新城』 設楽原歴史資料館
『しんしろの城～鳳来』 長篠城址史跡保存館
『しんしろの城～作手』 作手歴史民俗資料館



▲新城町繁昌之図『三河国名所絵図』より作画

新城開府450年記念事業

第33回 全国山城サミット 新城大会

歴史に学び、未来へつなぐ。

山の湊 新城に 山城が集う。

2026年11月28日(土)/29日(日)

記念講演シンポジウム
著名な講師による
ここだけの講演や
スペシャル対談

お城探訪ツアー
新城のお城、
作手の山城を巡る
ガイド付きツアー

音楽と芸能
音楽祭と祭礼能
新城の伝統文化に
触れる

火縄銃演武
轟く銃声音
大迫力の演武を
観覧する

ブース出展 山の湊ミニ軽トラ市
グルメと特産品
歴史を学べる
楽しいブース

2日間、多彩なプログラムで城の魅力を体感！

詳細はこちら 新城市公式HP

クラファン型ふるさと納税寄附募集！

会場：愛知県新城市 新城文化会館内ほか

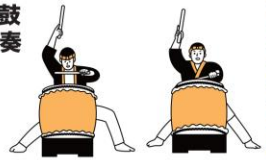
主　催：新城市/新城市教育委員会/一般財団法人自治総合センター
連絡先：新城市教育委員会 歴史文化課　☎0536-23-7610　✉rekishi@city.shinshiro.lg.jp

（挿絵）「新城街繁昌之図」を改変

11/28(土) 山城サミット新城大会 第1日 新城文化会館 大ホール

13:00 オープニング式典

13:15 オープニングアクト
- 鳳来中部小学校の児童による発表
- 長篠陣太鼓による演奏



14:00 基調講演
「三遠南信の戦国時代 今川・武田・徳川の戦い」
当日先着順/無料
講師 小和田哲男（おわだてつお）氏



©今井一詞

15:30 シンポジウム
「東三河の山城 新城を中心に」
当日先着順/無料
講師 千田嘉博（せんだよしひろ）氏、平山優（ひらやまゆう）氏



千田嘉博氏



平山優氏

撮影：畠中和久氏

17:00 サミット宣言・次期開催地挨拶

会場アクセス
- お車で
  新東名高速道路「新城IC」より約10分
  ※駐車場に限りがございますので、できるだけ乗り合わせでご来場ください。
- 電車で
  JR飯田線「新城駅」より徒歩約10分

11/29(日) 山城サミット新城大会 第2日 新城文化会館ほか

8:30 お城探訪ツアー（約150分/移動時間含む）
①新城城コース(徒歩)
要予約/先着20名程/無料
②作手山城コース（バス）
要予約/先着20名程/無料

10:00 山城サミット新城大会開催
記念音楽祭（大ホール）
奥三河音楽連盟による演奏 無料
ブース出展（展示室、大会議室 ほか）
山城サミット連絡協議会関係団体等による出展（15:00まで）
山の湊ミニ軽トラ市（はなのき広場）
協力/新城市商工会（14:00まで）

11:00 火縄銃演武（はなのき広場）



11:30 新城伝統芸能（小ホール）
「祭礼能」 無料

13:00 記念講演（小ホール）
「戦国期奥平家の動向と信昌・亀姫」
要予約/有料
講師 柴裕之（しばひろゆき）氏



©KADOKAWA

14:45 火縄銃演武（はなのき広場）
「山城サミット盛会礼射」
協力/長篠・設楽原鉄砲隊

要予約イベントのご案内

10月1日(木)からお申し込み開始

- お城探訪ツアー ①新城城コース ②作手山城コース
  ※新城市公式HP（表面のQRコード）からご予約下さい。
- 記念講演
  「戦国期奥平家の動向と信昌・亀姫」 講師 柴裕之（しばひろゆき）氏
  ※事前販売の講聴券（1,000円）をご購入ください。現金のみ。

販売
新城文化会館/新城市役所本庁4階 歴史文化課
新城市設楽原歴史資料館/新城市長篠城址史跡保存館
※郵送販売（現金書留）でのお取り扱いもございます。
詳しくは、新城市公式HP（表面のQRコード）をご覧下さい。

愛知県新城市の主な城舘

長篠城(国史跡)　日本100名城の城

所在地／愛知県新城市長篠字市場
時期／永正5年(1508)～天正4年(1576)
城主／菅沼元成・・・・・奥平信昌
概要／今川家の家臣であった菅沼元成によって永正5年(1508)に築城された。その特徴は豊川と宇連川の2本の大河の合流地点に築かれていることである。奥三河の重要拠点の一つとして考えられ、今川氏、武田氏、徳川氏が奪い合い、その結果、天正3年(1575)に長篠・設楽原の戦いへと繋がっていった。主な遺構として曲輪や土塁、空堀、井戸などが残されている。

古宮城(市史跡)　続日本100名城の城

所在地／愛知県新城市作手清岳字宮山
時期／元亀2年(1571)～天正元年(1573)
城主／小幡又衛門、甘利左衛門、大熊備前守
概要／元亀2年(1571)に武田信玄が築城しその縄張りを重臣馬場信春が行った。徳川流の縄張りも混在しており、後に徳川家による改修が行われた可能性も残されている。地形に応じて、土塁、竪堀や横堀、曲輪、虎口、馬出、土橋などが配置され、中世の山城の面影をほぼ完全な形で残している。

宇利城(県史跡)

所在地／愛知県新城市中宇利字仁田
時期／文明年間～享禄2年(1529)
城主／熊谷重実・・・実長
概要／三河国統一を目論む松平清康が享禄2年(1529)に宇利城を攻めた。大手口や搦手方面から猛攻を加えるなか、家臣の裏切りによって落城。後に井伊谷三人衆の近藤家の居城となった。主な遺構として曲輪や虎口、堀、井戸などが残されている。

野田城(市史跡)

所在地／愛知県新城市豊島字本城
時期／永正13年(1516)～天正18年(1590)
城主／菅沼定則－定村－定盈
概要／菅沼定則によって永正13年(1516)に築城された。この時期、東三河では多くの城が築かれたため、今川氏による影響があった可能性がある。その縄張りは連郭式とよばれ、舌状台地という地形をうまく利用した縄張りを持っている。武田信玄がその生涯で行った最後の城攻めの舞台ともなった。主な遺構として曲輪や土塁、空堀、虎口、土橋、井戸などがある

大野田城(市史跡)

所在地／愛知県新城市野田字幹徳
時期／応永年間～元亀年間
城主／城所浄古齋・・・菅沼定盈
概要／富永氏の出城として城所浄古齋の砦であった。その後、野田城主であった菅沼定盈が今川氏真の攻撃を受け、野田城は大破。野田城を修復する間、この砦を改修して大野田城と改めたとされる。元亀年間には武田氏の攻撃を受け、定盈は城に火をかけて逃れた。主な遺構として、土塁や堀などが遺されている。

新城城(市史跡)

所在地／愛知県新城市字東入船
時期／天正4年(1576)～明治2年(1869)
城主／奥平信昌、菅沼定実から定長に至る11代(7，000石)
概要／長篠・設楽原の戦いの後、長篠城主奥平信昌は郷ケ原に新たな城を築いた。近くにあった新城古城に対して新城(しんしろ)城と呼ばれるようになった。この城で家康の娘亀姫を迎えるが、天正18年(1590)に関東へと移っていった。江戸時代に入り、野田城主であった菅沼定盈の孫である定実が新城を治めることとなり、新たに新城陣屋を置いた。主な遺構として堀と土塁が遺されている。

石田城(市史跡)

所在地／愛知県新城市石田字西金国
時期／天正18年(1590)～慶長5年(1600)
城主／片桐半右衛門

概要／吉田城主池田輝政の家老片桐半右衛門が築いたとされている。豊川と野田川の合流地点に築かれている城であるが、新城城と合わせて半右衛門が管理しており、ここに新たに城を築いたことは謎とされている。主な遺構として曲輪、堀、土塁が遺されている。

大谷城(市史跡)

所在地／愛知県新城市字上平井字大谷(推定地)
時期／16世紀前半頃
城主／菅沼定廣－定継
概要／田峯城主であった菅沼定廣が築いた城とされ、その位置は伝承地として今に伝えられている。奥三河の山間地に勢力を置いた田峯菅沼氏が平野部に築城した初めての城。東の長篠城、西の野田城のほぼ中間地に位置し、一族に守られながら平野部へと進出した田峯菅沼氏の動きを知る上で重要な城跡であるが、場所がよく分かっていない。

柿本城(市史跡)

所在地／愛知県新城市下吉田字柿本
時期／永禄11年(1568)～
城主／鈴木重勝－重時－重好
概要／井伊谷三人衆の一人であった鈴木重時の城である。比高差70mほどの山の上に築かれているが、土塁などはなく、防御性は低いと考えられている。奥三河と遠州地域を結ぶ街道ににらみをきかせるような場所に立地している。主な遺構として曲輪、堀がある。

亀山城

所在地／愛知県新城市作手清岳字城山
時期／応永～天正年間
慶長7年(1602)～15年(1610)
城主／奥平貞俊～貞能、松平忠明
概要／応永31年(1424)に奥平貞俊が築城したもので、以降5代にわたって山家三方衆の奥平氏の居城となったとされている。慶長7年(1602)から8年間、松平忠明を城主として迎え、作手藩17，000石の中核として栄えた。主な遺構として曲輪や土塁、空堀、虎口などがある。

川尻城

所在地／愛知県新城市作手高里字城山
時期／応永31年(1424)～
城主／奥平八郎左衛門－但馬守
概要／天授年間(1375～80)に群馬県より移住した奥平貞俊がこの地を選び築城したが、やがて手狭となったため、亀山城へとその拠点を移していったという。

塞之神城

所在地／愛知県新城市作手清岳字本城
時期／元亀年間～
城主／不明
概要／元亀年間(1570～72)に奥平家との和睦にあたって武田氏によって築かれたとも、それ以前に米福長者によって築かれたとも伝えられている。東側に古宮城を見下ろすことができるという位置関係から、古宮城の背後を抑えるために築かれたという説もある。主な遺構として曲輪や土塁、虎口、竪堀がある。

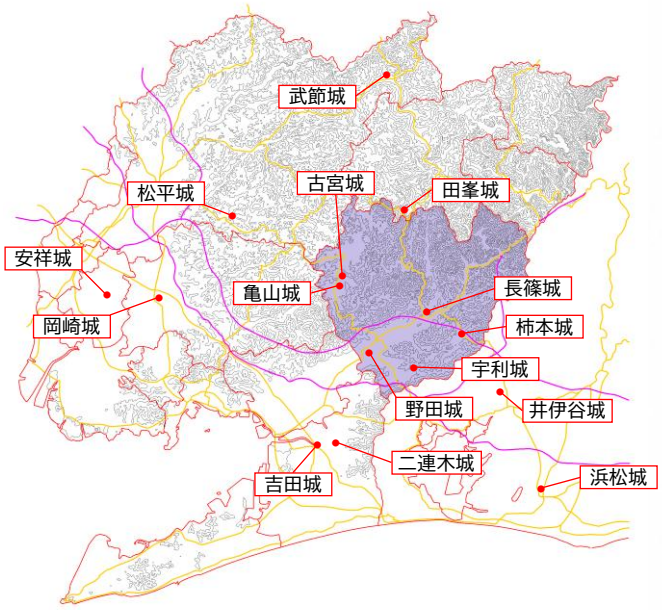
文殊山城

所在地／愛知県新城市作手清岳字見徳
時期／元亀年間～
城主／不明
概要／亀山城主奥平氏の砦で元亀年間(1570～72)に武田氏との和睦のあかしとして塞之神城とともに築くはずであったが、延引したため武田氏からの催促で、一夜にしてこれを築いたため、一夜城とも呼ばれたと伝えられている。主な遺構として曲輪、土塁、虎口や横堀などが残されている。

設楽原古戦場(市史跡)

所在地／愛知県新城市東郷地区一帯
時期／天正3年(1575)5月21日
概要／織田信長、徳川家康連合軍と武田勝頼の戦いが行われた。北に雁峯山、南に豊川に囲まれ、中央を流れる連吾川の両サイドには比高差20m程度の台地が舌状に突き出ており、歴史にその名を刻む古戦場としては意外に狭い印象を持つだろう。この地で連合軍38，000人、武田軍15，000人が激突し、両軍合わせて15，000人の戦死者が出たと伝えられている。信玄塚や馬防柵等の史跡が点在している。

新城市内の主な城郭


武節城
松平城
古宮城
田峯城
安祥城
亀山城
長篠城
岡崎城
柿本城
宇利城
野田城
井伊谷城
二連木城
吉田城
浜松城


島田城
川尻城
賽之神城
古宮城
文殊山城
亀山城
井代城
大野城
医王寺山砦
天神山陣所
竹広陣屋
大通寺山陣所
来迎松城
姥ヶ懐砦
大谷城
君ヶ臥床砦
長篠城
鳶ヶ巣山砦
新城城
中山砦
柿本城
石田城
川路城
久間山砦
岩廣城
野田城
新城古城
大野田城
千歳野舘
宇利城
比丘尼城
五葉城



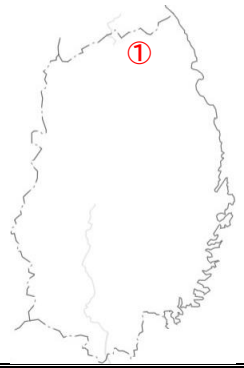
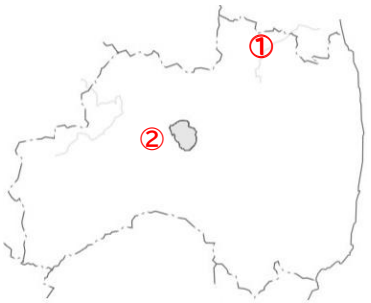
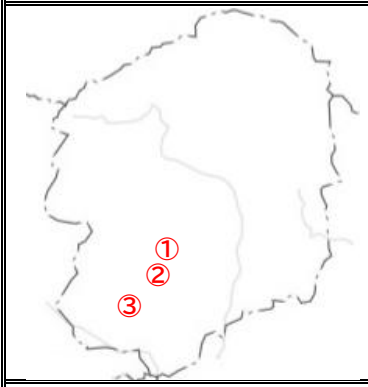
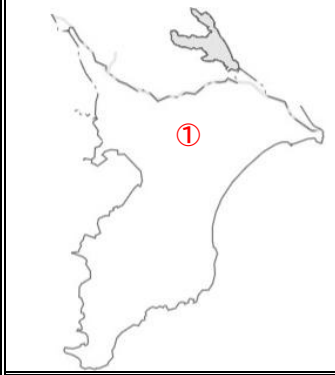
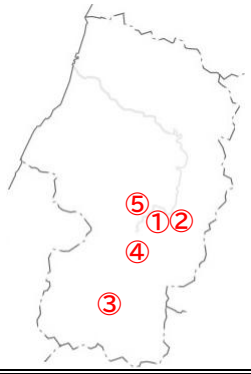
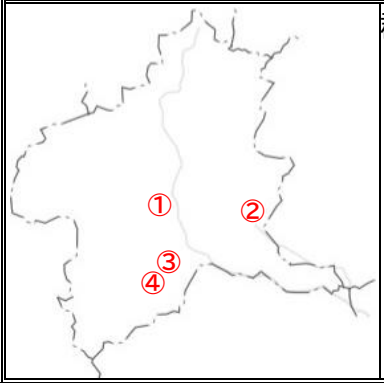
全国山城サミット連絡協議会
加盟城郭の紹介

加盟団体　117　加盟城郭　183

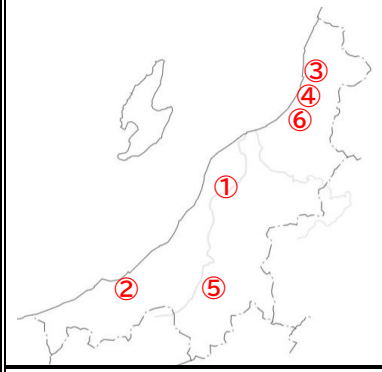
※本紹介については各加盟団体より原稿及び写真・図版の提供を受け、
新城市教育委員会において編集を行いました。
各加盟団体事務局のご協力に深謝いたします。
お城巡りをされる方はマナーをお守りください。

ホームページへリンク　Google Map へリンク　目次にもどる

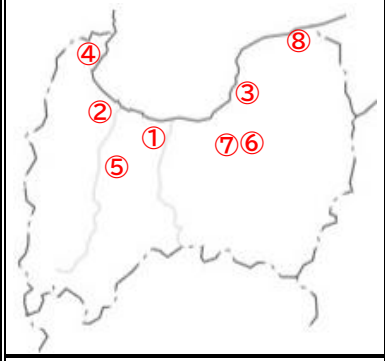
全国山城サミット連絡協議会加盟城郭の紹介　目次

<table>
<tr>
<td>
</td>
<td>岩手県
①九戸城跡</td>
<td>
</td>
<td>福島県
①桑折西山城跡
②向羽黒山城跡</td>
<td>
</td>
<td>埼玉県
①花園城跡</td>
</tr>
<tr>
<td>
</td>
<td>秋田県
①脇本城跡</td>
<td>
</td>
<td>栃木県
①西方城跡
②皆川城跡
③唐沢山城跡</td>
<td>
</td>
<td>千葉県
①本佐倉城跡</td>
</tr>
<tr>
<td>
</td>
<td>山形県
①長谷堂城跡
②成沢城跡
③舘山城跡
④中山城跡
⑤左沢楯山城跡</td>
<td>
</td>
<td>群馬県
①箕輪城跡
②金山城跡
③平井城跡
④金山城跡</td>
<td>
</td>
<td>神奈川県
①河村城跡</td>
</tr>
</table>

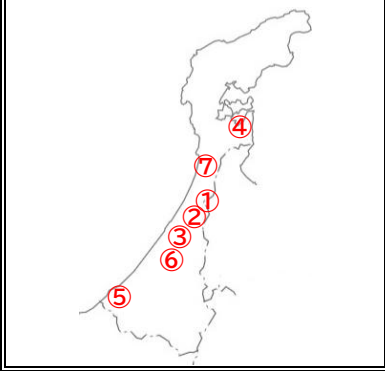
全国山城サミット連絡協議会加盟城郭の紹介　目次



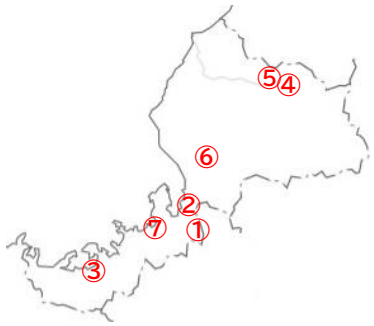
新潟県
- ①栃尾城跡
- ②春日山城跡
- ③村上城跡
- ④平林城跡
- ⑤坂戸城跡
- ⑥鳥坂城跡



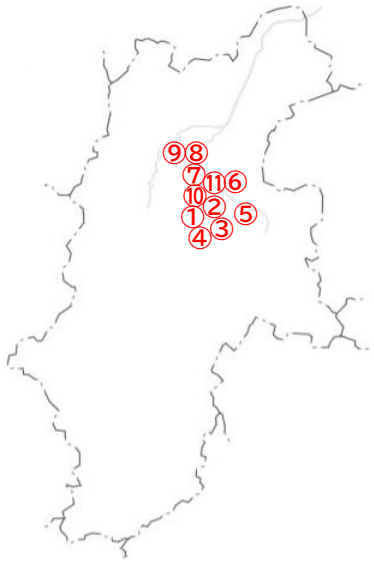
富山県
- ①白鳥城跡
- ②守山城跡
- ③松倉城跡
- ④森寺城跡
- ⑤増山城跡
- ⑥千石山城跡
- ⑦茗荷谷山城跡
- ⑧宮崎城跡



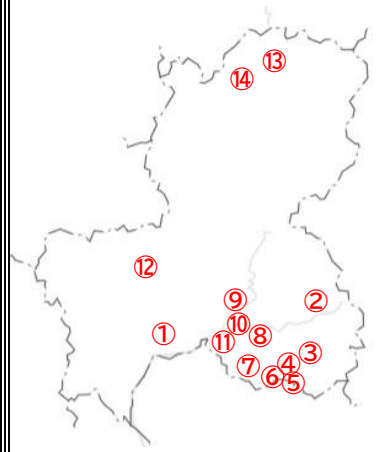
石川県
- ①松根城跡
- ②切山城跡
- ③高尾城
- ④七尾城跡
- ⑤大聖寺城跡
- ⑥鳥越城跡
- ⑦末森城跡



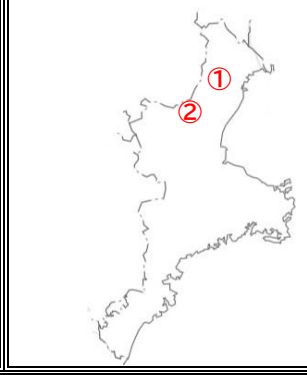
福井県
- ①玄蕃尾城跡
- ②金ヶ崎城跡
- ③後瀬山城跡
- ④白山平泉寺旧境内
- ⑤村岡山城跡
- ⑥杣山城跡
- ⑦佐柿国吉城址



長野県
- ①林城跡(大城・小城)
- ②桐原城跡
- ③山家城跡
- ④埴原城跡
- ⑤虚空蔵城跡
- ⑥砥石城跡・米山城跡
- ⑦荒砥城跡
- ⑧屋代城跡
- ⑨小坂城跡
- ⑩入山城跡
- ⑪葛尾城跡

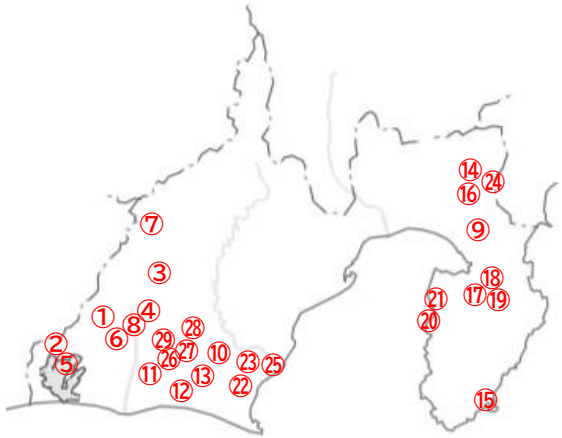


岐阜県
- ①岐阜城跡
- ②苗木城跡
- ③岩村城跡
- ④明知城跡
- ⑤仲深山砦跡
- ⑥多羅砦跡
- ⑦妻木城跡
- ⑧土岐高山城跡
- ⑨美濃金山城跡
- ⑩久々利城跡
- ⑪今城跡
- ⑫大桑城跡
- ⑬江馬氏城館跡
- ⑭姉小路氏城館跡



三重県
- ①峯城跡
- ②鹿伏兎城跡

全国山城サミット連絡協議会加盟城郭の紹介　目次



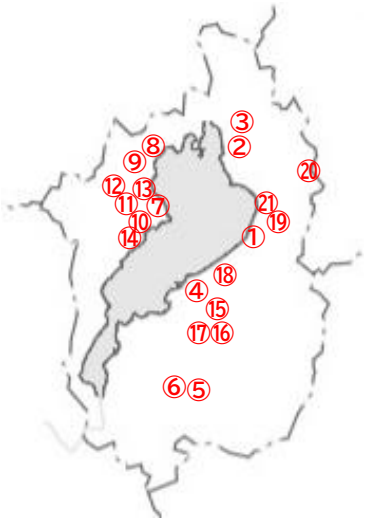
静岡県

①三岳城跡
②千頭峯城跡
③犬居城跡
④二俣城跡
⑤佐久城跡
⑥大平城跡
⑦高根城跡
⑧鳥羽山城跡
⑨山中城跡
⑩諏訪原城跡
⑪社山城跡
⑫横須賀城跡
⑬高天神城跡
⑭深沢城跡
⑮下田城跡
⑯葛山城址
⑰狩野城跡
⑱柏久保城跡
⑲大見城跡
⑳丸山城跡
㉑高谷城跡
㉒横地城跡
㉓勝間田城跡
㉔足柄城跡
㉕小山城跡
㉖飯田古城跡
㉗飯田城跡
㉘天方新城跡
㉙真田山城跡



愛知県

①船形山城址
②山中城跡
③日近城跡
④岩津城跡
⑤大給城跡
⑥足助城跡
⑦武節城跡
⑧亀山城跡
⑨田峯城跡



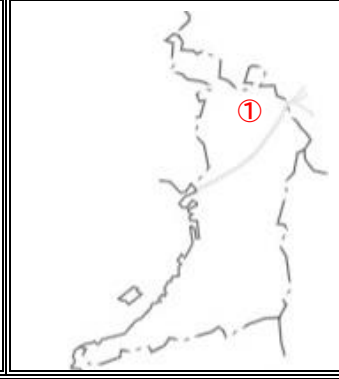
滋賀県

①佐和山城跡
②小谷城跡
③田上山城跡
④観音寺城跡
⑤水口岡山城跡
⑥三雲城跡
⑦清水山城館跡
⑧田屋城跡
⑨伊井城跡
⑩田中城跡
⑪太山寺城跡
⑫西山城跡
⑬日爪城跡
⑭打下城跡
⑮箕作山城跡
⑯大森山城跡
⑰布施山城跡
⑱佐生城跡
⑲鎌刃城跡
⑳上平寺城跡
㉑太尾山城跡



京都府

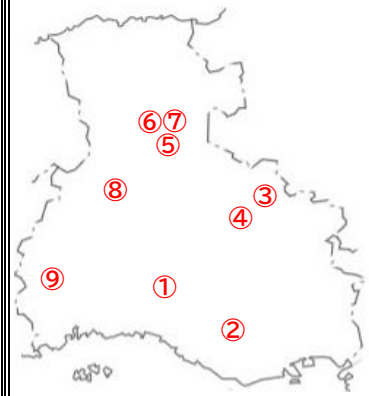
①福知山城



大阪府

①芥川城跡

全国山城サミット連絡協議会加盟城郭の紹介　目次



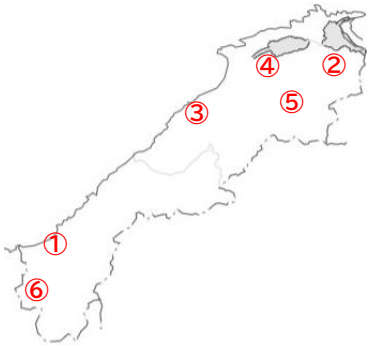
兵庫県
- ①置塩城跡
- ②三木城跡
- ③黒井城跡
- ④岩尾城跡
- ⑤竹田城跡
- ⑥法道寺城跡
- ⑦土田城跡
- ⑧波賀城跡
- ⑨白旗城跡



鳥取県
- ①鳥取城跡
- ②鹿野城跡
- ③景石城跡
- ④太閤ヶ平
- ⑤米子城跡
- ⑥若桜鬼ヶ城跡
- ⑦羽衣石城跡



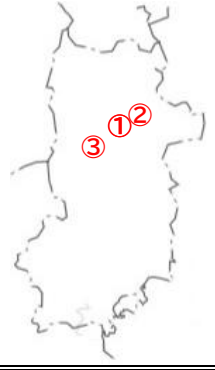
広島県
- ①鏡山城跡
- ②小早川氏城跡
- ③郡山城跡
- ④小倉山城跡
- ⑤日山城跡



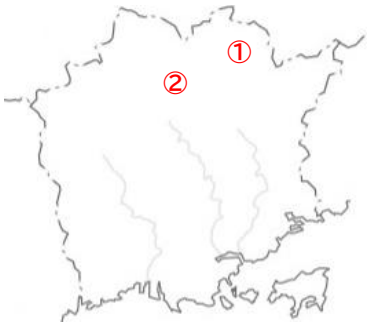
島根県
- ①七尾城跡
- ②月山富田城跡
- ③本明城跡
- ④三刀屋城跡
- ⑤三沢城
- ⑥津和野城跡



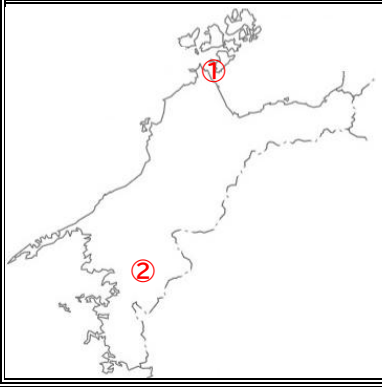
山口県
- ①高嶺城跡



奈良県
- ①宇陀松山城跡
- ②澤城跡
- ③高取城跡

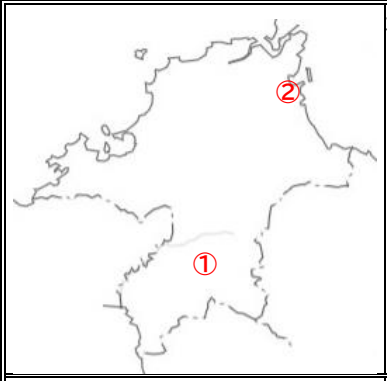
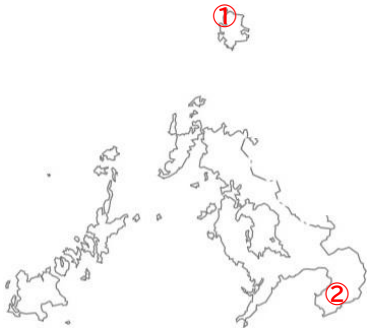


岡山県
- ①矢筈城跡
- ②岩屋城跡



愛媛県
- ①能島城跡
- ②河後森城跡

全国山城サミット連絡協議会加盟城郭の紹介　目次

	福岡県 ①猫尾城跡 ②松山城跡		大分県 ①岡城跡 ②角牟礼城跡		沖縄県 ①浦添城跡
	佐賀県 ①勝尾城筑紫氏遺跡		宮崎県 ①佐土原城跡 ②穆佐城跡		
	長崎県 ①勝本城跡 ②日野江城跡		鹿児島県 ①知覧城跡		

国史跡	九戸城跡（くのへ）	岩手県二戸市

陸奥国豪族九戸氏の居城。

築城年代は明応年間（15世紀末）頃。根城、浪岡城、七戸城と類似した広大な中世平山城である。ただし、天正19年の改修により中心部は石垣や枡形を伴う近世城郭に改変されている。

本丸、二ノ丸、三ノ丸、松ノ丸、若狭館、石沢館、本丸北曲輪から成る（総構36ha）。馬淵川とその支流の白鳥川、猫渕川を外堀とし、河川側は比高差20～30mの絶壁。南側は最大幅40mの堀を隔て侍屋敷地の在府小路に臨む。

昭和10年6月7日国史跡指定され、令和4年3月15日に在府小路遺跡の一部が追加指定を受ける。

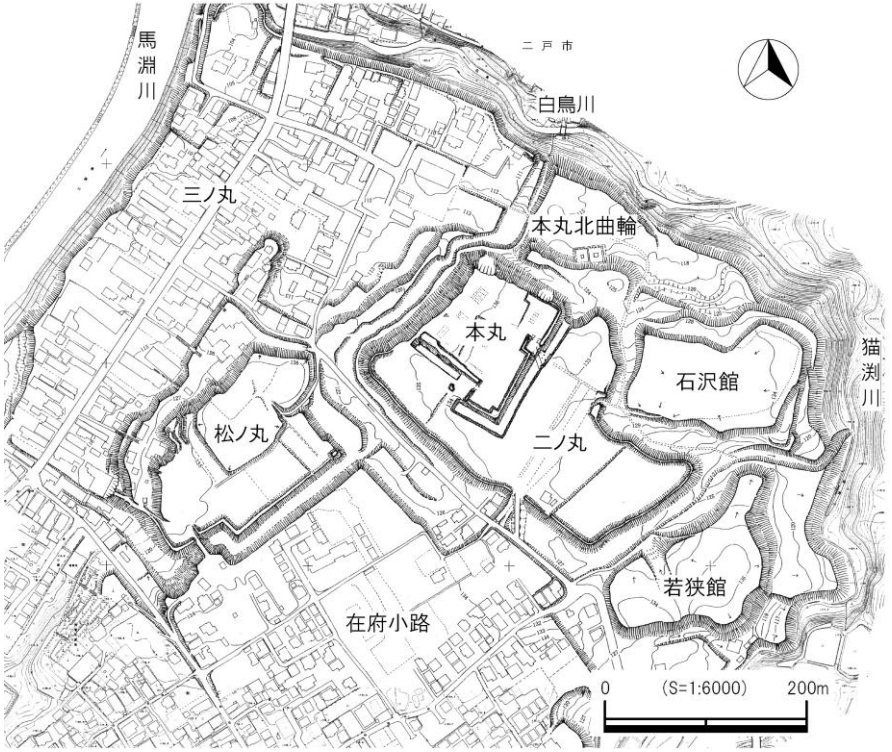
宗家跡目を巡り城主の九戸政実と南部信直が南部を二分して争ったが、信直が南部宗家26代目を襲名。天正19年（1591）9月、秀吉の奥羽再仕置軍を相手に籠城戦するも落城。直後に秀吉は蒲生氏郷に命じ城を再普請。配下となった南部信直に下賜。信直は拝領した城を南部の本城（福岡城）とし、三戸城から移り住むが、直ちに盛岡城築城を開始。盛岡城築城がなり、群臣を率いて移り住む元和元年（1615）までの約20年間が福岡城の機能した時期である。

元禄年間には三ノ丸を通る形で奥州街道が切り替えられ、今日そのまま市街地となっている。平成元年（1989）から開始された史跡環境整備事業に伴う発掘調査で本丸を囲む堀や土塁・枡形に築かれた石垣が福岡城のものであることが判明した。また、令和2年度以降の二ノ丸大手土橋と石沢館の曲輪北側中央法面の調査で新たに石垣が確認された。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR東日本二戸駅⇒IGR二戸駅
- ●自家用車／東北自動車道一戸ICから約15分

■所在地／岩手県二戸市福岡字城ノ内、字松ノ丸、字在府小路地内
■指定年月日／昭和10年6月7日／追加指定令和4年3月15日

▼九戸城跡縄張図（室野秀文氏作成、一部改変）




▲九戸城跡－空撮


▲九戸城跡－二ノ丸から本丸を臨む

国史跡	わきもと 脇本城跡	秋田県男鹿市

脇本城跡は男鹿半島の南のつけ根、海に面した標高100mの丘陵に位置する。元亀元(1570)年に湊安東氏と檜山安東氏を統一した安東愛季が天正5(1577)年に従来あった城を大規模に改修して居城したと伝えられている。安東氏は現在の秋田県中央～北部一円を拠点とし、日本海を一望できる海岸沿いに陸海交通の掌握を目的として、東北地方でも最大級の総面積約150万㎡におよぶ脇本城を築いた。城の南側は崖崩れによって急な崖となり、西側も尾根の下は急斜面となっていることから、天然の要塞となっている。周辺には脇本城に関連すると考えられる城館跡が多く分布しており、茶臼館跡、岩倉館跡、飯森館跡などが集中している。

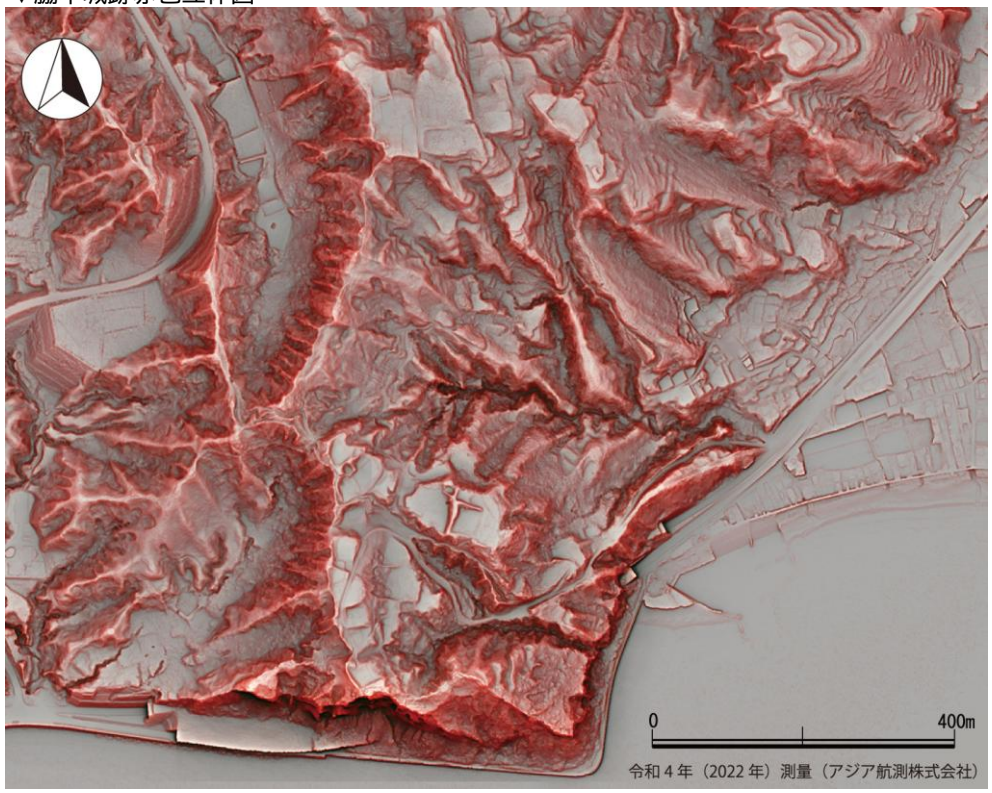
廃城時期は不明であるが、天正17(1589)年に起きた湊合戦以降の慶長20(1615)年の一国一城令発布以前と考えられる。その後、廃城以降は近隣集落の入会地として大切に管理されてきたため、遺構の残存状況は極めて良好である。

地表面観察の容易な曲輪や土塁、道跡、井戸跡などに加え、発掘調査によって、曲輪を造成した際の厚い盛土層や空堀跡、掘立柱建物跡、溝跡、柵列跡などが検出された。出土遺物は貿易・国産陶磁器が多い。さらに全長2mを超える角状の卒塔婆を含む木製品類や金属製品も出土し、貿易陶磁器では国内最北端での出土となる、中国「元」時代の染付が注目される。

平成27年度より整備事業を行い、日本海を臨む絶景と城当時の景観を重視した環境を維持している。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR男鹿線脇本駅から徒歩約35分
●自家用車／秋田自動車道昭和男鹿半島ICから約20分
■所在地／秋田県男鹿市脇本脇本字七沢地内ほか
■指定年月日／平成16年9月30日(令和4年11月10日追加指定)

▼脇本城跡赤色立体図





▲脇本城跡－空撮



▲脇本城跡内館地区の遺構群

長谷堂城跡（はせどうじょうあと）

★山形県山形市

山形盆地の南西部、標高約230m、平野部からの比高約85m、南北約670m、東西約400mの小規模な独立丘陵に築城される。主郭である頂上から城内各所への見通しがよく、主郭を頂点とした統一的な指揮命令系統を組織できる抜群の名城である。また、山腹には曲輪や横矢掛り、切岸、土塁、堀などの防御施設が随所に配置されている。

築城時期は不明であるが、永正11年（1514）、当時同城を領有していた最上氏と伊達氏が当地で戦い、最上軍は破れ、伊達氏家臣である小梁川氏が城主となったとの記録が、史料による初見である。その後、城郭は最上氏に返還されたようで、伊達氏あるいは上杉氏への抑えとして重要な防御拠点となっていた。

慶長5年（1600）の出羽の関ケ原と呼ばれる「慶長出羽合戦」では、「北の関ヶ原」とも呼ばれ、西軍（石田光成方）である上杉景勝の家臣である直江兼続と東軍（徳川家康方）の最上義光と城将である志村伊豆守が激戦を繰り広げた。直江軍は約2万といわれる兵をもって最上領に侵攻し、長谷堂城の西の菅沢山に本陣を置き、長谷堂城を攻略しようとしたが、最上軍は約半月にわたり食い止め、堅城として名を馳せた。慶長6年には最上氏の重臣の坂紀伊守が城主となり、城下町の整備を行ったといわれている。城下町は山城の東側に広がり、二重の堀で囲まれていた。また、御殿を作ったと言われ、統治のための城郭へと移行していったと考えられる。

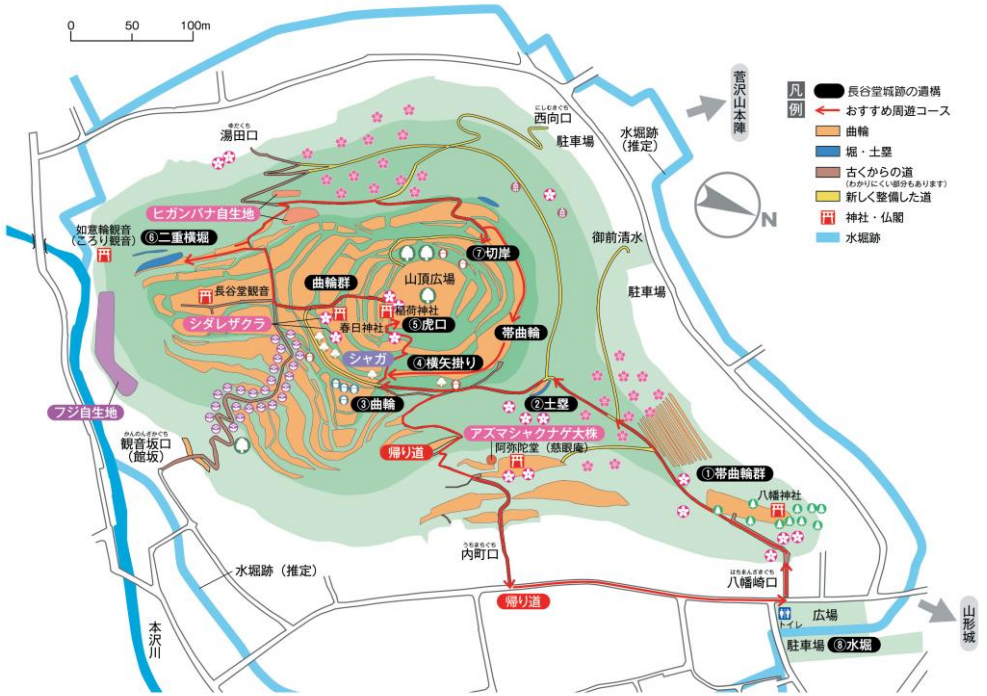
元和8年（1622）に最上氏が改易されると廃城となった。

なお、歴史的資源を活かした都市公園として整備を行い、平成23年に長谷堂城跡公園を開設した。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR奥羽本線蔵王駅
- ●自家用車／東北中央自動車道山形上山ICから約12分

■所在地／山形県山形市大字長谷堂字城山

▼長谷堂城全体図





▲長谷堂城－空撮



▲長谷堂城－水堀（復元）

成沢城跡（なりさわ）

★山形県山形市

山形盆地の南東部、標高約200m、南北約580m、東西約350mの小規模な丘陵に築城される。拠点となる曲輪が2つあり、標高の高い主郭と低い副郭（二の丸）が連携して敵の侵攻を防いだと考えられる。山腹には数多くの曲輪や土塁が設置され、その間に通路を効果的に通すことによって、巧みに防御する構造となっている。また、西に広がる平野部には、城主や家臣の屋敷があり、それらを取り囲むように鳴沢川が流れ、さらに外側に堀が廻らされていた。

築城は、永徳元年（1381）に、最上氏の始祖である斯波兼頼の孫である兼義が、須川のほとりの泉出に城を築き、その2年後の永徳3年に成沢に移築したのが、成沢城の始まりと伝えられる。

戦国時代には、南の伊達氏に対する最前線の城郭として機能し、成沢城を拠点に伊達輝宗の軍勢を破ったとの記録が残っている。城主は代々、最上家の重臣が担ったが、元和8年（1622）に最上氏が改易されると廃城となった。

また、城の東に望む瀧山は、平安時代から信仰の山として崇敬され、多くの登山者を集めた。成沢城は瀧山の登り口の一つである成沢口に築かれた城郭である。このため、城内には平安時代後半の建立と伝えられ国の重要文化財に指定されている石鳥居のほか、六地蔵石幢、板碑など、当時の信仰を示す石造物が今も多数残されている。

なお、歴史的資源を活かした都市公園として整備を行い、平成26年に成沢城跡公園を開設した。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR奥羽本線蔵王駅
- ●自家用車／東北中央自動車道山形上山ICから約13分

■所在地／山形県山形市蔵王成沢字館山

▼成沢城全体図





▲成沢城－空撮



▲成沢城－主郭

国史跡	館山城跡（たてやま）	山形県米沢市

仙台藩主伊達氏の正史『伊達治家記録』にみえる「舘山城」に比定される城館跡で、元亀元年（1570）の記事では伊達輝宗家臣新田義直の居城とされ、天正年間後半には伊達輝宗や伊達政宗が普請を行った記事がある。

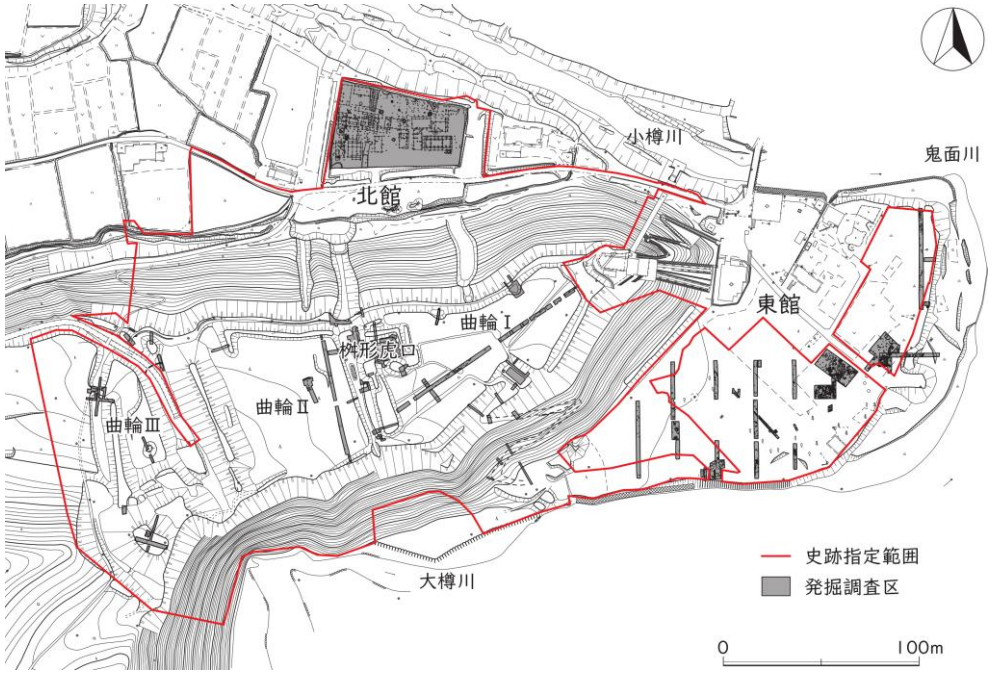
山形県南部の米沢盆地西縁の丘陵地に位置し、地元では長峯山や城山と呼ばれる舌状丘陵の先端部を利用した山城である。南北を流れる大樽川・小樽川（城の東側で合流し鬼面川となる）を堀とした天然の要害である。山麓部には中世期の掘立柱建物跡や井戸跡などが発見された舘山東館・北館と呼ぶ遺跡が立地する平坦地があり、同時期の居館（根小屋）を伴う。伊達氏が米沢を拠点とした16世紀代を中心に機能したと考えられ、平成28年3月1日に山城と山麓居館の一部が国の史跡に指定された。

山城は、堀切と土塁で区画された三箇所の曲輪（Ⅰ～Ⅲ）で構成され、全長は約330～350mである。平成25・26年度に行った発掘調査で、主郭と考えられる曲輪Ⅰの西側に設けられた桝形虎口周辺から、慶長年間後半頃に普請された石垣が発見された。石垣は大部分が壊されており、崩された大量の栗石で覆い隠すように埋もれていた。関ヶ原合戦後に入部した上杉景勝により普請された石垣と考えられるが、上杉氏がこのような普請を行った記録は無く、米沢時代の伊達氏が重要視した城を再利用しようとしていたことが発掘調査によって初めて明らかになった。なお、上杉氏による普請は未完成で、中途の状態で破却されたと考えられる。

米沢市では、米沢ゆかりの戦国大名伊達氏と上杉氏の足跡が辿れる史跡として、舘山城跡の保存・活用を図っていく。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR米坂線西米沢駅から徒歩約35分
●自家用車／東北中央自動車道米沢中央IC・米沢北ICから約15分
■所在地／山形県米沢市大字口田沢字長峯二ほか
■指定年月日／平成28年3月1日

▼舘山城跡縄張り図





▲舘山城跡－全景



▲曲輪Ⅰ西側桝形虎口全景

中山城跡（なかやま）

山形県上山市

中山城跡は市内中山集落にあり、三方を天然の渓谷に囲まれた小丘陵上に築かれた。永禄・元亀年間の頃に家臣中山弥太郎が天守山に城砦を築いたとされる。伊達領、蒲生領、上杉領時代を通して最上領との北の最前線であった。伊達領の時は、城主の称を「城主」（蒲生領の時も同じ）。慶長3（1597）年からは上杉領となり、元禄5（1692）年に藩財政の窮乏などにより支城体制を変え、「中山城」は「中山御役屋」と改称、「城主」の称も「城将」、または、「城代」、「御役城」と称した。その後、「御役城」の称は廃止、「御役屋将」または「役屋将」と呼ばれ、副官として御附馬上を置き、明治3（1870）年の廃止まで続いた。

遺構の概要として、中山城は家中屋敷と呼ばれる地を挟んで山城の部分と前森の部分とに分かれる。山城の部分は中核に本曲輪・二の曲輪・三の曲輪があり、本曲輪の周辺は土塁が築かれている。そして本曲輪には物見台が設けられており、西北面と北東面には石積も見えている。二の曲輪下方には帯曲輪も見ることができ、また本曲輪・二の曲輪・三の曲輪の間には虎口も見ることができる。

北側には本曲輪と同様に土塁が築かれており、急斜面で真下は狭い曲輪があり、そこに湧き水を利用した井戸が設けられている。この井戸を七色の清水（すず）と称し、城内の飲用水として使用されていた。

昭和63年度から平成8年度にかけて山形県教育委員会で実施した「中世城館遺跡調査」において、非常に高い歴史的価値のある城址であると判明、中世城館遺跡として登録されたことにより、保存・活用等の方向性を検討していく。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR奥羽本線羽前中山駅から西に約600m
- ●自家用車／東北中央自動車道かみのやま温泉ICから南西に約5㎞

■所在地／山形県上山市中山
■指定年月日／

▼中山城跡縄張り図





▲中山城跡－全景（東から）



▲中山城跡－物見台石垣

国史跡	あてらざわたてやま 左沢楯山城跡	山形県大江町

左沢楯山城跡を築城した左沢氏は、大江氏の一族である。大江氏がこの地に根付く契機となったのは、12世紀末に大江広元が寒河江荘の地頭職に任命されたことである。大江氏は領内の要所ごとに支城を築城し、1584年最上氏に滅ぼされるまで当地域を治めていた。

支城の一つである左沢楯山城は左沢氏の本城であり、14世紀後半に左沢元時により築城され、17世紀前半の最上家改易により廃城となるまで機能したと伝えられる。

左沢楯山城跡は、最上川が北流し急峻な楯山に突き当り大きく東に屈曲する部分の稲沢山丘陵に位置する。北東側は檜木沢の深い渓谷で防御され、南側は急崖をなし、眼下に最上川を眺めることができる。八幡座や寺屋敷・千畳敷など中心となる曲輪が、往時の状況をよく示す状態で良好に保存されている。また、この立地は水上交通と陸上交通の重要な結節点であり、交通の要衝の地でもある。

平成5年から調査を実施し、平成21年2月に国史跡の指定を受けた。平成29年から城跡を「左沢楯山城跡の構造が体感できるようにする」ことを目標とした第一期整備を進めており、城の中核部や堀切などを巡る散策路施工や、八幡座でみつかった櫓跡の表示などを行った。令和6年度で第1期整備が完了したので、今後は山城のさらなる活用を進めていく。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR左沢線左沢駅
●自家用車／山形自動車道寒河江SA（ETC専用）から約9分
寒河江ICから約15分
■所在地／山形県大江町大字左沢字楯山地内
■指定年月日／平成21年2月12日



◀左沢楯山城跡縄張り図



▲左沢楯山城跡－曲輪群



▲左沢楯山城跡からの眺望

国史跡	こおりにしやま 桑折西山城跡	福島県桑折町

天文元年(1532)頃、伊達氏14代稙宗(「独眼竜」伊達政宗の曽祖父)が築き、本拠とした。稙宗は城の周辺に一族や家臣の屋敷、宗教施設、待場を集めようとした形跡があるとともに、戦国法として著名な「塵芥集」は、当城で編集され、本丸で検出された中心建物跡で発布された可能性が高い。同11年から、稙宗が嫡男の晴宗と争った「天文の乱」を経て、家督を継いだ晴宗が同17年に米沢に本城を移す際、当城は破却された。

城跡は、本丸・二ノ丸を中心とする部分と、中館・西館を中心とする部分の2つの部分からなる。両者とも16世紀前半代の遺物を出土しており、文献資料と一致する一方、中館や西館に枡形状虎口がある等、戦国時代末期まで改修された形跡もある。

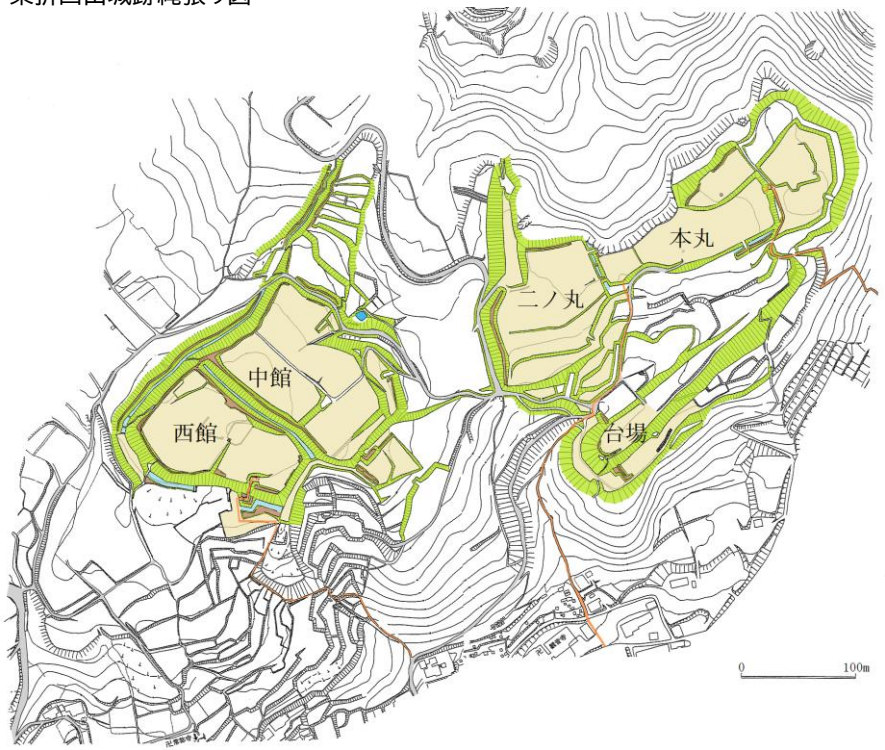
平成28年度から整備事業を実施し、本丸の中心建物の平面復元や、土塁、空堀の盛土復元、枡形状虎口石積の顕在化及び保護施設設置等の遺構整備や、遊歩道、階段、案内板等の整備、樹木を伐採して遺構の見通しや眺望の確保を行い、令和2年度に完成した。

令和元年度に、本丸の遺構復元完成を記念して「桑折西山城復元祭」を開催し、令和2年度には、全国山城サミット桑折大会プレ大会を「桑折西山城ライブ2020」と題して開催、令和3年10月30日、31日には第28回となる「全国山城サミット桑折大会」を開催した。

城跡では、毎年、町民、町内事業者、団体による「草刈ボランティア」が行われ、環境整備されてきた。令和4年5月には、「桑折西山城を守る会」が設立され、活動を行っている。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR東北本線桑折駅から徒歩約17分
●自家用車／東北縦貫道伊達桑折ICから約10分
■所在地／福島県伊達郡桑折町大字万正寺字本丸地内他
■指定年月日／平成2年2月9日指定

▼桑折西山城跡縄張り図





▲桑折西山城－本丸中心建物



▲桑折西山城－西館枡形状虎口

国史跡	むかいはぐろやま 向羽黒山城跡	福島県会津美里町

羽黒山城跡は、会津盆地南部、標高408．7mの独立峰、岩崎山に築かれた戦国時代最強と呼び声がある山城である。城の名は、会津若松市東山町の羽黒山神社を城に向い合せで移したことから向羽黒山城と名付けられた。戦国大名のひとり蘆(葦)名盛氏が永禄4年(1561)から8年の歳月をかけて永禄11年(1568)に完成させた比高差184mの山城。

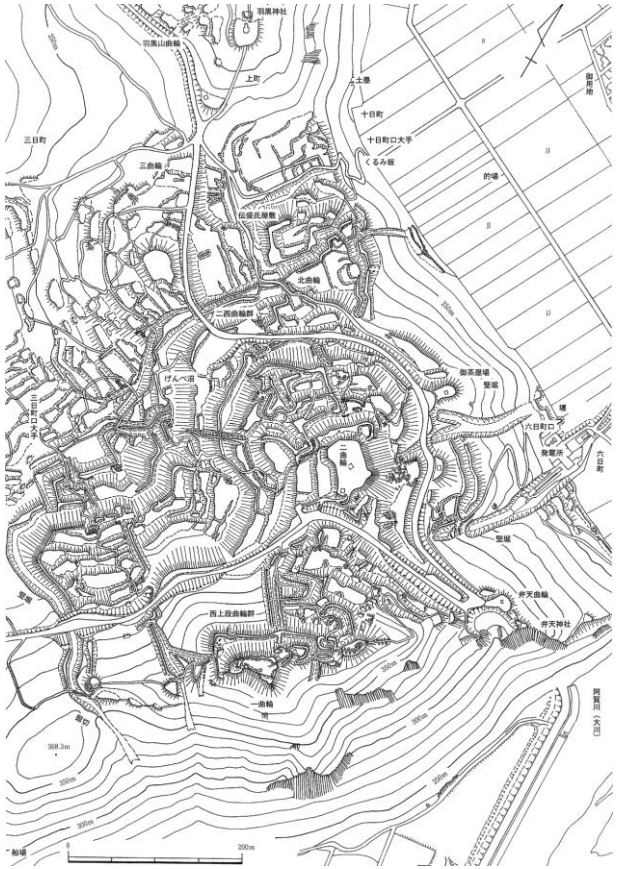
蘆名氏の居城は、城から北東約6㎞離れた会津若松市の黒川城(現在の若松城跡)であったが、この城に本城の機能を移そうとして築いたものである。

城の東には幅約500mの阿賀川が流れ、北と西には会津盆地が広がり、南には南会津につながる小山が連続している。会津盆地側の北を大手口とし、山麓には三日町、六日町、十日町、上町、本郷町、高田町、野伏町、新町などの町屋を阿賀川と鶴沼川が囲んでいた。

城が完成した時に詠まれた『巌館銘』には、「実城(本丸)、中城、外構があり、堀や土塁の並びは幾重にもなり、柵は櫛の歯を並べたようで、経路は縦横、格子の如し、根小屋、宿町二千余家に及ぶ」とあり、岐阜城などに似た市場を伴う壮大な城下町であった。お茶屋場、楽人屋敷、神学所や画僧雪村も居た文化的にも優れた城下であった。

その後、伊達政宗も改修し、蒲生氏郷は織豊的な技法で石垣や土塁、堀を大改修した。最終的に、上杉景勝が慶長5年(1600)、関ヶ原の戦い直前に徳川家康に対抗し、最後の砦として城を取り囲む竪堀、竪土塁などを大改修したが、戦わずして1601年に破城となった。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR只見線会津本郷駅から徒歩約20分
●自家用車／磐越自動車道新鶴スマートICから南に約10分
■所在地／福島県大沼郡会津美里町船場
■指定年月日／平成13年8月7日
■問合せ先／会津美里町教育委員会



◀向羽黒山縄張り図



▲向羽黒山城－空撮



▲三の丸からの散策路

国史跡	西方城跡（にしかた）	栃木県栃木市

足尾山地の東端の低位丘陵上、山頂部と山麓部の標高90～221mの間に郭群が広がる。

15世紀末頃から天正18(1590)年まで宇都宮氏家臣の西方氏が城主で、慶長5(1600)年までは結城秀康領となる。以降は元和元(1615)年まで、関ケ原の戦い直前に上杉氏から離れ徳川氏に仕官した藤田信吉が西方藩15，000石の城主となった。

西方氏は、天文17(1548)年、壬生綱雄の在所を攻める際に宇都宮氏方として参陣したとある。西方城は天正元(1573)年、小田原北条氏方となった皆川城主皆川俊宗・広勝と壬生城主壬生義雄が、小山領の粟志川城を攻めた際に、反北条氏である鹿沼城主壬生周長が常陸佐竹氏に援軍を要請した手紙の中に確認でき、後方拠点の西方城の重要性を伝えている。

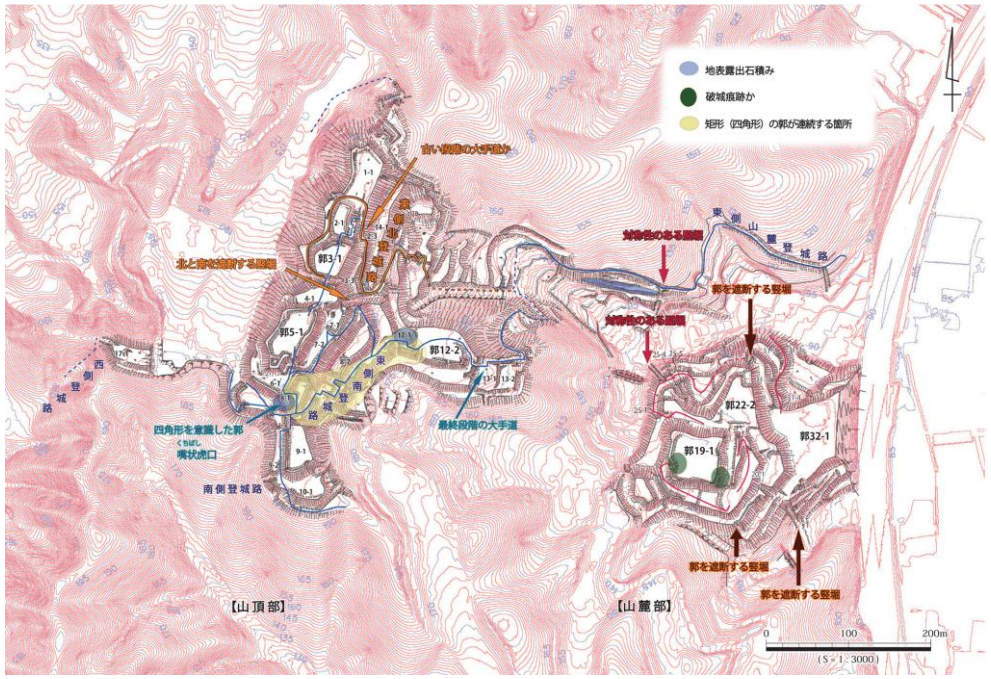
この城は、宇都宮領の西南端にあたり、壬生・皆川領に対する最前線に位置した。また、結城秀康領の時期には、徳川領国の最北を担う要害として改修が行われた可能性が高い。藤田信吉の時期には山麓部に藩庁が置かれた。山頂部の郭は西方氏・結城氏段階、山麓部の郭群は結城氏・藤田氏段階のもので、それぞれ2時期の変遷があり、城下町も2時期に変遷した可能性がある。

このような城主と城館の変遷や歴史的背景から、北関東の政治情勢を反映した「境目の城」であったと考えられる。

麓の長徳寺の東側に駐車場が整備されており、地域住民の愛護ボランティアにより見学路の整備、維持が行われているので、所々急峻な箇所もあるが、山頂まで上ることができる。城跡は所有者の多大な理解協力の下に立ち入りが許可されている。

■交通アクセス
　●公共交通機関／東武鉄道金崎駅
　●自家用車／北関東自動車道都賀西方スマートICから約10分
■所在地／栃木県栃木市西方町本城1468(長徳寺)
■指定年月日／令和6年10月11日

▼西方城縄張図





▲不動沢上空より西方城を望む



▲西方城山頂部郭3-1から南方を望む

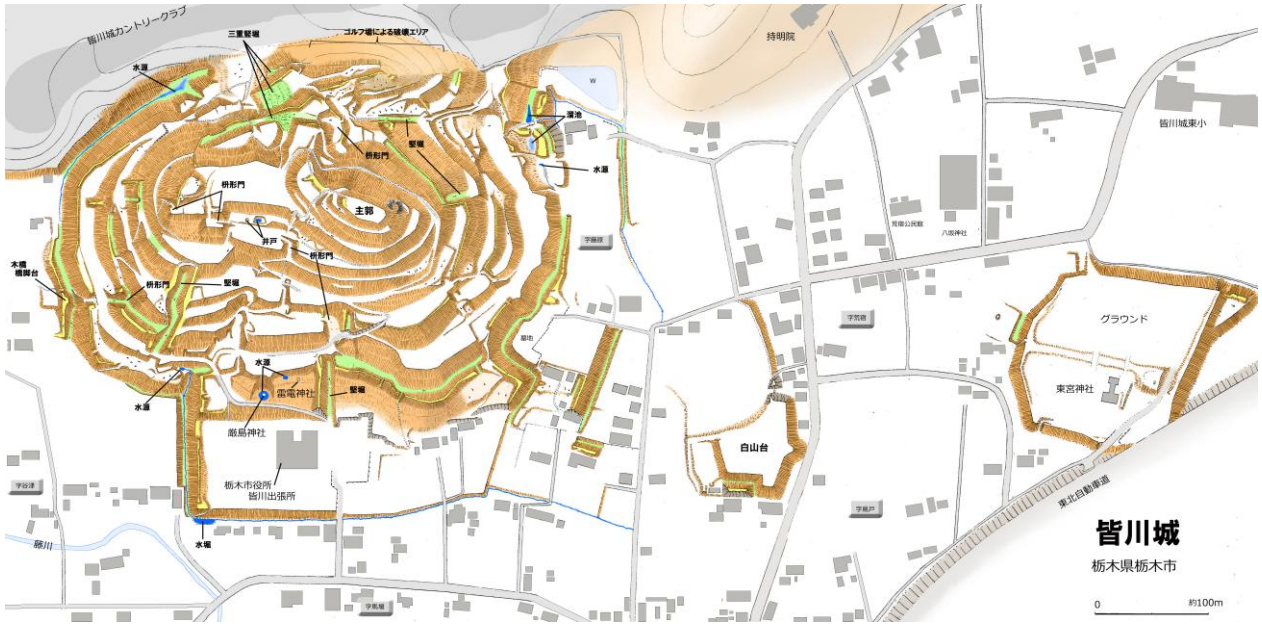
市史跡	みながわ 皆川城跡	栃木県栃木市

標高147mの山頂に主郭を持つ山城で、巨大な竪堀が南、南西に配置され、各所で通行を遮っている。北側には三重の竪堀があるが、一部は失われている。

寛喜年間(1229～32)に長沼宗和の築城と伝えられ、その後一族とされる皆川氏の本拠となった。皆川氏は時期によって対外関係を変え、戦国末期には皆川広照が城主となり、天正9年(1581)には織田信長に馬を献上、翌年の若御子合戦では徳川家康に味方し、天正12年(1584)の沼尻合戦(栃木市)では、佐竹・宇都宮氏と共に小田原北条氏と戦うが、天正14年(1586)には北条氏の勢力下となる。豊臣秀吉の小田原攻めに際し、広照は小田原城に入城するも家康の伝手により脱出、降伏した。その後皆川領は安堵されたが、慶長14年(1609)家康による改易で廃城したと考えられる。

近隣には古墳、平安時代の集落や祭祀遺跡等も所在しており、古代から人の活動が活発な地域であったと考えられる。平成22年の山頂部の発掘調査では、数基の柱穴が確認され物見櫓があったことが推定されている。廃城に関する痕跡は確認できていない。

麓の公民館駐車場が整備され、地域住民団体が維持管理に多大な協力を行っている。また、近年当史跡を舞台にした歴史ミステリー小説「皆みなのあらばしり」が刊行され、同小説が第166回芥川賞候補作にノミネートされ話題を呼んだ。



▲皆川城縄張り図(渡邉昌樹 作成)



▲皆川城－空撮



▲皆川城－空撮

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR両毛線・東武鉄道栃木駅
- ●自家用車／東北自動車道栃木ICから約25分

■所在地／栃木県栃木市皆川城内町699

■指定年月日／昭和39年5月19日

国史跡

唐沢山城跡（からさわやま）

栃木県佐野市

唐沢山城跡は、平安時代末頃より当地を治めた藤原秀郷の末裔・佐野氏が、戦国時代に拠点として整備したと考えられる城郭である。山頂（標高242m）の本丸と山麓の根小屋との比高差は約180mで、急峻な自然地形を巧みに利用した縄張は山全体に広がり、その城域は200ha以上と推定される、関東最大級の山城である。要衝の地にあったことから、越後の上杉氏と相模の北条氏による関東の覇権を巡る争奪戦の舞台となり、両氏からの攻撃を何度も退けた堅城としても名高く、関東七名城にも挙げられている。また、城の最終段階である慶長5年（1600）頃には、豊臣政権下の最先端技術が導入され、関東では数少ない織豊系城郭へ至るという特筆すべき歴史がある。

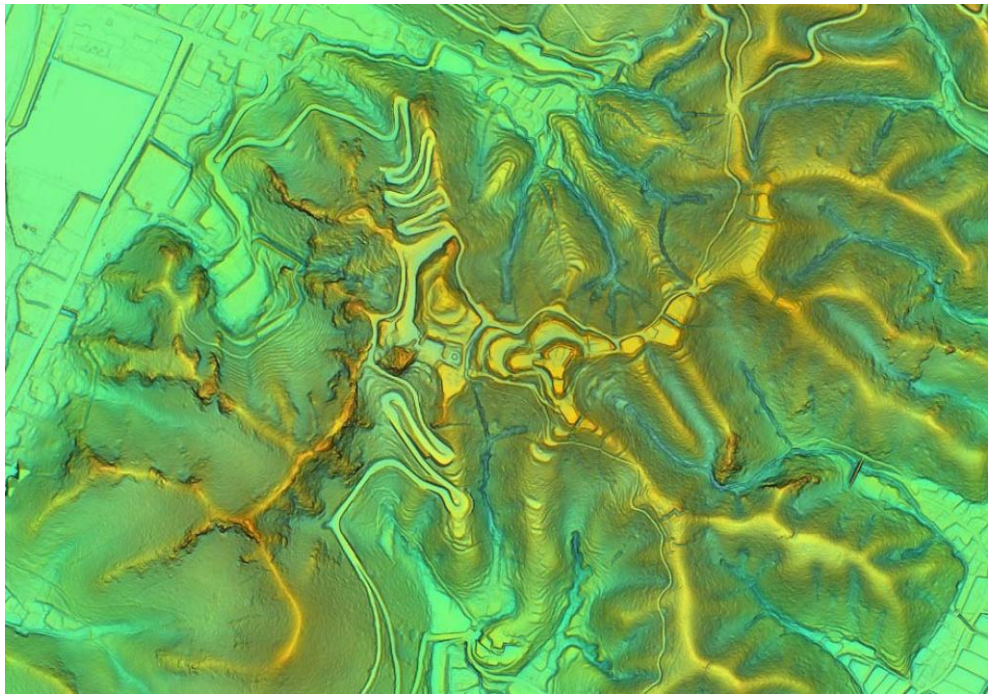
本丸周辺の主要部の石垣の大半は、文禄～慶長初期に築かれたものが現存しているとみられ、当時の姿を直接的に知ることができる大変貴重な文化財である。その中でも、特に本丸南西面の高さ約8mの高石垣は当城跡最大の見所である。このほかにも、城跡内には戦国時代以来の土造りの縄張も随所に残っており、中世から近世初頭にかけての多様な遺構を見比べながら散策を楽しむことができる。

また、山頂周辺の南城や天狗岩などからは関東平野を見渡せ、かつては江戸を遠望したとの話が伝わっているように、現在でも視界が良好な日には南方の地平線に首都圏のビル群が、南西方には富士山も望めるなど絶好の眺望も当城跡の魅力の一つとなっている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／東武佐野線田沼駅から本丸まで徒歩45分
- ●自家用車／東北自動車道佐野藤岡ICから約15分
  ／北関東自動車道佐野田沼ICから約7分

■所在地／栃木県佐野市富士町・栃本町地内

■指定年月日／平成26年3月18日



▲地形起伏図（一部抜粋）



▲文禄～慶長初期の石垣が残る南城



▲今も水量豊富な大井

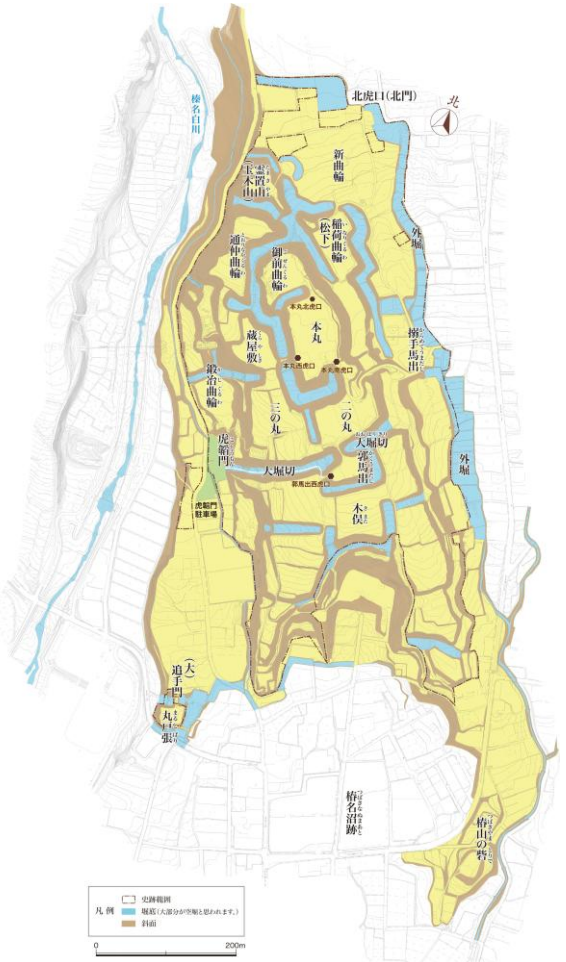
国史跡	箕輪城跡（みのわ）	群馬県高崎市

群馬県中央部の榛名山東南麓の丘陵上を中心に立地する箕輪城跡は、戦国時代の西上野を代表する城郭として昭和62年(1987)に国史跡に指定された。

西暦1500年頃に長野氏が築城したとされ、永禄9年(1566)に武田信玄により落城した後は、武田・織田・北条・徳川氏といった戦国大名の拠点となり、各氏の有力家臣が配置された。特に最後の城主である井伊直政は、徳川家臣団の中で最大石高の12万石で封じられている。慶長3年(1598)、直政が城を高崎に移したことで箕輪城は廃城となった。

平成10年度から18年度まで、史跡整備のための発掘調査を行い、戦国期の関東地方では有数の規模を誇る門跡などが確認された。この成果をもとに平成23年度から史跡整備に着手し、平成28年には郭馬出西虎口門が復元された。平成29年度から続く本丸地区の整備により、令和4年3月に本丸・蔵屋敷間をつなぐ木橋が架けられ、令和8年3月には本丸西虎口門の復元が完成した。これら一連の整備により、往時の壮大な城郭の雰囲気をより体感できるようになった。

また、地元住民を中心に手作り甲冑を着用して本丸で模擬戦を行う「箕輪城まつり」が平成15年以降毎年実施されているほか、平成19年に発足した「ボランティアガイド語り部の会」が現在も精力的に活動している。



▲箕輪城地形図


▲箕輪城－空撮


箕輪城－本丸西虎口門▶

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR高崎線高崎駅、群馬バス箕郷行箕郷本町下車徒歩約 20 分、伊香保温泉行城山入口または東明屋下車徒歩約 15 分
- ●自家用車／関越自動車道前橋ICから約20分

■所在地／群馬県高崎市箕郷町西明屋・東明屋地内
■指定年月日／昭和62年12月17日(追加指定／平成30年10月15日)
■面積／約21ha

国史跡	かなやま 金山城跡	群馬県太田市

金山城は、関東平野北辺にある独立丘陵の金山（海抜239m）に作られた山城である。

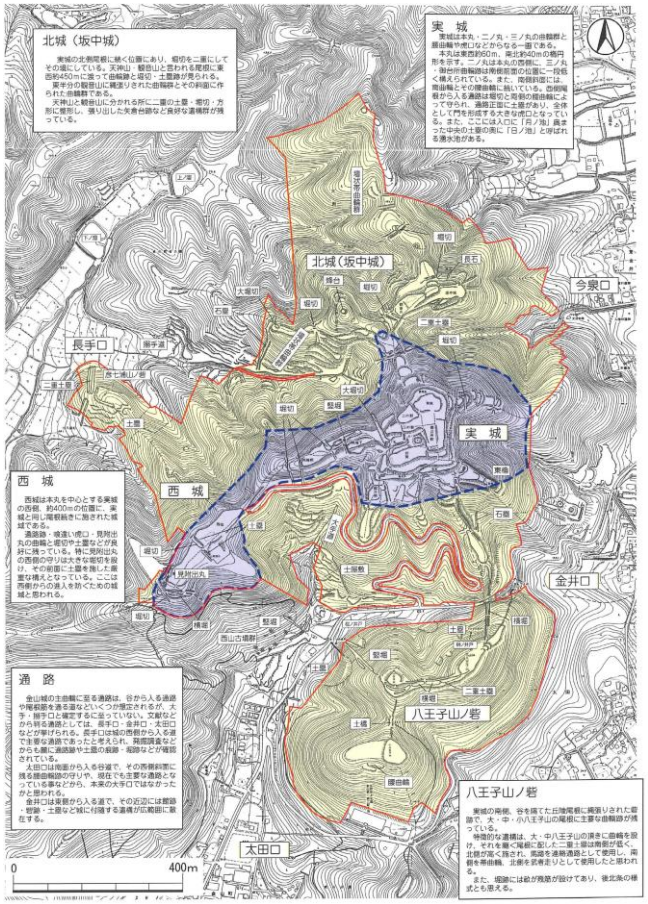
文明元年（1469）に、新田氏一族の岩松家純により築城された。その後、下剋上により岩松氏家宰の横瀬氏（後の由良氏）が実質的な城主となり全盛期を迎えた。武田氏・上杉氏・小田原北条氏などの有力戦国大名の攻撃に幾度も耐えたが、のちに北条氏の支配するところとなり、天正18年（1590）豊臣秀吉の小田原攻略に伴い、金山城も廃城となった。

金山の自然地形や岩盤（凝灰岩）を利用し、石垣を多用した土塁や、岩盤を切りひらいてつくった堀切で堅く曲輪を守っており、関東では稀有な「石垣を多用した城」であることが金山城の特色となっている。

平成6年度より実城大手虎口～西城間で整備事業が実施され、平成21年には山麓に史跡金山城跡ガイダンス施設が開館。施設は建築家の隈研吾氏による設計で、外壁は金山城の石垣をイメージした石板を配置した意匠となっており、金山城の歴史についての展示が常設されている。

令和6・7年度には森林環境譲与税を活用した事業として、日ノ池周辺の井戸に設置されている木製の井戸枠、南曲輪休憩所周辺に設置している休憩用ベンチ等の更新（改修）を行った。

■交通アクセス
●公共交通機関／東武伊勢崎線太田駅
●自家用車／（ガイダンス施設まで）東北自動車道館林ICから約45分
／北関東自動車道太田桐生ICから約10分
■所在地／群馬県太田市金山町
■指定年月日／昭和9年12月28日（追加指定／平成14年9月20日）



◀金山城縄張り図


▲金山城－大手虎口


▲史跡金山城跡ガイダンス施設

県史跡	平井城跡（ひらい）	群馬県藤岡市

15世紀前半の関東管領である（山内）上杉憲実により築かれ、後に山内上杉氏の本城となった。山内上杉氏は、上杉憲顕を祖としており、憲顕は貞治2年（1363）に関東管領に就任。以後山内上杉氏は上杉氏の宗家として関東管領職を継承した。憲顕の子の憲方が、康暦元年（1379）鎌倉山ノ内に居館を定めたので、山内（やまのうち）上杉氏と称する。

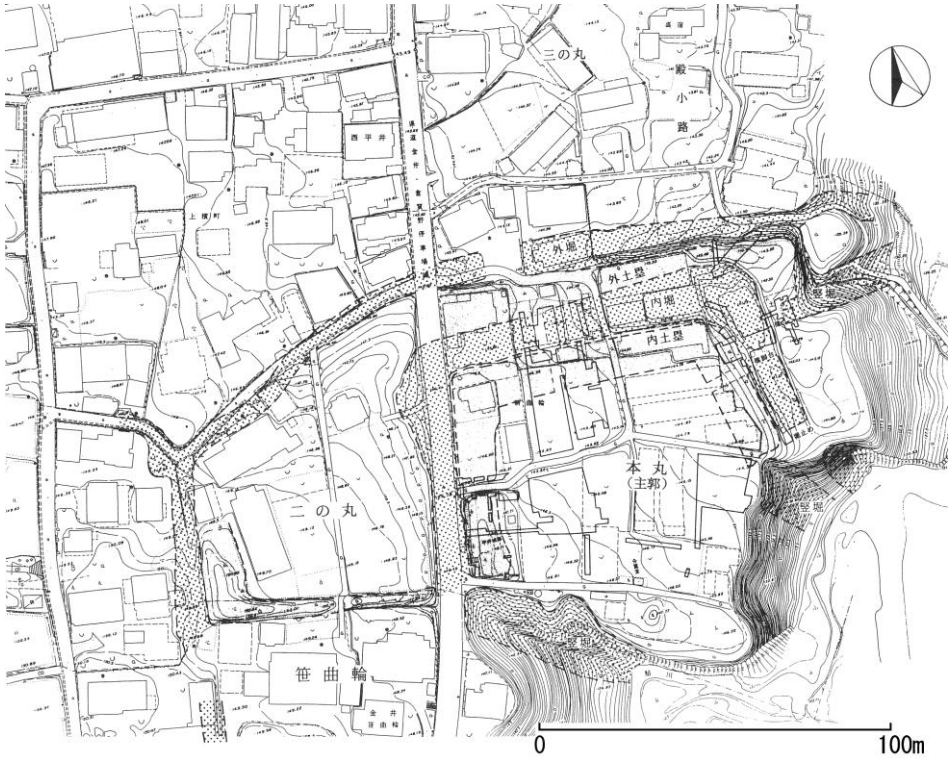
平井城は、藤岡市西平井一帯に所在。当地を流れる鮎川西岸の断崖上に立地する平城であり、「本丸」と呼称される主郭は、城域の南端部に置かれている。「本丸」の西には「二の丸」と「笹曲輪」という副郭が南北に連なり、北には「三の丸」があり、城域を「庚申堀」が囲んでいる。城が東面する鮎川の断崖面には竪堀が掘られ、城内は内堀と内土塁で区画されていた。

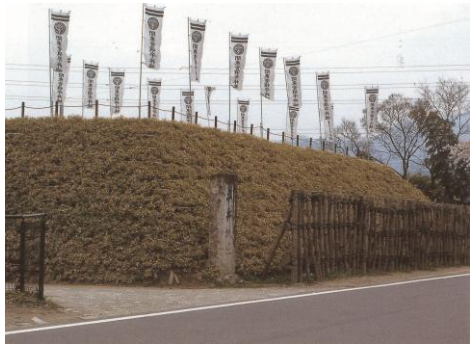
永享10年（1438）の永享の乱において上杉憲実は鎌倉山内館を退去、平井城に拠ったとみられる。平井城はこの頃築城され、上杉顕定が関東管領に在任していた応仁元年（1467）に修築・拡張されたと考えられている。その後、憲房，憲政の2代にわたり上杉氏の本城となったが、後北条氏の勢力が北上してくると，天文21年（1552）に憲政は平井城を退去。越後の長尾景虎（上杉謙信）を頼り，景虎は憲政を擁して永禄3年（1560）に関東に侵攻した。この時に平井城は奪還されるが、後に廃城にされたと伝えられている。

現在は、主郭の一部が平井城址公園として復元整備され、土塁や内堀・橋などが整備されている。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR八高線群馬藤岡駅よりバス
藤岡～上平線にて矢島商店前から徒歩3分
●自家用車／上信越自動車道藤岡ICから約20分
■所在地／平井城跡群馬県藤岡市西平井地内
■指定年月日／平成11年4月30日

▼平井城主郭周辺概念図




▲平井城－復元された土塁


▲平井城－復元された内堀

県史跡	かなやま 金山城跡	群馬県藤岡市

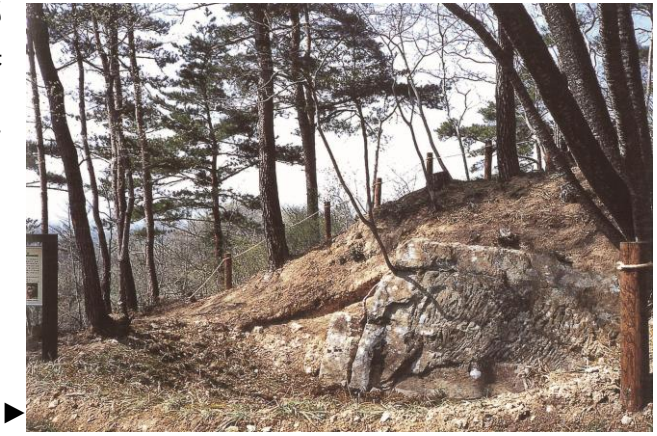
平井城の詰め城と考えられる。築城年代は不明であるが、上杉顕定が享徳の乱の最中に平井城の修築・城域の拡張を行う中で築城したとする見解がある。

城の本丸は、平井城跡の西南約1．2㎞、標高326mの金山の山頂に立地しており、城は東西約300m、南北400mにわたる尾根筋に築かれた連郭式の山城である。

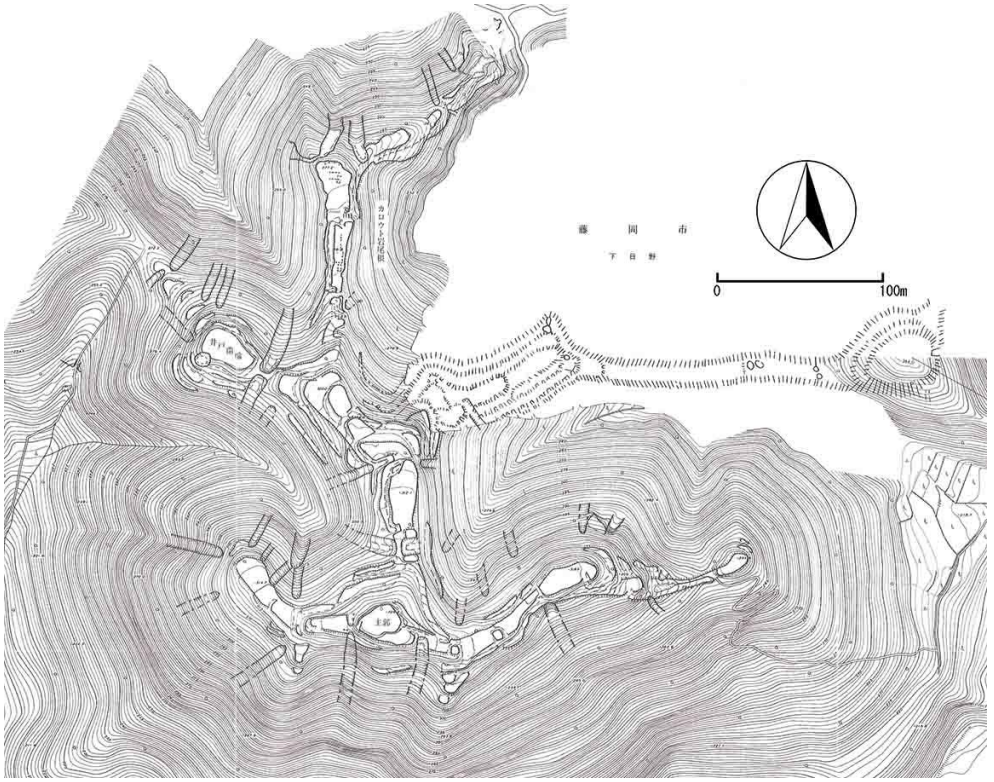
城域の北側にあたる通称「カロウト岩尾根」は、昭和62年に発掘調査が行われ、尾根筋を断ち切る「堀切」、「竪堀」と呼ばれる斜面に掘られた防御用の堀や、大手門・櫓門・木戸・曲輪などが検出され、その多くの部分に石垣が築かれていることが判明した

永禄3年（1560）の長尾景虎（上杉謙信）の関東侵攻後、平井城とともに廃城にされたと伝えられている。

現在は、山城遺構の一部が金山城址公園として保存整備され、森林の散策とあわせて楽しめる場として活用されている。



金山城－整備した水場跡 ▶



▲金山城縄張り図

■交通アクセス
●公共交通機関／JR八高線群馬藤岡駅よりバス
藤岡～上平線にて日野小学校前下車徒歩約45分
●自家用車／上信越自動車道藤岡ICから約25分
■所在地／金山城跡：群馬県藤岡市下日野地内
■指定年月日／平成11年4月30日

町旧跡
県遺跡

花園城跡（はなぞの）

埼玉県寄居町

花園城跡は「新編武蔵風土記稿」によると、武蔵七党猪俣党の藤田氏の居城と記され、初代政行から十五代泰邦まで在城したと伝えられている。藤田氏は、関東管領上杉氏の重臣で、榛澤郡の西側と秩父郡を支配していた。

小田原北条氏が武蔵国に進出し、河越合戦で上杉氏の劣勢が明らかになると、藤田氏は三代当主北条氏康の子である氏邦を女婿として迎え、花園城に氏邦が入城したと思われる。古文書等の史料が一切残っていないため、詳細は不明であるが、氏邦が鉢形城に入城した以降も支城として使用されたと思われ、天正十八年（1590）の豊臣秀吉による小田原合戦以降廃城となったと考えられる。

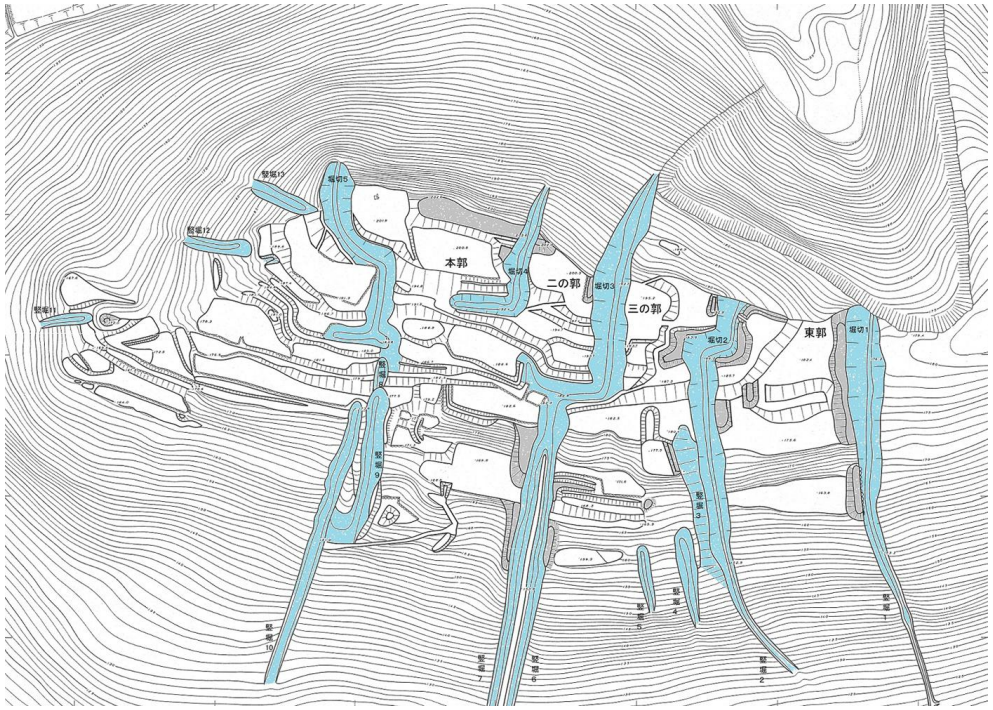
城跡は、上武山地が関東平野と接する丘陵の尾根に筋上に縄張りされ、荒川の扇状地の先端に位置している。

ここは、秩父街道や荒川などの交通の要所であり、街道筋には上・下本宿、小下宿、拾人小路、下宿、宿、蔵屋敷などの地名が残っている。麓には藤田善道寺、西には少林寺、東には藤田氏菩提寺といわれる正龍寺が建立され、荒川付近には藤田氏館跡と伝わる遺構が存在しており、この館及び花園城を中心とした城下の状況を色濃く残している。本郭は標高約202mを測り、岩盤を掘り下げた片岩を積み上げた石積みが多く残っている。竪堀により大きく四つの曲輪に区画され、一部に二重の竪堀が確認できる。

令和4年4月に地元有志による花園城跡保存会が立ち上がり、下草刈りや園路の整備などの維持管理作業を主体となって実施している。

■交通アクセス
●公共交通機関／秩父鉄道・JR八高線・東武東上線寄居駅から徒歩約30分
●自家用車／関越自動車道花園ICから約15分（駐車場なし）
■所在地／埼玉県大里郡寄居町大字末野地内
■指定年月日／昭和51年10月1日

▼花園城縄張図（寄居町教育委員会提供）




▲花園城－全景


▲花園城－堀切

国史跡	本佐倉城跡（もとさくら）	千葉県酒々井町

本佐倉城跡は文明年間（1469～1486）に下総守護千葉氏の居城として千葉輔胤により、当時水運交通の要衝でもあった印旛沼に面する台地上に築城されました。千葉氏は鎌倉時代以来、千葉の地を本拠としていましたが、享徳3年（1454）享徳の乱が関東全域に広がると、千葉一族内でも内紛が起こり、庶家側の輔胤が千葉氏の名跡を継承し、千葉の地から新たに築城したのが本佐倉城です。以後百余年、天正18年（1590）に豊臣秀吉の小田原攻めに際し後北条氏と共に滅ぼされるまで、当主9代が居城して下総の政治・経済・文化の中心として栄えました。

城の構造は、千葉県北部に広がる北総台地特有の、台地と谷津が奥深くまで入り込む複雑な地形を巧みに利用したもので、台地を削り、谷を埋め、空堀や土塁を巧みに配して郭を築いた「土の城」です。また、北側は常陸と下総の間に広がる水運の大動脈であった常総の内海の一部をなす印旛浦に接し、南側には銚子・芝山・千葉・武蔵など東西南北へと延びる街道が通るなど、水上・陸上交通の要衝に位置していました。

城域は、酒々井町と佐倉市にまたがる標高約36mの台地上に築かれ、東西約700m、南北約800m、面積約35万㎡に及ぶ巨大な城郭です。城内には、城主のための空間である内郭群7郭と、家臣の屋敷などが置かれた外郭群3郭の計10郭が設けられ、さらにその周囲には城下が広がっていました。

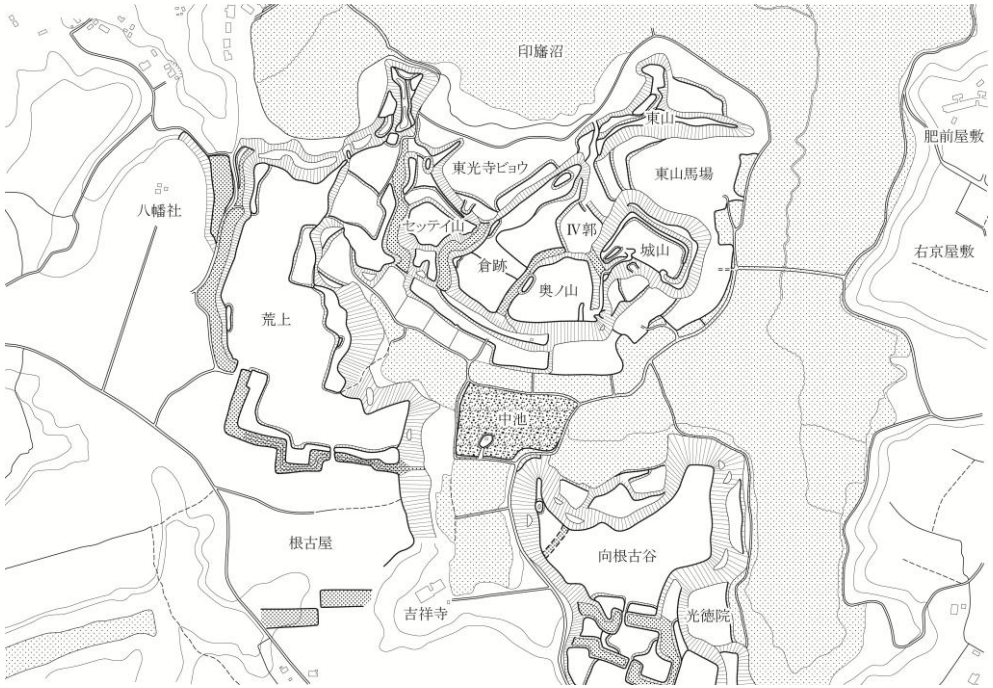
各郭は、複雑に配置された大規模で堅牢な空堀・土塁・櫓台などによって守られており、これらの遺構は現在でも明瞭に残っています。そのため、本佐倉城跡は、当時の城の姿や築城技術を知るうえで重要な資料として注目されています。

令和3年には国史跡本佐倉城跡案内所が設置され、城跡を見学する方々への導入施設として、本佐倉城跡と千葉氏の歴史を解説した展示パネルや出土遺物による展示を行っております。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／京成電鉄大佐倉駅から徒歩約15分
- ●自家用車／東関東自動車道酒々井ICから約10分

■所在地／千葉県印旛郡酒々井町本佐倉字城ノ内ほか
■指定年月日／平成10年9月11日

▼本佐倉城縄張図




▲本佐倉城跡－空撮


▲本佐倉城跡案内所

県史跡	かわむら 河村城跡	神奈川県山北町

河村城は平安時代末期、秀郷流藤原氏の一族、波多野遠義の二男秀高（後に当時の山北の地名「河村郷」から取り、河村秀高と名乗る）が現在の山北の地を領し、築城したといわれている。秀高の子義秀は源頼朝の石橋山挙兵の際、平氏に味方したため、領地を没収されますが、流鏑馬の妙技により本領河村郷に復帰できたと吾妻鏡に記載されている。この流鏑馬は、県指定無形民俗文化財「室生神社の流鏑馬」として現在も毎年11月3日に室生神社例大祭の際に披露されている。

1352～1353年には新田義興らが籠城したとされ、その後城主は畠山国清、関東管領上杉憲実、大森氏、小田原北条氏と変わり、1590年豊臣秀吉の小田原攻めに際し廃城になったと考えられている。

城は甲斐・駿河から西丹沢・箱根山地を経て足柄平野に入るルートの要に位置する標高225mの丘陵上に築かれ、自然地形を生かし、東西にのびる尾根に郭や堀切を配している。

2025年9月には、2007年の確認調査の際に撮影した堀切の中に堆積した土（土層断面）の写真をほぼ原寸大で陶板タイルに焼き付け、堀切を渡る管理用道路壁面に設置する全国的にも珍しい整備を行うなど、城の一部は「河村城址歴史公園」として、調査結果を活かした復元的整備を行っており、小田原北条氏の時代の障子堀なども見ることができる。

また、河村城をより多くに人に知ってもらうために、毎年9月には河村城址保存会が「河村城まつり」を開催している。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR御殿場線山北駅から徒歩約25分
●自家用車／国道246号線宮地信号の南西約1㎞
■所在地／神奈川県足柄上郡山北町山北・岸地内
■指定年月日／平成8年2月13日
■問合せ先／神奈川県山北町教育委員会

▼河村城縄張図




▲河村城－堀切（小郭付近）


▲河村城－堀切（蔵郭付近）

県史跡	栃尾城跡（とちお）	新潟県長岡市

栃尾城は、長岡市栃尾地域に20を超えて築かれた山城の中核をなし、南北朝時代の築城と伝えられている。

戦国動乱の頃、「越後の虎」と恐れられた上杉謙信。幼名を虎千代といい、14歳で元服して長尾景虎と名乗り、兄・晴景の名代として栃尾城に入城した。景虎はここで旗揚げをし、戦国大名への第一歩を踏み出すとともに、多感な青年時代の6年間を栃尾で過ごした。

景虎は武芸・兵法を学び、教養を高めることを怠らず、また戦備も着々と整えたという。武将としての資質と人柄は近隣の豪族たちをも魅了し、その名声は次第に高まっていった。そして中越地区平定のために活躍し、19歳の時、本庄実乃をはじめとする強豪家臣団の栃尾勢を率いて春日山城に入り、越後の盟主となった。

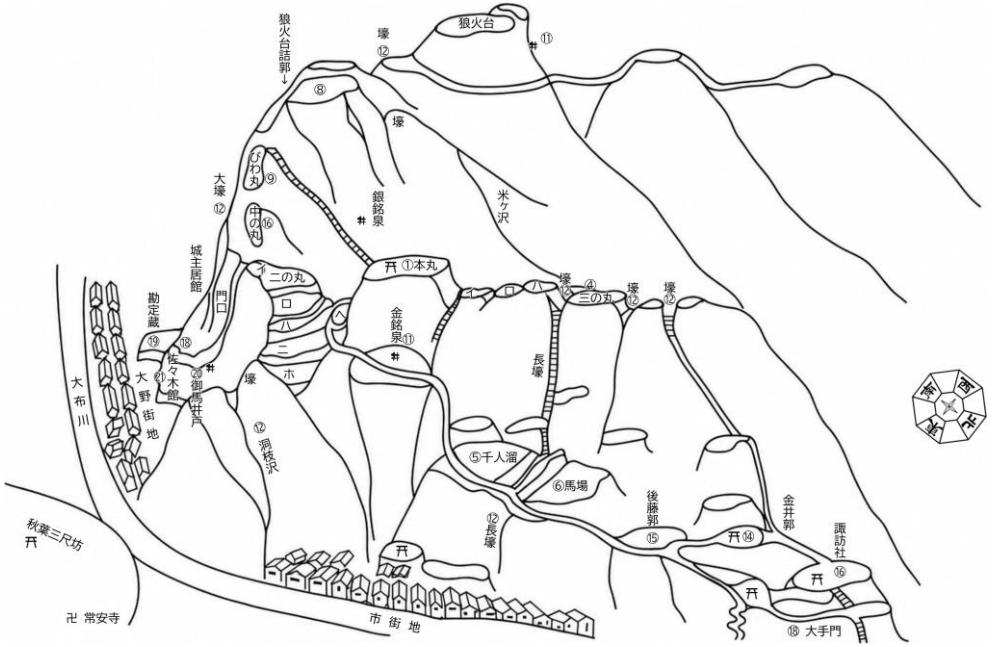
この歴史の舞台となった栃尾城跡は、鶴が羽を広げたような姿に似ていることから名付けられたという鶴城山にあり、市民は親しみを込めて「城山」と呼んでいる。巨大な二重・三重の空堀や千人溜まり、馬場跡など、戦国時代の山城の遺構がよく残っている。

本丸跡からは遠く佐渡や弥彦山を望むことができ、正面には守門岳の秀峰、眼下には西谷川と刈谷田川の流れに囲まれた市街地が一望できる。歴史と自然の魅力をあわせ持つ栃尾城跡は、今も多くの人々を惹きつけている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR長岡駅からバス約45分
- ●自家用車／関越自動車道長岡ICから約40分

■所在地／新潟県長岡市栃尾大野地内
■指定年月日／昭和35年3月28日

▼栃尾城縄張り図




▲栃尾城－全景


▲栃尾城－本丸跡

国史跡	春日山城跡（かすがやま）	新潟県上越市

築城の時期は、南北朝時代（14世紀後半）といわれ、上杉謙信公・景勝公と堀秀治公（16世紀後半）により、現在見られる広大な城に整備されたと考えられる。

春日山城の特徴は、屋敷や空堀が展開する山城の裾野に、延長約1．2㎞に及ぶ堀と土塁で総構がつくられていることであり、中世から近世への築城法の移り変わりを一つの城跡で探ることができる遺例として全国的にもめずらしく、大変貴重な城跡とされている。

昭和10年に山城中心部が国の史跡として指定され、その後、総構が昭和49、55年、平成12年の3回にわたって追加指定された。山城部分は植林されたスギの伐採や草刈りなどで山城本来の姿を見せる景観整備を行っており、平場の総構部分は堀や土塁などを整備し、春日山城史跡広場として公開している。

史跡広場は、例年8月下旬に催され、全国から多くの謙信公ファンが訪れる「謙信公祭」の川中島合戦再現の舞台となっており、上杉・武田両軍の戦いが、夕闇の中、かがり火に照らされ、戦国絵巻を繰り広げる。城跡内は市民団体や地元小中学校等と協働で除草等をはじめとした城跡保全にあたっている。現在『国指定史跡春日山城跡保存管理計画書』に基づいて保存・管理を行っている。

上杉家の正史『上杉家御年譜』は、天正6年（1578）に亡くなった謙信公を生きた姿のまま城内の不識院に埋葬したと伝える。謙信公の遺骸は既にこの地にはないが、今なお、ふるさとの偉人であり、戦国時代の名将である謙信公の聖地として愛され続けている。

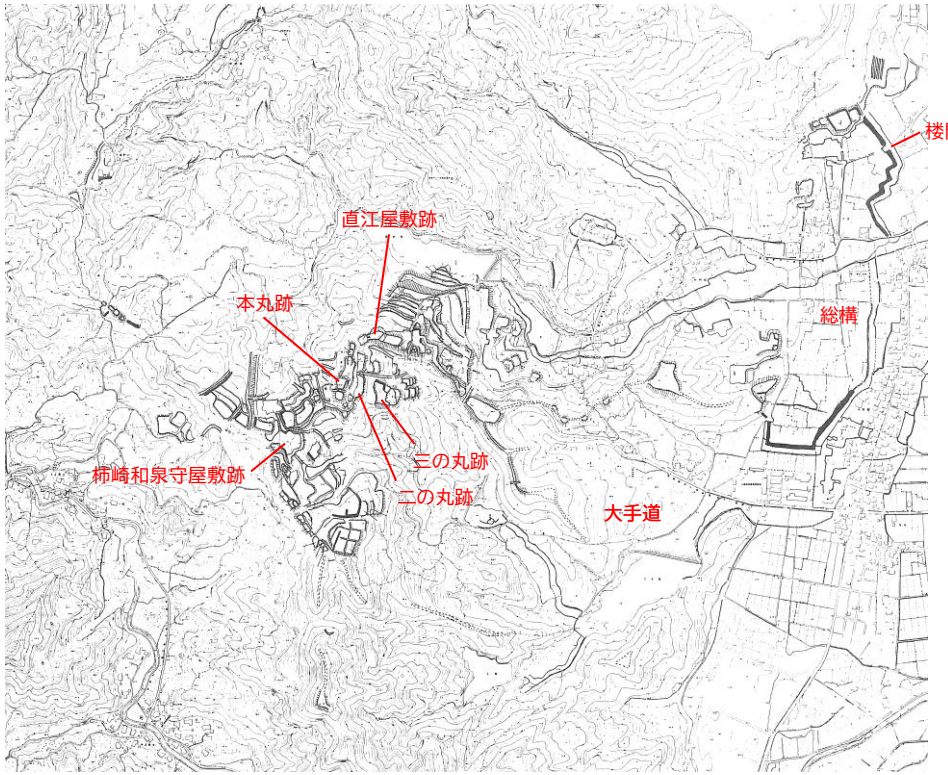
令和 10 年 3 月には謙信公没後450年、令和12年1月には謙信公生誕500年という大きな節目を迎える。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／えちごトキめき鉄道春日山駅から徒歩約40分
- ●自家用車／北陸自動車道上越ICから約15分

■所在地／新潟県上越市大字中屋敷ほか

■指定年月日／昭和10年8月27日
（追加指定／昭和49年3月18日・昭和55年3月14日・平成12年3月7日）

▼春日山城跡
（『新潟県中世城館跡等分布調査報告書』新潟県教育委員会　昭和62年）




▲本丸跡と二の丸の一本イチョウを望む


▲復元した総構と楼門

国史跡	村上城跡（むらかみ）	新潟県村上市

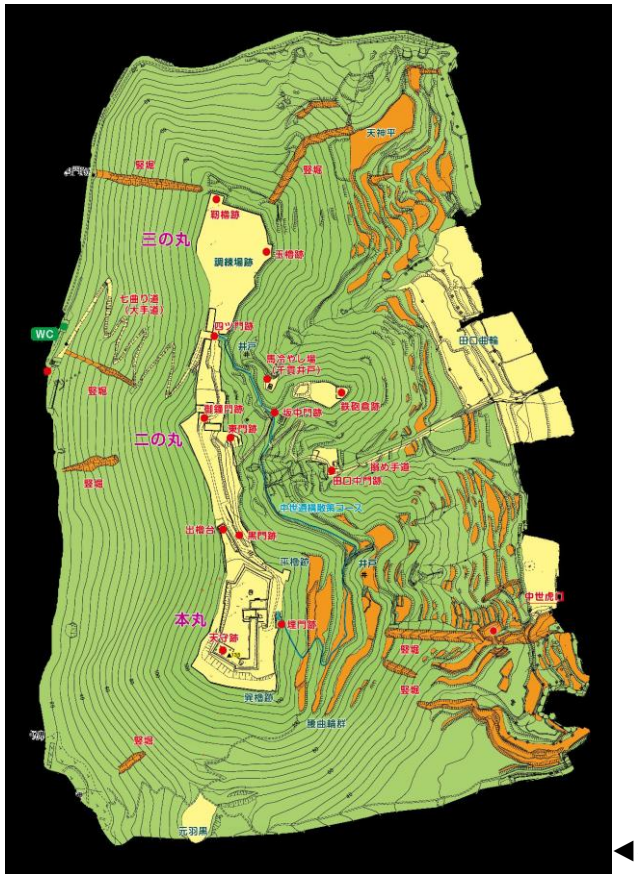
村上城は、16世紀初頭に国人領主の本庄氏により標高135mの臥牛山を中心に築かれたとされる。山上の曲輪を約1．8㎞の石垣が巡る北国では珍しい平山城であるが、慶長期の絵図では、石垣の代わりに木柵が用いられた中世的な城郭として描かれている。本庄氏は、繁長のとき、上杉謙信・景勝の部将として台頭し、上杉家の会津移封を契機に奥州へ移るが、現在も、山腹を中心に良好に残る虎口・竪堀・腰曲輪などの戦国期由来と思われる遺構群が当時を彷彿させる。

その後の村上城は、城主交代が頻繁で、村上・堀・本多・松平・榊原など9家が入れ替わるが、初期の村上家や堀家の頃に石垣を備えた近世城郭へと変貌を遂げたものと考えられる。特に、村上藩最大の15万石で姫路から入った松平直矩は、三層の天守を新造するなど村上城の縄張りを大きく改めた。現在の本丸・二の丸・三の丸から成る連郭式の姿は、当時のものを踏襲している。

最後の約150年は、内藤家が治め、幕末・明治を迎える。天守以下の建物は、すべて火災や明治期の払い下げなどで消失したが、山上を中心に約3，200㎡の石垣が残っている。

350年以上機能した村上城は、中世城郭から近世城郭への変貌と発展の過程を知る上で貴重であることから国の史跡となり、続日本百名城にも選定された。現在は、史跡整備事業としての石垣修復工事が進んでいる。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR羽越本線村上駅から徒歩約25分
●自家用車／日本海東北自動車道村上瀬波温泉ICから約10分
■所在地／新潟県村上市本町字臥牛山地内ほか
■指定年月日／平成5年6月8日



◀村上城縄張り図


▲村上城－本丸


▼村上城－本丸多聞櫓跡下石垣

国史跡	ひらばやし 平林城跡	新潟県村上市

平林城跡は、中世北越後（阿賀北）の小泉荘加納を領した色部氏の居城である。慶長3年（1598）、同氏が出羽国金山城に移封されるまで存続した中世の山城で、その麓には居館跡が広がっている。

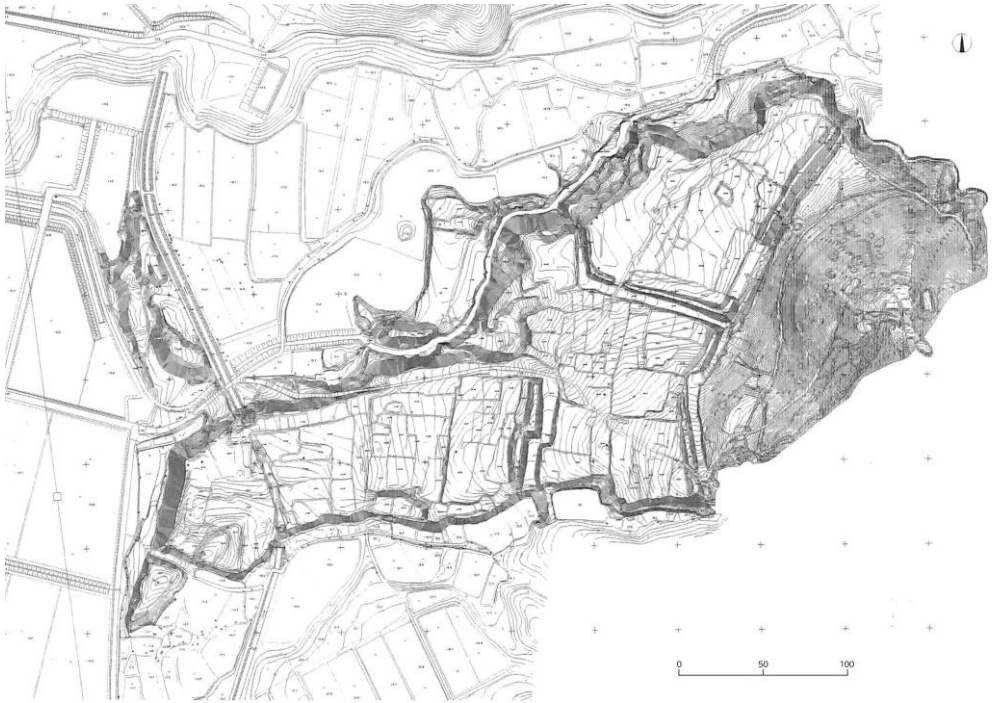
小泉荘は北部の本庄と南部の加納に分かれていて、鎌倉時代のはじめに小泉荘の地頭となった平姓秩父季長が、建永年間（1206～07）頃に嫡子の行長（本庄氏の粗）に本庄、庶子の為長（色部氏の粗）に加納の地頭職を譲り、13世紀後半頃に鎌倉から越後に下向し、現地の直接支配を行った。色部氏が平林城に本拠を移した時期は明らかではないが、居館跡の発掘調査成果から16世紀初頭には平林城が色部氏の居城となっていたと考えられる。色部氏は、村上城の本庄氏と同様に、戦国末期には阿賀北屈指の有力国人となり、謙信の時代には上杉氏に服従しながらも自立性を保っていたが、景勝の時代になるとその統制下に入った。

史跡指定地は59．69haと広大で、標高281mを最高点とする山城跡は、要害主体部（加護山要害）、物見山、のろし山などからなり、それぞれ何段もの帯曲輪が付随し、堀切や土橋などの遺構も残っている。居館跡は、土塁と空堀に囲まれ虎口を有する殿屋敷と岩館、両曲輪を連結し、かつそれらの前衛施設となる中曲輪、居館部の出入り口となる弁天虎口からなる。殿屋敷表虎口に面する空堀からは根固め石等で固定された2列6本の橋脚が確認され、その周辺からは地鎮等祭祀的な内容と推測される木簡が多数出土した。また、殿屋敷表虎口からは当該期の越後では稀有な門礎石と石組排水溝、そして色部氏主殿と考えられる25×26mの建物跡が発掘調査で確認された。なお、虎口の構造、空堀の造り替え、城内道の通路幅の差から、殿屋敷が古く、岩館や弁天虎口が新しいと考えられる。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR羽越本線平林駅から徒歩約20分
- ●自家用車／日本海東北自動車道神林岩船港ICから約10分

■所在地／新潟県村上市平林・葛龍山
■指定年月日／昭和53年9月18日

▼平林城－居館部地形図





▲平林城－全景



▲平林城－正面

国史跡	坂戸城跡（さかど）	新潟県南魚沼市

坂戸城跡が所在する南魚沼市周辺はかつて上田庄といわれ、14世紀中頃には越後守護上杉氏の家臣上田長尾氏の一族が坂戸城に居城、一帯を治めた。上杉謙信の跡目争いである御館の乱の際、坂戸城は上田庄出身である景勝方の拠点の城として整備され、関東方面からの守りを担い不落を誇った。慶長3年(1598)、国替えにより越前から堀氏が越後に入ると、堀直寄が坂戸城主となり石垣等の整備を行った。慶長15年(1610)に直寄が飯山に移され廃城となった。

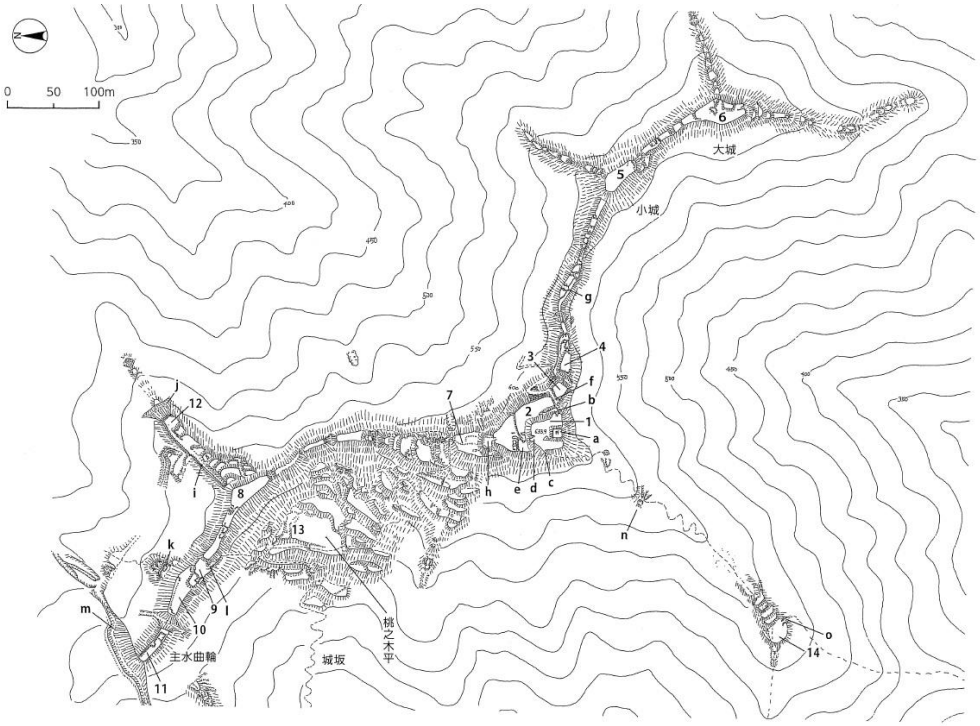
坂戸城跡の立地場所は、南魚沼市のほぼ中央、標高634mの坂戸山の山頂及び山麓に位置する。近世の三国街道を眼下に収め、街道に沿って流れる魚野川は外堀として機能していたと考えられる。坂戸山山頂付近から尾根にかけて、実城・主水郭・桃之木平・大城・小城と呼ばれている大小の郭が築かれ、堀切や土塁により補強されている。また山麓には御館・家臣屋敷跡・御居間屋敷跡と呼ばれる広大な郭が残る。

昭和54年に国の史跡に指定され、平成7年度からは環境整備事業が開始された。これまでに主要登山道である薬師尾根・城坂登山道の整備、埋田堀と呼ばれる内堀跡の復元整備が完了した。平成28年度からは御館石垣の解体修理が行われ、野面積み石垣が修復された。春には郭一面にカタクリが美しく咲き、また市街地から気軽に登ることができるトレッキングの場としても多くの市民に親しまれている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR上越線・北越急行ほくほく線六日町駅から東に約1km
- ●自家用車／関越自動車道六日町ICから南東に約3km

■所在地／新潟県南魚沼市坂戸地内
■指定年月日／昭和54年3月12日

▼坂戸城縄張図『六日町史資料編上巻』より




▲坂戸城－全景


▲坂戸城－居館跡

国史跡	鳥坂城跡（とっさか）	★新潟県胎内市

鳥坂城跡は鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』に登場する山城であり、鎌倉時代初期は新潟県下越地区を本拠地とした豪族・城氏一族の居城であった。城氏は源平合戦では平家側に就き、またその後は鎌倉幕府に敵対し幕府軍と戦ったが、合戦の結果城氏一族は幕府軍に敗北し、滅亡してしまった。なお、城氏の女武将板額御前の、幕府軍を相手に奮戦したことで有名なエピソードはこの鳥坂城が舞台の戦いであった。

城氏滅亡後、鳥坂城は新たに奥山荘（胎内市全域、村上市・新発田市各市の一部）の領主に就いた三浦和田氏の城となった。やがて室町時代後期にはその一族である中条氏の居城となり、また中条氏が鳥坂城の城主であった15世紀には、新たに6つの郭と麓の宮ノ入の居館群などが造られた。

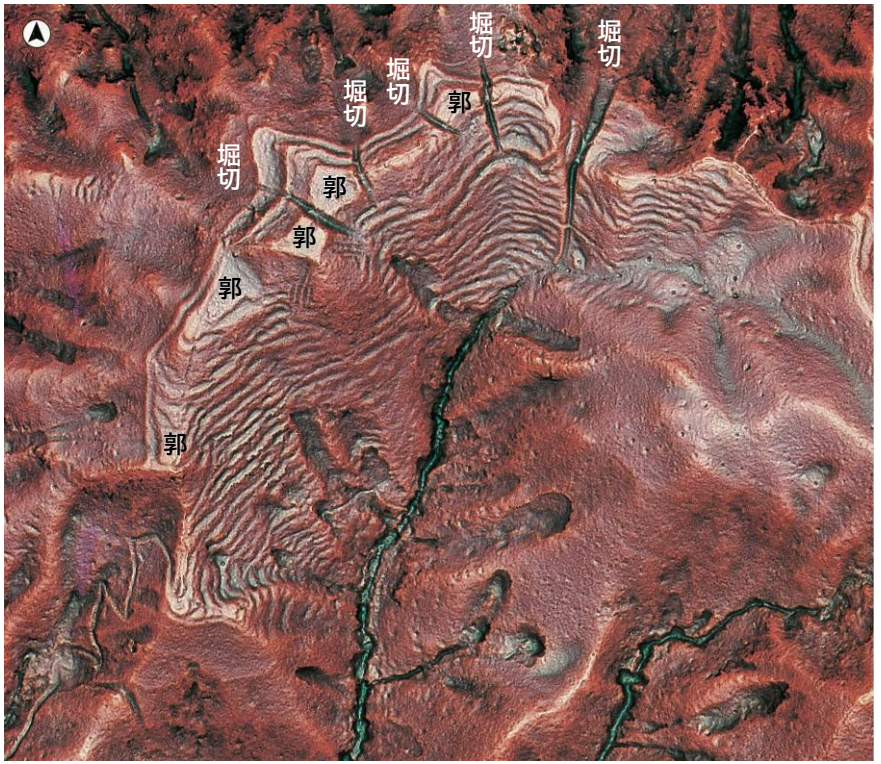
中条氏はその後、揚北衆の一員として越後（新潟県）の戦国大名上杉謙信、上杉景勝の下で活躍したが、慶長3年（1598）、上杉景勝が豊臣秀吉の命で会津（福島県）へ移ると、中条氏もこれに従い会津、米沢（山形県）へ移動した。鳥坂城はこの時廃城になったようであり、現在は上記の6つの郭と麓の屋敷群などの遺構が残っている。

鳥坂城跡が国史跡に指定されたのは昭和59年（1984）で、当初は中条氏の時代に築かれた6つの郭群を含めた山城跡の部分が対象範囲であった。その後平成23年（2011）に羽黒館跡や麓の宮ノ入館跡、寺山地区の土塁と堀が史跡に追加されたことを受け、確認調査を実施し、整備を進めている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR羽越本線中条駅
- ●自家用車／日本海東北自動車道中条ICから約10分

■所在地／新潟県胎内市羽黒地内
■指定年月日／昭和59年10月3日（追加指定／平成23年2月7日）

▼鳥坂城跡山城部分赤色立体図





▲鳥坂城と山麓居館群全景（南西から）



▲羽黒館跡－10次調査出土遺物
（15世紀～16世紀後半主体）

白鳥城跡（しらとりじょうあと）

富山県富山市

白鳥城は、呉羽丘陵の最高峰である城山（標高145m）に位置する山城で、富山平野の東西を見渡せる軍事上の要衝であり、『越登賀三州志』によれば城名は東麓に鎮座する白鳥神社に由来するとされる。南北350m×東西290mの規模を有する。上杉謙信の越中進攻時、神保長職が築城したとも、天正6年（1578）神保八郎左衛門が居住したとも伝えられる。

白鳥城は、天正13年（1585）、羽柴秀吉の越中出陣に際し、秀吉の本営となり、丘陵下の安田城（国史跡、富山市婦中町安田）、大峪城（富山市五福）を出城として築いたと伝わる（『越登賀三州志』）が、秀吉は加越国境の倶利伽羅峠の本陣にて佐々成政の降伏を受け入れており、白鳥城には布陣していない。白鳥城に布陣したのは、越中出陣の先遣隊総大将の織田信雄とする見解がある。

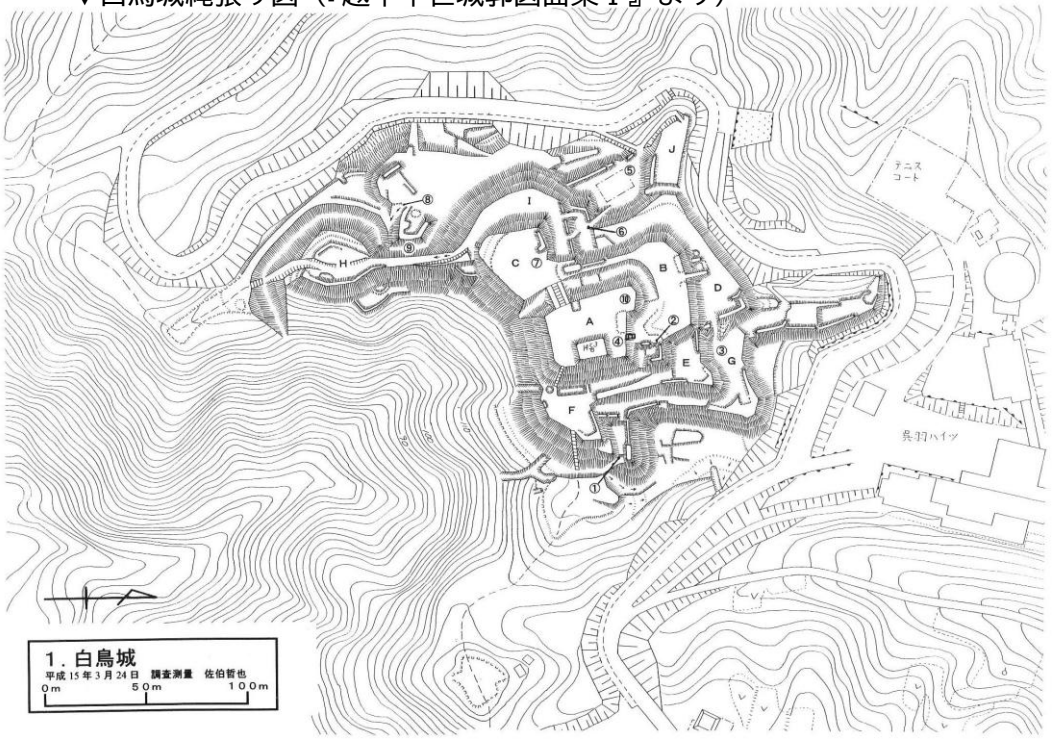
成政降伏後は、佐々氏の所領は新川郡1郡に削られ、他3郡（砺波郡・射水郡・婦負郡）は前田氏に与えられたことで、白鳥城は前田・佐々氏の領地境に位置する城となった。そのため、前田氏が佐々領を監視する戦略上の重要拠点として大改修を行ったとされ、それが現在の縄張と考えられる。

城は山頂部の主郭を中心に18ヶ所の曲輪と14ヶ所の虎口を設け、要所を堀切や空堀で守り、斜面を切崖状にした堅固な構造をもつ城で、現在も空堀や土塁などが良好に残る。試掘調査では、礎石建物・敷石・鍛冶炉などが確認された。

現在は城山公園として整備され、駐車場・石碑・案内看板を設置している。

■交通アクセス
●公共交通機関／①JR・あいの風とやま鉄道富山駅
⇒地鉄バス高岡・新湊小杉方面行きで約15分
⇒呉羽山公園から徒歩約30分
②JR高山本線西富山駅から徒歩約30分
●自家用車／北陸自動車道富山西ICから約15分
■所在地／富山県富山市吉作

▼白鳥城縄張り図（『越中中世城郭図面集Ⅰ』より）





▲白鳥城―本丸（A郭）



▲白鳥城－二の丸（F郭）東側裾空堀

市史跡	守山城跡（もりやま）	★富山県高岡市

守山城は、増山城、松倉城とともに「越中三大山城」として広く知られ、富山県を代表とする山城である。小矢部川下流の左岸に聳える二上山に築かれた。

守山城が初めて史料に登場するのは、観応3年（1352）である。能登の吉見勢が幕府に敵対する桃井直信らの拠点「師子頭」などを攻めたことが示されている。この「師子頭」は、二上山の最高所（標高274m）にある「二上山城」と考えられる。戦国前期には守護代神保慶宗の詰城となっていた。

戦国後期になると、神保長職の支城となり、神保氏張、佐々成政を経て前田利長が居城した。この期間は、二上山のもう一つの峰である城山（標高259m）に位置する「守山城」と考えられる。このように、現在の守山城跡は南北朝・戦国前期の二上山城の前段階を経て、城地を西の支峰に移し、戦国後期に形成されたと考えることができる。この主要部の規模は、110m×40mで主郭（本丸）の北東側にはかつて土塁と堀切が設けられ、正面には虎口を形成されていたと考えられる。

主郭（本丸）の西端部の三面には切岸下に腰郭が設けられ、主郭（本丸）の西側斜面に石垣が一部残されている。

主要部から麓に向けては、「殿様道」と呼ばれる推定大手道が残っている。また、山腹には大平坦面があり、上級家臣などの屋敷跡と考えられる。

守山城の遺構は、一部で後世の改変が見られるものの、大部分はほぼ良好に形をとどめており、「越中三大山城」にふさわしい規模を有している。さらに、加賀前田家2代当主前田利長が居城していた時期の縄張をよく伝える城跡として貴重であることから、平成26年3月27日に高岡市の史跡として指定されている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／あいの風とやま鉄道高岡駅
  - ⇒バス守山経由氷見行き海老坂から徒歩約40分
- ●自家用車／能越自動車道高岡北ICから約5分

■所在地／富山県高岡市守山地内
■指定年月日／平成26年3月27日



守山城縄張り図（主要部）／高岡徹氏作図
『富山県高岡市守山城跡詳細調査概報1』より



▲守山城－遠景



▲主郭（本丸）西側斜面石垣

県史跡	松倉城跡（まつくら）	富山県魚津市

越中三大山城のひとつに数えられる松倉城は、魚津市南部の城山と呼ばれる丘陵上に築かれた山城である。城の構造は、南北にのびる尾根上を空堀で区切り、複数の曲輪（郭）によって構成された連郭式の山城で、城域は約150，000㎡の規模を誇る。この松倉城を取り囲むように支城や砦が点在し、広域な城郭群を形成していることが大きな特徴である。

本丸の南側に位置する八幡堂と呼ばれる曲輪から、松倉城で最も標高の高い平ノ峰（標高430m）までの直線距離は約650mあり、周囲の尾根上には多数の平坦面が設けられている。さらに、標高415mの本丸から見渡す眺望は格別で、遠くは能登半島まで見渡すことができる。

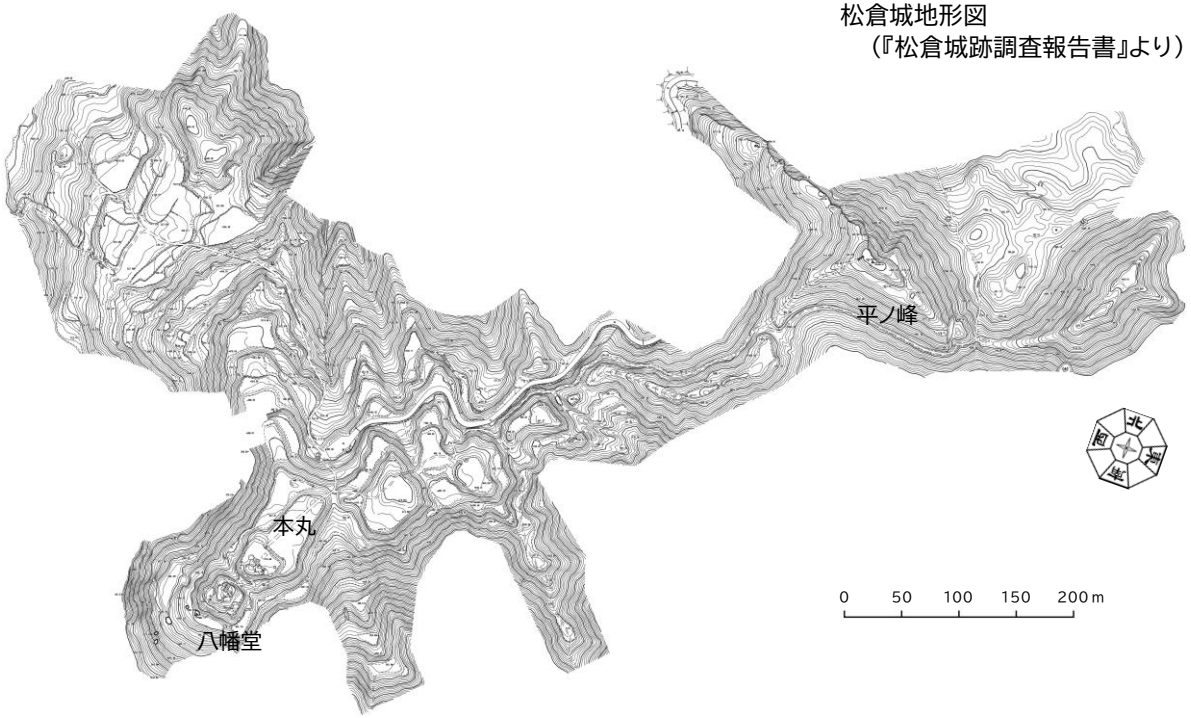
築城時期は定かではないが、南北朝時代には越中における重要な山城であったと考えられている。15世紀代には、越中国守護代であった椎名氏が代々城主を務めた。16世紀には、越後の上杉謙信に属していた椎名康胤が武田信玄と手を結んだことから、謙信に攻められ落城。以後、上杉氏から織田方の佐々氏、そして加賀前田氏の所領となり、慶長年間の初めに廃城になったとされる。

城内や遊歩道等は、地元の方々による定期的な除草作業が行われている。今後も、市民をはじめより多くの人々に、魚津市が誇る松倉城やその支城群の希少価値を知っていただき、地域にとって誇りや親しみが持てる城として後世に伝えていきたい。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／あいの風とやま鉄道魚津駅⇒タクシーで約40分
- ●自家用車／北陸自動車道魚津IC⇒新川広域農道を経て角川ダム方面へ約30分

■所在地／富山県魚津市鹿熊字城山
■指定年月日／昭和40年1月1日
■問合せ先／魚津市教育委員会

松倉城地形図
（『松倉城跡調査報告書』より）



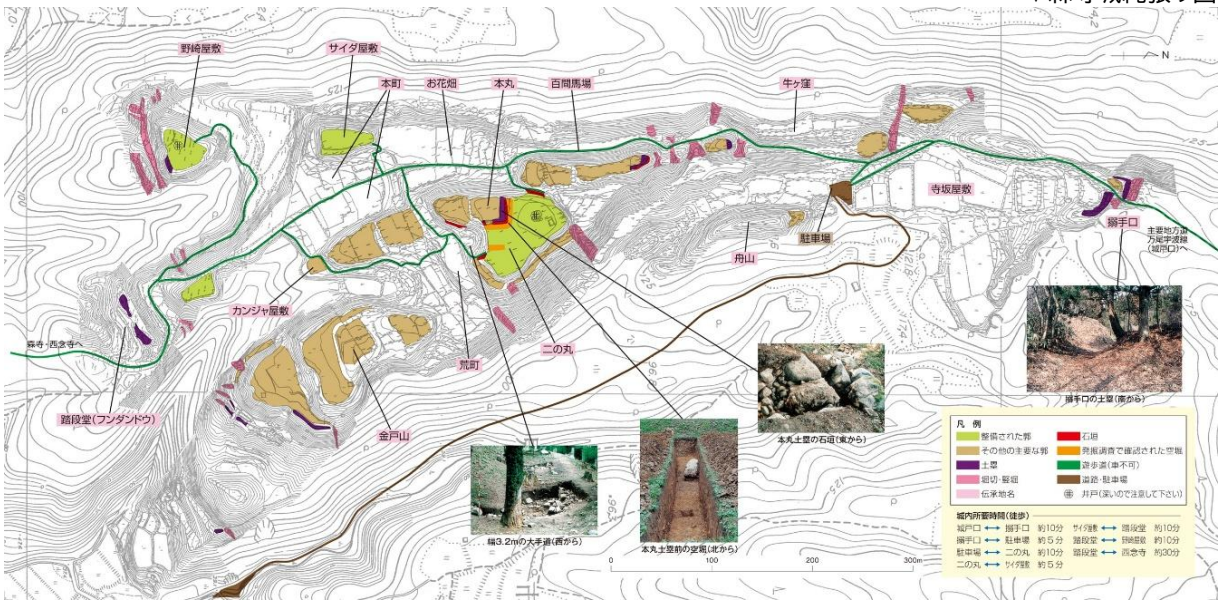

▲松倉城－全景



▲松倉城－本丸

市史跡	森寺城跡（湯山城跡） もりでら　ゆやま	富山県氷見市

▼森寺城縄張り図



富山県の西北部、能登半島の付け根東側に位置する氷見市の代表的な城郭である。能越国境の荒山峠へ向かう街道を見下ろす丘陵尾根に築かれ、中世の史料には「湯山」の名で登場する。

城の範囲は南北約1．1㎞、東西約0．4㎞、最高地点の標高は167．2m、平野との比高は約140mである。

16世紀初め頃に、能登七尾城の畠山氏によって築かれたとされる。その後、上杉謙信・佐々成政の支城となり、天正13年に氷見地域が前田氏領となった時点で廃城になったと考えられる。

昭和48年に城跡中心部が市指定史跡となり、平成8年度からは市教委によって測量調査と発掘調査が断続的に実施された。発掘調査では、本丸と二の丸の間の土塁外側に空堀があったこと、二の丸にのぼる大手道が両側に石垣をそなえた幅2．3mの石敷き通路であったこと、廃城時に石垣の一部を破壊した城わりが行われた可能性があること、などが確認された。天正9年頃、織田方によって中心部が石造りの政治拠点として改修されたと考えられる。

平成7年度、草刈りや案内・解説を行うボランティアグループ「尋湯山会」が結成され、平成15～17年には地元が中心となったイベント「湯山城戦国物語」が実施された。



▲森寺城－二の丸登り道の石垣



▲森寺城－二の丸登り道の石垣と側溝

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR氷見線氷見駅
- ●自家用車／能越自動車道氷見北ICから約10分

■所在地／富山県氷見市森寺字城山
■指定年月日／昭和48年1月30日
■面積／約600，000㎡（うち指定範囲約12，000㎡）

国史跡	ますやま 増山城跡	富山県砺波市

増山城は南北朝期、幕府に敵対した桃井直常の拠点・和田城として歴史上に登場する。室町時代には越中守護代・神保氏の支城となったが、後に上杉謙信に追われ本拠地をここへ移した。3度謙信に攻められ天正4年に落城。謙信没後の天正9年には織田方に接収され、佐々成政の支配下に入った。その後、成政は越中加賀の国境線で前田利家と争い、その時期に城の整備拡充を図ったとみられる。成政が豊臣秀吉に降伏した後は前田氏に与えられ中川光重が城主となるが、慶長年間には廃城となった。

砺波・婦負・射水三郡の境に位置し、砺波郡への前線拠点として機能した。麓を流れる和田川は天然の外堀であると同時に、日本海へつながる水運にも利用された。二ノ丸を主郭とし、その北東と南西に隅櫓を備える。また周囲に一ノ丸、安室屋敷など攻撃拠点となる曲輪を配している。F郭手前で4本の尾根を切った大堀切は、幅15m、深さ10m、総延長300m以上あり、安室屋敷北まで続く。幾重にも重ねられた深く長大な堀切による堅固な守りが特徴で、謙信は「増山之事、元来嶮難之地」と評した。

昭和23年に富山県指定史蹟となり、平成9～15年の総合調査を経て平成20年に報告書を刊行。平成21年には国指定史跡となり、同年から地域活性化イベント「増山城戦国祭り」を毎年開催している。平成22年から解説ボランティア「曲輪の会」が活動、平成29年には続日本100名城に選定された。

■交通アクセス
　●公共交通機関／JR城端線砺波駅下車
　●自家用車／北陸自動車道砺波ICから富山市方面へ約10㎞
■所在地／富山県砺波市増山地内
■指定年月日／平成21年7月23日（追加指定／令和3年3月26日）
■面積／60ha

▼増山城跡地形図





▲増山城空撮



▲増山城－冠木門

千石山城跡（せんごくやま）

★富山県上市町

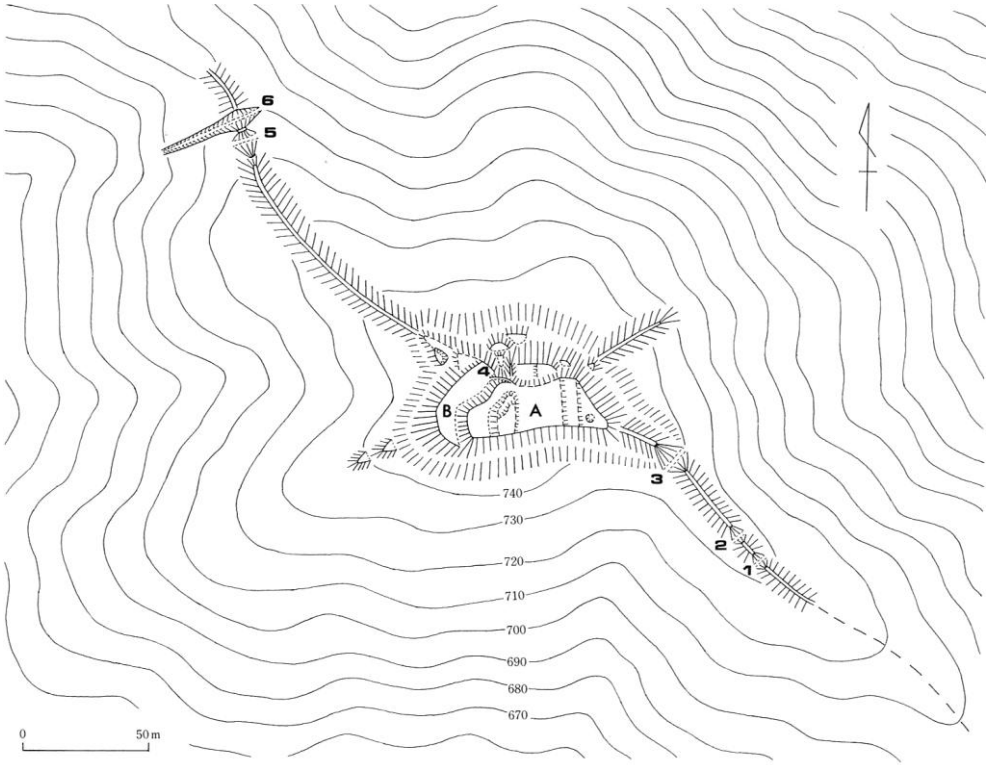
上市町域及び近隣には、新川郡西部一帯を支配した有力国人「土肥氏」の築いた城館群が点在する。千石山城は堀江城を本拠とした「堀江系」土肥氏の詰城と伝えられる。山上からは北方に護摩堂城や松倉城、西方に茗荷谷山城、南方には上市町のシンボルである剣岳を望むことができる。

上市川第二ダム東方の千石城山（757.3m）の山上に築かれた山城で、越中土肥氏関連支城群の中でも最高所に位置する。山頂部に主郭があり、北側の郭からの虎口が取り付く。南東方向の尾根は主郭に近づくほど大きくなる三重の堀切、また北西方向の尾根は深さ10～14mに達する深く巨大な二重の堀切によって完全に遮断されている。

本城の城主は土肥氏とされており、特に土肥弥二郎であったとする説が有力である。伝承では城主であった土肥弥二郎が堀江城落城後に本城に籠城し、織田方と戦ったものの落城。弥二郎はその後、稲村の百姓であった次郎右衛門のもとで3年間身を隠し飛騨へ落ち延びたとされている。城主である土肥弥二郎は天文24（1555）年に堀江庄の祇園社に木造獅子頭を寄進した人物として知られている。現在は登山道が整備されており、多数の人々が訪れている。城郭愛好家のみならず登山愛好家などにも支持されている本城もぜひ足を運んでほしい。

■交通アクセス
●公共交通機関／富山地方鉄道本線上市駅からタクシーで約40分
●自家用車／北陸自動車道立山ICから約50分
■所在地／富山県中新川郡上市町千石地内

▼千石山城縄張り図
（『富山県上市町中世城館調査報告書』掲載、高岡徹氏作図）





▲千石山城本丸周辺



▲千石山城からの眺め
（写真提供／滑川市立博物館）

茗荷谷山城跡（みょうがたにやま）

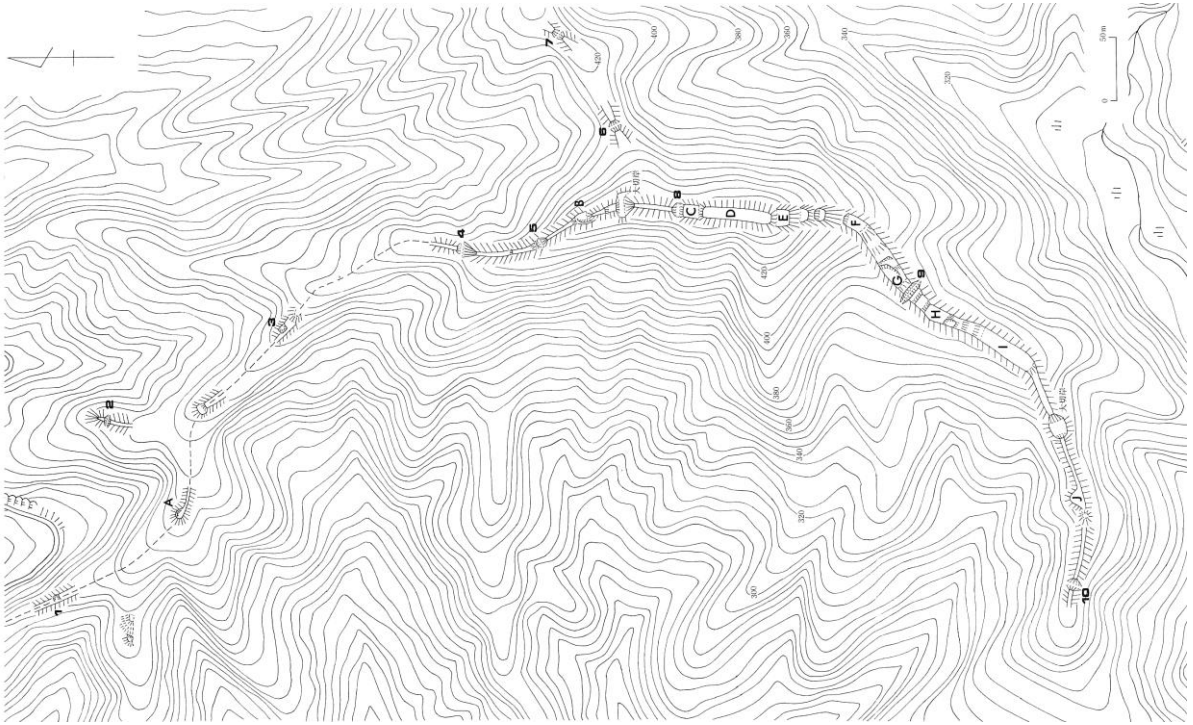
★富山県上市町

茗荷谷山城は弓庄城を本拠とした「弓庄系」土肥氏の詰城と伝えられる。山上からは新川平野や魚津市の松倉城をみることができ、上市町側では柿沢城や郷田砦といった土肥氏の持城であった城郭が視認できる。

主郭は山頂部にあり、両側を深い谷に守られた狭く長い尾根上に多数の郭や防御施設が連なる。郭は全体的に小規模・不整形であるが堀切は大規模なものが多い。主郭の南側には郭6ヵ所・堀切2ヵ所・大切岸1ヵ所があり、郭の数は計10ヵ所である。また、南北両端の堀切間は約1．2㎞にも及び、極めて長大な城域を有する。これだけの郭や防御施設を備えた山城は富山県内でも珍しく、見どころのひとつとなっている。

「大岩不動」で知られる大岩地区の東方にそびえる城ヶ平山（446．3m）の山上に位置する。東麓の大岩側を意識した縄張りとなっているが、現在は大岩集落の付近に登山道が整備されており、主郭（山頂）は立山連峰や富山平野が一望できる展望台として千石山城と同様、トレッキングを楽しむ人々の憩いの場となっている。

▼茗荷谷山城縄張り図
（『富山県上市町中世城館調査報告書』掲載、高岡徹氏作図）





▲茗荷谷山城



▲茗荷谷山城
（提供／滑川市立博物館）

■交通アクセス
- ●公共交通機関／富山地方鉄道本線上市駅からタクシーで約15分
- ●自家用車／北陸自動車道立山ICから約25分

■所在地／富山県中新川郡上市町大岩・浅生・須山地内

県史跡	みやざき 宮崎城跡	富山県朝日町

宮崎城は、標高248mの城山にあって、越中と越後の国境に近く、麓には北陸街道が通っている。山頂からの眺めは素晴らしく、東は国境方面、西は新川平野まで陸と海を見渡すことができるため、平安時代の末から加賀藩が廃城とするまで軍事上の拠点となった、県内最古の山城である。

宮崎城の築城には、この地方の豪族宮崎太郎が関わったとされるが、はっきりとわからない。平安末期の治承・寿永の乱の際には木曽(源)義仲が以仁王の皇子で後白河法皇の孫である北陸宮を宮崎太郎とともに奉戴した所と伝わっている。承久の乱では宮崎定範が官軍として幕府方と城に近い越後国境付近で戦い敗走している。室町・戦国期には越中守護代の椎名氏と越後の長尾氏、佐々成政と上杉氏との争奪戦が繰り返された後、佐々氏の肥後転封後は前田氏(加賀藩)の所領となり、高畠織部が在城している。明治以後は、位置、地形、地勢が軍略的に適していることから太平洋戦争の際には陸軍用地となっていた。

現在の城郭跡は、不明瞭ながら、本丸、二の丸、三の丸、矢倉台、石垣、食い違いの堀切土橋などの跡を認めることができる。



▲宮崎城

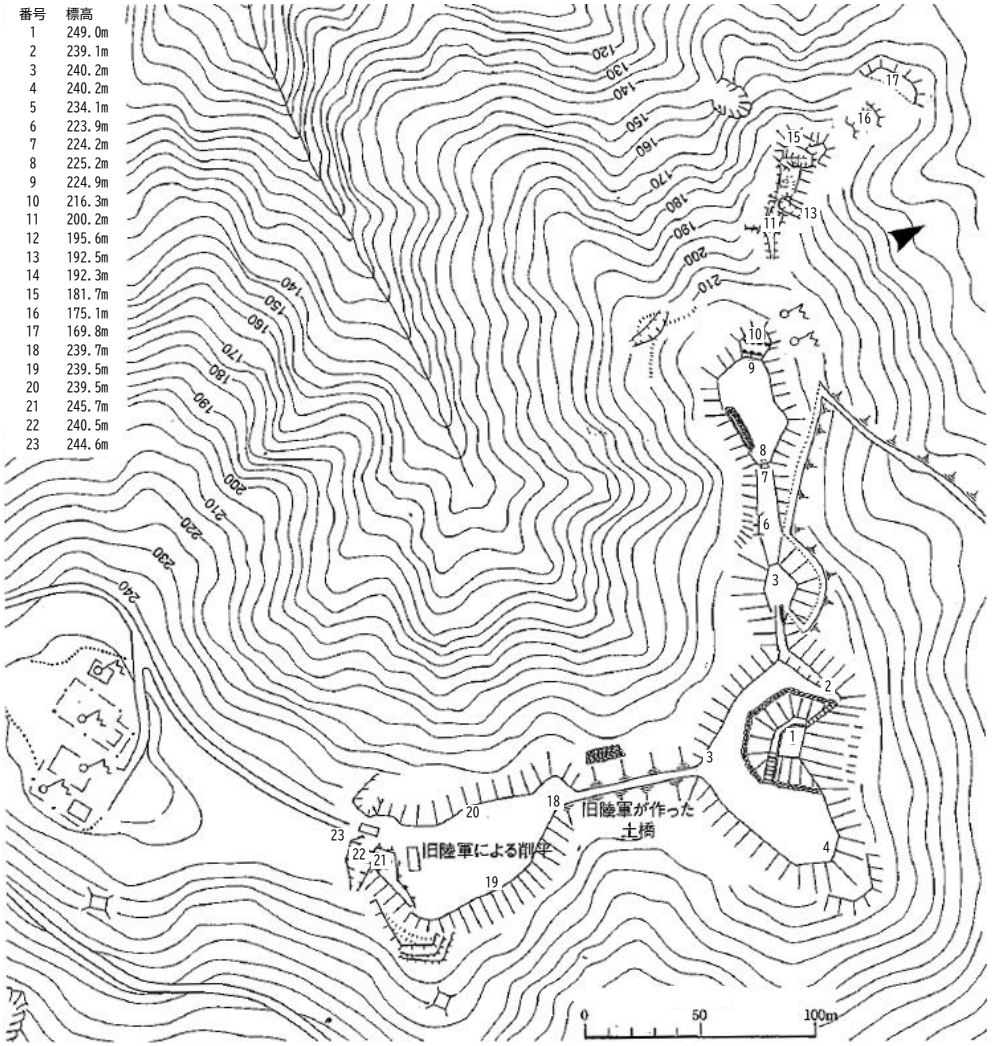


▲宮崎城－三の丸

■交通アクセス
- ●公共交通機関／あいの風とやま鉄道越中宮崎駅から徒歩約1時間
- ●自家用車／北陸自動車道朝日ICから約20分

■所在地／富山県朝日町城山地内

■指定年月日／昭和40年1月1日



▲宮崎城縄張り図
(富山県埋蔵文化財センター発行、富山県中世城館遺跡総合調査報告書)

国史跡	松根城跡（まつね）	石川県金沢市

国指定史跡「加越国境城跡群及び道」を構成する城郭である。

加賀と越中の国境、砺波丘陵の最も高い尾根筋である標高308mの山頂部を中心に造成されており、加賀平野や砺波平野への眺望がとても良好である。

源平合戦の伝承や南北朝時代の史料が残るが、現存遺構は発掘調査成果などから戦国時代末期の小牧・長久手合戦に連動して勃発した前田利家と佐々成政による加越国境合戦の頃のものと考えられる。

城は南北440m、東西140mの規模があり、主郭と土橋等で接続する曲輪群とそれらを囲む横堀、城郭の北端と西端を遮断する大堀切によって構成され、外枡形虎口や馬出を随所に配置している。大堀切が加賀側に認められることから、前田利家からの侵攻に備えた佐々成政方の築造もしくは改修を示しているものと考えられる。

発掘調査によって、門跡などの遺構と共に16世紀後葉の土師器皿、越前焼甕、珠洲焼甕の他、9世紀頃の灰釉陶器や13～14世紀頃の土師器皿、鉄釘なども出土した。

また、小原越が大堀切で遮断されていることが確認されたことから、国境を行き交う街道を戦時封鎖していた可能性が具体的な調査成果として指摘できる数少ない城郭である。

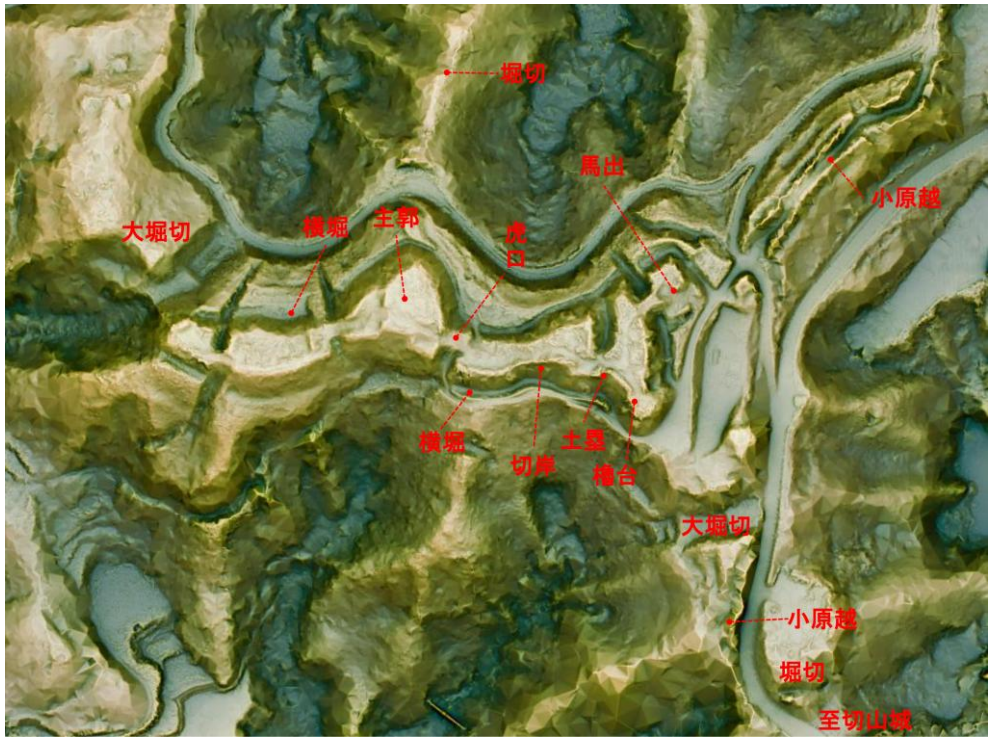
指定後は、平成12年に整備された遊歩道などの再整備を実施している。下草等の管理は、地元住民で構成される「加越国境城跡群及び道サポーターズクラブ」によって丁寧に行われおり、来訪者に備えている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関：IRいしかわ鉄道森本駅下車、タクシーで約25分
- ●自家用車：北陸自動車道金沢森本ICから約15分

■所在地／石川県金沢市松根町・竹又町地内

■指定年月日／平成27年10月7日

▼松根城赤色立体図（緑色に改変）





▲松根城－土橋と馬出



▲松根城復元イラスト

国史跡	切山城跡（きりやま）	石川県金沢市

国指定史跡「加越国境城跡群及び道」を構成する城郭である。

加賀と越中の国境からやや加賀よりに位置する標高139mの尾根頂部を中心に造成されており、国境付近や南方の森下川への眺望が良好である。

城は南北250m、東西200mの規模があり、コンパクトな造作ながらも主郭周辺は馬出と連続する外枡形を採用しており、高い防御力を備えた16世紀終わり頃の特徴がよくみられる。松根城側に大規模な横堀を設置したことから、小牧・長久手合戦に連動して勃発した加越国境合戦に際して、前田利家が越中の佐々成政軍に対抗して築城した城郭と考えられる。

発掘調査によって、礎石立ちの城門跡や土塁上の柵・塀跡などが確認され、火縄銃の弾丸や土師器皿、粉引臼、砥石などが出土した。城門及びその脇を固める土塁上の柵・塀、整地土などによって、緊張状態時に臨時的に築かれたと考えられる砦的な城郭の城門の姿の一端が明らかとなった。

城郭の東端に設置された大規模横堀は、尾根を通過していた小原越を遮断していたと考えられる。一方、尾根筋からやや下がったところには2重の堀とも見違うような深い堀割遺構、つまり道跡が確認できる。城域外と考えられるが、防御施設として道をつくり替え、城郭化した可能性があり、城郭と道の関係を示す好例といえる。

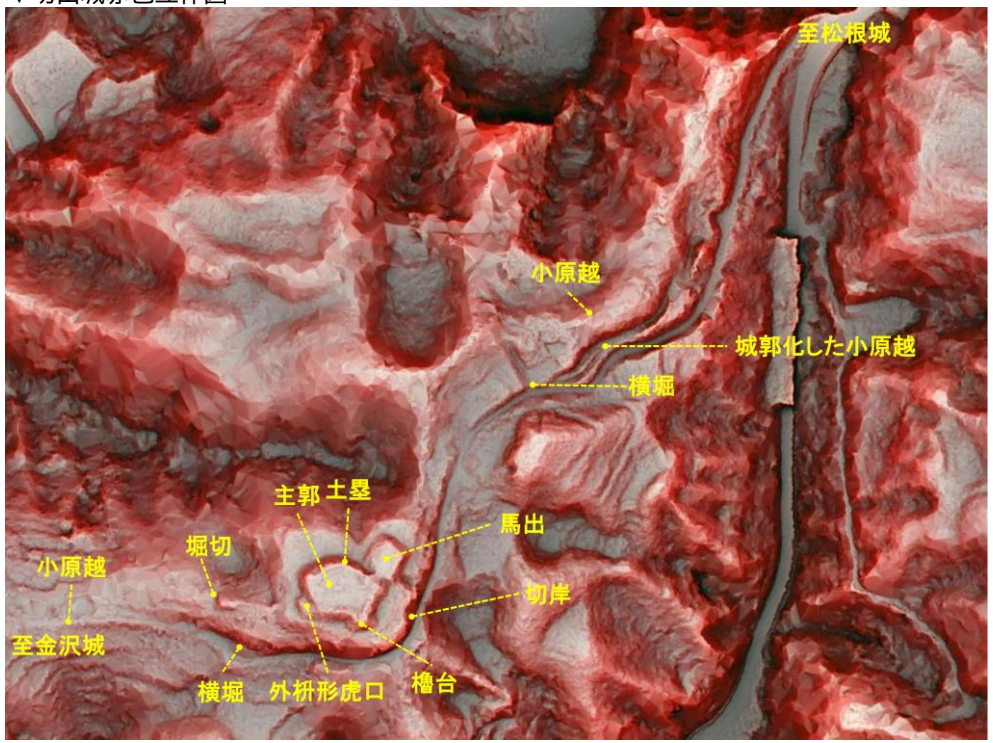
指定後は説明板などを設置しており、順次遊歩道整備を実施する予定である。下草刈りは三谷地区町会連合会の有志により実施されており、遺構の観察が容易となっている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関：IRいしかわ鉄道森本駅からタクシーで約15分
- ●家用車：北陸自動車道金沢森本ICから約10分

■所在地／石川県金沢市宮野町・桐山町地内

■指定年月日／平成27年10月7日

▼切山城赤色立体図





▲切山城馬出



▲切山城復元イラスト

市史跡	高尾城跡（たかお） 新	石川県金沢市

金沢市南部の富樫丘陵先端部に築かれた高尾城跡は、長享2年（1488）に加賀一向一揆（長享の一揆）によって攻め落とされた加賀守護富樫政親の詰城として知られている。この事件によって、加賀は「百姓ノ持タル国ノヤウ」と評されるようになった。

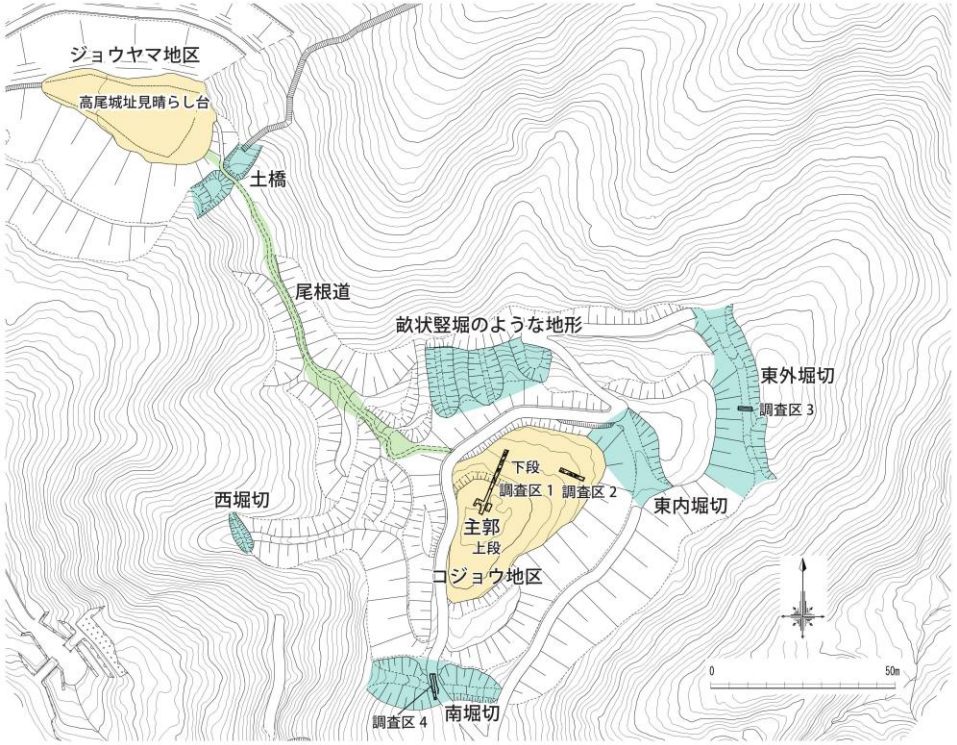
高尾城跡は、「ジョウヤマ」と「コジョウ」と称される2地区で構成され、「ジョウヤマ」が中心部分とされるが、過去の土砂採取によってその大半が失われた。一部残った曲輪は「高尾城址見晴らし台」として整備されている。

「コジョウ」は、「ジョウヤマ」に残る曲輪から南東に延びる尾根道を進んだ丘陵頂部に所在し、主郭や虎口、堀切、切岸、竪堀などが確認できる。「コジョウ」から東と南に延びる尾根道には堀切を設置して尾根を遮断するが、「ジョウヤマ」から延びる尾根には堀切を設けず、虎口が開口することからも両地区は一体的に機能していたと考えられる。また尾根道は細く両側は切岸の如く急斜面であり、一人ずつしか通行できない。虎口東側の緩斜面には畝状竪堀に似た地形がみられる。その他の周囲は大きな切岸もしくは急崖で進軍は困難といえる。

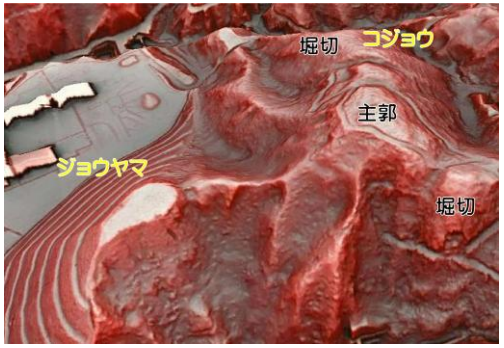
「コジョウ」での発掘調査によって14～15世紀の遺物が出土したことから、富樫氏が本市に隣接する野々市に守護所（館）を構えた際の詰城として整備した可能性が高い。また、畝状竪堀に似た地形がみられることから、柴田勝家軍の侵攻に備えた一向一揆勢による16世紀後半頃の城である可能性も指摘されている。

■交通アクセス
●公共交通機関：北鉄バス「高尾南二丁目」下車、徒歩約15分
●家用車：北陸自動車道白山 IC より約35分
■所在地／石川県金沢市高尾町地内
■指定年月日／令和8年9月11日

▼高尾城跡遺構




▲ジョウヤマからコジョウへの細尾根



▲高尾城赤色立体図

国史跡	七尾城跡（ななお）	石川県七尾市

七尾城は、能登の守護・畠山氏が領国支配の拠点として戦国時代（16世紀前半頃）に築いた山城である。

石動山系の北麓、七尾湾を見下ろす要害に築かれた主要な城郭の範囲は南北約2．5㎞、東西約0．8㎞（面積252．6ha）あり、七尾城全体の城域は面積323．3haに及ぶ。中心部には野面積みの石垣、土塁、堀切などの遺構が良好に保たれ、「七尾」の地名の由来ともなった山麓の城下へと広がる尾根筋には幾重にも曲輪が連なっており、北陸でも最大級の規模を誇るまさに戦国期を代表する中世城郭である。

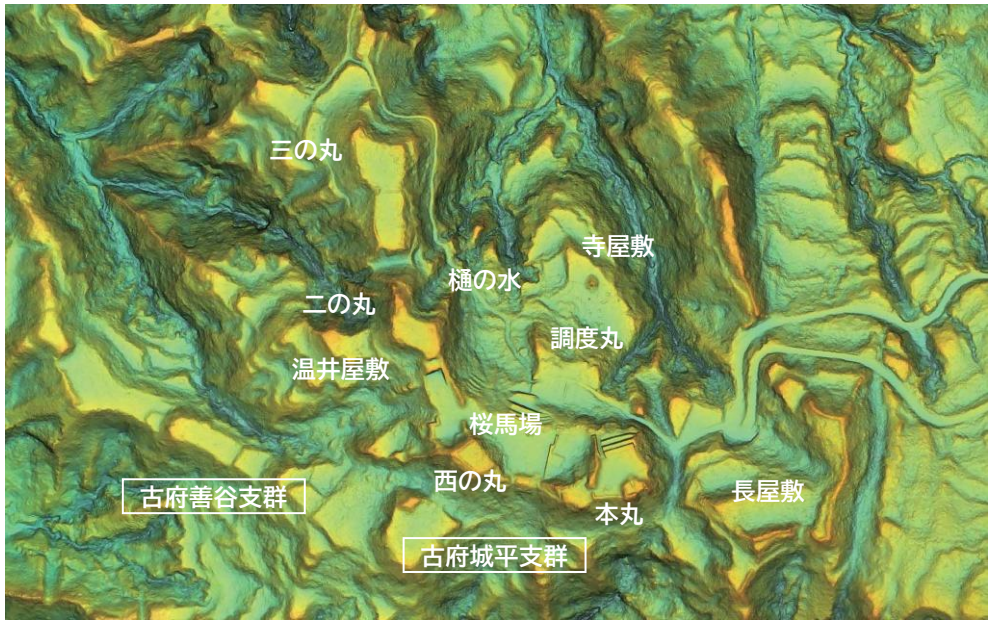
難攻不落と言われた七尾城は天正5年（1577）、重臣の内応により、能登に攻めてきた越後の上杉謙信によって落城し、能登畠山氏169年の歴史は幕を閉じた。その後、織田信長から能登を与えられた前田利家が天正9年（1581）に入城し、翌年に港近くの小丸山城、天正11年（1583）には金沢城に移るが、算木積み状の石垣から、天正後半以降も前田家による七尾城の改修が近年の調査・研究により指摘されている。

標高約300mの本丸からは、七尾市街地や七尾湾、さらには能登半島の絶景を望むことができる。かの上杉謙信は、「聞きしに及び候より名地、賀・越・能の金目の地形と云い、要害山海相応し、海頬嶋々の躰までも、絵像に写し難き景勝までに候」と本丸からの眺望を絶賛している。

令和6年1月1日の地震により、桜馬場北側石垣や二の丸南側石垣など23箇所の被害があった。現在もなお、一部箇所は立入禁止であるが、令和8年8月8日から山麓から本丸までの大手道が全面開通し、復興に向けて歩みを進めている。

■交通アクセス
　●公共交通機関／JR七尾線七尾駅
　●自家用車／能越自動車道城山ICから約10分
■所在地／石川県七尾市竹町古府町古屋敷町入会
■指定年月日／昭和9年12月28日（追加指定／平成23年2月7日、平成31年2月26日）

▼七尾城跡航空レーザー測量図（本丸周辺部起伏図）




▲七尾城跡本丸－空撮


▲桜馬場北西側斜面石垣下部

市史跡	大聖寺城跡（だいしょうじ）	石川県加賀市

加賀と越前の国境近くに位置し、戦国期から織豊期にかけて加賀国の支配をめぐる攻防が繰り広げられた城跡である。天正3年（1575）以降、一向一揆勢を退けた織田・豊臣勢のものとなり、江沼郡支配の拠点となった。慶長5年（1600）には関ケ原の戦いの前哨戦とも言える大聖寺合戦が起こり、大聖寺城主であった山口玄蕃宗永を討ち取った前田氏の支配下となった。元和元年（1615）には一国一城令によって廃城となり、寛永16年（1639）に創建された大聖寺藩はこの城の麓に藩邸を設けて青磁拠点とし、大聖寺城は再建されなかった。しかし大聖寺城は、藩政期を通じて適切な管理がなされたため、現在でも廃城時の姿をとどめている。本丸は石垣を備えた櫓台を持つ。廃城時の破城の様子が残っている。また、二の丸・鐘が丸・戸次丸等の主要な曲輪は土づくりで、土づくりの城から石づくりの城へと再整備された姿を見ることが出来る。

加賀市中心市街地・大聖寺地区は、天正年間に大聖寺城が領主居城となった時から城下町として整備が始まったとされ、町の歴史を考える上でも重要な城跡である。

大聖寺城跡はほぼ全域が昭和50年に都市公園となり、遊歩道等が整備されているが、城跡としての整備活用は端緒に着いたばかりである。平成23年度から28年度にかけて行った発掘調査の成果を基に、今後保存活用や再整備を計画してゆく。加賀市を特徴づける歴史資源として、活かし方を検討していきたい。

■交通アクセス
●公共交通機関：IRいしかわ鉄道大聖寺駅より徒歩15分
●自家用車：北陸自動車道加賀ICから6分分
■所在地／石川県加賀市大聖寺地方町字古城山ほか
■問合せ先／加賀市教育委員会事務局文化課（0761-72-7888）
■指定年月日／昭和35年10月7日

▼大聖寺城跡縄張り図





▲大聖寺城跡－全景（北東より）
（加賀市提供）



▲大聖寺城跡－本丸櫓台（東南より）
（加賀市提供）

国史跡	鳥越城跡（とりごえじょうあと）附二曲城跡（ふたげじょうあと）	石川県白山市

手取川と支流の大日川に挟まれた丘陵上の鳥越城跡と、大日川対岸の独立峰上の二曲城跡は、加賀一向一揆の最後の拠点として歴史的に重要な意義を持つ。鳥越城跡は、本丸、二の丸、三の丸など5つの曲輪と3つの腰曲輪で構成され、昭和52年から54年にかけて行われた発掘調査では、多くの遺構と遺物が出土し、当時の人々の生活を知る貴重な資料となっている。また、二曲城跡でも調査が行われ、山頂の削平や腰郭、空濠の遺構が確認されている。

鳥越城跡と二曲城跡の城主は、手取川・大日川流域の一向宗門徒組織である山内惣庄の指揮者、鈴木出羽守であった。天正6年（1578年）には、本願寺の顕如が白山麓一向門徒を督励する書状が鈴木出羽守と山内惣庄中に宛てて出している。天正8年（1580年）に本願寺顕如が織田信長に屈服し石山合戦は終結したが、北陸方面の一向一揆はその後も抵抗を続け、柴田勝家との間で戦闘が行われた。同年4月には加賀の一向一揆の拠点であった金沢御坊陥落したが、白山麓・山内衆の抵抗は続いた。しかし、同年11月には鳥越城跡、二曲城跡も落城し、鈴木出羽守とその一族の首級が安土に届けられた。山内衆の抵抗はその後も続いたが、天正10年（1582年）3月に再び鎮圧され、加賀一向一揆は終焉を迎えた。鳥越城跡には今なお「首切谷」「自害谷」といった地名が残り、繰り返された戦いの凄惨さを物語っている。

これらの鳥越城跡・二曲城跡は、加賀一向一揆の最後の拠点としての歴史的意義に加え、発掘調査によって戦国時代の人々の生活を知り得る貴重な遺跡であることが明らかになったため、両城跡を併せて史跡に指定し、その保存が図られている。

■交通アクセス
　●公共交通機関／北陸鉄道石川線鶴来駅⇒瀬女ゆきバス釜清水から徒歩約20分
　●自家用車／北陸自動車道小松ICから約30分
■所在地／石川県白山市三坂町ほか
■指定年月日／昭和60年9月3日

鳥越城縄張り図





▲鳥越城跡－遠景　▼二曲城跡－一の郭



県史跡	すえもり 末森城跡	石川県宝達志水町

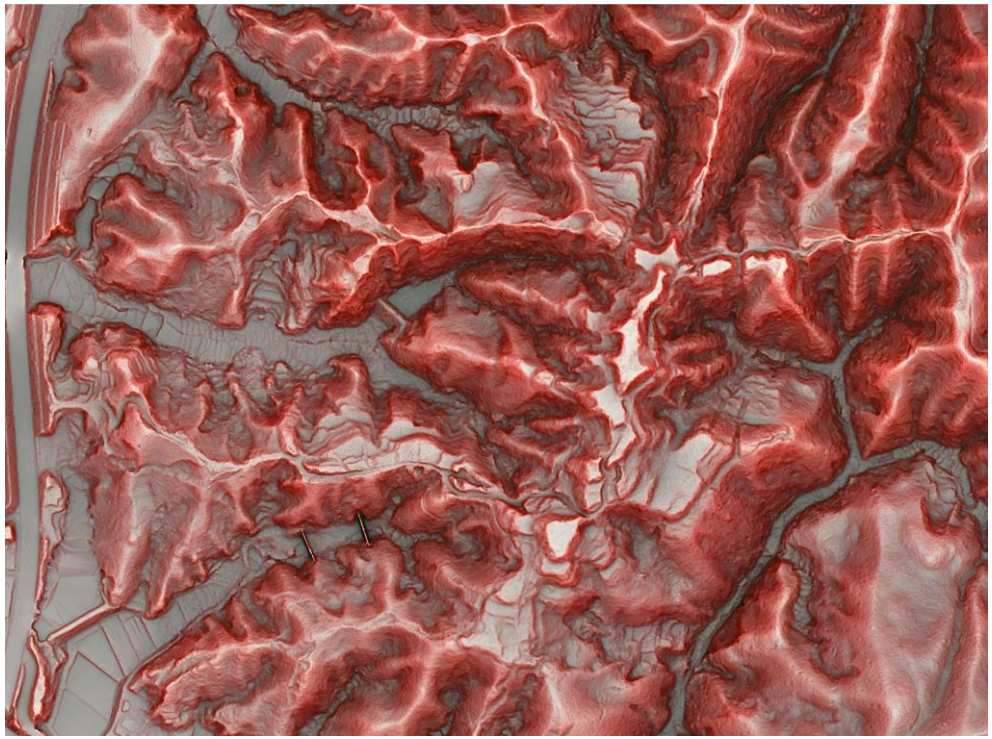
末森城跡は、宝達志水町のほぼ中央にある末森山（標高138．8m）に所在する能登国屈指の山城跡で、能登と加賀・越中を結ぶ交通の要衝に位置している。確かな築城年代は不明であるが、発掘調査の成果により、おおむね15世紀後半から16世紀にかけて活動していた痕跡が確認されている。なお、江戸時代以来「末森」と書かれることが多いが、本来の表記は「末守」である。

文献では、天正5年（1577）8月の上杉謙信書状に「末守」と見えるのが初見である。能登畠山方の拠点として謙信の能登侵攻に抵抗したが、同年9月に畠山氏が滅亡すると上杉軍に接収された。上杉氏の支配を経て、織田信長に仕えた土肥親真のもとで本格的に整備され、羽咋郡支配の拠点として機能した。親真の死後は前田氏の城となり、加賀・能登を結ぶ重要拠点としての役割を帯びた。同12年には佐々成政の襲撃を受けるが、城将の奥村家福らの奮闘と前田利家の素早い救援により撃退したことは知られている（末森城の戦い）。同14年には城下の「末守町」が解体されたことから、末森城も廃城になったと考えられている。

石川県内において加賀百万石の礎となった出世の城としての知名度は高いものの、城郭構造やその変遷、城跡の範囲など解明すべき課題の多い山城でもある。昭和と平成の2度の調査に続き、令和7年度から新たに調査事業が始まった。令和の調査により課題の解明が進むことで、城跡の魅力のさらなる向上につながることが期待されている。

■交通アクセス
　●公共交通機関：JR七尾線「敷浪駅」から徒歩約30分
　●自家用車：のと里山海道「今浜IC」から約10分
■所在地／石川県羽咋郡宝達志水町宿、竹生野、南吉田
■指定年月日／平成3年10月4日

▼末森城跡赤色立体図





▲末森城跡－空撮
（七尾市教育委員会提供）



▲末森城跡－推定虎口

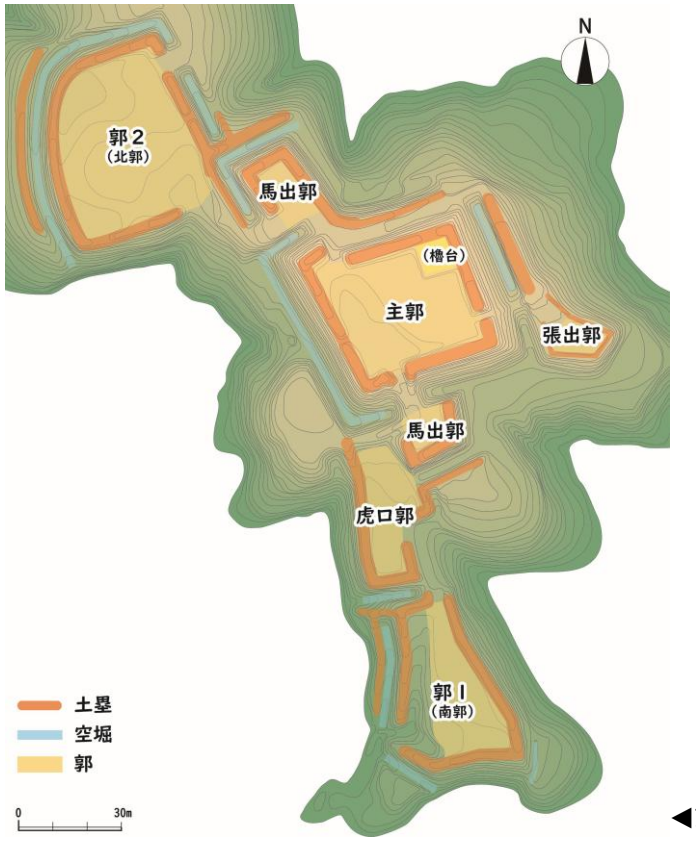
国史跡	玄蕃尾城跡（げんばお） （内中尾山城）	福井県敦賀市 滋賀県長浜市

玄蕃尾城跡は、越前・近江国境の内中尾山（柳ヶ瀬山）に位置し、長浜から越前北ノ庄に向かう北国街道と、それから分岐して敦賀に向かう刀根越間道との分岐点に位置する要衝に築かれている。

天正11年（1583）、信長没後の覇権をかけた賤ヶ岳の合戦で、柴田勝家の本陣となった。この戦いでは、勝家は戦わずしてこの城から撤退し、その後手つかずで残されたことから、山城の構造が合戦当時のままに良好に保存されている。本城は尾根上に巧みに配置された4郭構造で、石垣はなく、各郭は空堀や土塁で区画されるとともに、土橋や馬出で繋がっている。また、織豊期山城の典型で、中世的城郭から近世的城郭への過渡期にあたる城郭編年の標識遺跡として重要である。玄蕃尾城の名は地元の敦賀市刀根に伝わるもので、勝家配下の勇将・佐久間玄蕃允盛政にちなむものとして今日まで語り継がれている。

福井・滋賀両県に跨ることから、敦賀市では余呉町（現長浜市）と共同で、平成元年（1989）より伐開、遊歩道整備、案内標柱の設置など必要最小限の保存整備を行い、平成11年（1999）、国の史跡指定を受けた。翌年より地元、刀根区で玄蕃尾城跡保存会が結成され活用に向けての取組みが行われている。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR北陸本線敦賀駅⇒コミュニティバス愛発線刀根停留所から
駐車場まで徒歩50分、駐車場から城郭主要部まで徒歩約20分
●自家用車／北陸自動車道敦賀ICから駐車場まで約30分
駐車場から城郭主要部まで徒歩20分
■所在地／福井県敦賀市刀根・滋賀県長浜市余呉町柳ヶ瀬
■指定年月日／平成11年7月13日



◀玄蕃尾城縄張り図


▲玄蕃尾城跡－主郭・櫓台


▲玄蕃尾城跡－郭と虎口郭の堀切

国史跡	かねがさき 金ヶ崎城跡	福井県敦賀市

金ヶ崎城跡は、敦賀市北東部、天筒山から北西に伸びる尾根上に位置する、南北朝時代から戦国時代にかけての山城である。

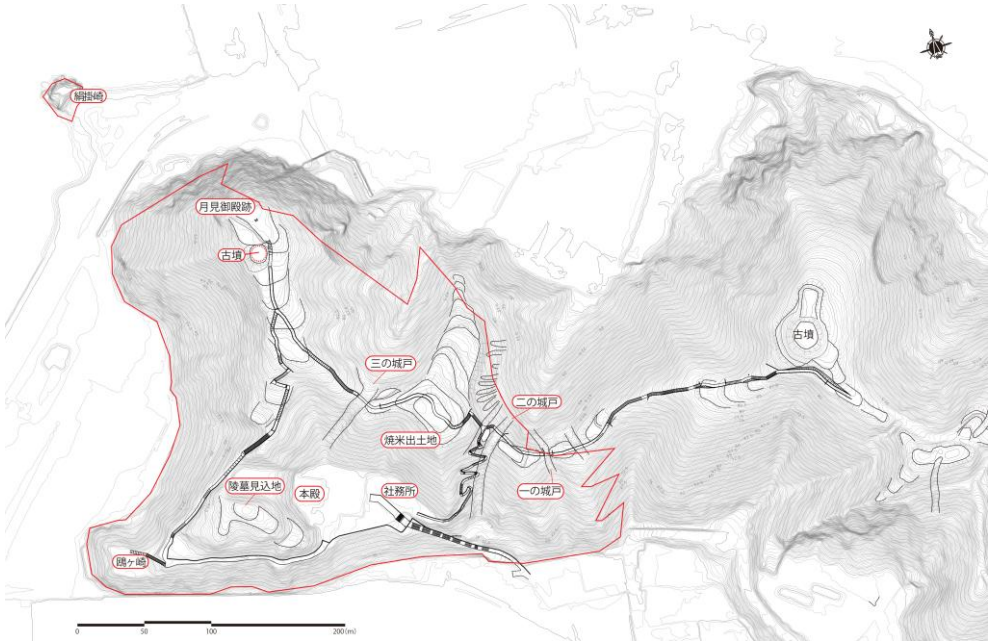
『太平記』の記述では天然の要害とされており、延元元年／建武3年（1336）10月に南朝方の新田義貞が、後醍醐天皇の皇子である恒良、尊良の両親王を奉じて立て篭もったものの、北朝方の高師泰らの兵糧攻めを受け翌年3月落城。その後も正平6年／観応2年（1351）に足利直義が足利尊氏に対抗すべく立て篭もるなど、南北朝期を通じて戦時拠点としての利用がされていた。戦国時代には、金ヶ崎から東方の尾根続きにある天筒山城とともに、戦国大名・朝倉氏の敦賀郡司の詰城として使われ、元亀元年（1570）、織田信長の越前攻めの舞台となった。明治以後、金ヶ崎の中腹には、恒良、尊良両親王を奉祭する金崎宮が建立された。昭和9年（1934）に史跡指定を受けている。

本格的な発掘調査が行われていないため詳細は不明だが、月見御殿跡と呼ばれる本丸から尾根伝いに3か所の堀切を配している。

史跡一帯は早くから都市公園として整備され、市民憩いの場として親しまれている。桜の名所としても知られ、例年4月におこなわれる花換祭は春の風物詩として多くの花見客でにぎわう。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR北陸本線敦賀駅
⇒ぐるっと敦賀周遊バス金崎宮停留所から徒歩約5分
●自家用車／北陸自動車道敦賀ICから約10分
■所在地／福井県敦賀市金ヶ崎町
■指定年月日／昭和9年3月13日

▼金ヶ崎城縄張り図




▲金ヶ崎城－二の城戸堀切


▲金ヶ崎城－月見御殿跡

国史跡	後瀬山城跡（のちせやまじょうあと）	福井県小浜市

後瀬山城跡は大永2年(1522)若狭守護5代武田元光によって、小浜市街地の背後に聳える後瀬山の山上に築かれた。そして、後瀬山の北側山麓にあった長源寺を東麓に移してその場所に守護館を建設した。これにより若狭を東西に通過する丹後街道を足下に、また日本海側有数の港である小浜湊を眼下に収める経済的・軍事的要衝を押える城郭と守護館が完成され、京極氏によって雲浜の地に小浜城が築かれる慶長6年(1601)まで若狭国の国政の中心となった。

後瀬山城跡は山頂に主郭を配し、それより北側に延びる主峰の稜線上に連郭をつくり、市街地に面する北西谷間には小郭とそれを連結する横道が多くつくられている。また、主郭南側背後から西南・西斜面には壮大な竪堀・畝状竪堀群が配置され、山麓には堀を巡らせた守護館が存在した。

後瀬山城跡は昭和62年～63年度に遺構の測量及び発掘調査を実施して城郭の縄張や建物跡の所在を明らかにした。平成14年度から第1期環境整備として遊歩道の整備と史跡説明板を配置し、史跡活用・保存管理に供する環境を整えている。

守護館については、平成18年度からの継続的な調査により堀を巡らせ、その中に居住スペースを設けていたことが明らかになり、平成28年10月に史跡追加指定を受けた。令和2年度には整備基本計画を策定しており、今後守護館を中心に整備を進める予定である。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR小浜線小浜駅から北西方向に徒歩約10分
- ●自家用車／舞鶴若狭自動車道小浜ICから国道27号線を西に約10分

■所在地／福井県小浜市小浜浅間・小浜男山・小浜鹿島・小浜大原・伏原
■指定年月日／平成9年5月23日(平成28年10月3日守護館追加指定)

▼後瀬山城跡(武田氏城址)実測図
(後瀬山城跡－若狭武田氏居城の調査　1989 小浜市教育委員会　付図)





▲後瀬山城－主郭鏡石



▲後瀬山城－主郭遠景

国史跡	はくさんへいせんじきゅうけいだい 白山平泉寺旧境内	福井県勝山市

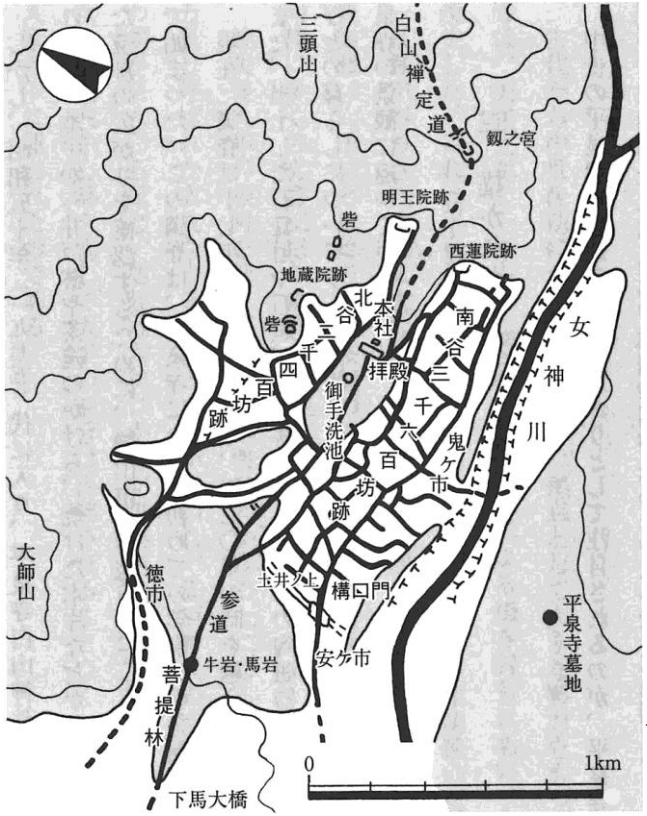
平泉寺は、養老元年（717）、越前の僧泰澄によって開かれたと伝わる白山信仰の中核寺院である。平安時代後半には比叡山延暦寺の末寺となり、宗教活動のほかに、経済・政治・軍事的な権力・勢力を持って地域に君臨した。特に戦国時代には、四十八社、三十六堂と六千の院・坊（僧侶の屋敷）が建ち並び、寺領九万石（九万貫）、僧兵八千を数えたと伝えられる。

ところが、天正2年（1574）、越前一向一揆勢との戦いに敗れ、全山焼失する。天正11年に再興されるが、境内の広さは元の1割ほどであった。一方で江戸時代は、白山を支配するなど地域での影響力を持ち続けた。明治初年、神仏分離令にもとづき寺号を廃して白山神社と改め、現在に至っている。

中世平泉寺の境内は、周囲を山や川、河岸段丘、堀で仕切られ、中央の尾根上に堂塔・社殿などが集中して建てられた。そして、その両側の「北谷」・「南谷」に、少なくとも500程度の院・坊群が建ち並んでいた。また、寺域から外に出る幹線道路沿いには、3か所の「市」のつく地名がみられ、商人・職人がいたと考えられている。

院・坊の周囲は石垣がめぐり、石畳道が縦横に整備された。また、院・坊の入口や石畳道・側溝の幅・長さなどは、一定の基準にもとづいて計画的につくられていた。平泉寺は、石を使った優れた土木技術を持っていたことがうかがえる。

なお、白山平泉寺旧境内では勝山市が発掘地の史跡整備を行い、ガイダンス施設が建設されて、調査研究や保存・活用が進められている。



◀戦国期平泉寺の都市構造
（『勝山市史』第2巻
原始～近世　2006年より）



▲平泉寺白山神社拝殿
（この周辺は中世平泉寺の中心部分）



▲南谷院・坊跡から発掘された
中世の石垣と石畳道

■交通アクセス
●公共交通機関／えちぜん鉄道勝山永平寺線勝山駅
●自家用車／北陸自動車道福井北ICから勝山方面へ約30㎞
中部縦貫自動車道勝山ICから20分
■所在地／白山平泉寺旧境内：福井県勝山市平泉寺町平泉寺
■指定年月日／白山平泉寺旧境内：昭和10年8月27日（追加指定／平成9年3月10日）

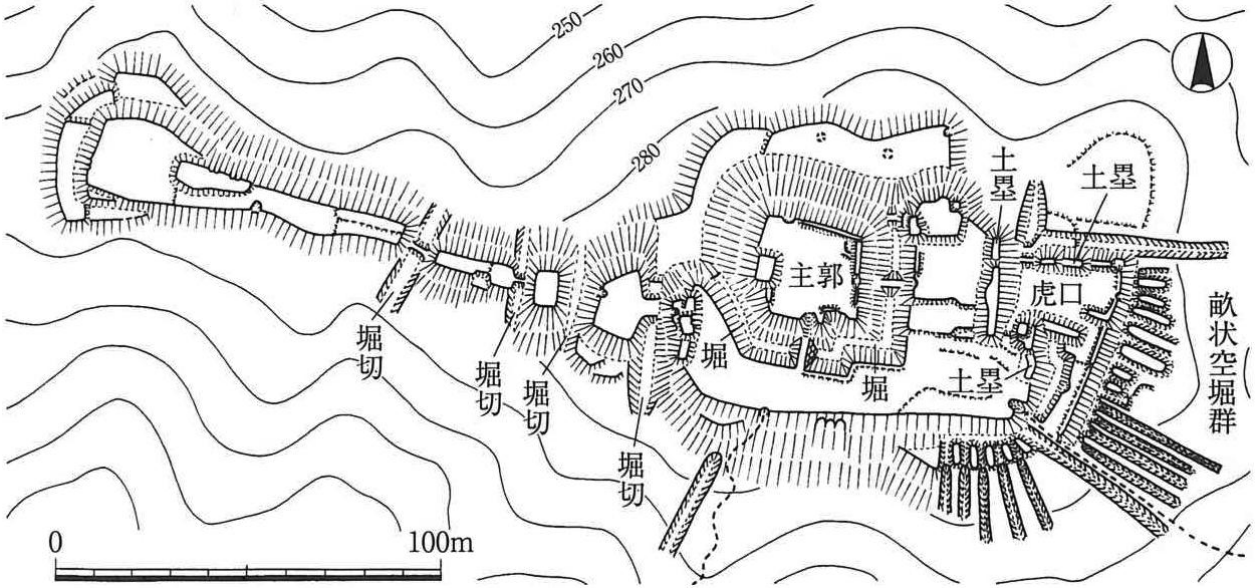
市史跡	むろこやま 村岡山城跡	福井県勝山市

天正2年(1574)に平泉寺と戦った越前一向一揆勢の拠点として築かれた城である。前年、越前戦国大名朝倉氏が織田信長の攻撃を受け滅亡するが、天正2年2月以降、信長方であった平泉寺と一揆勢の戦闘や情報戦が繰り広げられた。そのような中で、同年4月14日夜、大野・南袋・北袋・七山家(現大野市・勝山市)の一揆勢が、村岡山に塀柵・乱杭・逆茂木を立て、堀をつくって立てこもった。翌日、これを見た平泉寺軍は村岡山を攻撃するが、豊原寺(現坂井市)から来た一揆勢の援軍が直接平泉寺を攻めて火を放った。平泉寺軍は慌てて引き返そうとするが、村岡山より打って出た一揆勢にほとんどが討ちとられた。村岡山は、この一揆勢の勝利にちなんで「かちやま」と呼ばれたと伝えられ、後の藩名や市名などの「勝山」へとつながっていく。

その後、村岡山は一向一揆を制圧する織田方の柴田義宣・勝安の本拠となっていったと考えられている。義宣は一揆勢との戦いの中で戦死するが、勝安は国境を越えて加賀一向一揆も制圧した。

村岡山城の構造は、最高所に櫓台状の高まりがある方形の主郭があり、東側に土塁や堀を組み合わせた虎口と斜面の畝状空堀群で厳重な防御ラインをつくる。城の西側は、尾根上に6段の曲輪と4本の堀切を設ける比較的単純な構造をしている。東側は柴田氏が改修した可能性が考えられている。

なお、村岡山城跡では地元住民が登山道整備や説明板設置、イベント(「かち山ちょうちん登山」等)などを行っている。



▲村岡山城跡縄張図(『勝山市史』第2巻　原始～近世　2006年より)


▲村岡山城跡と越前・加賀国境の山並み


▲村岡山城跡主郭付近

■交通アクセス
- ●公共交通機関／えちぜん鉄道勝山永平寺線勝山駅
- ●自家用車／中部縦貫自動車道勝山ICから10分

■所在地／村岡山城跡：福井県勝山市村岡町寺尾

■指定年月日／村岡山城跡：平成31年2月7日

国史跡	杣山城跡（そまやま）	福井県南越前町

杣山城跡は、北陸道や朝倉街道に面し、越前国府からも近距離にあることから、南北朝時代から戦国時代にかけての越前における覇権を巡る争いの拠点となった城である。鎌倉時代末期、瓜生氏により築城されたといわれ、『太平記』巻17から巻19には、杣山城に拠った瓜生一族の記事が数多くみられる。

瓜生保は、延元元（1336）年に新田義貞が恒良・尊良両親王を奉じて金ヶ崎城に入ると、金ヶ崎城を援護するために杣山城を拠点に越前国府を奪還するなどの活躍を見せるが、翌年敦賀市樫曲付近で戦死。暦応4（1341）年、南朝方の拠点としての杣山城は落城している。その後、斯波高経が在城したが、貞治6（1377）年、高経は杣山城で病没。次いで、斯波氏の家老で越前国守護代を歴任した甲斐氏が拠って、越前朝倉氏と対峙するも文明6（1474）年の杣山の合戦で朝倉孝景に敗れ落城。以後、朝倉の家臣河合安芸守宗清が在城したが、天正元（1573）年、織田信長の北陸攻めにより廃城となった。

標高492mの杣山一帯に築かれた山城には、曲輪や切岸、堀切、土塁など多くの遺構が良好な状態で保存されていることから、昭和9年に国の史跡指定を受けた。その後、昭和54年には山麓城下の居館跡と城戸跡の未指定地を包括するかたちで追加指定を受け、約172haにおよぶ史跡となっている。

昭和45年から56年にかけては、第1次となる整備事業として山城跡の発掘調査や一帯の史跡整備を実施し公開を進めてきた。平成30年度には、城下に残る居館跡や城戸跡などを含めた史跡全域の整備基本計画を策定。令和元年度からは第2次となる整備事業を進め、城主居館跡の史跡整備とともにガイダンス施設の建築を進めている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／ハピラインふくい南条駅から南東へ5㎞、徒歩約1時間
- ●自家用車／北陸自動車道南条スマートICから南東3㎞、車で約5分

■所在地／福井県南条郡南越前町阿久和・中小屋・社谷地係
■指定年月日／昭和9年3月13日（追加指定／昭和54年5月21日）
■問合せ先／南越前町教育委員会事務局☎0778－47－8005

▼杣山城縄張図




▲杣山城－全景


▲杣山城－西御殿


▲杣山城－二ノ城戸跡



▲史跡杣山城跡ガイダンス施設

町史跡

佐柿国吉城址（さがきくによしじょうし）

福井県美浜町

若狭守護大名武田氏の重臣であった粟屋越中守勝久が弘治2年（1556）頃に築城したと伝わる。永禄6年（1563）、隣国の越前朝倉氏が攻め寄せたが、籠城戦の末撃退した。以降、ほぼ毎年侵攻してくる朝倉勢を悉く退け、「難攻不落」を誇った。元亀元年（1570）、越前攻めに向かう織田信長の軍勢を迎え入れたが、「金ヶ崎の退き口」で知られる通り、織田勢の撤退に終わった。国吉城は、その後も織田方の最前線として守られ、攻防は天正元年（1573）の朝倉氏滅亡まで続いた。

天正11年（1583）、賤ケ岳の合戦後に城主となった羽柴秀吉の家臣、木村常陸介は、城を石垣造りに改修し、城下の整備を進めた。その後、若狭一国を領した大名たちは、国吉城を若越国境の境目の城として重要視し、重臣に与えた。

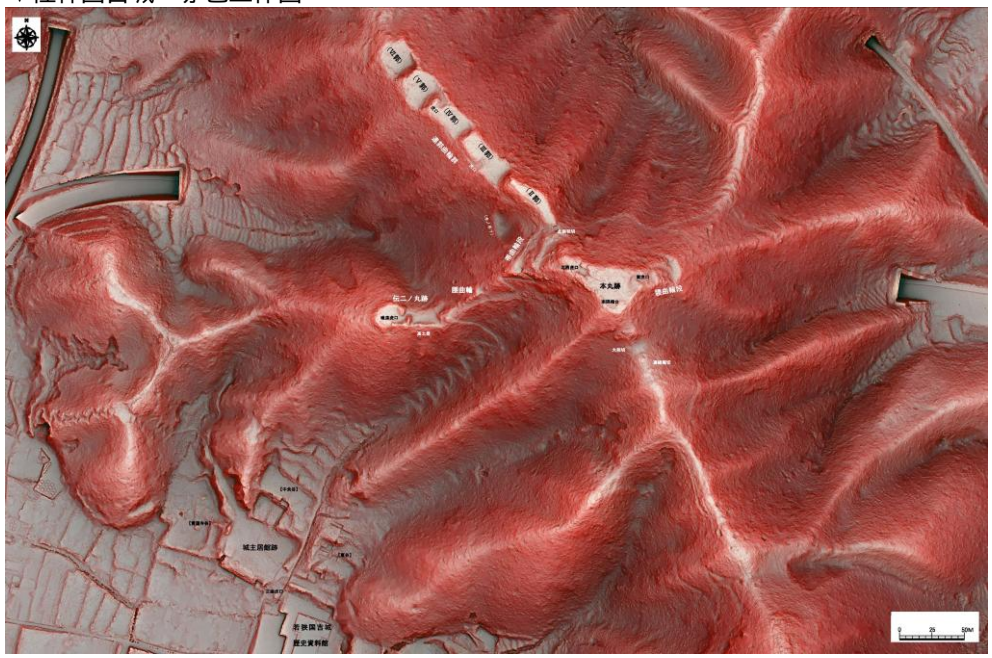
寛永11年（1634）、小浜藩主となった譜代の酒井忠勝は、城を廃して佐柿町奉行所（御茶屋屋敷）を城跡の麓に開いた。

平成12年度より史跡公園整備に伴う発掘調査を実施し、総石垣の様相や虎口、礎石建物群等が確認され、16世紀中～17世紀初頭の遺物が出土した。遊歩道や誘導サイン、解説板を整備し、平成21年春、「若狭国吉城歴史資料館」が佐柿町奉行所跡に開館した。木造棟の旧田辺半太夫家住宅は、平成30年3月に国登録有形文化財となっている。

平成29年4月、公益財団法人日本城郭協会より続日本100名城に選定された（№139）。

■交通アクセス
　●公共交通機関／JR小浜線美浜駅
　●自家用車／舞鶴若狭自動車道美浜ICから約5分
■所在地／福井県三方郡美浜町佐柿地係
■指定年月日／昭和58年4月1日

▼佐柿国吉城－赤色立体図





▲佐柿国吉城－全景



▲佐柿国吉城－本丸北西虎口

国史跡	林城跡（はやし）（大城・小城）	長野県松本市

林城は、戦国時代に信濃守護小笠原氏が拠点とした山城であり、大城・小城の2つの城からなる。小笠原氏は建武3年（1336）に貞宗が信濃守護に任命され、府中（当時の松本周辺の呼称）に入って井川に館を構えた。文安3年（1446）に府中と飯田の小笠原氏の間で家督相続の争いが起こり、府中小笠原氏は井川館から林の地に館を移し、要害として林城を築いた。その後、天文19年（1550）、武田晴信（信玄）の府中攻略により、周辺の城とともに自落した。自落後の林城の経過は不明である。

大城は、独立した尾根の頂部に主体部を設けている。約1kmにわたる城域を持ち、尾根沿いに大小200以上の曲輪を造成し、傾斜が緩やかな尾根を守っている。また、堀切と堀切から派生した竪堀を持ち、山麓へと延びる竪堀の規模は圧巻である。石積は、松本平周辺の城と同様に主郭周辺に見られる。

小城は、大城と大嵩崎集落のある谷を挟んだ尾根の先端に主体部を設けている。主郭の南側は、背後の山塊に続く尾根があることから、深い堀切で遮断している。主郭周辺に石積が見られ、主郭の石積の高さは、約1mから1．5m程でほぼ垂直に積まれ、隅角部を造らない連続した積み方をしている。

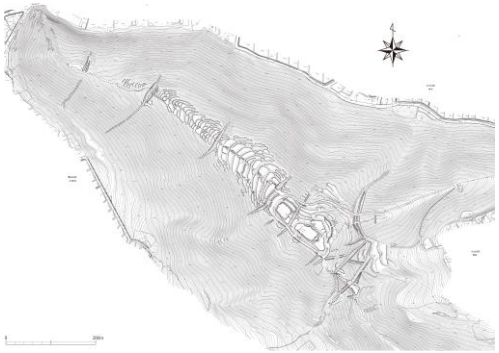
林城跡は保存状態が良く、両城に挟まれた谷部に想定される山麓拠点とともに、戦国時代特有の拠点のあり方をみることができる。その保護を図るため、室町時代の守護居館である井川城跡とともに小笠原氏城跡として国の史跡に指定された。

林城跡は、林古城会を中心とする地元住民が、見学路整備などの保存活動を行っている。

■交通アクセス
●自家用車／長野自動車道松本ICから約25分
■所在地／長野県松本市大字里山辺、大字入山辺
■指定年月日／平成29年2月9日井川城跡、林城跡（大城）
平成31年2月26日林城跡（小城）



◀林城跡－遠景
（左／大城　右／小城）



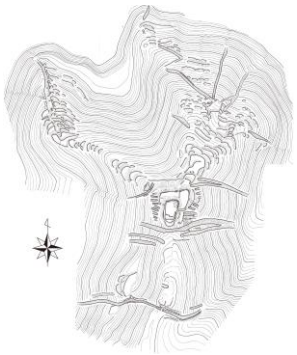
▲林城跡（大城）縄張図（遠藤公洋氏作図）



▲林城跡（大城）－竪堀



▲林城跡（小城）－鉢巻状石積



▲林城跡（小城）縄張図（遠藤公洋氏作図）

県史跡	桐原城跡（きりはら）	長野県松本市

桐原城跡は、薄川扇状地の扇頂付近の薄川右岸に位置し、追倉沢と海岸寺沢に挟まれた大蔵山の中腹に位置する。薄川を隔てた対岸には、林城跡がある。

享保9年（1724）に編纂され、松本藩及び信濃国一円の地理、歴史等をまとめた「信府統記」には、中世の桐原郷を治めた桐原氏の城で、桐原大内蔵真智が寛正元年（1460）に築城したと記されている。天文19年（1550）に甲斐の武田晴信（信玄）が松本平に侵攻した際、林城とともに自落した。

桐原城は、主郭を頂点に扇形に曲輪群が展開している。尾根の中腹に主郭を設けていることから、主郭背後に続く高尾根に対して、土塁と三重の堀切を築いて遮断している。主郭には、斜面の上部に鉢巻状に築いた石積がある。石積は、鉢巻状に平らな石を垂直に積む松本平の城共通の造り方をしているが、他の城は、主郭とその周辺（副郭や虎口）に石積を用いるのに対し、桐原城は広域に石積が築かれ、斜面の中段や腰巻状にも築いているのが特徴である。南西の尾根筋には2か所に二重堀切を設け、堀切間には不整形の小曲輪群が見られる。対照的に西側斜面には短冊形の整然とした段郭群があり、竪堀で南北2群に区切られる。西側を中心に、竪堀や曲輪が多く配置されており、西側からの攻撃に対する防御を重視していたことが分かる。西の山麓には主郭と同様な石積を伴った曲輪があり、蓮法寺跡と伝わる。

桐原城は、慶長4年（1599）の記載がある絵図が残っている。絵図には桐原城の麓に「御屋舗」の記載があり、桐原氏の居館跡と推定される。

地元の桐原城址愛護会によって遊歩道等が整備されている。

■交通アクセス
●自家用車／長野自動車道松本ICから約30分
■所在地／長野県松本市大字入山辺
■指定年月日／昭和55年9月8日


▲桐原城跡－遠景


▲桐原城跡－鉢巻状石積

県史跡	山家城跡（やまべ）	長野県松本市

山家城跡は、薄川が形成した山辺谷の中ほど、北沢と菖蒲沢に挟まれた山中に位置する。

山家城は鎌倉時代末に諏訪氏の一族の神氏（後の山家氏）により築城されたと伝わる。文献に登場するのは、文明12年（1480）、小笠原氏が対抗する山家氏を山家城に攻めた記録が初見である。その後、神氏系の山家氏に関する記録は少ないが、永正2年（1505）には小笠原氏に従った折野氏がこの地を所領し、山家氏を名乗ったとされている。天文19年（1550）の武田晴信（信玄）の府中（当時の松本周辺の呼称）攻略の際、山家城も林城とともに自落するが、その後、山家氏は武田氏に仕え、桐原・大村を含む広範囲の領主になった。山家城の麓（現在の徳運寺周辺）には山家氏の居館があったといわれている。

山家城跡は、東西で2つの異なる構造の城域をもつ。西側の城域は、尾根の先端部を主体とし、そこから派生する尾根上に曲輪が展開している。西側主体部には高さ3m近い石積を伴う曲輪を有し、背後に続く高尾根を警戒するため五重の大堀切によって遮断している。東側の城域は、主体部に石積を伴わない楕円形の曲輪を有し、その周りに帯曲輪を巡らし、放射状の竪堀を備えている。東側主体部からは北・東の二方に尾根が伸び、背後の山塊へ続く東尾根の末端には堀切と、虎口状の遺構が確認できる。山家城跡は、林城跡や桐原城跡と共通した縄張りで、それぞれの尾根に大小複数の曲輪や堀切を備え、特に曲輪は複雑に配置され、数度にわたり改修されたと推測される。また、現存する高い石積は戦国末期の松本平における石垣技術の到達点を示すものと言われる。

■交通アクセス
　●自家用車／長野自動車道松本ICから約30分
■所在地／長野県松本市大字入山辺
■指定年月日／昭和55年9月8日


▲山家城跡－遠景


▲山家城跡－石積

県史跡	埴原城跡（はいばら）	長野県松本市

埴原城跡は、松本市街地の南東部に位置する鉢伏山地に築かれた山城であり、和泉川と宮入川に挟まれた標高994mの尾根上に東西約850m、南北約650mという広大な城域を有するが、文献史料等が皆無であり、築城の経過は定かではない。埴原城は、林城と高遠山を経て、稜線沿いに連絡可能な位置関係であり、小笠原氏の拠点だと考えられる。

主郭の三方には土塁が残存し、東側の高土塁背後には、主郭と同規模の副郭がある。副郭から東に続く尾根は、背後の山塊に続く高尾根となっているため、副郭の東側に高土塁と大堀切が設けられ、主体部背後の守りをなし、その規模は壮大である。堀切から背後の尾根には、南側斜面を中心に畝状竪堀が築かれている。

主体部から五方向に派生する尾根筋は、堀切・竪堀と稜線上の曲輪の連続によって徹底的に遮断し、主体部の防御を固めている。石積は、他の松本平の城と同様に主体部付近に築かれている。主郭には高さ1．5mほどの石積が築かれており、一部で高さを出すために石積をセットバックさせて2段構造にし、その高さは3mに及んでいる。

主体部周辺での石積の採用、尾根沿いに築かれた無数の曲輪群、堀切・竪堀の多用など、林城や山家城、桐原城と共通する技法が多く見られる。

■交通アクセス
●自家用車／長野自動車道松本ICから約30分
■所在地／長野県松本市大字中山
■指定年月日／昭和45年10月22日



▲埴原城跡－遠景



▲埴原城跡－石積

虚空蔵山城跡（こくうぞうさんじょうあと）

長野県上田市

村上氏や上杉氏らも活用したといわれている通称『村上連珠砦』がある。その範囲は東の砥石・米山城跡から西の和合城跡までをいい、その中央部に宇宙（虚空）のような無限の知恵と慈悲を秘めた仏といわれる虚空蔵尊を山名とした虚空蔵山がある。この山頂一帯にある虚空蔵山城跡は標高1076．9m、南は上田地方を一望に見下ろす事ができ、北は坂城方面の葛尾城跡も見え、いわば埴科（現坂城町）と小県（現上田市）の郡境にあることで北信濃の上杉勢力と東信濃の徳川、真田勢力圏、双方の戦略上重要境にあるため、壮絶な争奪戦が繰り返された。

この城跡は麓の塩尻地区から600mの比高があり西側の堀切から東の鞍部までの約180mが城域となっている。尾根筋と南斜面及び北斜面に9つの郭があり土塁等も確認できる。尾根部の曲輪は小規模であるものの、北側には一定程度兵が駐留可能な広さを確保している曲輪もある。各郭の削平は甘く、堀切等の規模もそこまで大きくないものの、西側の尾根伝いには鳥小屋城跡、東側の尾根伝いには積城跡、亀井城跡が連なり、比高差と急峻な立地にあわせ、付近の諸城と連携をとりながら使われたものと思われる。

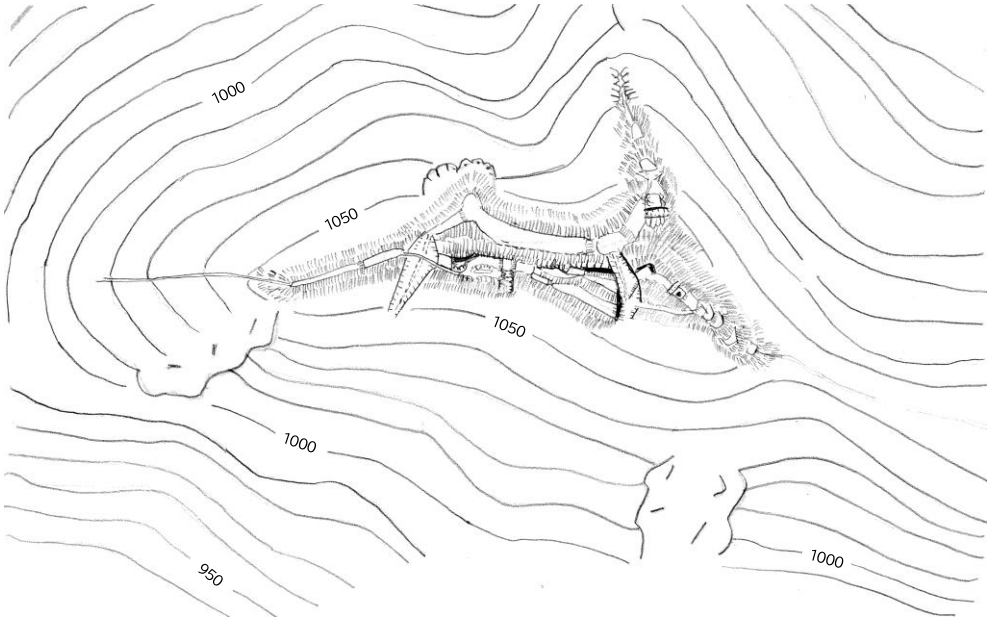
天正11年（1583）には上田城築城を開始した徳川方の真田氏の監視を上杉方がおこない、攻防戦が行われたことでも知られており、現在でも城域からは上田城が間近に見え、様子を監視するには最適の立地であることが体感できる。

ここ虚空蔵山城跡は戦国期の武田氏、村上氏に始まり、徳川氏、真田氏対上杉氏の動静、上田城構築期を知る上で歴史的に貴重な山城といえる。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR北陸新幹線上田駅⇒しなの鉄道西上田駅
- ●自家用車／上信越自動車道上田菅平ICから上塩尻登山口約6㎞（駐車場／各登山口）

■所在地／長野県上田市上塩尻虚空蔵山
／長野県埴科郡坂城町入横尾

▼虚空蔵山城縄張り図





▲虚空蔵山城－全景



▲虚空蔵山城－主郭から東方面

県史跡	といしこめやま 砥石・米山城跡	長野県上田市

砥石城は、上田市街地の北に連なる太郎山山系の東端に築かれた、砥石城・本城・枡形城(この3つを「砥石城」と呼ぶ)からなる連郭式の山城で、南西にある米山城とあわせ砥石・米山城と呼ばれている。上信国境の四阿山から流れ出る神川を眼下に見下ろし、上田盆地はもちろん、佐久平方面までも見通すことができる。

築城時期は明らかではないが、村上義清(1501～1573)の父・顕国の頃には上田盆地を押える拠点として機能していただろう。天文19年(1550)に武田信玄が北信濃攻略のために義清を攻め、砥石・米山城を落とそうとしたのだが難航し、退路を背後から奇襲され、大敗を喫した。これを「砥石崩れ」と呼び、砥石・米山城の堅牢さを語るうえで欠かせないエピソードである。

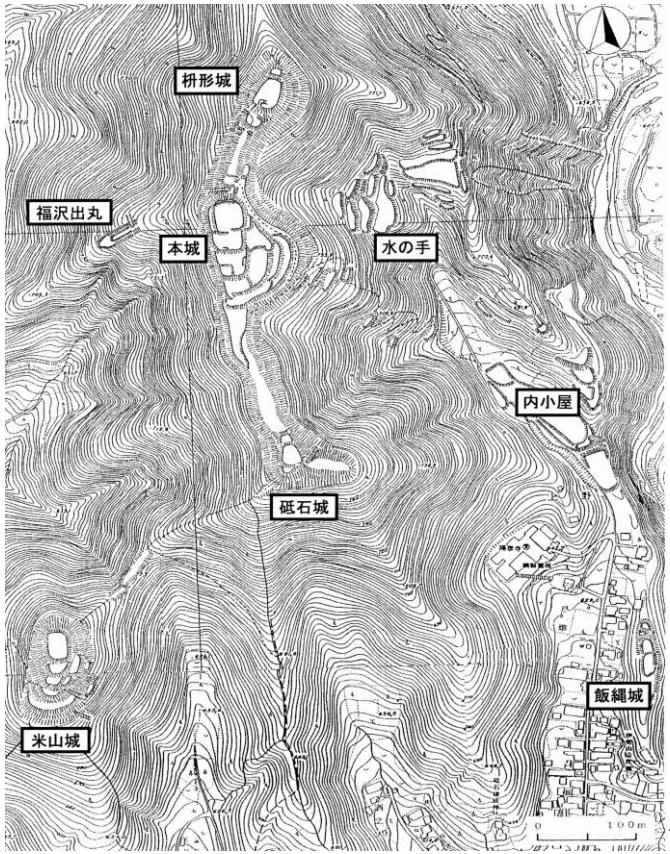
翌年、信玄旗下の真田幸綱(1513～1574)が独力で陥落させ、以降、真田家の属城となり、徳川家が上田城を攻めた二度の合戦でも、真田昌幸(1547～1611)を勝利に導く一役を担った城である。

各城は単郭もしくは下に1～2郭及び堀切を設ける程度の構造だが、本城は10程度の段曲輪を設け、規模も大きく切岸も急峻に造成しており、真田氏の時代に一定の改修がなされたことがうかがえる。また、本城及び米山城には虎口周辺に土留めの石積みがみられる。

長野県史跡として保護され、地元自治会・保存会等により登山道整備や説明版の設置、山城ツアーなどの活用がされるなど、地域住民から親しまれている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR北陸新幹線上田駅⇒しなの鉄道上田駅からバスで約30分
- ●自家用車／上信越自動車道上田菅平ICから約10分

■所在地／長野県上田市上野・住吉
■指定年月日／昭和44年5月15日



HP MAP 砥石城 MAP 米山城

◀砥石・米山城縄張り図



▲砥石・米山城－全景



▲砥石・米山城－虎口

市史跡

荒砥城跡（あらと）

長野県千曲市

荒砥城跡は大永4年(1524)に山田氏によって築かれたと伝えられる。

天文22年(1553)に始まった川中島の合戦では武田軍と上杉軍との争奪戦が繰り広げられ、荒砥城は絶えず戦火の渦中にあった。

天正10年(1582)武田勝頼が自刃し武田氏が滅亡すると、上杉景勝は善光寺平を掌握。海津城将に村上景国を、副将に屋代秀正を任命するが、屋代秀正は徳川家康と内通し、天正12年(1584)上杉氏に背き荒砥城へ立て籠もる。しかし上杉軍に攻められ荒砥城を脱出。荒砥城は廃城となる。

平成7年6月に城山史跡公園として整備し、本郭から四の郭までを再現した。2007年NHK大河ドラマ「風林火山」では武田晴信初陣のシーンを撮影した。



▲荒砥城跡

■交通アクセス
- ●公共交通機関／しなの鉄道戸倉駅から車約10分
- ●自家用車／上信越自動車道坂城ICより約20分

■所在地／長野県千曲市大字上山田字城山

■指定年月日／昭和62年1月27日

MAP

市史跡

屋代城跡（やしろ）

長野県千曲市

屋代氏は、村上氏の代官として活躍し、応仁・文明の乱の中では、村上氏と結び海野氏・井上氏と抗争し、その必要性から15世紀中ごろに屋代城の築城がなされたと考えられる。

天文22年(1553)武田晴信から新砥(荒砥城)を与えられた屋代氏は、屋代城を撤退し荒砥城を拠点とする。屋代城の発掘調査によって、16世紀後半以降の遺物のないこと、この時期に屋代氏と屋代城を直接・間接に結び付ける史料のないことなどから、屋代城の廃城は天文22年と考えられる。

朱鷺の尖った長い嘴のような一重山(標高456m、平地との比高差約90m)の尾根筋に1～12の曲輪が南から北に連続し、曲輪と曲輪の間は主として堀切・竪堀で遮断され、斜面には雛壇状の腰曲輪が構築されているのが、大きな特徴である。



▲屋代城跡

■交通アクセス
- ●公共交通機関／しなの鉄道屋代駅から徒歩約15分
- ●自家用車／長野自動車道更埴ICから約10分

■所在地／長野県千曲市大字屋代字一重山

■指定年月日／昭和48年10月24日

MAP

市史跡

小坂城跡（こさか）

長野県千曲市

小坂城跡は、康正年間（1455～1457）の築城とされる。天正10年（1582）の武田氏滅亡、織田信長の自刃に際して上杉景勝が当地を占拠。天正11～12年にかけて小笠原貞慶軍との戦闘が激化する中、小坂城は景勝により補強され縄張が複雑となるが、天正14年（1586）、豊臣秀吉による戦闘停止命令が関東奥州諸大名に下され、翌年、小坂城は廃城となる。

かつては、城の平坦部を利用して、りんごや桑の栽培がおこなわれていた。その後、大きな開発や改変もなく、城の形状をよく残している。現在、地元住民を中心に見学路の整備がおこなわれている。



▲小坂城跡

■交通アクセス
●公共交通機関／JR篠ノ井線稲荷山駅⇒しなの鉄道屋代駅
●自家用車／長野自動車道更埴ICから約15分
■所在地／長野県千曲市大字桑原字城ほか
■指定年月日／平成27年4月1日
■問合せ先／長野県千曲市教育委員会

MAP

市史跡

入山城跡（いりやま）

長野県千曲市

入山城跡は、千曲市新山地区と漆原地区の間の尾根に築かれた山城である。

村上氏の支族である寄合氏、入山氏、横山氏、安藤氏などに代々受け継がれたと伝わるが、廃城の時期は不明である。明治14年（1881）に、新山村が長野県に提出した書類には、「古城跡」と書かれており、明治時代以前より知られていたことがわかる。城跡は標高508m付近にあり、千曲川対岸の葛尾城をはじめ、荒砥城や出浦城を望むことができる。戦国時代、善光寺平南部は交通の要衝にあった。松本方面から当地に向かう街道の一つである四十八曲峠道を見下ろせるこの場所が重視されたと考えられる。

小規模な山城であるが、後世の開発や改変を免れたため、施設の依存状況は良好である。山頂には5つの曲輪があり、とくに二の曲輪と三の曲輪には土塁がよく残る。西側の郭には、漆原の方から水を通した水路と伝わる遺構もある。また、北側斜面にのみ曲輪を区切る4つの堀切が岩盤を削って作られており、市内でも有数の規模である。

現在、地域住民有志により、山城の整備や登城道の整備が行われている。

■交通アクセス
●公共交通機関／しなの鉄道戸倉駅から車で約15分
●自家用車／上信越自動車道坂城ICより約15分
■所在地／長野県千曲市大字新山字日影・越道
■指定年月日／昭和62年1月27日

MAP

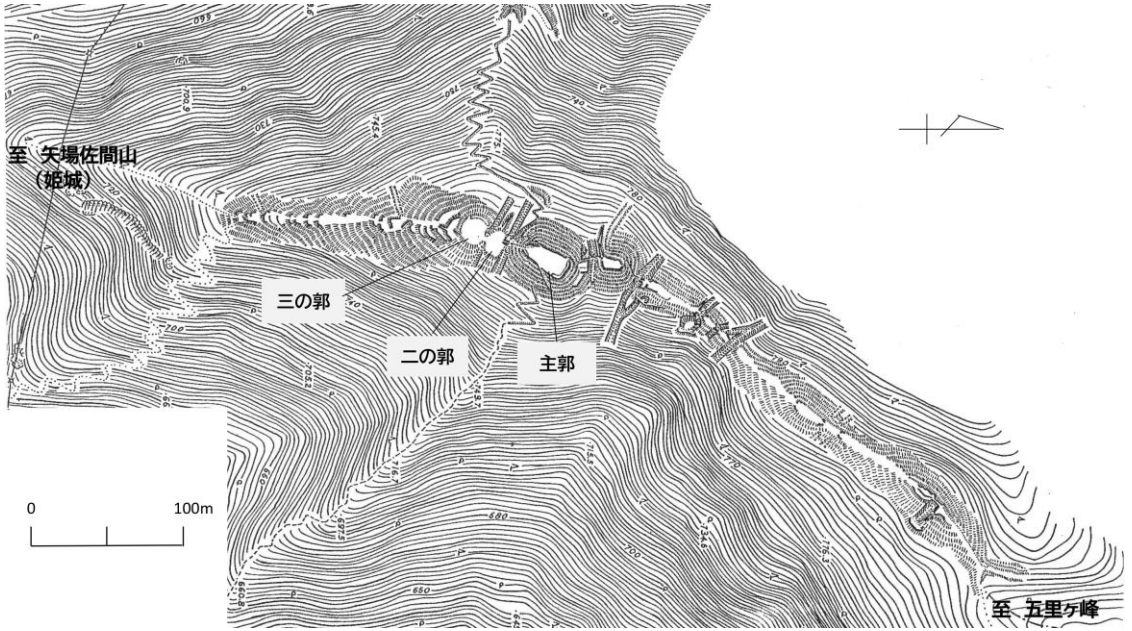
県史跡	葛尾城跡（かつらお）	長野県坂城町 長野県千曲市

葛尾城は、埴科郡坂城町と千曲市磯部にまたがる葛尾山に位置し、主郭はその頂上、標高805メートルの高所に設けられている。眼下には坂城町、遠くは上田市塩田方面、長野市塩崎方面までが見渡せる。築城年は定かではないが、千曲川対岸の村上郷を本拠としていた村上氏が、坂木郷の地頭・薩摩氏を建武2年(1335)に討って以降、本拠を坂木郷に移したとみられており、その後、海野氏等周辺勢力に対抗する中で村上氏によって築かれたと考えられる。村上氏の居館は葛尾山麓に位置する現・満泉寺にあったとされ、葛尾城はこの居館と対応する山城である。

戦国期の城主・村上義清は、川中島から小県郡にかけ勢力を広げていたが、天文22年(1553)に甲斐の武田晴信の侵攻を受け、葛尾城を自落させた。本拠奪還のため越後の長尾景虎に支援を要請したことから、世にいう川中島の戦いが始まった。

葛尾城の遺構は葛尾山の尾根上に広がり、主郭から矢場佐間山へ続く南の尾根筋に郭群、五里ヶ峰へ続く北の尾根筋に堀切が見られる。主郭は東西11メートル、南北29メートルのほぼ長方形で、南面は急な切岸となり、堀切を挟んで二の郭、三の郭が設けられている。その先の尾根は南に緩やかに下り、小規模な郭が連続している。

主郭の北には幅10メートル以上の大規模な堀切が連続して設けられ、この城の最大の見どころである。防御の硬さが見て取れると同時に、当時の緊張感を今に伝えている。



▲葛尾城縄張図(福原圭一氏作図を一部改変)


▲葛尾城－遠景


▲葛尾城－主郭周辺(東から)

■交通アクセス
●公共交通機関／しなの鉄道坂城駅
●自家用車／上信越自動車道坂城ICから約15分(駐車場より主郭までは徒歩約60分)
■所在地／長野県千曲市大字磯部字城下
長野県埴科郡坂城町大字坂城
■指定年月日／昭和49年1月17日

国史跡	岐阜城跡（ぎふ） 新	岐阜県岐阜市

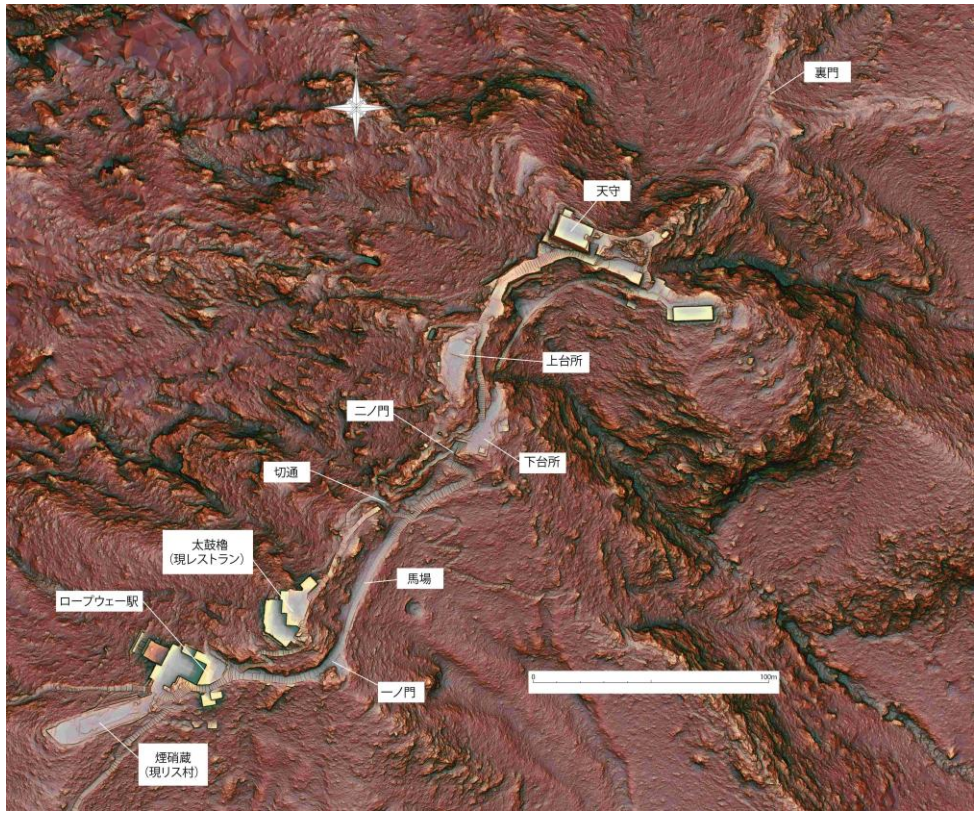
岐阜城跡は、金華山（稲葉山）の山上の城郭と山麓の居館を中心に、山全体を天然の要害として築かれた山城である。建仁年間（1201～1204）に二階堂山城守行政が初めて築城したとされるが、本格的に城郭が整備されたのは天文8年（1539）頃、斎藤道三が拠点を置いたころからと考えられ、当時は「稲葉山城」と呼ばれていた。永禄10年（1567）、織田信長は稲葉山城を占領し小牧山から拠点を移すと、城下町の名前を岐阜と改め天下統一の拠点とした。天正10年（1582）の本能寺の変以後は5人の城主が入れ替わるが、慶長5年（1600）、関ヶ原の戦いの前哨戦において、当時の城主であった織田秀信は西軍に付いていたことから、東軍に攻め込まれ落城した。

岐阜城跡は昭和59年度（1984）から山麓居館跡の発掘調査が始まり、巨石を立て並べた通路、滝が流れ落ちる岩盤を背景とした巨大な池をはじめとする複数の庭園、金箔瓦などが見つかった。ポルトガルの宣教師ルイス・フロイスの記録をはじめとする文献の記述と発掘調査成果が整合すること、城郭内の庭園空間のあり方を示す貴重な庭園遺構群などの歴史的価値が評価され、平成23年に国の史跡に指定された。

現在は『史跡岐阜城跡整備基本計画』に基づき、山上部において発掘調査や城郭景観の復元、山麓部において居館庭園の復元整備などを進めている。山上部の発掘調査では道三や信長など歴代城主が築いた石垣を確認しており、道三や信長の城づくりが徐々に明らかになっている。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR岐阜駅・名鉄岐阜駅よりバスで約 15 分、「岐阜公園・岐阜城」下車。
●自家用車／東名・新東名・名神・東海北陸自動車道「岐阜各務原 IC」より約20分
／名神・東海環状自動車道「岐阜 IC」より約20分
■所在地／岐阜県岐阜市千畳敷下他
■指定年月日／平成 23 年 2 月 7 日

▼岐阜城山上部赤色立体図




▲岐阜城復興天守


▲山麓居館庭園の岩盤

国史跡	苗木城跡（なえぎ）	岐阜県中津川市

苗木城跡は中津川市内を東西に流れる木曽川の右岸、一段と高くそびえる山にある。

木曽川から山頂の天守跡までは、標高差約170m。急峻な地形を活かして築かれた山城である。苗木城の城主は遠山氏。江戸時代から明治維新まで12代にわたり苗木領を治めた。

苗木城は険しい岩山に築かれたことから、むき出しの巨岩を巧みに利用し、そこに様々な石垣を積むことで平坦面を確保し、岩に柱穴をあけ懸造りの構造で建造するなど、自然の地形を最大限に活用した。

特に苗木城内最大の建物であった大矢倉では、巨岩と石垣を組み合わせた独特の景観を間近に楽しむことができる。

また、天守跡には現在、当時の構造を復元した展望台が設けられ、恵那山や木曽川をはじめ中津川市街を360度見渡すことができ、美しい景色が見ものである。

平成29年4月6日には続日本100名城に認定された。



▲苗木城－空撮

▼苗木城－雲海



■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR中央本線中津川駅から北恵那交通バス「苗木バス停」下車徒歩約 30 分
- ●自家用車／中央自動車道中津川ICから約15分
- ●徒歩／JR中央本線中津川駅から徒歩約 1 時間

■所在地／岐阜県中津川市苗木
■指定年月日／昭和56年4月22日
■お問い合わせ先／苗木遠山史料館

県史跡	岩村城跡（いわむら）	岐阜県恵那市

岩村城は近世山城の中で最も標高の高い所（717m）に築かれ、高低差180mの急峻な地形を巧みに利用した要害堅固な山城である。花崗岩の岩盤の上に立ち花崗岩のヒビ割れから湧き水が出るため井戸が多く、霧の発生しやすい土地ともなっており、別名は「霧ヶ城」とも呼ばれる。日本100名城に選定されており、「高取城」（奈良県）、「備中松山城」（岡山県）と並ぶ日本三大山城としても知られる。「岩村城」は1185年源頼朝の重臣加藤景廉（かげかど）が恩賞として美濃国遠山荘（恵那市、中津川市にまたがる大半の地域）を拝領したことが契機となっている。景廉は遠山荘には居住せず長男の景朝から遠山氏を名乗り岩村の地を本拠地とした。

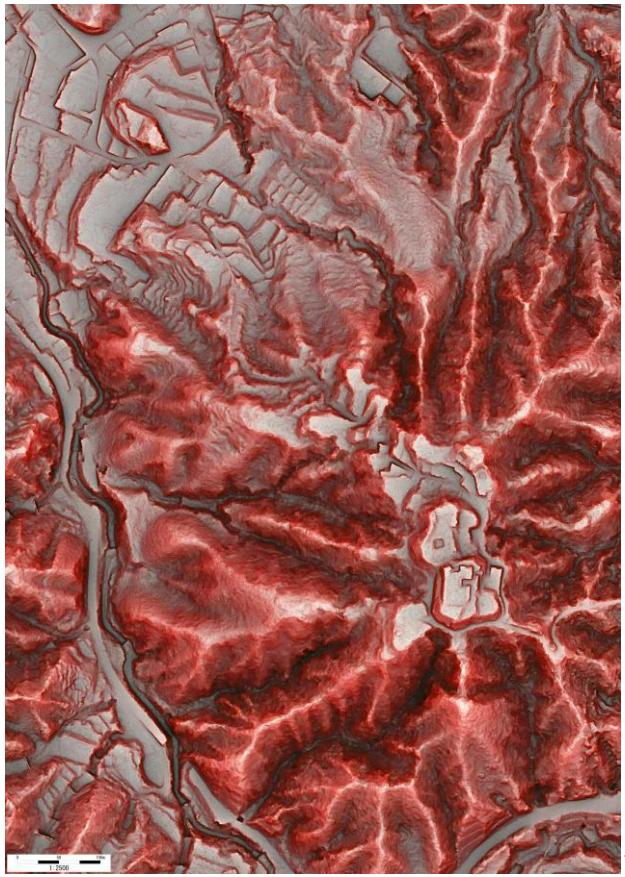
岩村城の存在が大きく飛躍するのは戦国時代、武田、織田、徳川が大きく勢力を拡大し、3強に囲まれた境目にあり戦略的に重要な城となったころである。江戸幕府成立まで緊張感が張り詰めやがてそれは城の防備対策を推し進めることとなる。岩村城は武田、織田、豊臣、徳川の支配するところとなり、現在の城跡は関ヶ原合戦後に松平家乗・乗寿によって築城された近世城郭である。

城の概要は城山の山上に本丸、本丸の外側に二の丸、西側に出丸、二の丸の外側に八幡曲輪が配された。本丸には二重櫓が二基、二の丸は岩村城最大の曲輪で番所、役人詰所、朱印蔵、武器庫、米蔵など重要な施設が置かれた。八幡曲輪には大手口に三重櫓が建ち、三重櫓の脇には追手門と畳橋がある。畳橋は空堀に架けられ敵が攻めて来たときに、畳を上げるように橋板をはずす事が出来たためこのような名が付けられたといわれる。岩村城は鎌倉時代から明治初頭まで続いたまさに武家政権の足取りが残る近世城郭の集大成といえる歴史ある城である。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／明知鉄道岩村駅から登城口まで徒歩約30分
  登城口から本丸まで徒歩約30分
- ●自家用車／中央自動車道恵那ICより岩村町まで20分
  岩村歴史資料館前に駐車場あり。岩村歴史資料館から徒歩約30分

■所在地／岐阜県恵那市岩村町字城山

■指定年月日／昭和32年12月19日



◀岩村城赤色立体図



▲岩村城－六段壁



▲岩村城－再現 CG

県史跡	明知城跡（あけち）	岐阜県恵那市

1185年源頼朝の重臣加藤景廉（かげかど）が恩賞として美濃国遠山荘の地頭職となる。長男の景朝から遠山氏を名乗り岩村の地を本拠地とし、景朝の次子景重が明智の地周辺を任される。手向郷地頭職の地位につき明知遠山氏の基を築いた。室町時代は将軍の近習、奉公衆として活躍。天文20年（1551）明知城の存在が分かる所見があり、この頃は街道が整備され中馬街道（名古屋－根羽）と南北街道（岡崎－大井宿）が通り、街道の押さえとして小高い山に城が築かれたことが伺える。

元亀3年（1572）武田信玄の西上作戦が動きだし岩村遠山氏は単独で降伏、織田方を主張する遠山勢は明知遠山景行を総大将に上村合戦を行い大敗した。天正2年（1574）武田軍が再び襲来し、籠城して戦うが籠城者の飯羽間友信が謀反を起こし落城した。

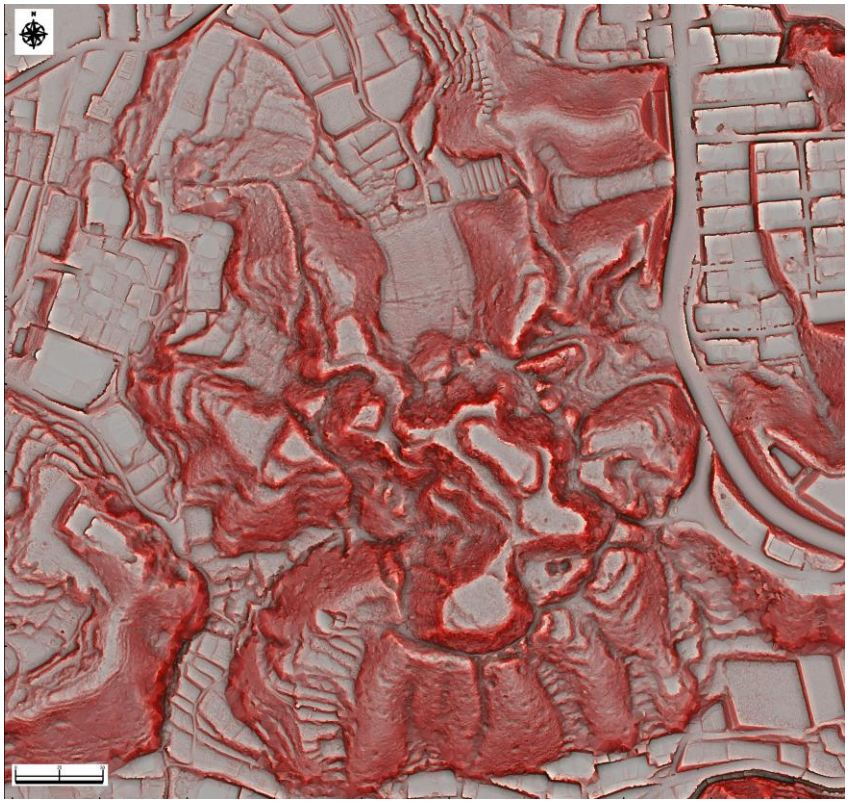
遠山利景は慶長5年（1600）、関ヶ原合戦のとき田丸直昌の支城となっていた明知城を奪還した。この功績により明知遠山利景は、旧領6，500石を安堵され徳川幕府の旗本として、明治を迎えることとなる。

城の概要は標高528m、山頂の二つの曲輪と通称「出丸」を中心として、東西400m南北300mの城山の全域に曲輪を配している。特筆すべきは主要な曲輪を取り囲む大規模な横堀、堀切とこれと連動する畝状竪掘群である。このほかにも貯水池や出丸の巨石列、山麓に構えられた近世旗本遠山氏の陣屋など見所が多い。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／明知鉄道明智駅から徒歩30分
- ●自家用車／中央自動車道瑞浪ICから約35分

■所在地／岐阜県恵那市明智町城山1318－1
■指定年月日／昭和39年12月8日

▼明知城赤色立体図





▲明知城－空撮



▲明知城－本丸

仲深山砦跡（なかのみやま）

岐阜県恵那市

明知城の南400mの万ヶ洞を隔てた尾根の先端に位置し、東西二つの曲輪群からなる。東側の曲輪は、背後（東端）を二重堀切で画し、北側には帯曲輪が巡る。その東端は横堀状になり3本の竪堀を設けている。堀切を隔てた西側の曲輪は、周囲に帯曲輪を巡らせ、さらに一段低い位置に横堀・堀切とこれに連動する畝状竪堀群が巡る。このうち北西の1本は、万ヶ洞の入口を画するように麓近くまで延びる長大な竪堀である。

仲深山砦の規模は、明知城の主郭部分に匹敵し、一段低い位置に帯曲輪や横堀と連動した畝状竪堀群を設ける点も明知城に類似する。

明知城の南を守る砦か、それとも明知城を攻撃するための陣城か、興味深い城跡である。

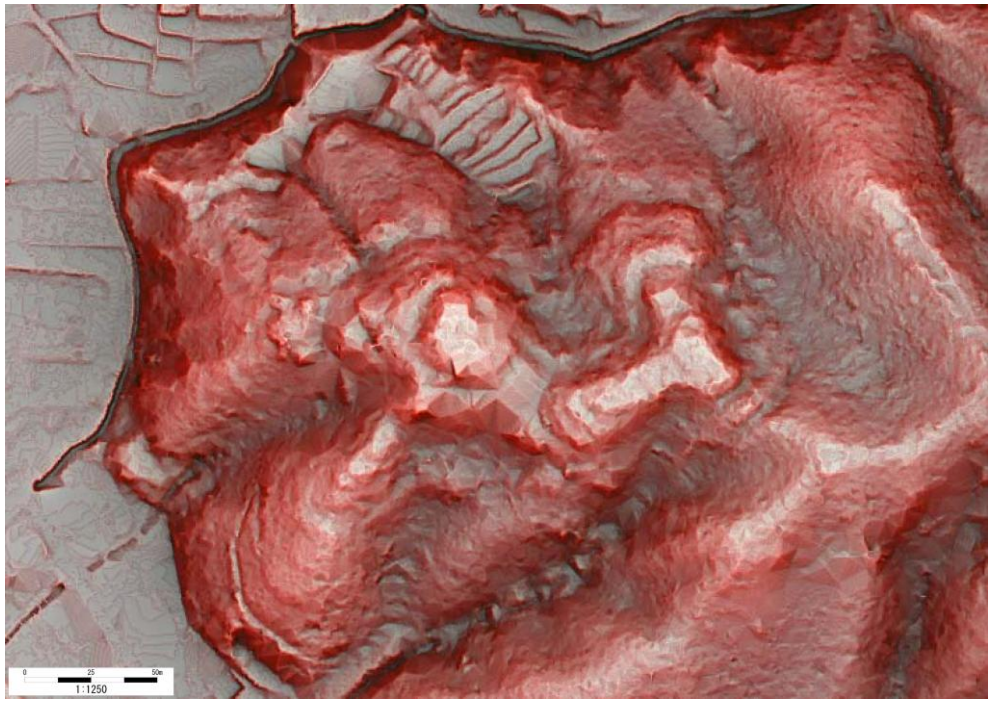


◀仲深山砦―全景

■交通アクセス
- ●公共交通機関／明知鉄道明智駅から徒歩15分
- ●自家用車／中央自動車道瑞浪ICから約35分

■所在地／岐阜県恵那市明智町万ケ洞

▼仲深山砦赤色立体図





◀仲深山砦－堀切

多羅砦跡（たら）

岐阜県恵那市

明知城が宝治元年（1247）に築城される前（『明智年譜』による）前から、西南800mの千畳敷台地に多羅砦が築かれたと伝わり、「土岐明智城」「落合山砦」と呼ばれている。

現在は、千畳敷公園として整備されており、出丸からの見晴らしがよく、三河（北条、今川、松平、三宅）、尾張・西美濃（織田、森）、信州（武田、真田）等の動きをいち早くとらえることができる絶好の場所である。戦国大名の争奪戦が幾度も繰り広げられた要衝の地である。

本丸には、枡形、虎口、武者走り、客人接待場所、大手通りなどが残っている。出丸（二の曲輪）は狼煙を上げる場所として、三の曲輪は井戸があることから、寝食をした場所と考えられている。なお、明智光秀公は、享禄元年（1528）にこの多羅砦で誕生したと伝わり、現存する井戸は、光秀公の産湯として使われたとされる伝承が今に残る。

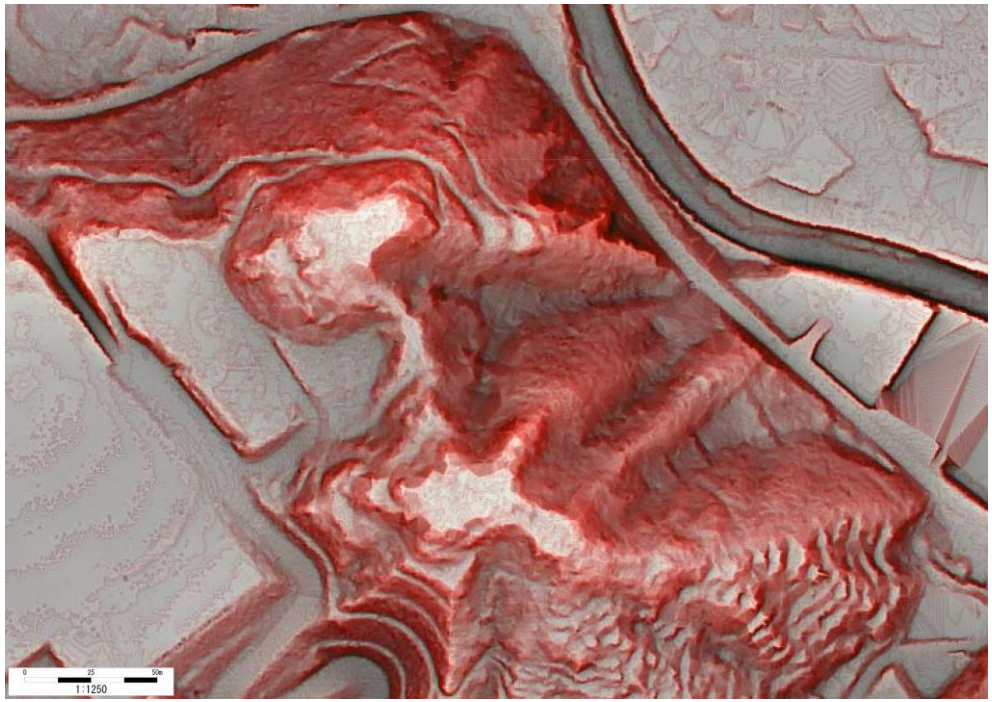


◀多羅砦－全景

■交通アクセス
- ●公共交通機関／明知鉄道明智駅から徒歩15分
- ●自家用車／中央自動車道瑞浪ICから約35分

■所在地／岐阜県恵那市明智町947－10

▼多羅砦（落合山砦）赤色立体図





◀多羅砦－主郭

市史跡

土岐高山城跡（ときたかやま）

岐阜県土岐市

土岐高山城は、土岐市北部の土岐津町高山に位置し、標高約180m、比高差約50mの通称「城山」と呼ばれる山地に立地している。城山のすぐ北側には土岐川が東西に流れ、麓には中山道の脇街道である下街道の「高山宿」が置かれている。

城の明確な築城時期は不明であるが、室町時代に高山伊賀守秀頼が築いたとされる。その後弘治2年（1556）頃、平井頼母が武田信玄の命により城主となったが、天正2年（1574）頃には織田信長の配下となったため、武田勝頼から攻撃を受けている。本能寺の変（1582）後は、金山城主（可児市）の森長可に従属したが、平井氏に代わり金山から城番として林長兵衛が置かれた。

天正12年（1584）の小牧・長久手の戦いでは、羽柴秀吉方に与した森氏の領内に徳川家康が侵攻しようとし、高山城がその攻防の場となった。関ヶ原の合戦の際には西軍方の田丸直昌（岩村城主：恵那市）の支城となり、城代として木原清兵衛が配置された。直昌は、東濃の戦い（関ヶ原の合戦時に東濃地域で行われた一連の戦い）で妻木氏に破れ、高山城に火を放って鶴ヶ城（瑞浪市）に退いたとされる。高山城落城の様子は、家康が妻木城主の妻木家頼に宛てた書翰にみることができる。

縄張りは、後世の開発工事により不明瞭であるが、南北約190m、東西約70mを測る南北に細長い構造である。最頂部とその周辺に本丸や堀切があったとされるが、現存する遺構は切岸状の地形と西側に続く小規模な郭のみである。室町時代から戦国時代にかけての地方における領主の変遷がわかる山城として、昭和31年に土岐市指定文化財となっている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR中央本線s駅
- ●自家用車／東海環状自動車道・土岐南多治見ICから約10分
  中央自動車道・土岐ICより10分

■所在地／岐阜県土岐市土岐津町高山

▼土岐高山城縄張り図





▲土岐高山城の春



▲土岐高山城－物見櫓

県史跡	妻木城跡（つまぎ）	岐阜県土岐市

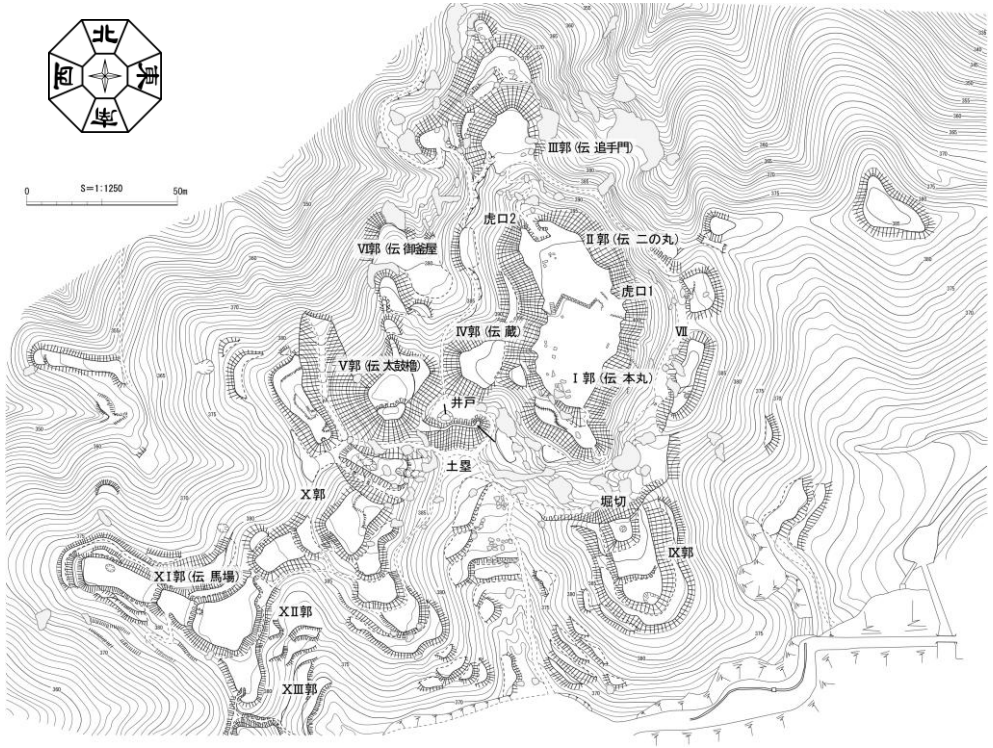
妻木城は土岐市南部の妻木町に位置し、標高約404m、比高差約170mの山地に立地している。また山地の麓には、城主の館や家臣団の屋敷地である妻木城土屋敷が広がっている。

城の明確な築城時期は不明であるが、暦応二年（1339）に土岐彦九郎頼重（土岐明智氏の祖）が祖父の美濃国守護であった土岐頼貞から妻木郷（土岐市妻木町他）等の遺領を引き継いでいるため、この頃に築かれたと考えられる。その後、土岐明智氏が代々妻木郷を治めるが、戦国時代に入ると領主は妻木氏に交替する。その一族の中には明智光秀の伯父にあたる妻木広忠と言う人物がおり、光秀が山崎の戦いで敗死した後に西教寺（滋賀県大津市）で自害している。慶長五年（1600）関ヶ原の合戦の際には、東濃地方唯一の東軍方に属し、徳川家康からの命を受けて土塁や堀などの土木工事を行っている。合戦後、妻木氏は戦功が認められ土岐郡内8ヶ村7500石を治める城主となった。その後、妻木氏は万治元年（1658）に城主が急死したため、跡継ぎが無かったこともあり断絶した。

山上の縄張りは、東西約230m、南北約240mの広範囲に広がっている。最頂部には主郭部が位置し、その周囲に各郭が展開している。郭の周囲には堀（堀切、横堀、竪堀）や土塁が設けられ、土塁の規模は高さ約7mを測る巨大なものである。平成10年から12年にかけて発掘調査を行い、妻木城は15世紀中頃に築城され、17世紀初頭頃には使われなくなったことが判明した。また出土遺物には日常食器を主体に茶道具や宴会道具等が含まれていたため、戦いの場としての利用だけでなく、日常生活の場としても使われていたことが明らかとなった。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR中央本線土岐市駅
●自家用車／東海環状自動車道・土岐南多治見ICから約15分
■所在地／岐阜県土岐市妻木町

▼妻木城縄張り図
『妻木城－妻木城跡・土屋敷跡発掘調査報告書－』より
（2002年 岐阜県土岐市教育委員会、(財)土岐市埋蔵文化財センター）




▲妻木城－土屋敷跡


▲妻木城－くさび岩

国史跡	みのかねやま 美濃金山城跡	岐阜県可児市

美濃金山城は、天文6年(1537)、斎藤大納言正義(妙春)によって木曽川左岸の標高276mの丘陵(古城山)に築かれた山城である。美濃の中央に位置し、木曽川や東山道を眼下に見ることができ、美濃統治の要衝として重要視されていた。当初、烏峰城と呼ばれたこの城は、永禄期に尾張の織田信長が美濃に侵攻すると、桶狭間の戦いなどで大きな戦功があった家臣の森可成に与えられて金山城と名を変えた。可成以降、長可、乱丸、忠政と3代に渡って森家が金山城主となった。

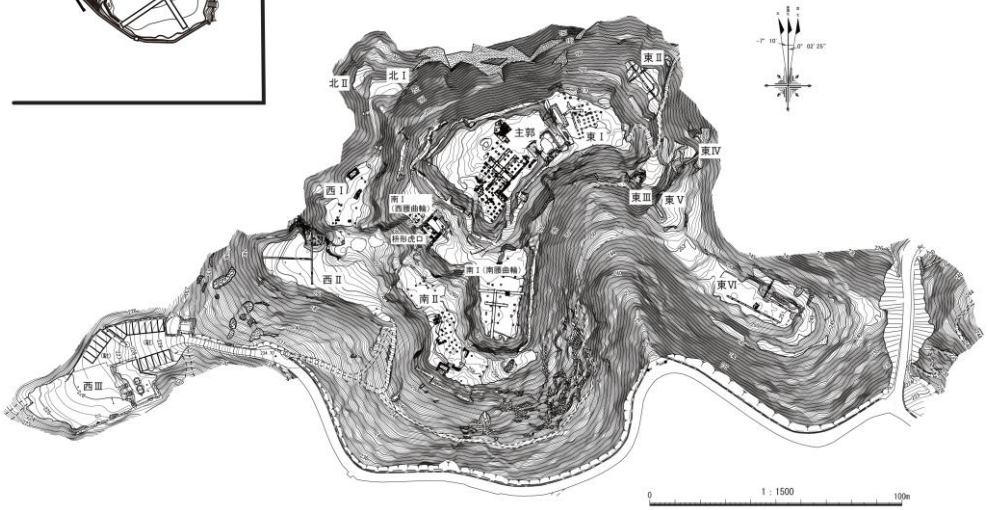
昭和10年代より発掘調査が行われており、ほとんどの曲輪で建物礎石が確認され、一部の曲輪で瓦が出土した。近年の発掘調査では、忠政期に主郭付近において数回にわたる整地や建物の改修が行われていたことが明らかになっている。石垣も各所に残っており、慶長期の破城の跡が良好な状態で観察することができる。また、破城後に建物に使われていた部材の一部を、木曽川を使って犬山に運び、犬山城の天守などに再利用されたとする「金山越」の伝承がある。石垣、瓦、礎石建物という織豊系城郭の三つの要素が揃う山城であり、山城の変遷を考える上で貴重な史跡と評価され、平成25年には国史跡に指定された。また、平成29年には「続日本100名城」にも選ばれている。

現在は、「美濃金山城おまもりたい」による定期的なボランティア整備が行われている。また、発掘調査の出土品は、麓の可児市戦国山城ミュージアムや、久々利に所在する可児郷土歴史館で展示されている。麓の公園「蘭丸ふる里の森」には桜が植栽されており、満開の時期には多くの人で賑わう。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／名鉄広見線明智駅⇒YAOバス城戸坂から徒歩10分
- ●自家用車／東海環状自動車道可児御嵩ICから約10分

■所在地／岐阜県可児市兼山

▼美濃金山城地形図(可児市作成)





▲美濃金山城－全景



▲美濃金山城－石垣(破城の痕跡)

久々利城跡（くくり）

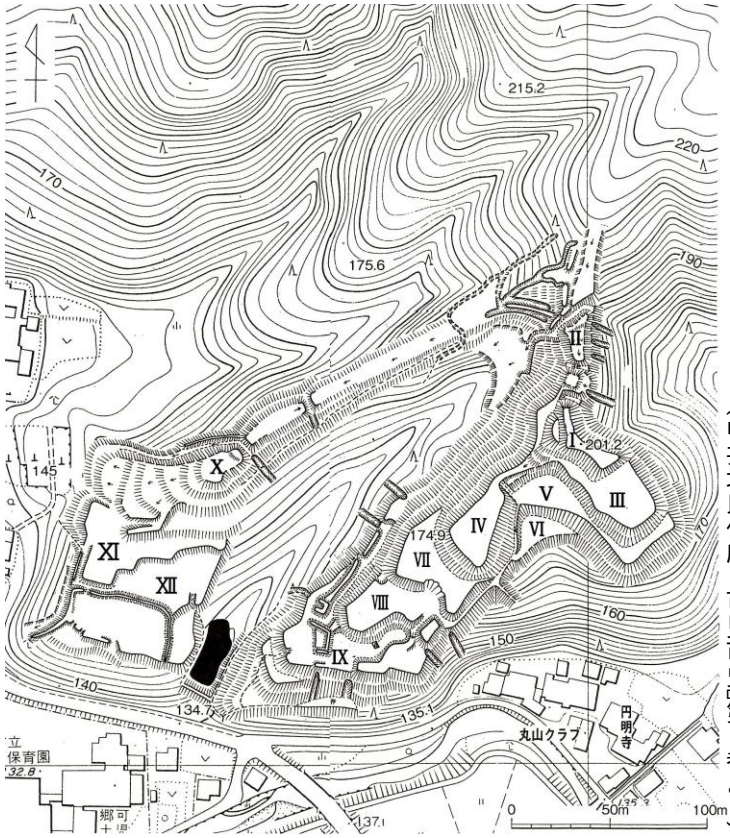
岐阜県可児市

久々利城の築城年代は定かではないが、室町時代には美濃国の守護であった土岐氏の一族で幕府奉公衆の久々利氏の本拠であった。久々利氏は、天文 6 年(1537)から 10 年にかけて烏峰城(のちの美濃金山城)主の斎藤妙春と激しく戦ったとされている。永禄 6 年(1563)に織田信長が小牧山城を築くと、信長の美濃侵攻を警戒した久々利氏は、武田信玄と手を結んで支援を受けようと図ったと思われる。しかし、永禄 8 年(1565)に中濃攻略を成功した信長が信玄と手を組んだことにより、後ろ盾を失った久々利氏は、美濃金山城主であった森可成に従うこととなった。その後、天正 11 年(1583)に当代の土岐悪五郎が美濃金山城主森長可に討たれ、久々利城は落城し、森氏は家臣林長兵衛を城に置いたと言われている。

城跡は、標高 236m の山を背にし、南に張り出した急峻な山を、堀切をもって遮断し構築されている。東西二股に分かれる丘陵の尾根の先端が城跡であり、東側は曲輪を階段状に配する城郭、西側は尾根の最先端を方形に区画した居館部(推定)で構成される。その土木作業の規模の大きさから、久々利氏の動員力の大きさがうかがえる。築城当初は単調な造りであったと思われるが、森氏の入城後に縄張りの改修が行われており、横矢、枡形虎口、横堀等が導入されるなど、複合的な構造となっている。市域に所在する中世城館跡では最大規模で、現在もよく遺構が残されている。現在は、「久々利城跡城守隊」によるボランティア整備活動により、見学路などが整備されている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／名鉄広見線明智駅から徒歩約1時間
- ●自家用車／東海環状自動車道可児御嵩ICから約10分

■所在地／岐阜県可児市久々利



◀久々利城跡縄張り図
（中井均氏作成・『可児市史』第1巻より）



▲久々利城－切岸と曲輪



▲久々利城－横矢掛け

今城（いま）跡

岐阜県可児市

天文年間(1532～1555)に小池刑部家継が築いたとされている。その小池氏は、美濃金山城主森長可の勢力拡大に伴い、城を退去し帰農したと伝えられている。

城跡は「愛宕山(あたごやま)」と呼ばれる比高約20mの丘陵先端部に展開しており、主郭と想定される曲輪Ⅰには、昭和33年まで愛宕神社が鎮座していた。曲輪Ⅰは一辺約30mの方形を呈し、これを中心として北・東・南方向に土塁が築かれている。主郭南端の虎口は食違いとなり、その外方の尾根には堀切が設けられている。なお、この堀切は城の東辺へ続き、横堀となる。主郭の北側には、堀切を隔てて曲輪Ⅱが設けられており、主郭北端の虎口と土橋によって通じられている。主郭と曲輪Ⅱの西側には一段低い曲輪Ⅲが設けられている。曲輪Ⅲには数基の五輪塔が残っており、小池氏の墓所であると考えられている。曲輪Ⅲ北側の虎口は、西端を土塁で区画した桝形となっている。

一見すると土豪の詰城に見えるほど小さな山城だが、横堀を巡らせる点や、食違いの虎口、枡形虎口等の存在から、戦国時代後半の技巧的な縄張りを持つ城郭といえる。

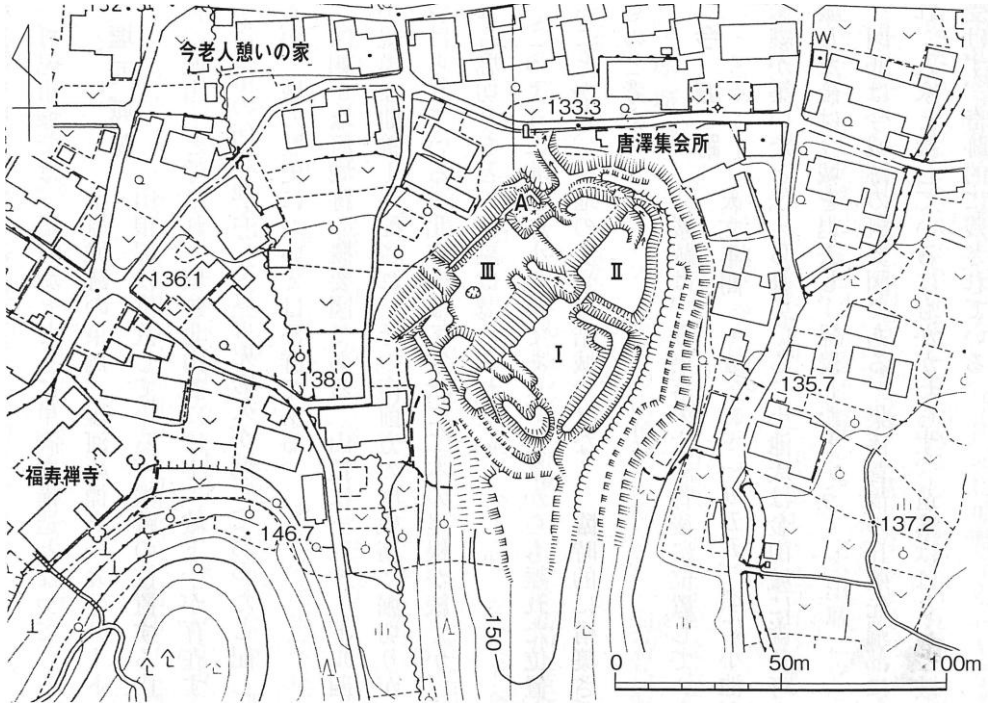
近隣の城跡と構造的に類似していることから、小牧・長久手の戦いの際に、美濃金山城主である森氏によって改修されたものと考えられている。

現在は、「今城址を整備する会」により、定期的なボランティア整備が行われている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR太多線下切駅から徒歩約30分
- ●自家用車／東海環状自動車道可児御嵩ICから約15分

■所在地／岐阜県可児市今

▼今城跡縄張り図(中井均氏作成・『可児市史』第1巻より)





▲今城－入り口



▲今城－虎口と土塁

大桑城跡（おおが）

岐阜県山県市

大桑城跡は、戦国時代に美濃国守護土岐氏が本拠とした標高407．5mの古城山に位置する山城である。天文4年（1535）の長良川大洪水を契機に、従来の拠点であった「枝広（現在の岐阜市長良）」から移転・整備されたが、天文12年（1543）に家臣・斎藤道三の侵攻により落城したとされる。令和2～6年度に実施した総合調査により、保存状態が極めて良好で、16世紀前半から中頃に機能した守護の拠点城郭の実態が判明。戦国時代における守護大名の本拠地の構造を知る上で重要な遺跡として評価され、令和8年（2026）2月17日に「国史跡」に指定された。

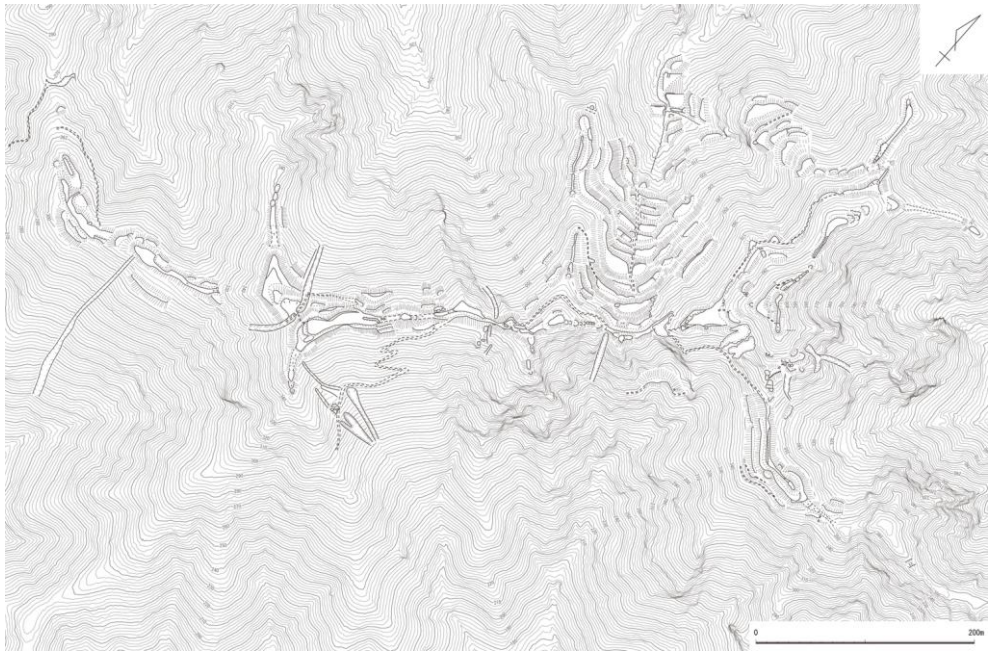
調査成果から、当城は政治的空間と居住空間を併せ持つ構造であったことが確認されている。山麓には「四国堀」等の堀や土塁で区画された城下町が配されていた。登城ルート起点にある伝「岩門」では、巨石列や石垣による城門が確認され、来訪者に対する視覚的な演出を意図した空間構造が指摘されている。

山頂部で最大の面積を有する伝「台所」の調査では、黒色の円礫を配した池庭遺構や、横目地を通した石垣が検出された。また、政治的儀礼に用いられる素焼きの皿（土師器皿・かわらけ）が多量に出土したことから、同地は客人をもてなす迎賓施設として機能した可能性が高い。主尾根北側の谷筋にひな壇状に50もの曲輪が展開する曲輪群からは、日常雑器のほか、唐物茶入や花器などの遺物が出土しており、居住空間としての役割が考えられている。さらに、城内で計95箇所の石垣が確認されており、城郭を恒久的に維持管理する意識が窺える。

このことから、土岐氏が訪問者に守護としての権威を示そうとしたことや、権力者・一流の文化人として優雅なひとときを過ごしていたと推測できる。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR岐阜駅⇒〈岐阜バス〉山県バスターミナル
⇒椿野バス停〈ハーバス伊自良・大桑線〉⇒古城山登山口徒歩（北へ約1㎞）
●自家用車／東海環状自動車道山県ICから約15分
■所在地／岐阜県山県市青波・大桑・富永地内

▼大桑城跡遺構配置図（山県市教育委員会作成）





▲大桑城－伝「岩門」全景



▲ミニチュア模擬天守と朝日
（撮影者：山菅敦史）

国史跡

江馬氏城館跡（えまし）

岐阜県飛騨市

江馬氏城館跡は岐阜県北西部の高原郷を治めていた武将・江馬氏の拠点である。江馬氏は室町幕府関係の文書にしばしば登場し、長享3年（1489）には『梅花無尽蔵』の作者・万里集九が高原郷を訪れ江馬氏の饗応を受けている。天正10年（1582）江馬輝盛は南飛騨を治める三木自綱に敗れ戦死し、ほどなくして江馬氏は歴史の表舞台から姿を消した。江馬氏の下館は現在の飛騨市神岡町殿にあり、その背後山稜に本城の高原諏訪城があった。また、それぞれ街道沿いの支城として、土城・寺林城・政元城・洞城・石神城・傘松城がある。これらの城館群は、下館の庭園跡を代表とする遺構の良好な保存状況に加えて中世の城館の相互の関連を示すものとしても貴重であり、一括して国史跡に指定されている。

下館は昭和49年から土地改良工事に伴う発掘調査が実施され、建物・土塁・堀・庭園遺構が確認された。庭園は15世紀末から16世紀初頭にかけて完成したものと考えられ、その配置から室町将軍等の上級武士の邸宅を模した館の構造であることが明らかになった。平成11年度から平成22年度にかけて保存整備を実施し、平成29年には当時の様子を忠実に復元した庭園区画が国名勝「江馬氏館跡庭園」に指定されている。復元した館や庭園は、室町時代の人々が行ったであろう行動を当時の景観の中で追体験できる場所となっている。

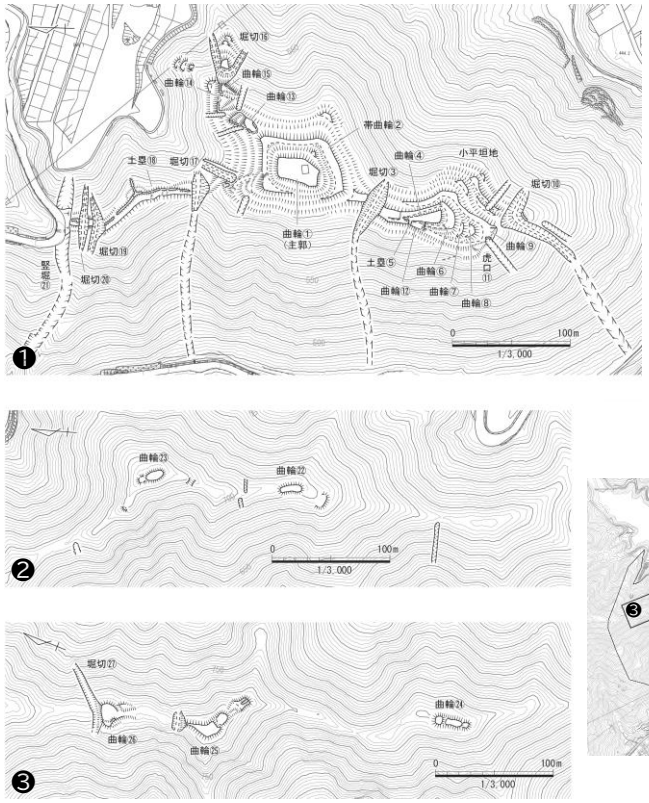
また、近年は下館の利活用事業を推進している。お茶会やフレンチ、箱庭作り、ヨガなど、会所から眺められる美しい庭園の魅力を活かした取り組みを、地元のまちづくり団体と連携して行っている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR高山本線飛騨古川駅⇒バス江馬館前
- ●自家用車／東海北陸自動車道飛騨清見ICから約50分

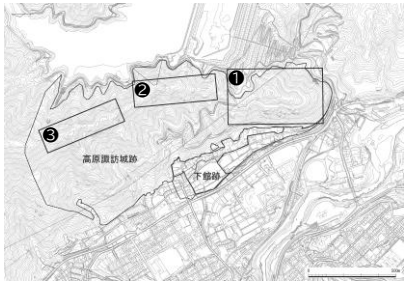
■所在地／岐阜県飛騨市神岡町殿573－1（下館）

■指定年月日／昭和55年3月21日（平成29年10月13日名勝指定）
令和6年2月21日傘松城国指定追加

▼高原諏訪城縄張り図



MAP 下館
MAP 高原諏訪城跡
MAP 傘松城
MAP 土城
MAP 寺林城
MAP 政元城
MAP 洞城
MAP 石神城



▲高原諏訪城跡全体図



▲江馬氏下館跡・高原諏訪城跡



▲江馬氏館跡（下館）

写真提供：飛騨市画像オープンデータ

国史跡

姉小路氏城跡（あねがこうじし）

岐阜県飛騨市

姉小路氏城跡は、現在の岐阜県飛騨市の古川盆地周辺を治めていた、飛騨国司・姉小路氏が築いた城館群である。姉小路氏は京都の公家の一族で、南北朝時代に飛騨国司に任じられ、以後飛騨に土着する。その後、古川・小島・向（後に小鷹利）の3家に分家し、それぞれに拠点を構えた。このうち、主なものとして古川氏の拠点と伝わる「古川城」、小島氏の拠点と伝わる「小島城」、向氏の拠点と伝わる「向小島城」と「小鷹利城」がある。これらと同規模の城として「野口城」があり、立地や縄張りの様子から姉小路氏の山城と考えられる。

16世紀になると姉小路氏は勢力が衰え、南飛騨から進出してきた三木氏が台頭する。三木氏は古川氏の名跡を継ぎ、古川盆地を押さえる。天正13年（1585）、羽柴秀吉の命を受けた金森長近が飛騨に侵攻し三木氏を滅ぼす。

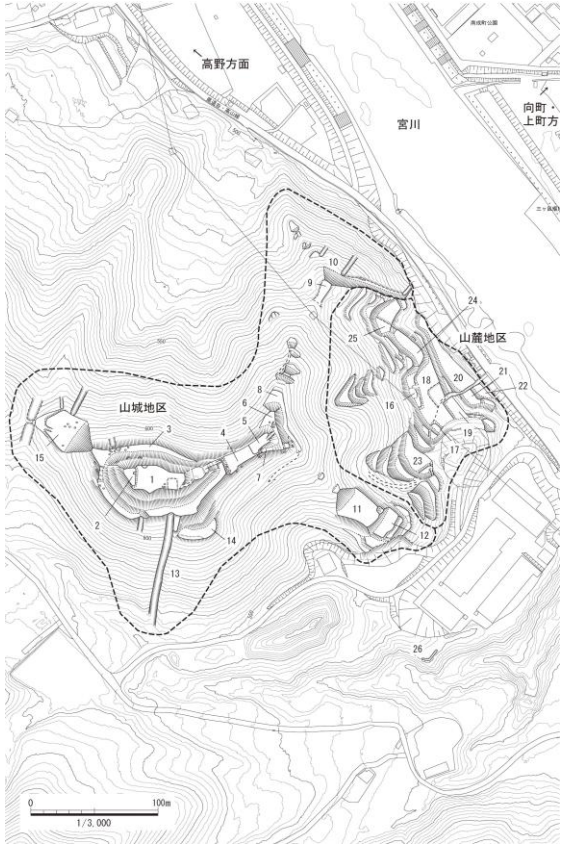
三木氏が金森氏の侵攻に備え大規模に改修したと考えられる畝状空堀群が野口城、向小島城、小鷹利城に見られる。また古川城、小島城には織豊系の石垣をともなう虎口や礎石建物が発掘調査で発見されており、金森氏が飛騨攻略直後に臨時的に旧来の勢力の城を改修しながら使用したと想定される。

このように姉小路氏の城館群は、中世飛騨の中心地であった古川盆地をめぐる支配勢力や政治的動きの変遷を築城・改修の様子から具体的に見て取れる「飛騨の歴史を物語る城館群」である。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR高山本線飛騨古川駅
- ●自家用車／東海北陸自動車道飛騨清見ICから約20分

■所在地／岐阜県飛騨市古川町周辺

■指定年月日／昭和34年11月16日県指定（小島城、古川城、向小島城、小鷹利城）
昭和33年10月13日市指定（野口城）
令和6年2月21日国指定



◀古川城跡縄張り図

古川城
小島城
野口城
向小島城
小鷹利城


▲古川盆地を取り囲む姉小路氏城跡
空撮（南東から）


▲姉小路氏城跡－空撮（北西から）

写真提供：飛騨市画像オープンデータ

国史跡	三岳城跡（みたけ）	静岡県浜松市

三岳城は、標高467mの三岳山に築かれた南北朝期と戦国期の山城である。三岳山山頂は、三方原台地や都田川水系が形成した中川平野や井伊谷盆地、浜名湖への眺望に優れている。また、鳳来寺や信州を結ぶ街道が山麓東側を通るほか、井伊谷盆地内では東西南北の要所続く街道が交差しており、交通の要所に立地している。

南北朝期の三岳城は、南朝勢力の山城として利用されたが、暦応2年（1340）に落城した。戦国期には今川氏・井伊氏・徳川氏等による築城と改築を経て、武田氏の脅威が薄れた天正年間初頭以降、廃城になったと捉えられる。

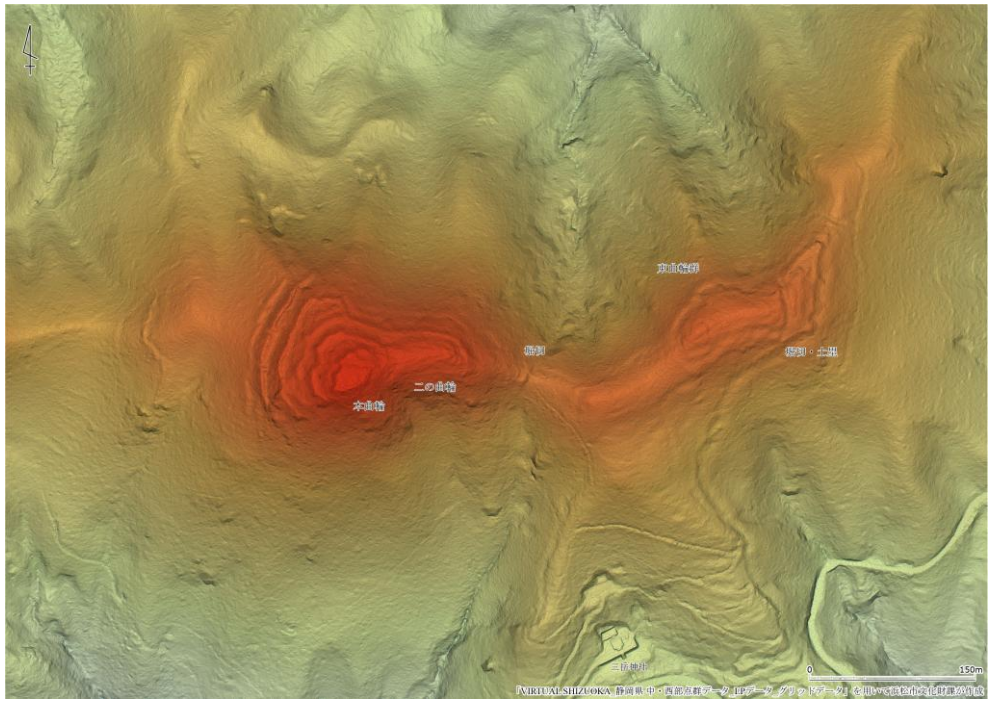
南北朝期における三岳城の構造は、今川氏や徳川氏等による戦国期の改築により不明瞭であるが、山頂を含む本曲輪とその周辺に利用し、高低差と急峻な地形を活かした山城であったと想定できる。

戦国期における三岳城は、尾根の鞍部を境界として山頂の本曲輪や山頂と連続する東の尾根上に二の曲輪、本丸の周囲に配置された腰曲輪を中心とした範囲と尾根の鞍部を挟んで東の尾根上に築かれた東曲輪の2つに分けて認識することができる。

本曲輪や二の曲輪を中心とした遺構群は、自然地形を活かした構造で地形加工は小規模である。いっぽう、東曲輪は、尾根と城域の境界に掘削が明瞭な堀切が築かれ、堀切の外側に土塁を築いている点が特徴である。大平城における城域縁辺部に築かれた堀切と土塁の様相と同様の特徴を有している。大平城と同様の時期に、同様の築城技法を用いた集団による改築を想定できる。

■交通アクセス
●自家用車／東名高速浜松西ICから国道257号線経由引佐⇒井伊谷交差点を東へ約3㎞
新東名浜松いなさIC約11㎞
■所在地／静岡県浜松市浜名区引佐町三岳地内
■指定年月日／昭和19年3月7日

▼三岳城－地形図





▲三岳城－空撮



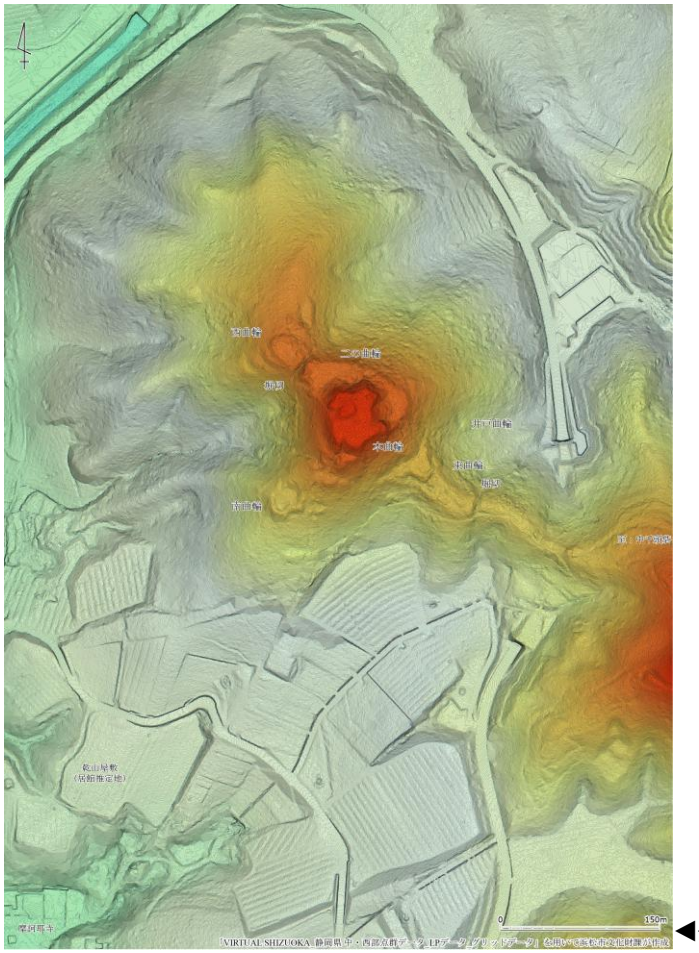
▲三岳城－本曲輪からの眺望

県史跡	千頭峯城跡（せんとうがみね）	静岡県浜松市

千頭峯城跡は、標高137mの千頭山に築かれた南北朝期と戦国期の山城で、南麓には摩訶耶寺、中腹に山下の居館とみられる乾山屋敷跡、東の尾根に中千頭砦跡、南に鯉山砦跡が所在する。千頭山山頂からは浜名湖や内湖・猪鼻湖を臨む。また、南に東海道の北往還である本坂道（姫街道）、北に奥山や新城へと至る街道があり交通の要所である。南北朝期に南朝勢力の山城として利用され暦応2年（1339）に落城、戦国期に再度築城され、16世紀前半を中心とした時期に用いられたと捉えられる。

南北朝期の千頭峯城は、戦国期の改築によりその構造が不明瞭であるが、千頭峯城の東、中千頭砦の中腹に宇志瓦塔の出土で知られる山林寺院・宇志北大里遺跡（宇志瓦塔遺跡）が所在する点や、近接する複数の頂上部に砦が複数分布する状況から、既存の宗教施設や山麓から山頂までの高低差、急峻な自然地形を活かした複合的な南北朝期の城郭の構造を想定することができる。

戦国期の千頭峯城は、山頂に櫓台状の基壇を持つ本曲輪を配置し、地形に合わせ階段状に二の曲輪、西曲輪、南曲輪、東曲輪、井戸曲輪等の曲輪を配置し、堀切や土塁によって区画している。二の曲輪や西曲輪・東曲輪、井戸曲輪等を対象として1983年に発掘調査を行い、掘立柱建物や柵、土塁や土塁裾部の石積み、堀跡等を確認した。16世紀前半の遺物が二の曲輪や西曲輪を中心に出土している。千頭峯城は戦国期のうち、今川氏支配下から徳川氏の遠江侵攻時を中心とした16世紀前半の比較的短い期間を中心として使用された山城と捉えてよいだろう。



◀千頭峯城－地形図


千頭峯城－本曲輪▶

■交通アクセス
●公共交通機関／天竜浜名湖線三ヶ日駅から徒歩30分
●自家用車／東名高速三ヶ日ICより三ヶ日・摩訶耶寺方面約7km
■所在地／静岡県浜松市浜名区三ヶ日町摩訶耶地内
■指定年月日／昭和56年3月16日

県史跡	犬居城跡（いぬい）	静岡県浜松市

犬居城は、標高290mの鐘打山に築かれた戦国期の山城である。犬居城の麓には天竜川の支流・気田川が北東から南西に向けて流れ、犬居城の眼下で、平地を形成している。天竜・浜松方面や袋井・掛川方面へと続く街道がこの平地を通っており、水上交通や陸上交通の要所であったと捉えられる。この平地の周囲には北に犬居城、南に若身城山城や堀ノ内城山城、東に平尾城が分布し、重要性をうかがい知ることができる。

犬居城を領有した天野氏は、今川氏、徳川氏、武田氏と上級領主を変えている。徳川勢力と武田勢力の軍事的緊張感がなくなった天正年間の初頭頃、犬居城は廃城になったと捉えられる。

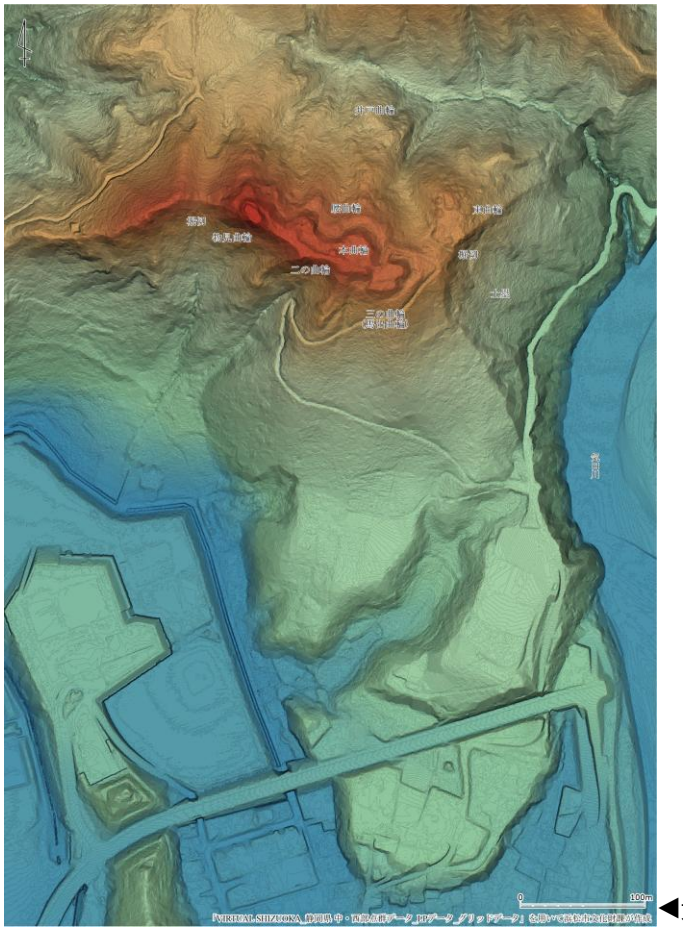
戦国期の犬居城は、山頂に物見曲輪、山頂から東へと続く尾根上に本曲輪、二の曲輪、三の曲輪（馬出曲輪）を配置し、大手口へと続く。このほか、腰曲輪や東曲輪、井戸曲輪が配置されている。三の曲輪東側のU字形の空堀や本曲輪と三の曲輪の境界部分に築かれた竪堀と土橋などは、対徳川勢力に対する防備のために武田氏の支援を受けて改築したと捉えられている。これらの遺構群れは現在も良好な状態で残存している。

犬居城の麓付近には台地状の平地が複数あり、いずれかの台地上に居館があったと推定できる。

天正2年（1574）や天正4年（1576）の天野氏と徳川勢力の戦いにおいては、天野氏が篠嶺城や勝坂城を用いたことが史料から知られている。犬居城は、天野氏が築いた城郭群の拠点のひとつと捉えて良いだろう。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／遠鉄バス西鹿島駅から春野車庫行き、犬居すみれ通りから徒歩約30分
- ●自家用車／東名高速浜松ICから春野町方面約30㎞
  新東名高速浜松浜北ICから約20㎞

■所在地／静岡県浜松市天竜区春野町堀之内地内
■指定年月日／昭和60年3月19日



◀犬居城－地形図



▲犬居城－全景



▲犬居城－堀切と土塁

国史跡	二俣城跡（ふたまた）	静岡県浜松市

二俣城は、標高83mの城山（蜷原台地南端）に築かれた戦国期から江戸期初頭の山城である。武田氏と徳川氏の激しい争奪戦が行われた城としても知られている。山間部から沖積平野に移行する境界部分に位置する。天竜川と二俣川の旧流路に囲まれた蜷原台地の南端に位置している。二俣川の旧流路を隔てた南側には鳥羽山城があり、相互の機能を補完する別城一郭と呼ばれる関係をもつ。二俣城下は東西南北を結ぶ陸上交通網が重複し、水上交通も利用できる交通の要所である。

二俣城は、永禄3年（1560）の桶狭間の戦いを中心とした時期に整備が本格化し、前身城郭である笹岡城から地域拠点が移転した。本丸を頂点とし、二の丸や南の丸、北の丸が配置され、西側にも3つの曲輪が設けられている。各曲輪の間には横堀や堀切、竪堀、切岸が設けられ、戦国期の二俣城の様相をうかがい知ることができる。今川氏や徳川氏、武田氏が二俣城を領有した際には、石垣を備えない城郭であったが、天正18年（1590）から慶長5年（1600）の間に浜松や二俣の地を領有した堀尾氏によって石垣を備えた城に改築された。本丸や二の丸、南の丸Ⅰ、西の丸Ⅰ等で石垣が築かれ現在も残存している。

二俣城の本丸西端には石垣を用いた天守台が築かれており、天竜川からの眺望を意識していることがわかる。西の丸Ⅰにも大規模な石垣が築かれており、下方にあった川湊を重要視していたことがうかがえる。

鳥羽山城は御殿的な機能を重視しているが、二俣城は実戦的機能や城下から見た際の荘厳な景観と象徴性を強く意識した構造であるといえる。

■交通アクセス
●公共交通機関／天竜浜名湖鉄道二俣本町駅から徒歩約15分
●自家用車／東名高速浜松ICから二俣方面へ約20㎞
新東名浜松浜北ICから約4㎞
■所在地／静岡県浜松市天竜区二俣町地内
■指定年月日／平成30年2月13日



◀二俣城縄張り図


▲二俣城－空撮


▲二俣城－天守台

国史跡

鳥羽山城跡（とばやま）

静岡県浜松市

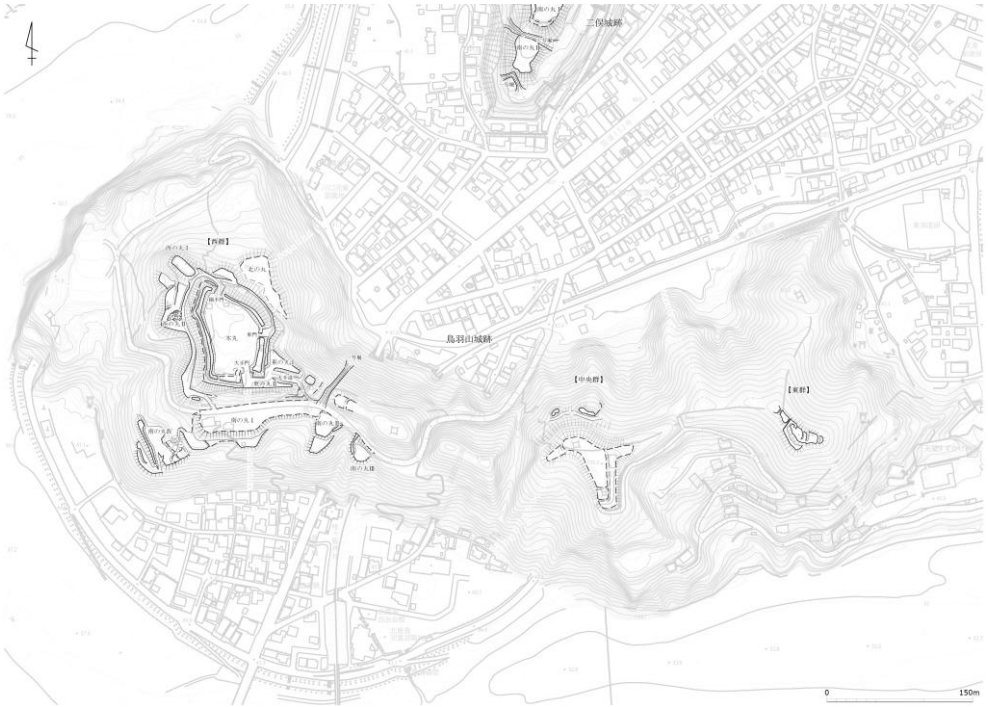
鳥羽山城跡は、標高108mの独立丘陵上に築かれた戦国期から江戸期初頭の山城のである。西側と南側には天竜川が流れ、流路が付け替えられるまでは北側を二俣川が流れていた。二俣川を隔てて北側には二俣城がある。二俣城と鳥羽山城は500mほどの距離であり、別城一郭と呼ばれる密接な関係をもつ。鳥羽山城は眺望に優れており、三方原台地や磐田原台地、天竜川平野を臨むことができる。

鳥羽山城跡が所在する独立丘陵上には3つの山頂部があり、西群・中央群・東群に分けて認識することができる。天正3年（1575）の徳川家康が武田氏から二俣城を奪還するために本陣を置いた地として知られる東群・中央群がある。いっぽう、西群は土塁を備えた本丸と数多くの腰曲輪がある。西群は出土遺物から二俣城が城山に築かれた16世紀後半の同時期に築城されたと想定できる。その後、堀尾氏によって二俣城とともに石垣を備えた城郭へと改築され、江戸期初頭には二俣城とともに廃城になったとみられる。

東群や中央群の遺構は、西群に比べて小規模なものが多いが、中央群北側に築かれた横堀は総延長が50m以上あり、徳川氏による二俣城攻めに際し本陣が置かれた地であることを示唆する遺構といえ注目できる。西群は、大規模な土塁に囲まれ、鉢巻き石垣と腰巻石垣がめぐらされた本丸を中心としている。本丸中央西側には枯山水庭園がある。本丸に至る大手道は両側に石垣が築かれ、最大幅が9mある大規模なものである。南への眺望と御殿的な機能を重視した城郭であったと捉えられる。

■交通アクセス
●公共交通機関／天竜浜名湖鉄道二俣本町駅から徒歩約15分
●自家用車／東名高速浜松ICから二俣方面へ約20分
新東名浜松浜北ICから約4㎞
■所在地／静岡県浜松市天竜区二俣町地内
■指定年月日／平成30年2月13日

▼鳥羽山城縄張り図





▲鳥羽山城－東門



▲鳥羽山城－枯山水庭園

市史跡	佐久城跡（さく）	静岡県浜松市

佐久城跡は、浜名湖の内湖・猪鼻湖の北東岸に位置する湖に突出した標高11mの半島上に築かれた水城（海城）である。本曲輪の北・西・南の3方が湖面に囲まれている。浜名湖と内湖を用いた水上交通の掌握を重視した立地と捉えられる。

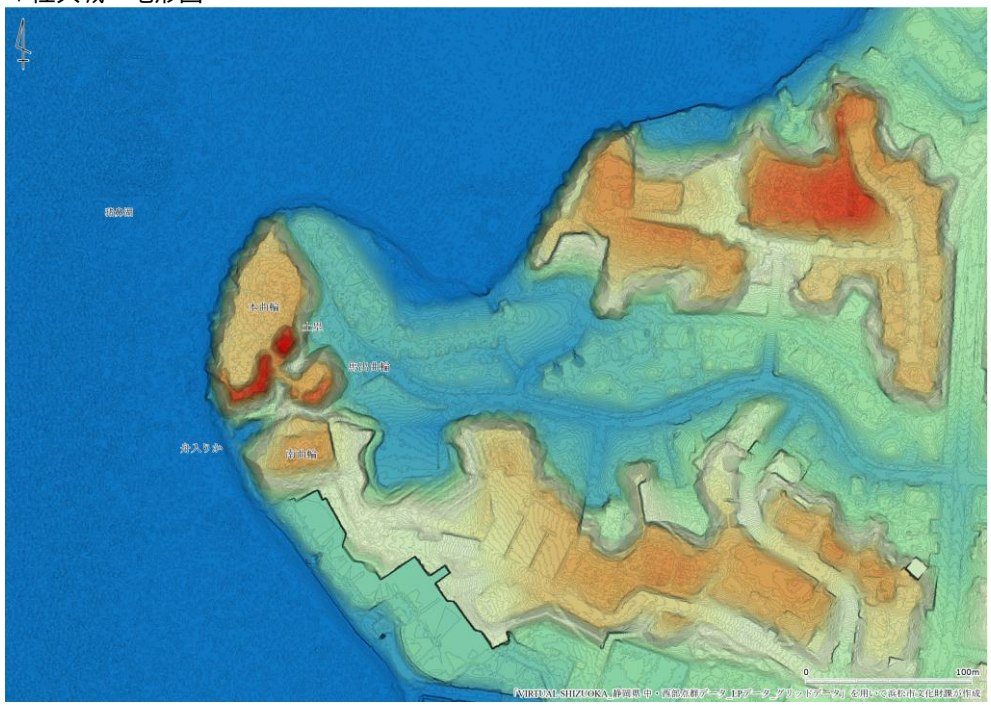
佐久城は、貞和4年（1348）に浜名清政が築城したと伝わるが、築城時における佐久城の様相は明らかでない。徳川家康の遠江侵攻時には、今川勢力下の浜名氏が佐久城で応戦し落城した。その後、徳川氏の城として改築が行われたことが知られている。天正11年（1583）に入り江を挟んで北側の半島に野地城が築城され、佐久城は廃城となった。陸上交通の重要性が増し、水上交通と陸上交通の結節点を掌握することに適した野地城に移ったものと想定できる。現在確認できる城郭遺構は徳川氏の改築によるものと捉えられる。

戦国期の佐久城は、丘陵の突端に本曲輪があり、本曲輪の南東に馬出曲輪、南曲輪が配置されている。南曲輪は現代の土地利用により、詳細は不明だが、本曲輪と馬出曲輪の間や馬出曲輪と南曲輪の間には幅15m、深さ10mの堀が配置され、本曲輪と馬出曲輪は土橋でつながれている。本丸は猪鼻湖に面していない南側には土塁がめぐっているが、猪鼻湖に面した部分では土塁が認められない。土塁部分が失われた可能性も否定できないが、湖側は土塁を備えていない構造であった可能性が想定できる。馬出曲輪には南・西・東の三方に土塁が廻らされている。本丸と馬出曲輪の境界部分にある南側の堀跡は堀底が低標高かつ緩傾斜に造られており、舟入りを兼ねていたと想定できる。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／天竜浜名湖線都筑駅から徒歩約30分
- ●自家用車／東名高速三ヶ日ICから大崎半島瀬戸方面へ約3㎞

■所在地／静岡県浜松市浜名区三ヶ日町都筑地内
■指定年月日／昭和44年2月14日

▼佐久城－地形図





▲佐久城－空撮



▲佐久城－本曲輪

市史跡	おいだいら 大平城跡	静岡県浜松市

大平城跡は、標高102mの丘陵に築かれた南北朝期と戦国期の山城である。大平城の南側には細江・三ヶ日方面と二俣方面をつなぐ街道が存在し、灰木川が北東から南西へと流れている。大平城跡の南西には都田川と灰木川の合流点がある。交通の掌握を目的として大平城が築かれたと捉えられる。

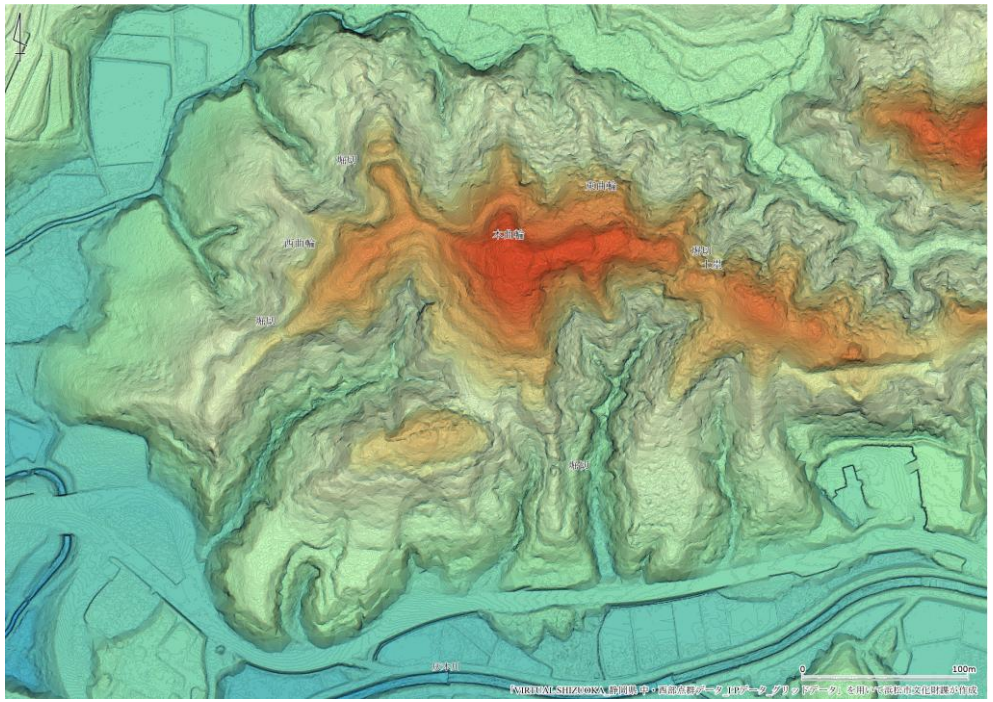
南北朝期に南朝勢力の山城として利用されたが、暦応3年(1340)に北朝勢力により落城した。戦国期には徳川氏と武田氏の緊張感が増す中で築城され、武田氏の脅威が薄れた天正年間初頭以降、廃城になったと捉えられる。

南北朝期における大平城の構造は、戦国期の改築により不明瞭である。戦国期における大平城の本曲輪を中心に13世紀の舶載陶磁器が採集されており、中世の山林寺院が存在した可能性が想定されている。

戦国期の大平城は、丘陵の頂部に本曲輪を配置し、東西南北それぞれに伸びる尾根上に曲輪を配置している。尾根の鞍部と谷を境として、本曲輪が所在する東側の曲輪群と西曲輪を中心とした西側の曲輪群に分けて認識することができる。2つの曲輪群の境界となっている尾根の鞍部や谷付近に大手筋や搦め手筋を求めることができる。四方の尾根に配置された曲輪の外縁部等で尾根を切断し堀切を設けている。東曲輪や北曲輪等の堀切では、堀切の外側に土塁を設けている点が特徴的である。東曲輪の外縁部に築かれた堀切が最も大規模であり、尾根が城外へと続いている東への備えを重視していることがうかがえる。南曲輪では、地形に合わせて小規模な曲輪が尾根上に配置されている状況を認識することができ地形による差異をうかがい知ることができる。

■交通アクセス
●公共交通機関／天竜浜名湖鉄道宮口駅から県道68号線を大平地区方面へ約4㎞
●自家用車／新東名浜松浜北ICから8㎞
新東名浜松SAスマートICから徒歩約30分
■所在地／静岡県浜松市浜名区大平地内
■指定年月日／昭和47年8月30日(追加指定／平成9年10月1日)

▼大平城－地形図





▲大平城－全景



▲大平城－堀切

市史跡	高根城跡（たかね）	静岡県浜松市

高根城は、標高420mの山頂と北側の尾根に急峻な地形を活かして築かれた戦国期の山城である。久頭郷城とも呼ばれている。高根城の麓には水窪川と河内川が流れ、高根城の北西で合流し、盆地を形成している。秋葉街道が城下を通過しており、信濃・遠江国境の峠越えには青崩峠もしくは兵越峠が用いられ2つの経路があるが、高根城眼下の盆地の北側で合流し、ひとつの街道になることから、信濃と遠江を結ぶ南北交通の要所に築かれたと捉えられる。

高根城跡では全面的な発掘調査が行われ、遺構や出土遺物から構造やその変遷が明らかになっている。

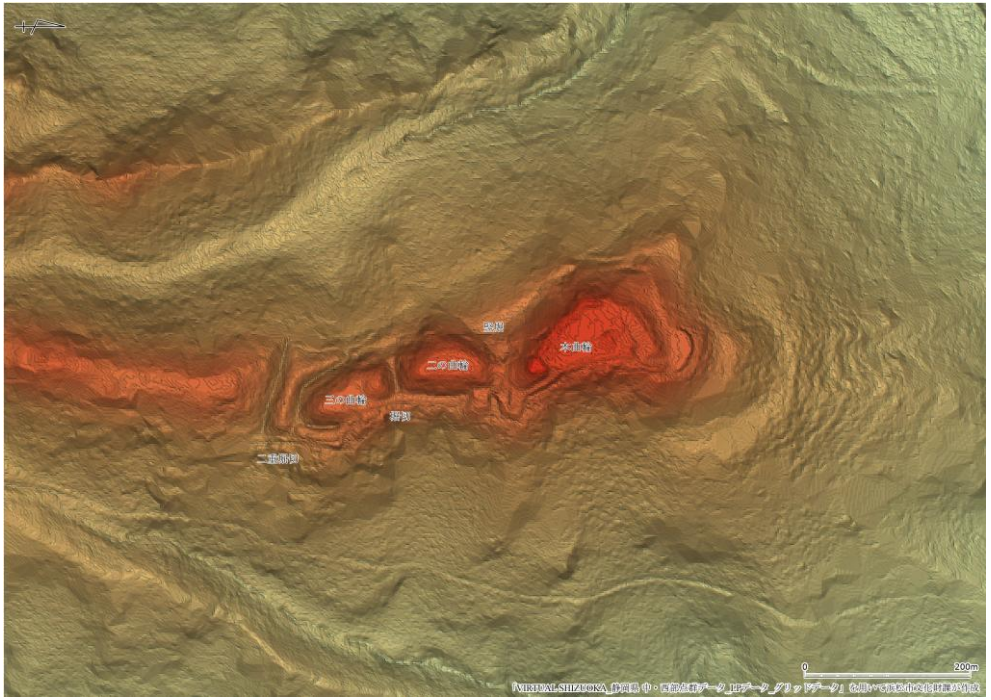
戦国期前半の高根城は、奥山氏のもと15世紀から16世紀前半を中心とした時期のもので、本曲輪とその周辺が用いられたと捉えられる。

戦国期後半の高根城は、戦国期前半に奥山氏が本曲輪を中心に築いた高根城を基礎として、二の曲輪や三の曲輪の配置を含め改築したとみられる。山頂から南へ本曲輪・二の曲輪・三の曲輪の3つの曲輪が配置され、それぞれに堀切や竪堀を用いて区切られている。三の曲輪南端にはくの字形に曲がった土塁を中央にもつ二重の堀切がある。二重堀切の構造から武田氏による改築と想定できる。戦国期後半の出土品は少なく、短期間の使用であったとみられる。

現在、発掘調査成果をもとに戦国期後半の高根城が復元整備され、当時の山城の様子を感じることができる。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR飯田線向市場駅から徒歩30分
●自家用車／東名高速浜松ICから水窪方面へ約60㎞
新東名浜松浜北ICから約50㎞
城跡公園直下に駐車場、駐車場から徒歩20分
■所在地／静岡県浜松市天竜区水窪町地頭方地内
■指定年月日／昭和57年2月16日

▼高根城－地形図





▲高根城－本曲輪遠景



▲高根城－本曲輪

国史跡	山中城跡（やまなか）	静岡県三島市

山中城跡は、戦国時代の16世紀半ばに築城された。関東の覇権を握った小田原北条氏が、小田原城西方の防御のために箱根山西麓の尾根上に築いた国境警備の山城である。

城の広さは約20万㎡と推定され、南西方向の尾根を障子堀と呼ばれる小田原北条氏の城によく見られる堀によって分断している。現在は芝生が張られているが、障子堀のなかにはロームを掘り残した堀内障壁が設けられ、堀底に落下した者の動きを制限する機能を持つ。堀によって尾根を遮断し、本丸に対して連続して曲輪を設ける連郭式城郭である。また、城内に街道を取り込んでおり、関所機能もあわせもっている。

天正18年(1590)の小田原合戦では、箱根路を行くために突破が必須となる山中城が激戦の地となった。3月29日、豊臣軍の7万にものぼる大軍による攻撃を受け、4千人の北条軍は約半日で壊滅、小田原攻めに備えた増築が未完成なまま、山中城は落城した。大名クラスの武将である一柳直末が討たれるなど、豊臣軍にも損害がでており、熾烈な攻城戦が繰り広げられたことがうかがい知れる。

昭和47年より史跡指定地の公有地化、発掘調査と環境整備が21年間にわたって実施され、現在、史跡公園として一般開放されている。公園の隣接地には売店・公衆トイレが設置されている。春から晩秋にかけて、さまざまな花木が咲き、岱崎出丸や本丸側の西櫓からは富士山や駿河湾が見渡せる。

平成18年に日本100名城(№40)に選定された。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR東海道線三島駅からバス約30分
- ●自家用車／伊豆縦貫道塚原ICから約12分

■所在地／静岡県三島市山中新田410－4
■指定年月日／昭和9年1月22日



◀山中城曲輪配置



▲山中城－遠景



▲山中城－障子堀・畝堀

国史跡	諏訪原城跡（すわはら）	静岡県島田市

諏訪原城跡は、標高220mの牧之原台地上にある戦国末期の山城である。天正元年(1573)に武田勝頼が家臣の馬場美濃守信春(信房)に命じて城を築き、武田家の守護神諏訪大明神を祭ったことからこの城の名が付いたと言われている。

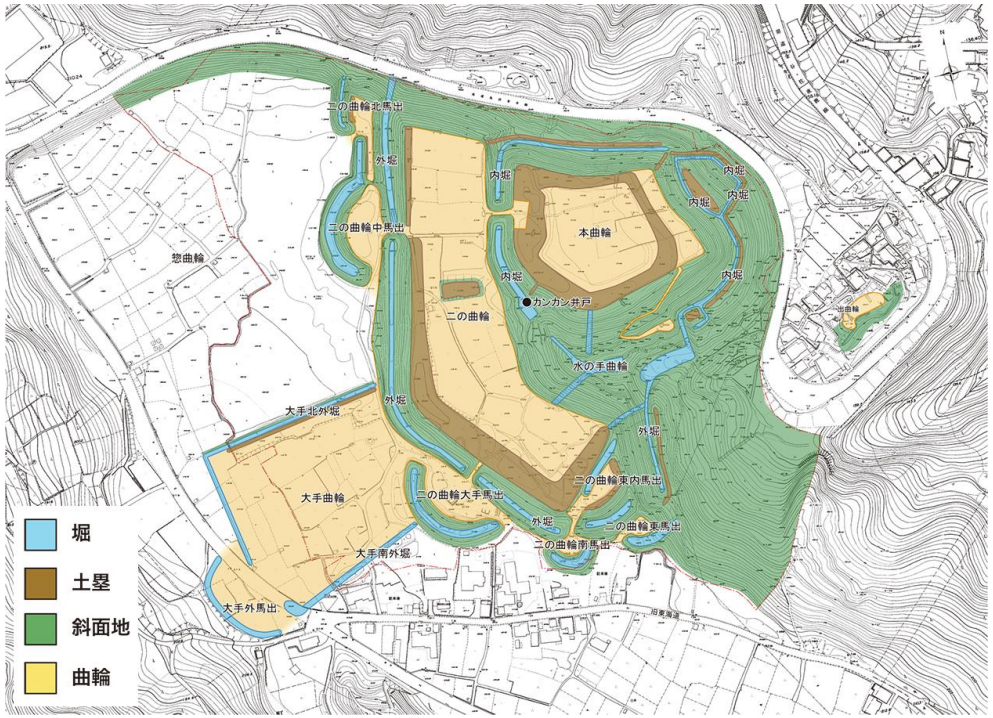
天正3年(1575)に勝頼が長篠の戦いで織田信長・徳川家康に敗北すると、同年8月に諏訪原城は徳川四天王の一人である本多忠勝、家康の重臣である鳥居元忠らによって攻め落とされた。この戦いで元忠は足を火縄銃で撃たれ、それ以降正座ができなくなってしまったが、家康によって足を崩して座ることを許されたという逸話も残っている。徳川の城となった後、諏訪原城は家康によって「牧野城」と呼ばれるようになり、天正6年(1578)から天正9年(1581)まで堀や土塁等の改修が盛んに行われ、武田方との戦いの拠点とした。天正10年(1582)に武田氏が滅亡すると、牧野城の必要性はなくなり、天正18年(1590)に家康が関東に移ると廃城になったと考えられている。

現在でも、長さ100mを超える三日月堀を有する巨大な「丸馬出」が残り、その他にも大小様々な堀を見学することができる。

島田市では、平成16年度から発掘調査を実施し、土塁や宝篋印塔を転用した門の礎石などの遺構、瀬戸産の天目茶碗や鉄砲玉、落城時のものと思われる焼けた炭化米などが出土している。平成29年3月に発掘調査の成果を基に城門を復元し、平成31年3月には諏訪原城ビジターセンターがオープンした。ビジターセンターでは、地元高校生が制作した丸馬出のジオラマ模型や出土品の展示も行われ、御城印などのグッズも販売されている。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR金谷駅から徒歩約30分
●自家用車／東名高速道路相良牧之原ICから約20分
新東名高速道路新金谷ICから約12分
■所在地／静岡県島田市菊川1174
■指定年月日／昭和50年11月25日(追加指定／平成14年12月19日)

▼諏訪原城地形図




▲本曲輪から富士山を望む


▲諏訪原城－二の曲輪中馬出(三日月堀)

市史跡	やしろやま 社山城跡	静岡県磐田市

社山城は、磐田原台地の北に位置する標高130mほどの小山の尾根を利用して築かれた山城である。

天竜川によって西側斜面は急峻な断崖地形を造り、頂上の本曲輪から西は浜松方面、北は二俣方面が一望できる。

城跡の南側を抜ける東西の街道は、森を通り、袋井・掛川を結び、西側には二俣から遠江国府の所在地見付へと続く南北の道が通じていて、社山城は両街道を押さえる重要な結節点であった。

城は南北約70m×東西約25mの本曲輪と、幅10mほどの堀切を隔てた二の曲輪を中心に、その他多くの小曲輪が尾根上や斜面に設けられている。

本曲輪の北から西に横堀と土塁を巡らせ、二の曲輪には大土塁と北には帯曲輪を備えたほか、尾根筋や斜面部の要所には二重堀切を含めたいくつもの堀を設け、その構えは厳重である。

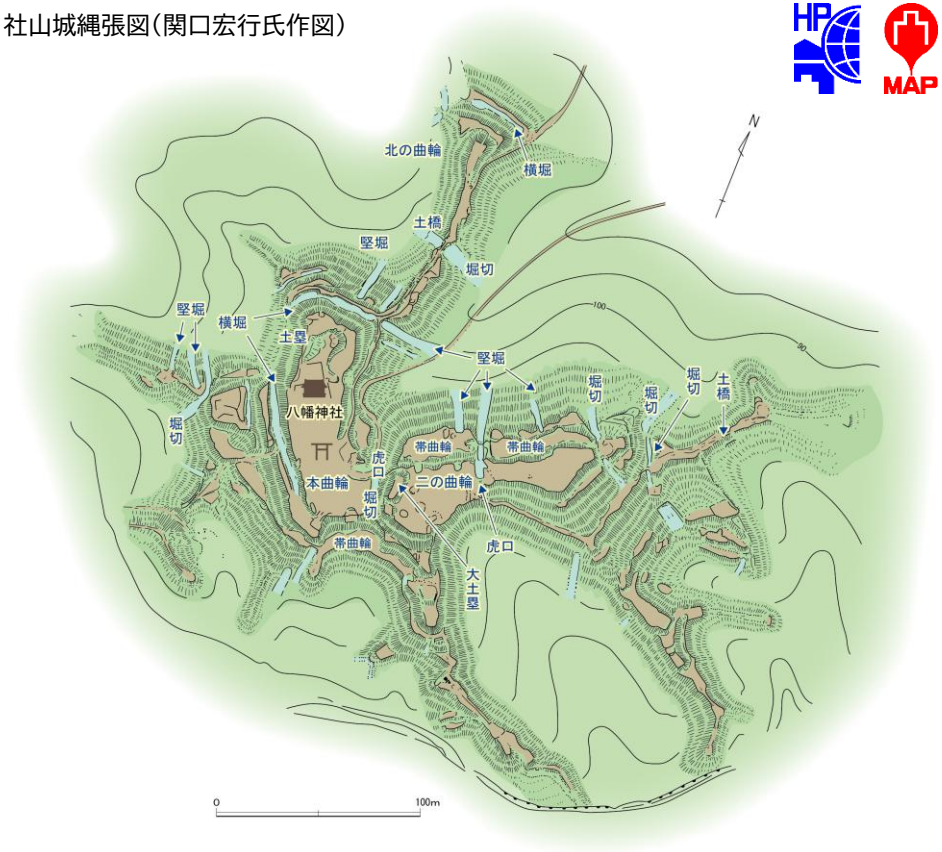
城の創築年代は不詳だが、文亀の頃(1501～03)、今川氏と斯波氏の争いの場となった記録が残り、その後、今川氏の支配下に置かれるが、桶狭間の戦いで今川氏が敗れた後は徳川氏の支配に移ったと考えられる。

元亀3年(1572)、武田信玄が遠江へ侵攻すると合代島に陣を敷いたことが知られ、社山城を含めた周辺一帯が二俣城攻めの拠点となった。

信玄の死後も勝頼との抗争は続くが、天正元年(1573)に徳川家康が砦とした記事を最後に、社山城の記録は途絶えている。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR磐田駅⇒二俣山東行き慈眼寺入口バス停から徒歩25分で山道登り口。そこから約15分で山頂
■所在地／静岡県磐田市社山地内
■指定年月日／平成17年11月21日

社山城縄張図(関口宏行氏作図)





▲社山城－全景



▲社山城－本曲輪

国史跡	横須賀城跡（よこすか）	静岡県掛川市

東遠江の重要拠点である高天神城は、戦国時代の末、遠江へ侵攻を図る武田氏と徳川氏との激しい攻防の舞台となっていた。天正2年(1574)に高天神城が勝頼の手に落ちると、天正6年(1578)頃(天正4年説も有り)、家康は高天神城を奪還するための拠点として横須賀城を築いた。

天正9年(1581)に高天神城が落城した後、横須賀城はこの地域の拠点の城となった。当時は城のすぐ南まで入江になっていたため、湊が築かれ水運が発達した。江戸時代になると多くの廻船問屋が営まれ城下は大変栄えたが、宝永4年(1707)の宝永地震により地盤が隆起すると、入江は次第に干上がっていき、湊の機能は失われた。

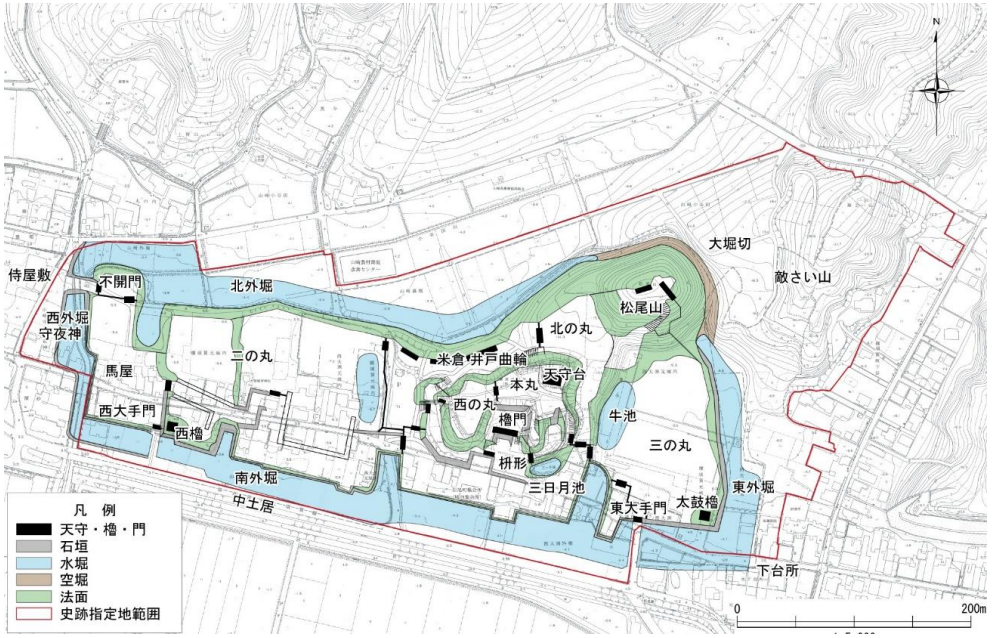
初代城主大須賀康高から最後の城主西尾忠篤まで、禄高2万5千石から5万5千石の大名20代の居城となり、明治維新で廃城となるまで約290年間存続した。

廃城後は、城の建物や土地が民間に払い下げられ、工場や学校施設が建設されるなど土地利用が進んだものの、城跡保存の機運が高まり、昭和56年に国の史跡に指定された。

昭和59年度から順次史跡整備事業が進められ、丸い河原石が用いられた玉石積み石垣の復元や天守建物跡の平面表示、城跡北東の松尾山などが整備されている。近年は、三の丸跡の整備事業を進めるため、発掘調査が継続的に進められている。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR袋井駅から秋葉中遠線横須賀車庫前行または大東支所行「七軒町」「西田町」下車すぐ
●自家用車／東名高速道路袋井ICから約25分
東名高速道路掛川ICから約20分
■所在地／静岡県掛川市山崎
■指定年月日／昭和56年5月8日
■指定面積／168,419.64㎡

▼横須賀城縄張り図





▲横須賀城跡櫓門周辺整備状況（南西から）



▲現在も残る大堀切（北西から）

国史跡

高天神城跡（たかてんじん）

静岡県掛川市

高天神城は室町時代から遠江を領有していた今川氏の支城として、16世紀初頭に築かれた。今川氏が桶狭間の戦いに破れ衰退すると、遠江に勢力範囲を拡大していった徳川氏の城となった。

元亀2年（1571）武田信玄が遠江に侵攻し高天神城を囲んだが、城の堅固な様子を見て取ると、大きな戦闘は行わずそのまま西へ通り過ぎた。そのため「信玄でも落とせなかった難攻不落の城」として高天神城はその名を広めていった（諸説あり）。

天正2年（1574）に武田勝頼が高天神城を攻め、激しい戦いの末に高天神城は降服、開城し、武田氏の城になった。城を取られた家康は高天神城奪還の準備を進め、まず城攻めの拠点となる横須賀城を築き、次に高天神城を取り囲むように高天神六砦をはじめとする20にも及ぶ城砦群を築いていった。家康は徐々に包囲網を狭め、天正9年（1581）3月に高天神城を奪還したが、その後は廃城となり、江戸時代以降は高天神社の境内地として利用された。

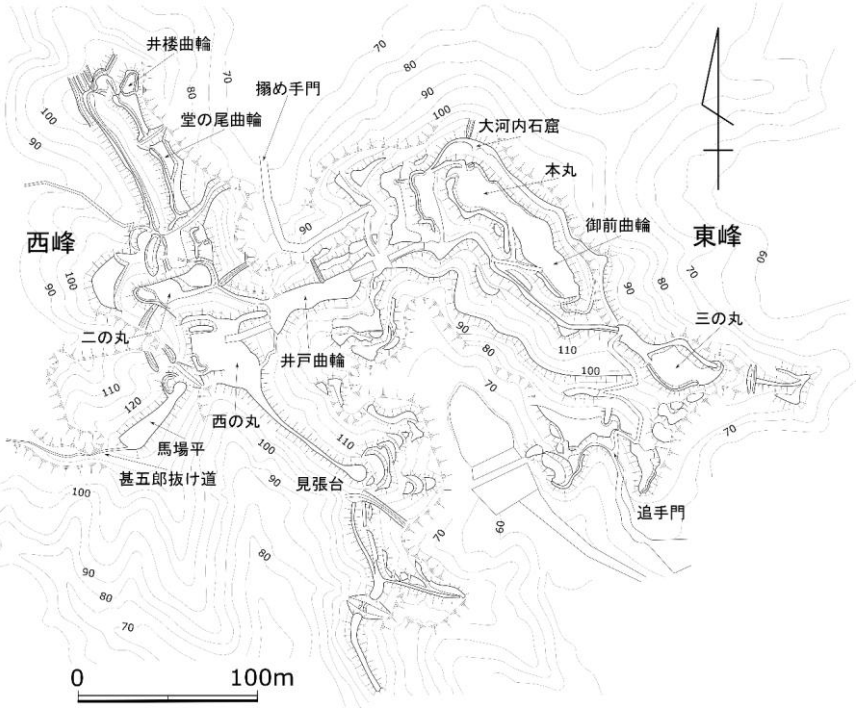
高天神城は、遠江における武田・徳川の激しい攻防戦の舞台となったことから、「高天神を制する者は遠江を制す」と称されるようになった。

城跡の大部分は神社の境内地でもあったことから後世の開発を免れており、中でも激しい戦闘が行われた西峰周辺には土塁や横堀などの遺構が良好な状態で残されている。近年は、城内の看板、景観整備が進み、令和4年度には、AR・VRコンテンツが新たに公開された。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR掛川駅⇒静岡鉄道バス浜岡営業所行または大東支所行（井崎経由）（入山瀬経由）土方から徒歩約15分
- ●自家用車／東名高速道路掛川ICから約15分

■所在地／静岡県掛川市上土方嶺向字鶴翁山ほか
■指定年月日／昭和50年10月16日（追加指定／平成17年3月2日、平成19年2月6日）
■指定面積／132，035㎡

▼高天神城跡縄張り図





▲高天神城遠景（追手側から）



▲西峰で見つかった横堀（井楼曲輪西下）

県史跡	深沢城跡（ふかさわ）	静岡県御殿場市

深沢城は、江戸時代の地誌等では今川氏の築城とされているが、確固たる証拠はない。後北条氏関係の史料には、永禄12年(1569)に「深沢と号す新地」という記述が見られ、同年に後北条氏が築城した可能性が高い。この城は中世以前の東海道に面し、交通の要所「竹之下」にも近いことから、駿河・甲斐・相模の境目の城として武田氏との間で攻防戦を繰り返した。元亀2年(1571)正月、武田信玄に曲輪を一つ残す状態までせめられ、城主北条綱成は世に有名な「矢文」を受けて開城、後北条氏はこの城を失った。松代藩真田家に伝わる「地黄八幡の旗印」は、この戦に従軍していた同家に武田信玄が与えたものと伝わる。

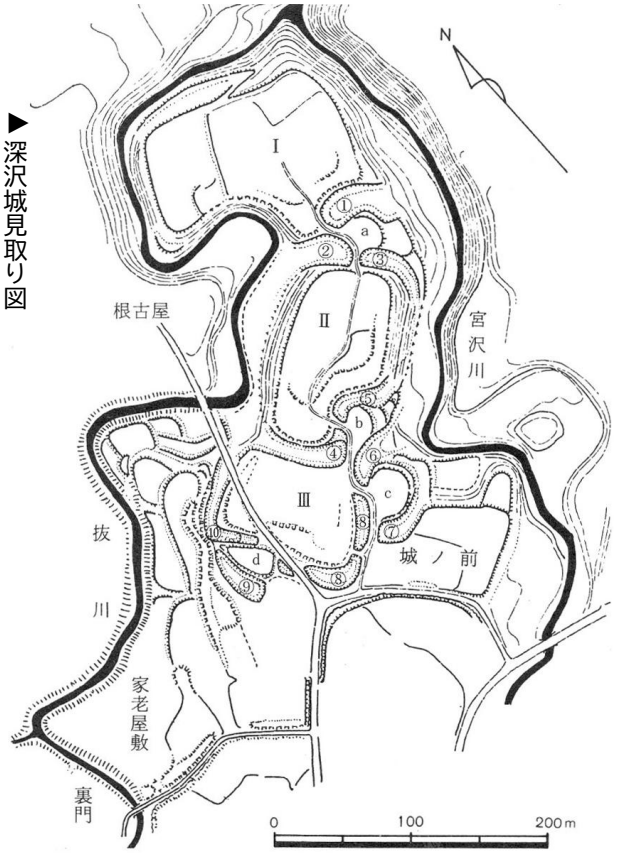
以後、武田氏の支城となるが、天正10年(1582)の武田氏滅亡により武田方は城を焼いて退去したと伝わる。天正12年(1584)には小田原への備えとして徳川氏が三宅康貞に守備させたが、天正 18 年(1590)に後北条氏滅亡により役目を終え廃城となった。従来は武田氏の築城術を色濃く残す城と説明されてきたが、近年は徳川氏による大規模改修の可能性も指摘されている。

指定地内は民有地が96％を占め、水田や山林として利用されている。城の区割りの中に耕作地が収まっていることから、堀などの防御施設が当時の形状を残しており、地権者の協力により保全が図られている。

深沢城は馬伏川と抜川が蛇行して合流する地に築城したことで、両河川が天然の堀となり城の防御性に優れた。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR御殿場駅から富士急行バス城入口下車
- ●自家用車／東名高速道路御殿場ICより15分

■所在地／静岡県御殿場市深沢
■指定年月日／昭和35年2月23日
■指定面積／54，768．56㎡



▶深沢城見取り図
（『静岡県の中世城館跡』静岡県教育委員会 1981 年に名称を加筆）

Ⅰ:第Ⅰ郭　①:1号堀　⑥:6号堀
Ⅱ:第Ⅱ郭　②:2号堀　⑦:7号堀
Ⅲ:第Ⅲ郭　③:3号堀　⑧:8号堀
　　④:4号堀　⑨:9号堀
a～d:馬出　⑤:5号堀　⑩:10号堀

（注）図中の河川の名称は現在と異なる
（図中）「抜川」→（現在）「馬伏川」
「宮沢川」→「抜川」



▲深沢城－9号堀（図中9）



▲第Ⅰ郭（図中Ⅰ）より馬伏川を臨む

市史跡	下田城跡（しもだ）	静岡県下田市

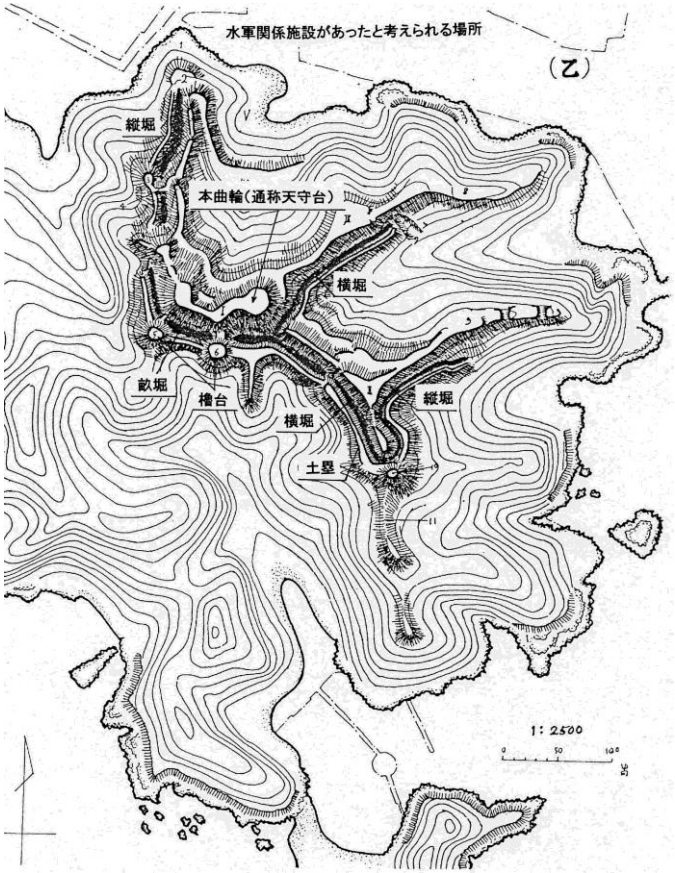
下田城の築城時期は明らかでないが、天正16年（1588）に、伊豆・関東一円を支配していた戦国大名後北条氏が、天下統一を目指す豊臣秀吉から領国を防衛するために築城、あるいは改築したと考えられている中世末期の山城である。

城は、下田湾に張り出した丘陵上に築かれている。後北条水軍の基地であった下田港を守るかたちで丘陵の要所に曲輪や物見台が配され、およそ700メートルの空堀が巡るが、天正18年（1590）に襲来した豊臣方水軍は、兵1万を超える圧倒的な兵力で西伊豆各所を制圧しながら、下田城に迫った。城将清水上野介康英は城兵600余名とともに篭城したが、50日あまりを経て、降伏し開城したと伝えられている。

その後も下田は港町として発展を続け、幕末には日米和親条約によって、箱館（函館）とともに開港場となった。下田港は、国内外の人や文化が行き交う場所となり、現在の下田のまちの形成にも大きな影響を与えている。現在、下田城址は公園として整備されており、城跡の一部は市街地化しているものの、丘陵には曲輪や空堀、土塁などが良好に残されている。また、城跡からは下田湾や市街地を一望することができ、下田城が海を見渡す丘陵に築かれたことを実感できる。下田城址をはじめ、下田港周辺には、戦国時代から幕末、そして現在へと続く下田の歴史を物語るさまざまな文化財が残されている。下田城址は、海とともに発展してきた下田の歴史を知るうえで重要な文化財であり、地域の歴史や文化を後世に伝えるため、大切に保存・活用されている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／伊豆急下田駅から徒歩約20分
- ●自家用車／国道136号線下田市中島橋交差点より南へ約1㎞

■所在地／静岡県下田市三丁目地内
■指定年月日／昭和48年6月12日



◀下田城跡縄張り図


▲下田城跡


▲下田城跡

市史跡	かずらやま 葛山城址	静岡県裾野市

築城／築城年代は定かではないが、室町期に駿東一帯を支配した大森氏が小田原城に本拠を移した際に、一族の葛山氏が居住したと言われている。

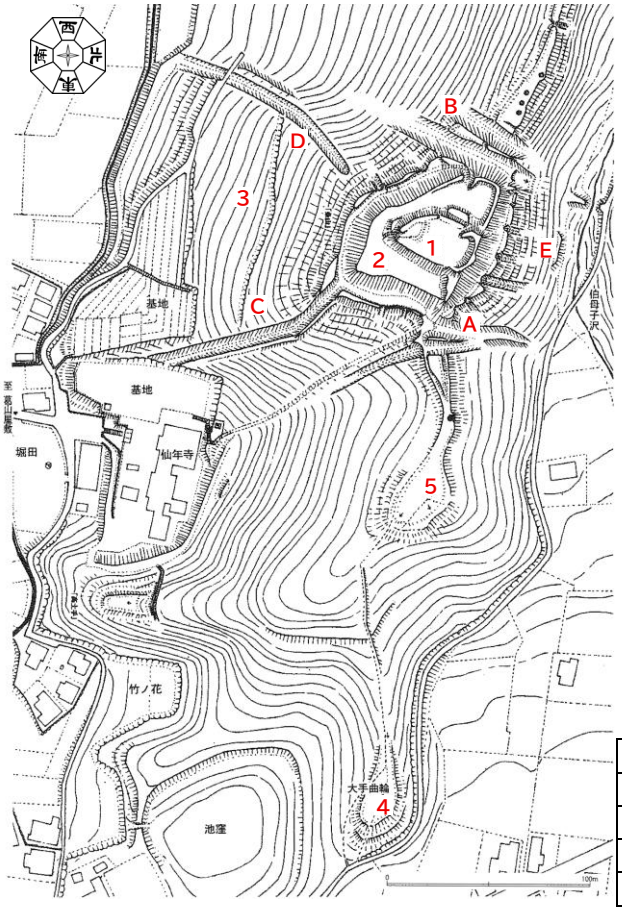
廃城／葛山氏元の死後、武田信玄の六男信貞が葛山氏を嗣いだが、天正10年（1582）2月、武田氏滅亡により信貞は甲斐善光寺で自刃し、葛山は断絶し葛山城も廃城となった。

縄張りの特徴／葛山城は愛鷹山の突端部に造られ、佐野川（宮川）を東に控え、城下集落を見下ろすことができる位置、すなわち館跡から230m北西に行ったところにある。城跡は東西約350m、南北約70mあり、城の構造は、主郭（一の曲輪）、二の曲輪、東曲輪、西曲輪、大手曲輪とその他の小郭群、堀切から成り、山頂部を階段状に削平して主郭を中央に設け、その左右に曲輪を配している並郭式の山城である。

葛山城址は、戦国時代の駿東地域における政治・軍事の拠点として重要な役割を果たした城跡である。現在でも主郭（一の曲輪）や二の曲輪、堀切などの遺構が比較的良好な状態で残されており、中世山城の構造を知ることができる貴重な史跡である。特に、敵の侵入を防ぐために設けられた堀切や、山の地形を巧みに利用して配置された曲輪群は大きな見どころである。また、城跡からは葛山地区や愛鷹山麓を一望することができ、戦国時代の城主が見たであろう景観を体感できる。四季折々の自然に囲まれた城跡は散策にも適しており、歴史と自然の両方を楽しめる市内を代表する史跡の一つである。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR御殿場線裾野駅
- ●自家用車／東名高速道路裾野ICから約15分

■所在地／静岡県裾野市葛山
■指定年月日／昭和48年2月24日



◀葛山城跡縄張り図
『静岡県の城跡 中世城郭縄張図集成（中部・駿河国版）』
静岡古城研究会 平成24年7月発行

1	本曲輪	A	二重堀切
2	二の曲輪	B	二重堀切
3	駐屯曲輪	C	竪堀
4	大手曲輪	D	竪堀
5	駐屯地	E	畝上竪堀群


▲葛山城跡－全景


▲葛山城跡

市史跡	狩野（かの）城跡	静岡県伊豆市

狩野城跡は、狩野川中流部左岸、支流柿木川との合流点南西側の山稜部に位置する、平安時代後期に狩野氏により築かれたと考えられる山城である。

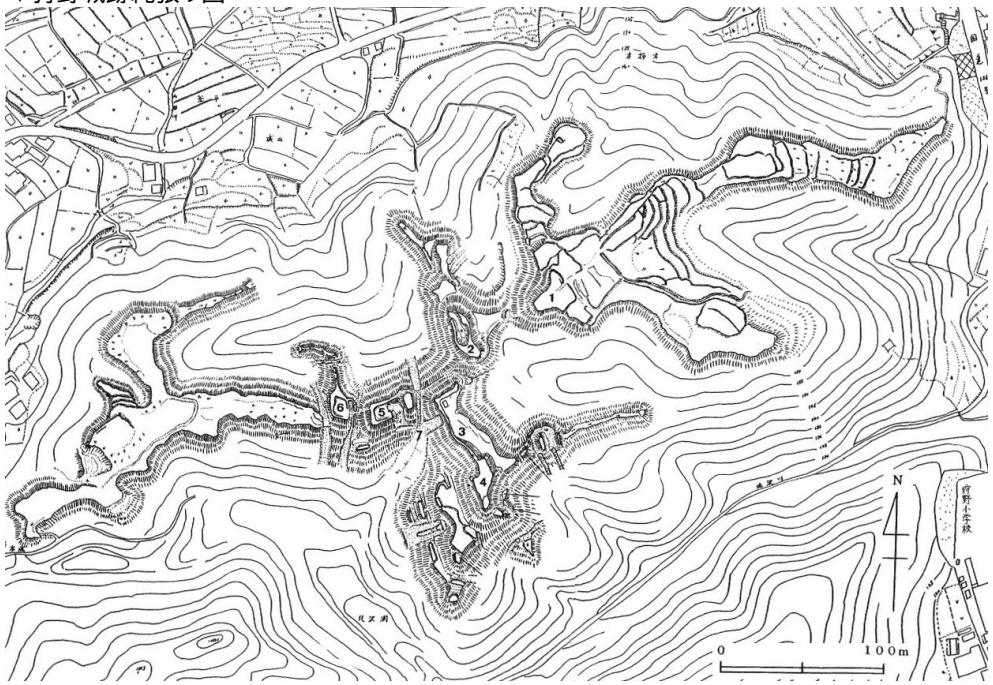
狩野氏は藤原南家の流れを汲む工藤惟景が、駿河守退任後に伊豆国狩野荘に土着したことに始まる氏族であるとされ、その子惟織および孫惟次は伊豆国押領使を務めたほか、惟次の孫茂光の頃には、『保元物語』において伊豆大島に配流された源為朝追討や源頼朝の挙兵に伴う石橋山合戦への参戦などに狩野氏の名がみられる。

明応2年（1493）、伊勢宗瑞による伊豆討ち入りが起きると、城主狩野道一は足利茶々丸方として宗瑞に抵抗するも、翌明応7年に敗北、開城した。その後の一族は後北条氏家臣として関東へ移ったらしく、『小田原衆所領役帳』において松山衆として狩野一族の名がみられる。なお、室町時代以降、御用絵師として栄えた狩野派の初代狩野正信は、氏祖維景から十六代の子孫ともいわれる。

狩野城跡の遺構は、東西に細長く延びる稜線上の主軸約600mと、そこから派生する複数の支尾根上に展開している。主体部である「中郭」を中心として、北東方向に「東郭」と「出丸」、南方に「南郭」、西方に「本郭」と「西郭」を擁し、それらを大空堀や二重堀、竪堀などで明瞭に区画している。また、それらの周縁部には無数の土塁や堀切を有する「袖郭」ないし「帯郭」が配置されている。これらの縄張り配置からは、尾根が狭長であることからその面積を拡幅できず、むしろ従来の地形を巧みに活かして築城されたことが伺える。

■交通アクセス
●公共交通機関／伊豆箱根鉄道修善寺駅から天城・河津・松崎方面バスで約20分
●自家用車／東名高速道路沼津ICから下田方面へ約31㎞
■所在地／静岡県伊豆市本柿木・青羽根
■指定年月日／昭和58年2月28日

▼狩野城跡縄張り図





▲狩野城跡－全景



▲狩野城跡―二重堀（本郭側から）

柏久保城跡（かしわくぼ）

静岡県伊豆市

柏久保城跡は、狩野川支流古川と大見川の合流点、標高180mの愛宕山に位置する山城である。江戸時代の地誌『豆州志稿』によれば、明応年間に伊豆討ち入りを進める伊勢宗瑞が築城したとされるが、宗瑞以前に在地豪族狩野氏が出城として築城したとする説もあり、築城年代は定かではない。

『大見三人衆由来書』のうち、明応6年4月25日に宗瑞が大見三人衆に宛てた感状によれば、明応4年（1493）、当城において狩野氏と宗瑞方との間で戦闘が起こり、大見三人衆が戦功を挙げたということが、「今度柏窪一戦刻、忠節無比類」と記されている。宗瑞が伊豆国を平定した後の当城の動向については、史料が乏しく詳細不明であるが、規模や遺構などからは宗瑞以降の後北条氏による改修は考えにくく、伊豆国平定後まもなく廃城を迎えた、あるいは、未改修のまま維持されたと思われる。

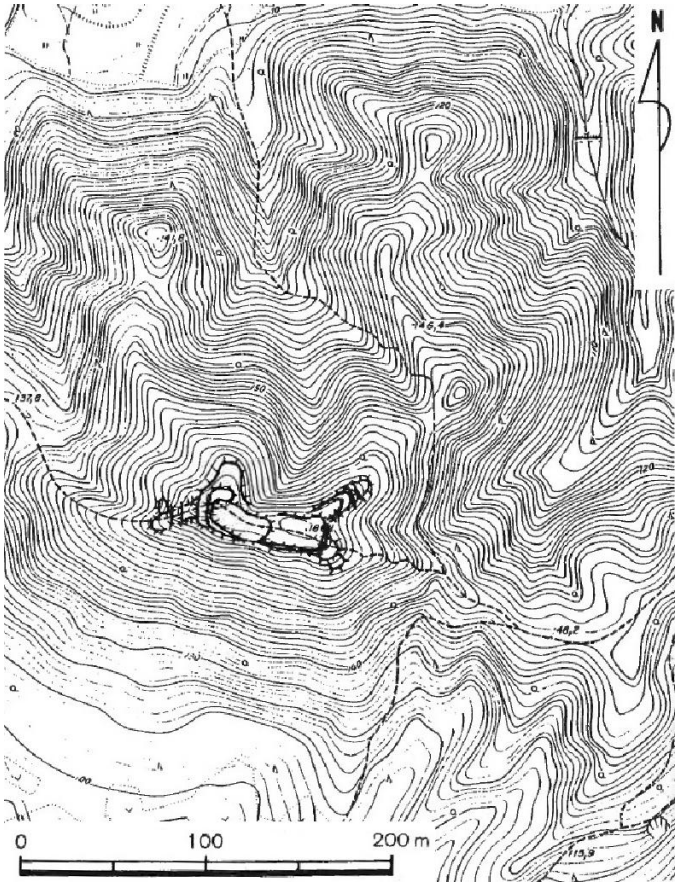
柏久保城跡の遺構は、丘陵頂部に広がる本曲輪を中心として、東方にいくつかの曲輪が展開する。城域は東西約100m程度と小規模である。本曲輪は東西約35m、南北約8mと狭小であり、中央に愛宕神社の小祠が建つ。断崖絶壁である北側斜面を除き、周囲には幅2～4m、高さ1～2mの土塁がめぐる。南側土塁は二の曲輪にも延び、同様に北側のみ土塁が存在しない。北側に土塁が存在しない理由としては、断崖絶壁であり防備の必要性が無かったためとも考えられるが、地元の古老曰く「かつて山上で開かれていた祭りのために削土した」という。

なお、宗瑞はこの峻険な北側断崖を登って急襲したと伝わり、地元では今もこの谷を「新九郎谷」と呼んでいるほか、北東には「地獄沢」という小字が残り、当地における激しい戦闘の様子が伺える。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／伊豆箱根鉄道修善寺駅から徒歩約40分（登り口：一宮神社）
- ●自家用車／東名高速道路沼津ICから修善寺方面へ約26㎞

■所在地／静岡県伊豆市柏久保

▼柏久保跡縄張り図





▲柏久保城跡－全景



▲柏久保城跡－土塁

大見（おおみ）城跡

静岡県伊豆市

大見城跡は、狩野川支流大見川と冷川の合流点、標高210mの丘陵上に位置する、平安時代後期に在地豪族大見氏により築かれたと考えられる山城である。

大見氏は桓武平氏の流れを汲む氏族とされ、伊豆国大見郷を本拠地とした。『吾妻鑑』では治承4年（1180）に源頼朝に従い石橋山合戦に参戦したとして、『曽我物語』では河津祐泰暗殺の刺客として大見氏の名がみられる。しかし、応安6年（1373）に大見郷は相模土肥氏から山ノ内上杉氏へと所領地変更がなされており、大見氏はこれ以前に当地を離れたと考えられる。

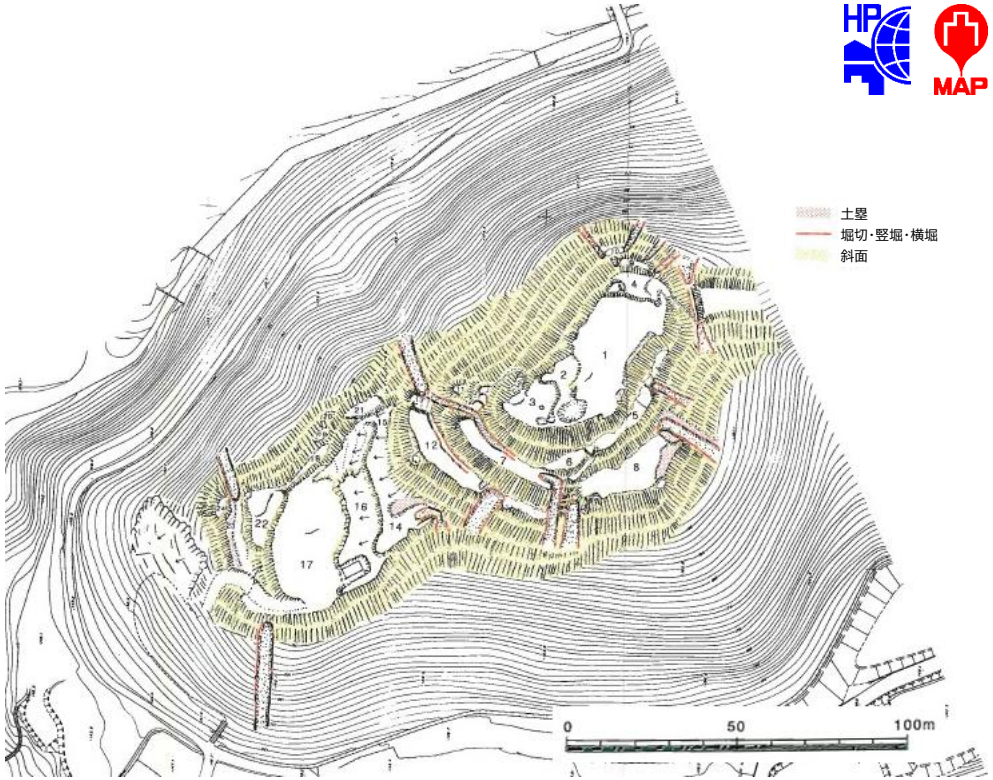
『北条五代記』によれば、明応2年（1493）の伊勢宗瑞による伊豆討ち入りが起きた際に宗瑞に臣従した伊豆国内の在地豪族として「大見三人衆」の名がみられ、明応6年に宗瑞が三人衆に宛てた感状が残る。なお、『大見三人衆由来書』には三人衆の名として佐藤藤左衛門、梅原六郎左衛門、佐藤七郎左衛門とあり大見氏との関係性は明らかではない。

大見城跡の遺構は、丘陵頂部に広がる本曲輪を中心に、北方の丘陵裾部にかけて展開している。本曲輪は南北約50m、東西約20m程度の平坦地で、一部土塁が残存する。東方は急峻な崖地形であり遺構が認められない。南方には尾根に対して垂直に1条の堀切がみられ、これが城域南端をなす。丘陵裾部にかけては階段状に腰曲輪が設けられているほか、随所に大小の竪堀がみられる。これらの遺構は、大見氏による築城時および伊勢宗瑞の伊豆討入り時の姿をそのまま伝えるものとは考えにくく、その後伊豆国が後北条氏の支配下に入るなかで、伊豆国内および近隣諸国との軍事的緊張に応じて適宜改修が加えられたものと考えられる。

付近には鍛冶谷戸、矢取洞、敵ヶ平、馬場沢などの地名が残り、北部の馬場沢には大見小藤太成家の墓と伝えられる宝篋印塔がある。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／伊豆箱根鉄道修善寺駅から冷川・筏場方面バス約20分
- ●自家用車／東名高速道路沼津ICから修善寺・伊東方面へ約31㎞

■所在地／静岡県伊豆市柳瀬



▲大見城跡縄張り図


▲大見城跡－全景


▲大見城跡－本曲輪四阿

丸山城跡（まるやま）

静岡県伊豆市

丸山城跡は、土肥八木沢海岸の背後に広がる海岸丘陵上に位置する、室町時代に在地豪族富永氏により築かれたと考えられる山城である。当城に関する記録はごく僅かであり江戸時代の地誌『豆州志稿』以前にはその名が見られないが、天正18年（1590）の小田原征伐による侵攻を受け落城したのち廃城となったものと思われる。

遺構は、八木沢海岸背後の丘陵上（「本城」あるいは「新城」）と、国道136号を挟み駿河湾に突出する丘陵上（「出城」あるいは「旧城」）とに広がり、どちらも標高50m程度の小丘陵である。

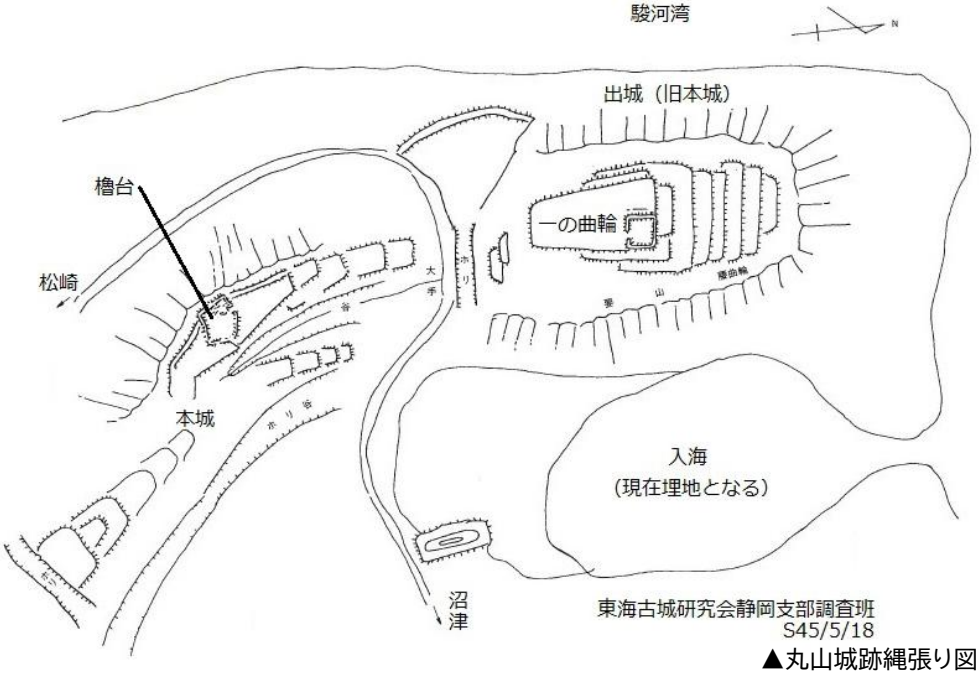
「本城」は、部分的な発掘調査に留まっているため全容の把握は難しいが、仮称「本曲輪」、「物見曲輪」、「詰曲輪」からなる縄張りを持つことが想定されている。昭和58年の国道136号拡幅工事に伴う発掘調査では「物見曲輪」およびその周辺において櫓台・石塁・塁段・塁段内側に沿って並ぶ柱穴列・空堀などの遺構が検出された。また昭和60年の同災害復旧工事に伴う発掘調査では、城域内から金銀鉱石の選鉱作業に関連する竪穴建見跡や石鉢・摺石などが検出・出土されている。

一方『「出城」では、踏査による確認に留まるが、頂部から中腹にかけて北東方向にやや狭長な塁段、南西麓に自然地形を利用した空堀、西麓海浜低地に石塁と思われる地形が認められるほか、山頂部には当城城主との伝承が残る富永山随軒を祀る山随権現の祠がある。

当城北東麓一帯は、往時は沿岸流による砂嘴が形成され、船溜りとして利用されたと考えられる。後世には開墾、干拓、埋立等が進み、明治・大正期の時点ではかろうじて八木沢ノ池という湖沼が残っていたが、現在では丸山スポーツ公園として整備され、「港」「西ノ浜」の地名が残るのみである。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／伊豆箱根鉄道修善寺駅から松崎行きバス約50分
  土肥丸山公園下車徒歩15分
- ●自家用車／東名高速道路沼津ICから松崎方面へ約56㎞
  丸山スポーツ公園駐車場から徒歩15分

■所在地／静岡県伊豆市八木沢



▲丸山城跡縄張り図


▲丸山城跡－全景


▲丸山城跡－出城跡山頂（南から）

高谷城跡（たかや）

静岡県伊豆市

高谷城跡は、土肥大藪海岸から東方に延びる丘陵上一帯に位置するとされる、室町時代に在地豪族富永氏により築かれたと考えられる山城である。丸山城跡と同様に、『豆州志稿』以前にはその名が見られないが、天正18年（1590）の小田原征伐による侵攻を受け落城したのち廃城となったものと思われる。

遺構は、部分的な発掘調査に留まっているため全容の把握が難しいが、仮称「本曲輪」、「出曲輪」、「物見曲輪」からなる縄張りをもつことが想定されている。平成8年の県道沼津土肥線拡幅工事に伴う発掘調査では、大藪弁天神社背後の丘陵末端部「出曲輪」から、平坦地や土塁、石塁、竪堀が検出された。また、平成11年の土肥中央農道整備事業に伴う発掘調査では、「本曲輪」周辺から小規模の堀切が検出された。なお、近年の現地調査では、前述の遺構群を「本城地区」として、東方600mに「出城A地区」、さらに東方500mに「出城B地区」が存在するとの指摘もある。

土肥富永氏は三河国設楽郡を本拠とした三河富永氏の流れを汲む氏族であるとされ、『北条五代記』によれば、伊勢宗瑞による伊豆討ち入りが起きた際に宗瑞に臣従した伊豆国内の在地豪族の一人に「富永三郎左衛門尉」の名がみられる。このほか『小田原衆所領役帳』や小土肥国玉神社永禄2年銘棟札、宇久須別所神社永禄5年銘棟札などに一族の名がみられるが、資料が乏しいこともあり、江戸時代以降に成立した地誌・軍記物語に依るところが大きい。



◀ 高谷城跡縄張り図


▲高谷城跡－空撮


▲高谷城跡－堀

■交通アクセス
●公共交通機関／伊豆箱根鉄道修善寺駅から松崎行きバス約50分大藪バス停
徒歩約20分（登り口：諏訪神社）
●自家用車／東名高速道路沼津ICから松崎方面へ約56㎞
■所在地／静岡県伊豆市土肥

国史跡	横地（よこち）城跡	静岡県菊川市

横地城は、東遠江を代表する有力武士・横地氏が要害として築いた山城である。

横地氏は、保元の乱では源義朝、後には頼朝に従い、鎌倉幕府成立後は有力御家人として鎌倉を中心に活動していた。さらに、南北朝期には足利方に属して菊川流域一帯を領し、のちに室町時代には将軍家の奉公衆として京都を中心に15世紀中頃まで活動したことが記録されている。その後、活動拠点を東遠江の横地に移すものの、遠江へと勢力拡大していた駿河守護・今川義忠によって文明8年（1476）に滅ぼされた。

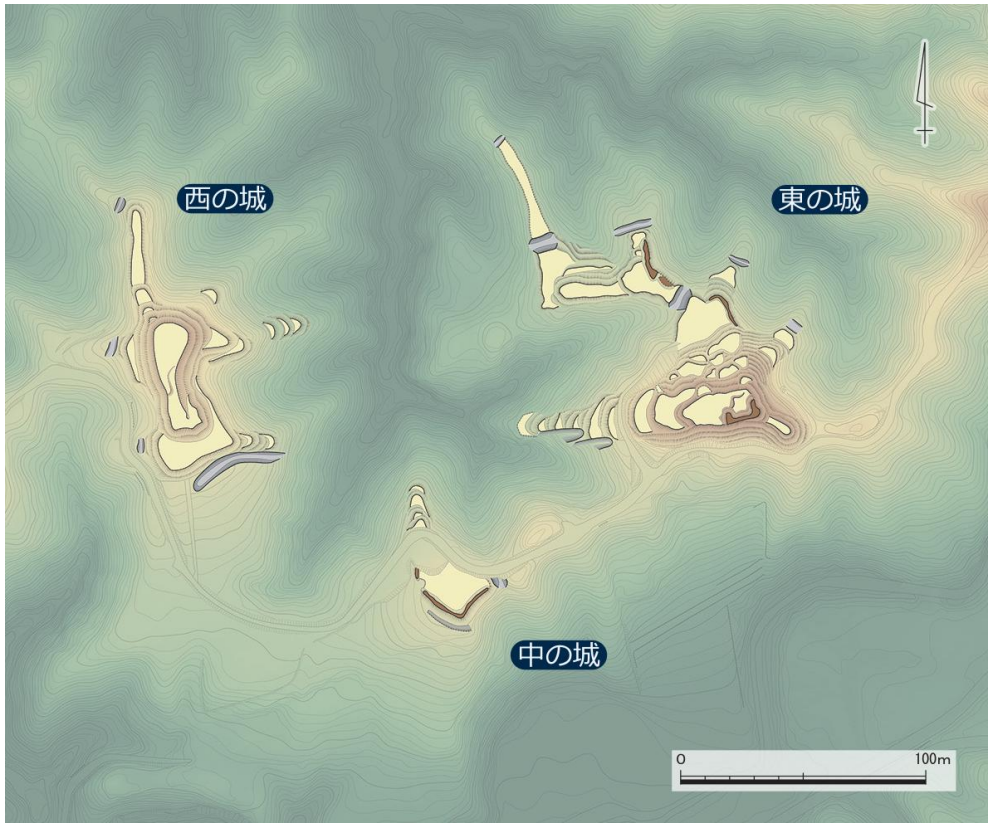
横地城は牧之原台地の支脈が南西に伸びる丘陵上に位置し、「東の城」・「中の城」・「西の城」の3つの曲輪群からなる。構造は堀切と曲輪・土塁を組み合わせており、中世城郭の古い様相を示すものである。東の城の発掘調査では火を受けた陶磁器類が出土し、焼けた地山面や炭化米も確認されている。中国製の青磁碗や白磁・染付、瀬戸美濃産天目茶碗・灰釉碗・皿類など15世紀中頃の製品がまとまって出土しており、14世紀以前と16世紀以降に下るものがなく、従来いわれていた落城時期と合致する。

城周辺には中世前期以来の中心的な屋敷地・寺院跡・墓地跡などの組み合わせが複数確認でき、中世武士の本拠地としての全体的な空間構造が良好に遺存している。横地氏は平安時代末期から滅亡に至るまで本拠をこの地から移すことがなかったため、中世武士の本拠展開や空間構造の変化を追うことができる。また、中世前期の居館から戦国時代初期に要害として山城を築くまでの変遷だけでなく、一族の一揆結合を屋敷地と城郭構造において比定することができる。

なお、山城地区の一部は「御前崎遠州灘県立自然公園」に指定され貴重な生態系が保全されていることから、史跡の保存・活用と自然環境が調和した整備を進めている。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR東海道線菊川駅⇒浜岡営業所行きバス菊川市立総合病院
徒歩約40分
●自家用車／東名菊川ICから約5㎞
■所在地／静岡県菊川市東横地地内
■指定年月日／平成16年9月30日

▼横地城跡概要図





◀横地城－東の城　主曲輪周辺（南西より）

県史跡

勝間田城跡（かつまた）

静岡県牧之原市

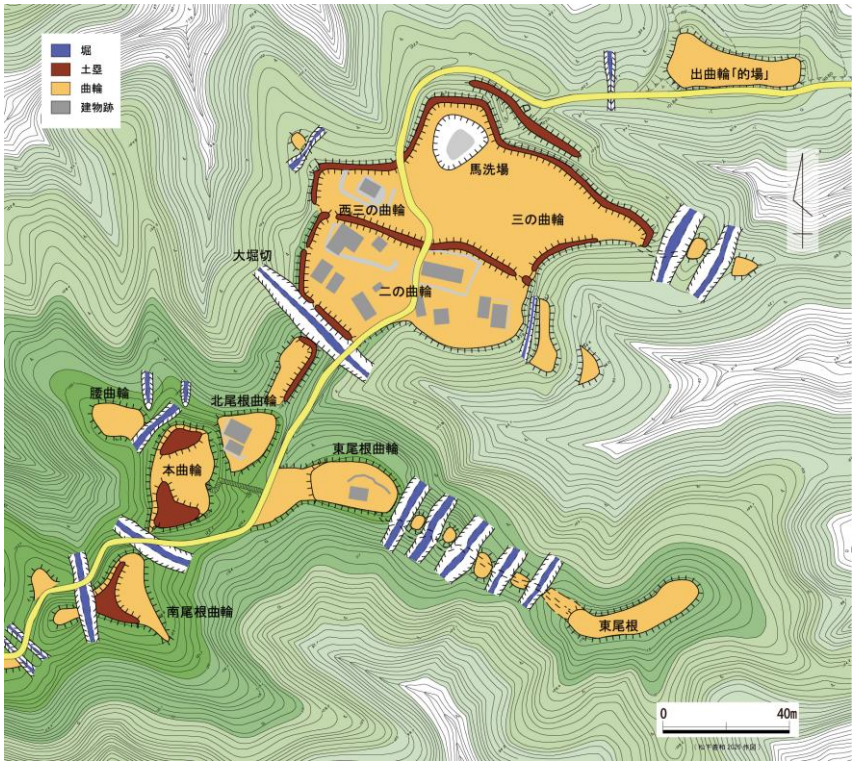
勝間田城は、勝間田氏が15世紀中頃に築城したと考えられる戦国時代以前の原型を残す山城である。勝間田氏は、牧之原市勝間田川流域（勝間田荘）を治めた在地領主として、平安時代末期保元の乱（1156年）史料に初めて登場する。同族と考えられる横地氏（菊川市）と共に鎌倉時代には御家人、室町時代には奉公衆として活躍したが、応仁の乱以降、駿河守護の今川氏と対立し、文明8（1476）年に今川義忠の攻撃により勝間田城は落城する。離散した勝間田氏一族は、富士山周辺などに移り住んだと伝わる。一族には鎌倉時代後期、歌人として名を成し「夫木和歌抄」を編纂した勝間田（藤原）長清などがいる。

昭和60年度からの数次にわたる発掘調査により、多くの遺構（建物跡・井戸・堀）や遺物（土器・木簡・古銭等）が検出され、築城過程、建物の配置、城内の生活の実態を知ることができる。木簡に書かれた文章からは、笠原を姓とする武将の存在や、池田衆と呼ばれる土着の兵力まで城内に在城していたこと、籾や竹を調達して食料や武器・建物に利用していたことなどが推測できる。本曲輪を中心に狭小である南区域に対し、幅10m程の大堀切を挟む北区域二・三の曲輪は一区画が広く外縁部に土塁を巡らしている。南区域より後代改修の可能性が考えられる。二の曲輪を中心に復元整備が行われている。

東方向を向いて配置された堀・土塁・曲輪は今川氏に対する備えといえる。東尾根曲輪からは、静岡空港越し駿河湾と富士山を望むことができる。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR金谷駅⇒静岡鉄道バス静波海岸入口行きで約20分
中島下車、徒歩約20分
●自家用車／東名相良牧之原ICから約5㎞
■所在地／静岡県牧之原市勝間他
■指定年月日／昭和58年2月25日
■指定面積／12，695．1㎡

▼勝間田城概要図（作図／松下善和氏 2026）





▲勝間田城一本曲輪



▲勝間田城
復元された二の曲輪建物跡・土塁

足柄城跡（あしがら）

静岡県小山町

足柄城跡は静岡県北東端に位置する小山町域の東側、駿河と相模の国境に当たる足柄峠に位置している。足柄城跡の本城が位置する足柄峠の標高は約760mで、そこから派生する3方向の尾根上を中心に、曲輪・土塁・堀等の遺構が確認されている。古代東海道でもある中世鎌倉街道を取り込む形で築かれ、交通の要衝を直接的に抑えることを最優先した城であった。足柄城には付属の砦として、北に猪鼻砦、南の尾根に通り尾砦、こならお砦・阿弥陀尾砦・丹土尾砦など、五つの砦群が防御を固めていた。

築城年代は不明で、天文6年（1537）に小田原北条氏と今川氏が対立して起こった「河東一乱」に伴って国境の守りを固めるべく、小田原北条氏が築いた可能性が高い。永禄12年（1569）武田信玄が駿河東部侵攻を開始すると、小田原北条氏は足柄城の普請のために石工を動員したことが史料に残っている。

武田氏とは一旦は和睦するものの、天正10年（1582）に武田氏が滅亡するまで対立が続き、その後も織田・徳川氏に備えるために「足柄当番之事」とした城掟が出されるなど、国境の城として重要視された。

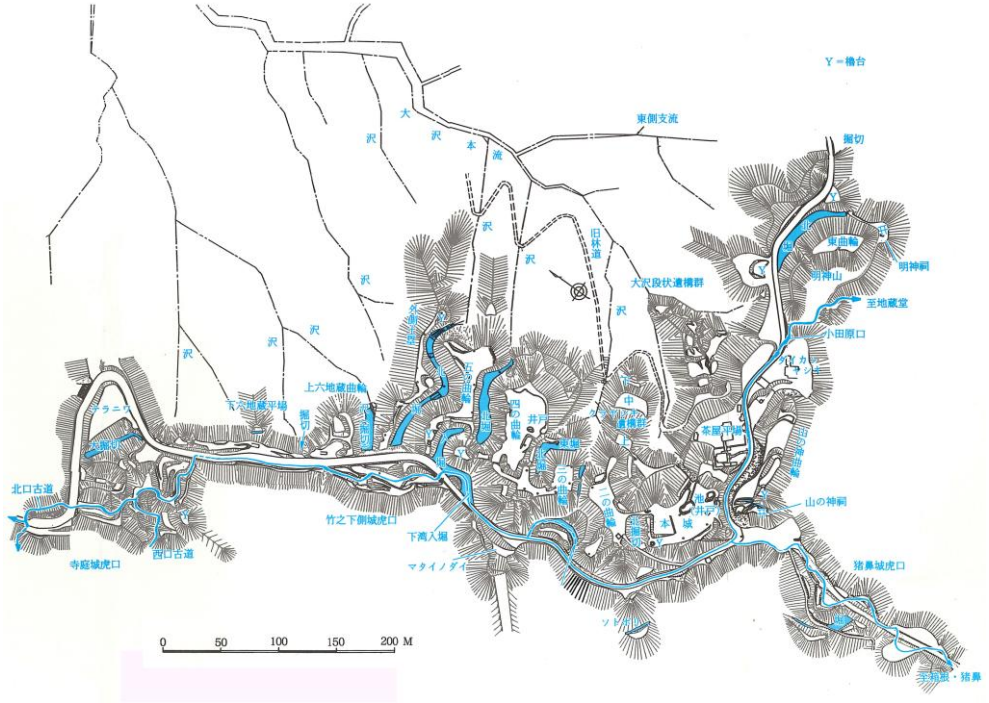
天正18年（1590）、豊臣秀吉軍に対抗した小田原北条領国の西部の諸城郭のうち重要な3つの城郭のひとつとして、小田原攻めを前に足柄城も改修がなされたが、一日で落城している。

足柄峠の西側最高所に「本城」と呼ばれる主曲輪を置き、北西に向かう尾根上に主要な5つの曲輪、また峠東側にも茶屋平場や聖天堂などの曲輪が展開し、その周りには小曲輪が付属する形で造られている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR御殿場線足柄駅から徒歩約2時間（6㎞）
- ●自家用車／東名高速道路足柄スマートICから小山方面へ約12㎞

■所在地／静岡県駿東郡小山町竹之下字峠・字古城跡

▼足柄城縄張り図（『足柄城現況遺構調査報告書』より）





▲足柄城跡－本城からの富士山



▲足柄城－本城

小山城跡（こやま）

静岡県吉田町

◆小山城のはじまり◆

永禄3年（1560）、今川義元が桶狭間の戦いに敗れ、駿河・遠江・三河の三国は大きな戦の渦に飲み込まれることになった。甲斐の武田信玄は、駿河に残る今川氏の勢力を排除し、駿河を手中にしようとしていた。永禄11年（1568）、信玄は配下の将を徳川家康の下に使わし「今後、大井川の東側を武田が、西側は徳川が治めることにしたい」と申し入れた。その年の12月、信玄は甲斐から駿河に軍を南進させ、今川軍が守る駿府城を攻撃し掛川城まで追いやりました。この時、武田軍の一隊が今川軍を駿河から掃討するため、境界である大井川を越えて山崎（能満寺山）に砦を築きました。この砦が小山城の元になったといわれている。

【小山城跡の見どころ】

『三日月形の三重堀』

武田氏の築城技術の特徴といわれている。郭（曲輪）の前に設けられた半月形の堀を三日月堀といい、この三日月堀を三つ並べたものを三重堀という。

城の出入口にあたる土塁の切れ目、外から見て真正面にあたる所に三日月形の堀を設けることで、外からこの出入口に通じる道は見えず、敵がここへ押寄せると三方から挟み打ちにあう仕組みとなっている。城兵からは敵がよく見え、敵方からは城兵が見えないため城を守りやすい馬出しの構えとなっている。

非常に珍しく、小山城跡では歳月により築城当時より溝が浅くなっているが、現存する堀としては、きれいにその形が残されている。

■交通アクセス

●公共交通機関／東海道本線静岡駅⇒特急静岡相良線相良営業所行き乗車
片岡北吉田特別支援学校から徒歩約5分

●自家用車／東名吉田ICから（都）主要地方道島田吉田線を約1．8㎞
南下（国道150号方面へ）、案内看板を右折して400m

■所在地／静岡県榛原郡吉田町

『馬出し』三日月形の堀（復元）

防御施設。小山城では後方の本郭（本丸）を守るために築かれ、前方には三重堀を中心にして、左右に多くの堀があった。さらに城外500m先には、出城（出郭）にあたる城主の館もあり、城周辺の守りを固めていた。また、出陣の拠点にもなっていた。



▲小山城

飯田古城跡（いいだ）

静岡県森町

太田川左岸の堂山（飯田山）の山頂に所在する飯田山崇信寺の境内は「古城」と呼ばれ、当所南方の「本城」より古い構とされる。応永7年（1400）、東海における曹洞宗の大先達・如仲天閨は、山内対馬守（法名道美）の外護によって崇信寺を開き、翌応永8年（1401）に古城地の寄進を受けた。「沙弥道美寺領寄進状」によれば、「北丑寅方は谷境、谷頭の峰筋に堀切、東は峰境で宇刈の境界、西は谷境、南西の薬師堂（相堂寺）山境に堀切、南は地頭方の山堀切有」とあり、現存する遺構に合致している。

如仲天閨は崇信寺開山後、応永18年（1411）に橘谷山大洞院を開き、大洞院は、末寺三千四百余の本寺となった。

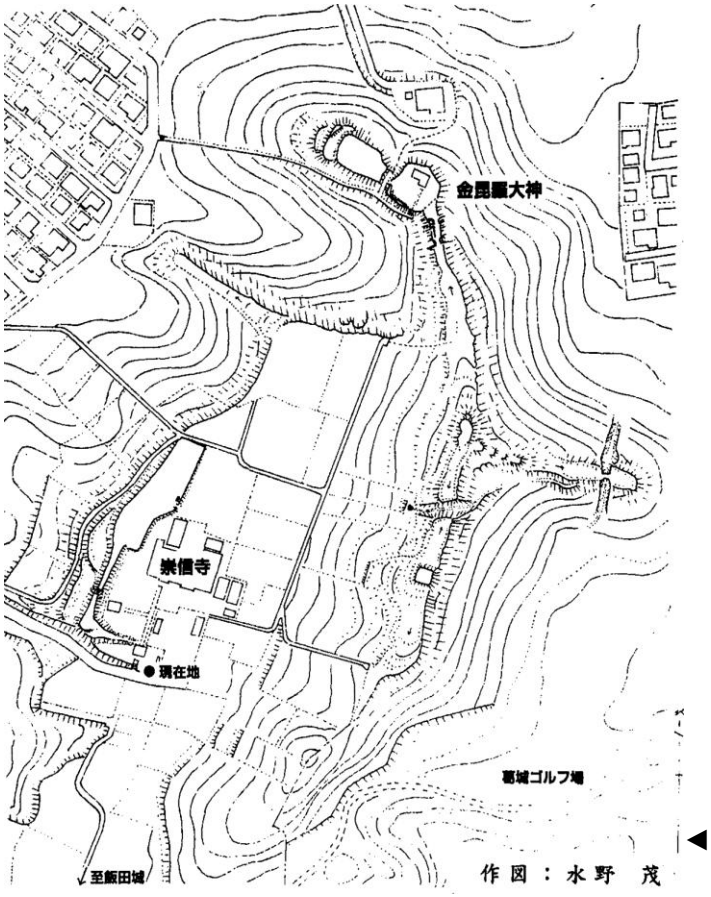
道美（孫右衛門）は、天方城（飯田荘上郷本城）を弟の山城守に譲り、同荘下郷（現飯田）に進出し（『掛川誌稿』）、もう一人の弟重美は、小國一宮勅使の御座所大城戸館に入ったという（粟倉養父系図）。この時期、天方本城を中心とする山内（天方）氏の勢力が南に拡大したと思われる。しかしながら、応永より67年以前の嘉暦2年（1327）に、山内孫太郎入道道光と山内刑部阿闍梨道俊が飯田荘下郷の田地について相論している（内田文書）。また、古城内からは鎌倉期の舶載青磁片、堂山には緑泥片岩五輪塔残片も確認されていることから、崇信寺が建立される以前から、この場所が古い寺院もしくは館として用いられていたと考えられる。

飯田荘は、平安末期の立荘とみられ、文永2年（1265）「遠江国三代起請地并三社領注文写」『教王護国寺文書』に、「飯田庄蓮華王院」とあるのが初見で、飯田荘は、蓮華王院（三十三間堂）領の三代（白河・鳥羽・後白河）御起請地であった。荘園の要は、法勝寺（国王の氏寺）直末の飯田観音寺（これより北方300m）であったとみられる。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／天竜浜名湖鉄道円田駅下車約2㎞
- ●自家用車／新東名森掛川ICから約10分、東名袋井ICから約20分

■所在地／静岡県周智郡森町飯田3052

■問合せ先／森町教育委員会社会教育課☎0538－85－1114



◀飯田古城縄張り図
（崇信寺説明看板より）



▲飯田山崇信寺（飯田古城）



▲崇信寺本堂

町史跡

飯田城跡（いいだ）

静岡県森町

飯田城と天方城が所在する飯田・天方地区は、平安末期、飯田荘（天方・戸綿・飯田）と呼ばれ、蓮華王院（三十三間堂）領の三代（白河・鳥羽・後白河）御起請地であった。

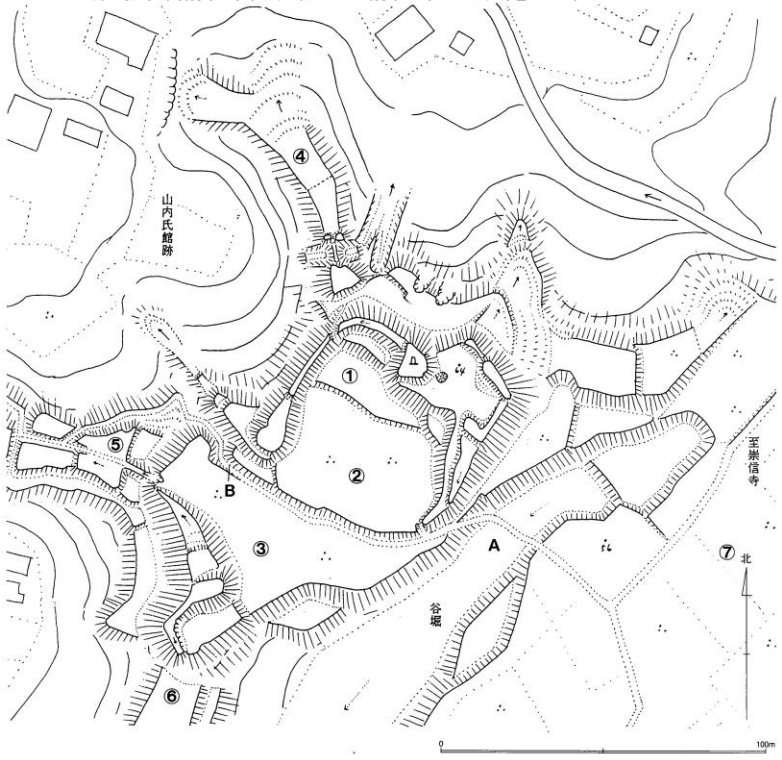
天方城主の山内氏は、備後国を本拠とし、弘安4年（1281）に、飯田荘上郷（天方地区）の地頭職を安堵された山内首藤是通を祖とし、南北朝期、通衢の頃に遠江国に赴き、天方本城（大鳥居）を築いたとされている。一方、嘉暦2年（1327）、飯田荘下郷（現飯田）において山内孫太郎入道道光と同刑部阿闍梨道俊が田地相論に及んでいることから、鎌倉末期には山内氏が下郷に館を構え所領を有していたとみられる（内田文書）。

応永初年頃、天方城主山内対馬守道美が飯田に移り住み、天方本城は弟の山城守に譲った（『掛川誌稿』）。応永8年（1401）、道美が東海曹洞宗の祖・如仲天闇に寺領を寄進して飯田山崇信寺が開かれ、菩提寺とした。この境内が「古城」と呼ばれ、現在の飯田城趾を地元では「本城」と呼んでいる。長禄元年（1457）に、久通が、父道美の三十三回忌法要を行っており、道美と久通が父子であることが知られる。その後、永禄12年（1569）6月、今川方であった山内大和守通泰は、徳川家康の遠江侵攻を受け、元亀元年（1570）8月に、榊原康正、大須賀康高らによって悉く斬獲され、悲惨な最期を遂げ落城、千人塚（本城南東方向）に葬られた。大和守通泰の一子伊織は、徳川の従士梅村彦兵衛に伴われて三州加茂郡広瀬村（豊田市）に落ち延び、同郡上野山村に土着した。

飯田城は家康の治める城となったが、元亀3年（1572）10月、武田信玄の大軍により、たたら城（森の城か）とともに攻略された。その後、武田と徳川の攻防は続き、天正5年（1577）に至って、徳川方が近辺を平定した。

■交通アクセス
●公共交通機関／天竜浜名湖鉄道円田駅下車約2㎞
●自家用車／新東名森掛川ICから約10分、東名袋井ICから約20分
■所在地／静岡県周智郡森町飯田
■指定年月日／飯田城趾：昭和53年4月1日
■問合せ先／森町教育委員会社会教育課☎0538－85－1114

▼飯田城縄張図（静岡古城研究会『静岡県の城跡』より）





▲飯田城趾



▲飯田城趾－石碑

町史跡

天方新城跡（あまがた）

静岡県森町

天方地区には、3つの代表される山城が残されている。大鳥居の本城山（天方古城）、城下の城藪背後の城（白山城）、向天方の城ヶ平（天方新城）の3か所である。天方城主の山内氏は、備後国を本拠とし、弘安4年（1281）に、飯田荘上郷（天方地区）の地頭職を安堵された山内首藤是通を祖とし、南北朝期、通衝の頃に遠江国に赴き、天方本城（大鳥居）を築いたとされている。

文亀元年（1501）、今川方であった城主天方通季（道芬）の時、天方本城は遠江国守護の斯波方に占領された。この時の惨敗から、天方本城の南方に要害堅固な白山城を天方氏が築いたとする説と、元亀年間頃、武田信玄が遠州侵出の出張城として白山城を構築したとする説がある。永正2年（1505）、通季は崇信寺五世・助岑祥佐和尚を請じて、自らが開基となって松厳山蔵雲院を開いた。

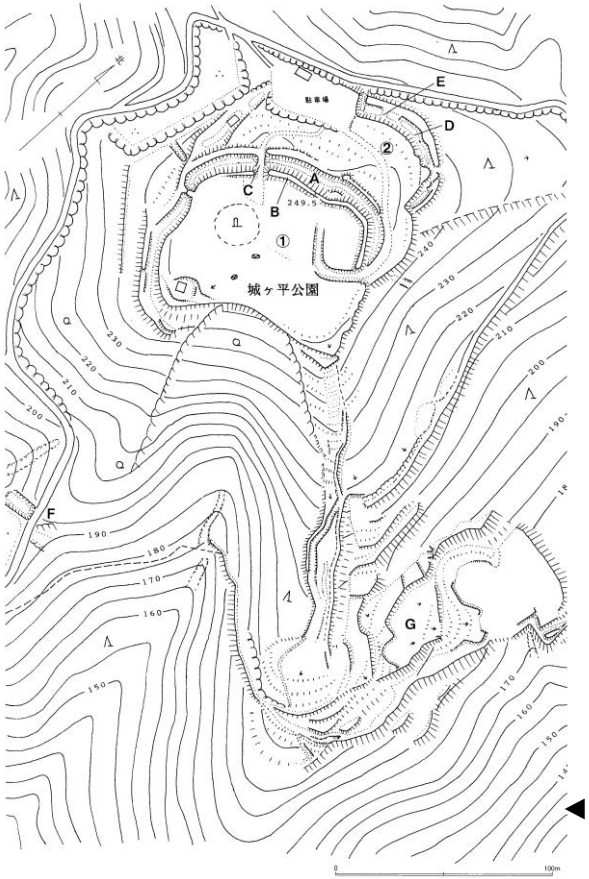
徳川家康は天野氏討伐のため、天正2年（1574）4月6日、出陣したが、豪雨が3日間降り続き、大水が出て先手の兵士も進軍ならず、腰兵粮で出陣したため、粮米も欠乏し、一旦退却して出直すと軍議が決まり、退却途中の三倉山中で、天野軍の追撃と、待伏していた光明城兵や樽山城兵に襲撃され、徳川軍は名のある武将や多くの将士を失い大敗を期した。この時家康は三倉城に逃げ込むが、ここは要害の城でないと11㎞南方の天方本城に入った。

この戦闘で九死に一生を得た家康は、天正3年～4年春にかけて、天方本城の1．5㎞南方で太田川左岸の標高248mの山頂に、広大な付城を構築して、城主に天方山城守通興を据え置いた。2度目の天野氏攻略は天正4年（1576）7月である。

この天方新城は二郭構造で、広大な単郭方形曲輪（東西65m、南北93m）、この形態を見ると、徳川家康が関係した各地の陣城構造そのものと云える。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／天竜浜名湖鉄道戸綿駅から約2㎞
- ●自家用車／新東名森掛川ICから約10分、東名袋井ICから約25分

■所在地／静岡県周智郡森町向天方
■指定年月日／天方城跡：昭和49年3月19日
■問合せ先／森町教育委員会社会教育課☎0538－85－1114



◀天方新城縄張図
（静岡古城研究会『静岡県の城跡』より）



▲天方新城跡－石碑



▲展望台からの眺め

町史跡

真田山城跡（さなだやま）

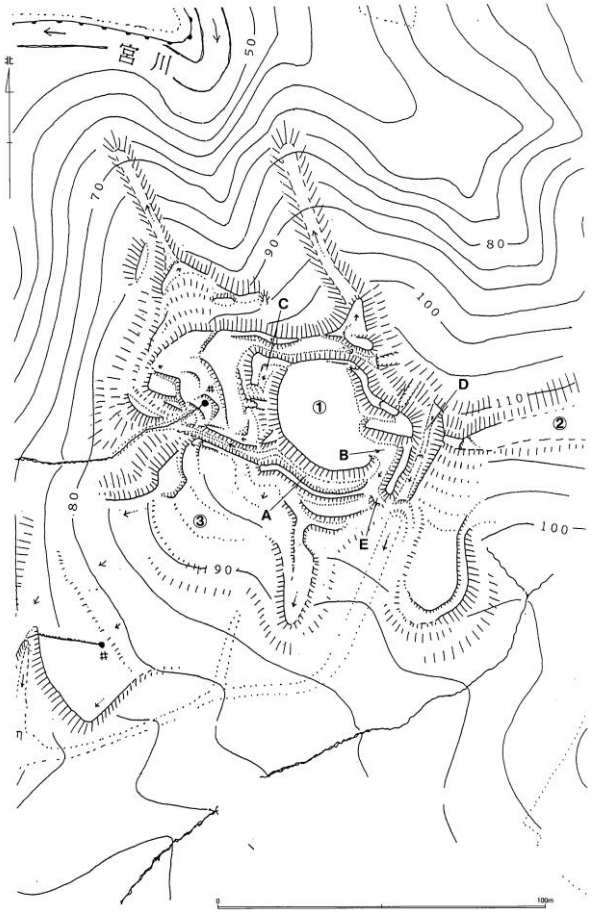
静岡県森町

真田山城（別称：真田城）は、遠江国一宮小國神社へ至る街道沿いの東丘陵上に位置する単郭式山城である。中世、この一帯は一宮荘であり、守護又代は武藤氏（九州少弐氏一門）が務め、当初は円田郷草川（草ケ谷）の香勝寺付近に居館を構えていた。

永禄11年（1568）12月、武田信玄と徳川家康は、今川領であった駿遠両国へ同時に侵攻したが、武藤刑部丞氏定は、今川氏を離れ武田氏に属し、真田城を築いたという。『遠江風土記伝』に氏定が「北曲輪を構ふるなり」と見え、氏定は戦国期において荘内を掌握し一宮神主を兼ねた武家神主であったという（『大場家由緒』）。家康の侵攻に伴い、氏定は一時甲州へ逃れていたが、元亀3年（1572）10月、信玄の遠州攻略に伴い帰参し、一宮諸城の構築を案内したとみられる。武田氏は、近隣の天方城（森町）、向笠城（磐田市）、各和城（掛川市）、真田城等を改修し、中遠北部の守りを固めた。同年12月の三方ヶ原で大敗北した家康は、翌天正元年4月に信玄が没すると森方面へ侵入して反撃し、堀越・山梨（袋井市）辺りで合戦となった。この時、武田軍は森郷に陣を構えた（『三河物語』『当代記』等）。11月頃、武田勝頼は浜松城を牽制して社山（磐田市）、山梨・須雲原（袋井市）と進み、久野城・掛川城攻めの拠点として諏訪原城を築いた。その後、最終的に天正9年（1581）、武田軍の高天神城は落城、氏定は戦死し、子息の武藤孫左衛門は、掛川亀ノ甲村に土着している。

真田城東域に、伏間陣場、森之城、粟倉城、さらに西域には片瀬城という広大な山城が静岡古城研究会の踏査により確認されている。この一帯は、武田軍が中遠北部から南部の平野部に位置する久野城・掛川城へ打って出るための拠点であり、一時期、武田氏の遠江戦略上の要であったことが推察される。

■交通アクセス
●公共交通機関／天竜浜名湖鉄道円田駅から約1．5㎞
●自家用車／新東名森掛川ICから約15分、東名袋井ICから約30分
■所在地／静岡県周智郡森町一宮
■指定年月日／真田城跡：昭和49年3月19日
■問合せ先／森町教育委員会社会教育課☎0538－85－1114



▲真田山城跡縄張り図
（静岡古城研究会『静岡県の城跡』より）

▼真田山城跡－全景



船形山城址（ふながたやま）

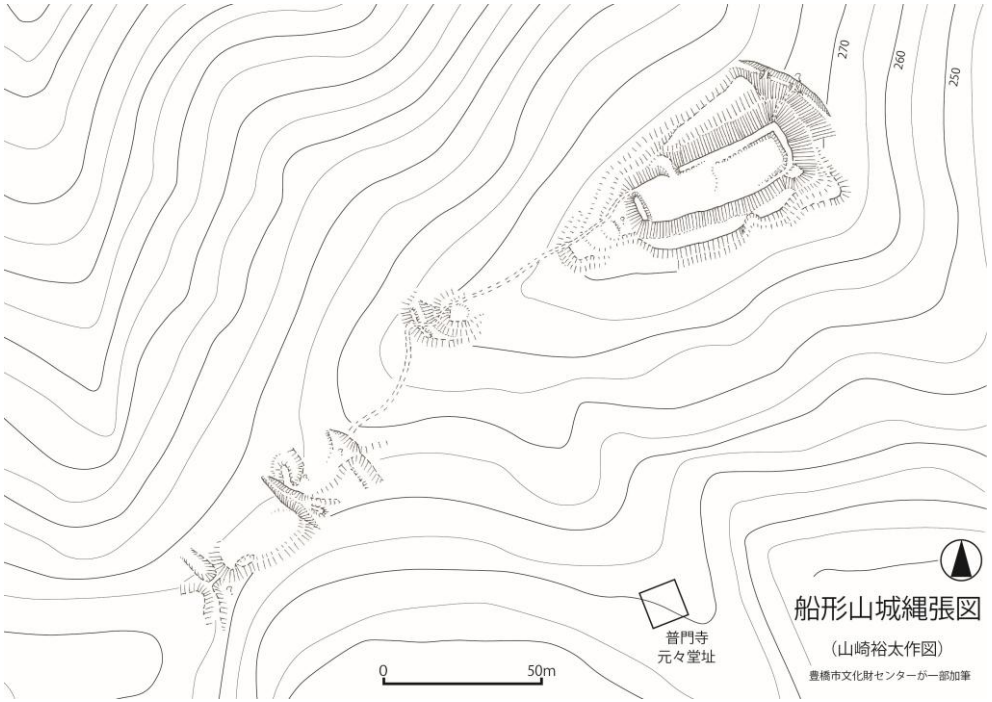
愛知県豊橋市

船形山城址は三河国と遠江国の境目の監視を主な目的として築かれた城で、愛知県と静岡県の県境に連なる弓張山地の南端近く標高270m程のところに位置している。同城の築城時期は明らかでないが、明応年間（1492～1501）と推定される。

城は北東から南西に延びる船形山の尾根に沿って長さ240m程にわたって築かれたようで、曲輪や土塁、堀切が確認できる。中心となる曲輪の周囲を小規模な帯曲輪が囲み、北東の隅にある大きな堀切が城の東端と考えられる。

この場所は三河国と遠江国の境目であるため、かつて各勢力による攻防が繰り広げられた。記録によれば、駿河国と遠江国を領有した今川氏と在地領主である戸田氏との勢力争いで、城主であった今川方の多米又三郎が明応年間に討死したといわれ、また天文2年（1533）の船形山合戦では落城したとされる。その後、徳川氏の家臣である三河の小笠原氏が城を守り、今川氏や武田氏との勢力に対したといわれる。

船形山の南東山麓に古代から続く普門寺が現在もあり、城址より南東の斜面には同寺の旧境内である本堂跡や平場群が広がっている。このため、普門寺が城の維持管理に深く関わっていたと推定されている。



■交通アクセス

※普門寺からの自然歩道は、令和4年9月に閉鎖となりました。

●路面電車／JR豊橋駅⇒市内電車赤岩口行き「赤岩口」から徒歩約40分
『葦毛湿原』到着後、「葦毛湿原・岩崎自然歩道」に沿って登り、東へ約2.1km（徒歩約40分）。

●バス／JR豊橋駅⇒飯村岩崎線赤岩口行き「岩崎・葦毛湿原」から徒歩約15分
『葦毛湿原』到着後、「葦毛湿原・岩崎自然歩道」に沿って登り、東へ約2.1km（徒歩約40分）。

●自家用車／豊川ICより40分、浜松西ICより40分。葦毛湿原駐車場に駐車
『葦毛湿原』到着後、「葦毛湿原・岩崎自然歩道」に沿って登り、東へ約2.1km（徒歩約40分）。

■所在地／愛知県豊橋市雲谷町字上ノ山


▲船形山城－全景


▲船形山城－堀切

市史跡	やまなか 山中城跡	愛知県岡崎市

山中城は、岡崎市の東部、標高約200mの岩尾山（医王山、城山）山頂に築かれている。規模は県下最大級で400×200mを測り、主郭から東・北・北西方向に曲輪を進展させる連郭式の城郭である。眼下には東海道と吉良道の分岐点を望み、大草（現・幸田町）方面への連絡も取りやすい重要地点である。

主郭は二段に分かれ、一段低い二の郭には土塁が残る。土塁の東・西・南には虎口が設けられ、帯曲輪の端に武者隠が備えられている。東の城道は虎口を経て一段低くなり、東郭に至る。馬出しを伴い、四面に土塁を巡らせるこの曲輪は、縄張り全体にとって、防御上で非常に重要視されていたことが見て取れる。東側が西側に比べて高度な改修が行われたことには、今川氏の西進のための城郭から、松平氏の東進、岡崎城の東方押えの城という情勢の変化が表れている。また、尾根の先端部には堀切を配して尾根筋を遮断し、曲輪斜面を伝う移動を防ぐための竪堀を備えることで、一層守りを固くしている。

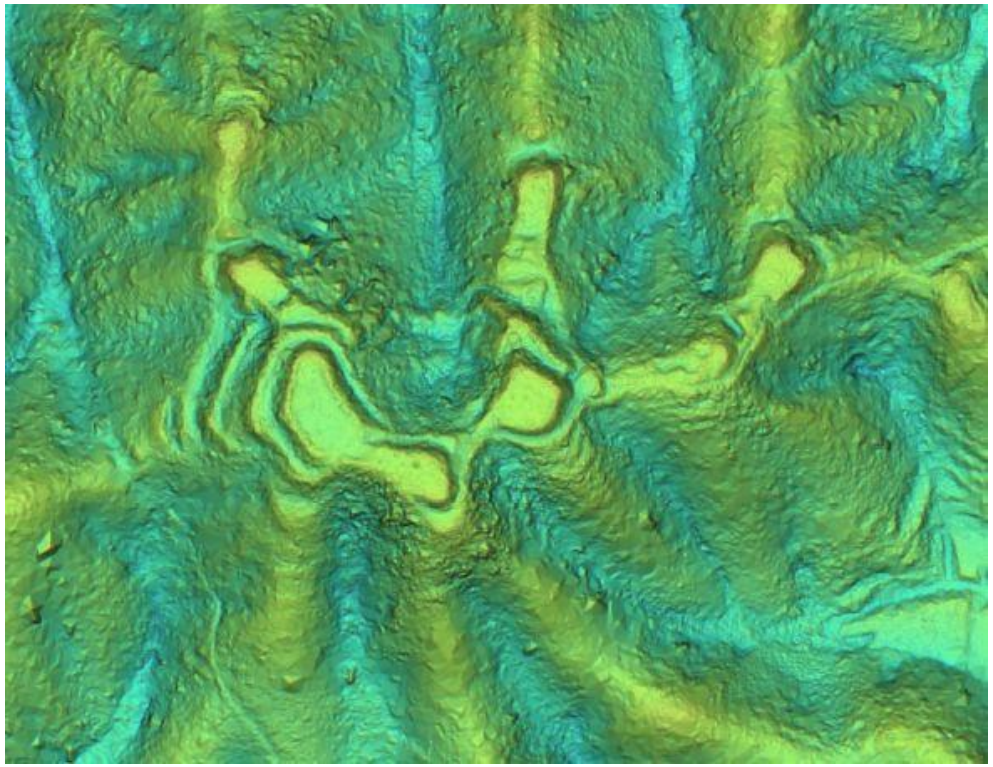
築城は西郷氏とも、岡崎松平家であったとも伝わる。大永4年（1524）、岡崎松平家の本城であった山中城は、松平清康の奇襲により安城松平家の居城となった。ついで岡崎城を掌握し、本拠を現在の岡崎城へ移すなど、山中城の奪取は安城松平家の結束と一門の再集結を図る大きな契機となった。清康暗殺後は今川氏の手に渡り、天文17年（1548）の小豆坂の合戦時には今川氏の重要拠点となった。永禄3年（1560）の桶狭間の戦いの後には、松平元康（徳川家康）が今川軍が籠る山中城を奪取し、同7年から天正18年（1590）まで山中郷は酒井忠次の所領となった。現在残る縄張りは家康の改修と考えられている。

県下最大級の規模を誇り、初期的な馬出しを有する縄張り構造など、山中城は西三河を代表する戦国時代の山城である。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／名鉄名古屋本線名電山中駅から徒歩約15分、3つ目の信号を越えて右折、しろやま橋を渡ると登城口。そこから徒歩約20分で主郭
- ●自家用車／岡崎東ICから国道473号・1号を経由、県道324号線を南へ約5分、駐車スペースあり

■所在地／岡崎市羽栗町・舞木町
■指定年月日／昭和37年6月15日

▼山中城立体図





▲山中城－主郭



▲山中城－全景

市史跡	日近城跡（ひぢか）	愛知県岡崎市

日近城は、乙川と毛呂川の合流地点東側に位置し、標高約250mの丘陵上に築かれている。

作手奥平貞昌は文明10年（1478）までに日近郷を支配し、その子・貞直に日近郷を与えて日近奥平氏が成立した。この頃に日近城が構築されたと思われる。当初、日近奥平家は宗家と同じく今川氏に従っていたが、貞直が反旗を翻したことで、日近城は奥平宗家の支配下に置かれた。弘治2年（1556）の弘治合戦では、今川氏に背いた宗家と共に、日近城を主舞台として激しい戦いが繰り広げられた。

遺構の保存状態は非常に良く、曲輪・堀切・土塁などが良好に確認できる。城郭は、主郭とその西に連なる曲輪群、そして主郭南の堀切を隔てた大土塁とそれに付属する曲輪群の二つの部分で構成されている。

縄張りは大きく2時期にわたって構築されたと考えられる。弘治2年（1556）の日近合戦を挟んで奥平氏が使用した初期段階では、尾根に曲輪を階段状に配置した連郭式の城郭であり、詰めの城として機能したとみられる。

一方、主郭南の大土塁は北東側の小土塁や南側の土塁、南北の堀切などが整備されており、堀切前面に掘られた横堀は、土塁と合わせて堀切への侵入を困難にしている。これらの複雑な構造や当時の軍事的情勢を鑑みると、徳川家康によって天正年間（1573～1592）にこの大土塁の築造をはじめとする全体的な改修がなされ、三河領国の城館配置のなかで「繋ぎの城」または「砦」として使用されたと考えられる。

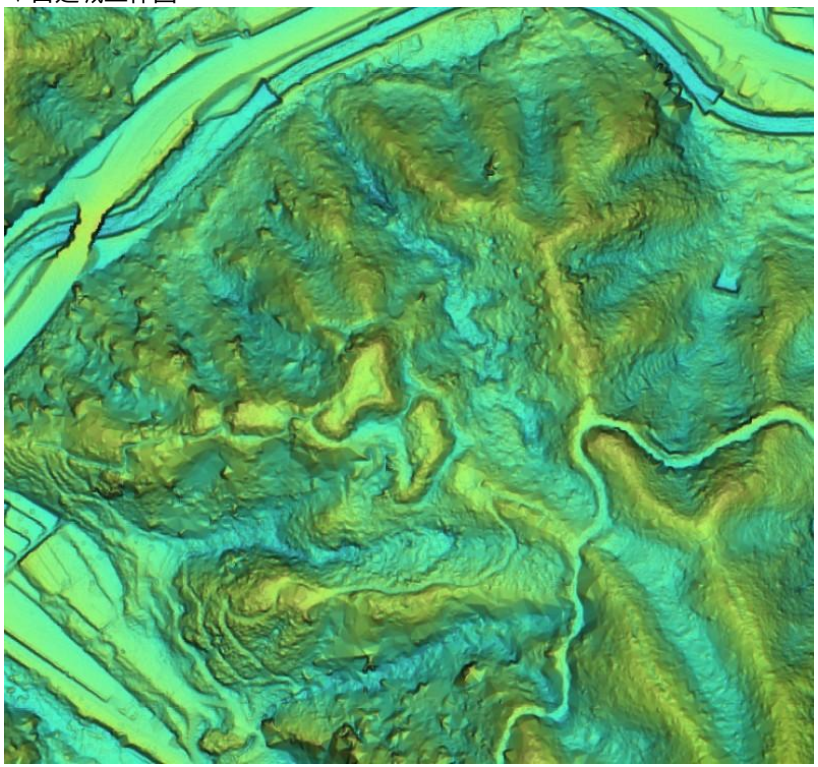
日近城は、小規模ながら非常に発達した段階の城郭であり、三河山間部の要地作手から岡崎へと抜ける街道を押さえる役割を担った。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／名鉄名古屋本線東岡崎駅⇒名鉄バス桜形線桜形から、徒歩約15分
- ●自家用車／岡崎東ICから国道473号線を北へ約30分

■所在地／岡崎市桜形町

■指定年月日／平成2年7月6日

▼日近城立体図





▲日近城－全景



▲日近城－登城口

市史跡	岩津城跡（いわづ）	愛知県岡崎市

岩津城は、矢作川中流域の沖積平野を西に見下ろす、標高約60～70mの丘陵上に築かれている。岡崎から尾張と信濃に向かう街道の分岐点にあたり、交通の要衝に立地する。

応永28年（1421）の松平泰親の岩津進出以降、その子・信光の勢力拡大の過程で築城されたと考えられるが、当時の規模・形態は定かではない。永正3年（1506）には今川氏、元亀2年（1571）には武田氏の脅威に晒されたことが知られるが、それ以降の記録には表れない。

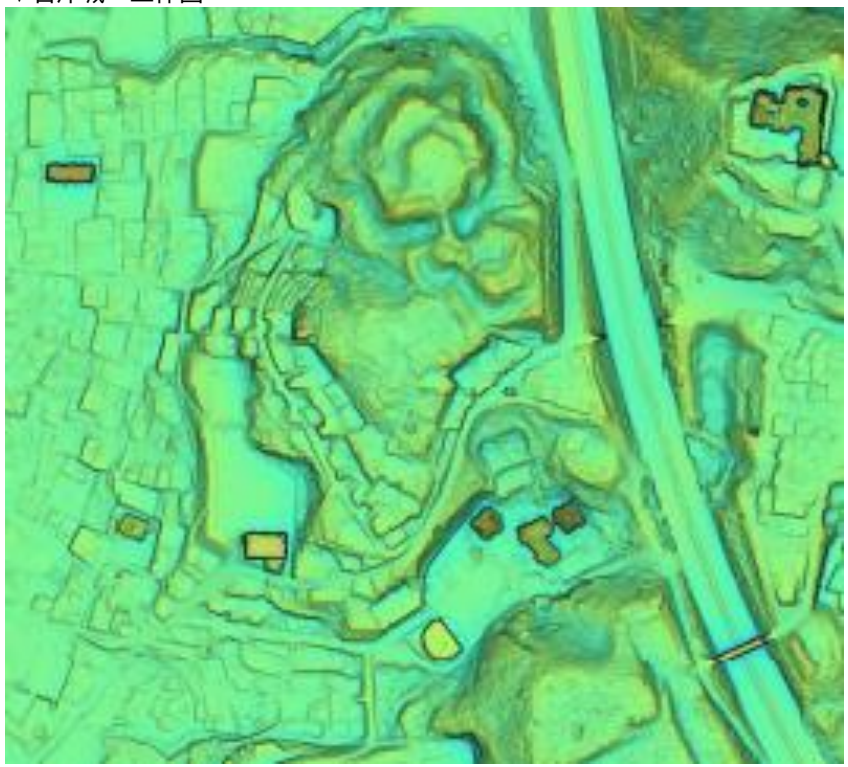
築城当初の姿は不明であるが、現存する遺構から見た城域は約150m×200mほどで、土橋で結ばれた主郭と南郭を基調にして構成されている。主郭は城域の中央部に位置し、郭群やそれに付随する竪堀で構成されている。南郭へ続く土橋の手前には、虎口両側に土塁を有する。主郭北西の腰曲輪には枡形虎口の遺構が残り、山麓の搦手口へ通じている。主郭と南郭は上端部で幅20m、土塁上から堀底まで7～8mに及ぶ大規模な空堀が隔てており、これらを土橋が接続する。南郭は、西・南・東面を土塁が廻るが、土塁は幅20m以上と非常に幅広く、郭内の平坦面よりも郭全体に占める割合が大きい。南郭は主郭から土橋へと渡る虎口ルートを確保し、南側全面の守備を担っていた。この南郭は、一部地続きの馬出しとそれに続く曲輪と見る説が有力である。

主郭搦手の枡形虎口、主郭を巡る横堀と組み合わされた竪堀、櫓台や土塁を盾とした横矢掛がりなど、岩津城は比較的小規模な城郭でありながら、中世城郭のほぼ全ての要素を備える優れた縄張りが最大の特徴である。これらの構造の複雑さから考えると、現存遺構は築城当初ではなく、戦国末期、天正年間（1573～1592）に豊臣秀吉との緊張が高まるなか、家康によって西三河の他の城郭とともに修築されたものと推定される。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／名鉄名古屋本線東岡崎駅
  ⇒名鉄バス岩津方面行き岩津天神口から徒歩約15分
- ●自家用車／付近に駐車スペースなし

■所在地／岡崎市岩津町
■備考／城域は全て民地であり、周辺住人への配慮が必要
■指定年月日／令和6年3月29日

▼岩津城－立体図





▲岩津城－主郭



▲岩津城－土橋

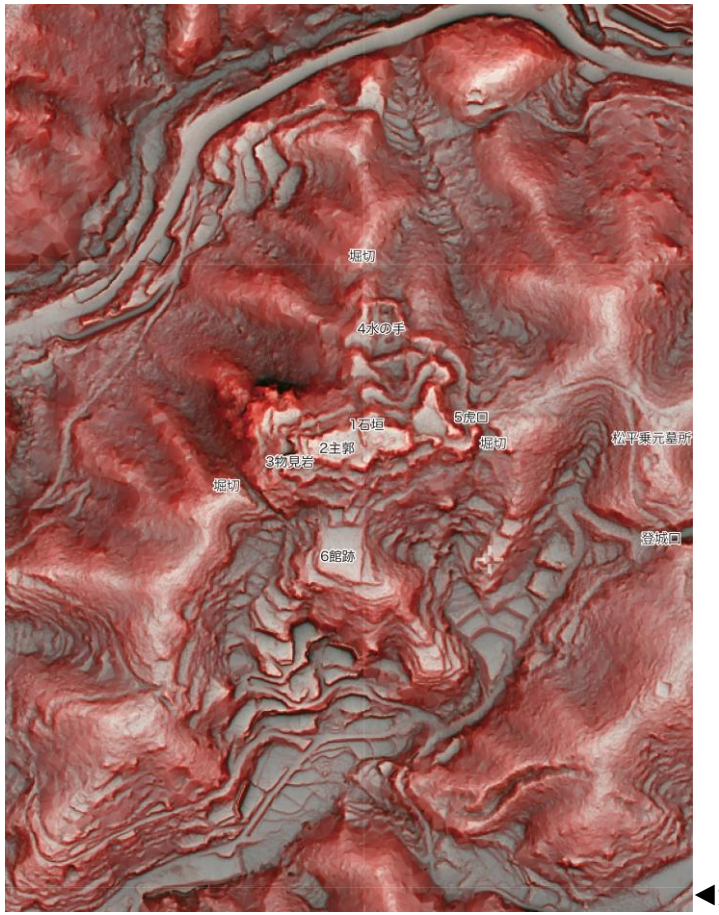
国史跡	大給城跡（おぎゅう）	愛知県豊田市

大給城は標高約200m、比高約120mの丘陵に築かれている。築城時期は定かではないが、長坂氏により築城され、後に松平信光が奪い、嫡男親忠の次男乗元に与えたと伝えられている。乗元は大給松平氏の祖となり、後裔は松平宗家と服従・対立を繰り返したとされる。1584年頃、大給松平氏は大給城から細川城へ拠点を移した。この後、大給城は改修を受け、徳川家康の領国支配等のために使用されたと考えられている。その後家康の関東移封に伴い廃城となった。

遺構は中央に主郭・副郭を配し、その東西に比較的大きな曲輪を設けている。また、北側斜面に堀切・石塁を配し、南側には居館跡と推定される曲輪がある。現状の遺構では随所に石垣が用いられている。石垣は高さが3mを超える部分もある上、石垣によって直線的なライン、櫓台や虎口としての方形区画を明瞭に作り出しているところもある。石垣とそれに伴う曲輪は大規模な普請であるとともに、防御性の高さも示している。自然地形に沿う形で曲輪の縁辺や部分的に石垣が用いられる三河国内の他の中世城館とは異なり、城域内に広範囲に石垣が用いられているなど、三河では他に例のない特異な縄張りの城である。石垣の構築時期については、徳川家康による1572年以降、あるいは田中吉政による1590年以降が考えられているが、遺構からは判断が難しい状況である。

指定面積は31，414㎡で、松平城跡・高月院・松平氏館跡とともに松平氏遺跡として指定されている。

■交通アクセス
●公共交通機関／名鉄豊田市駅からとよたおいでんバス大内から徒歩約10分
●自家用車／東海環状自動車道松平ICから国道301号経由約10分
■所在地／豊田市大内町
■指定年月日／平成12年2月4日
■問合せ先／豊田市文化財課 0565-32-6561



◀大給城赤色立体図


▲大給城－空撮


▲大給城－水の手

足助城跡（あすけ）

愛知県豊田市

足助城は標高約300m、比高170～180mの真弓山山頂を中心に構築された城郭で、真弓山城あるいは松山城とも呼ばれている。平安時代末から南北朝時代にかけて足助地方に勢力を有した足助氏が真弓山にも城を構えたと言われ、戦国時代には、西三河山間部に勢力を伸ばした三河鈴木氏の一派である足助鈴木氏が本城を築いたとされる。築城時期は不明。天正初めの武田信玄による西三河侵攻の際には、一時期武田氏が本城郭に入ったと伝わる。鈴木氏は天正18年（1590）、家康の関東入国に従い足助を離れ、それ以降利用された記録がないことから、この時点で廃城となったと考えられている。

遺構は山頂に立地する主郭を中心に四方に伸びる尾根を利用して階段状に腰曲輪が展開し、南へ延びる尾根には堀切が確認できる。平成2年から発掘調査が行われ、主郭には、掘立柱建物・高櫓・長屋・門などの施設があったことが推定され、その他の曲輪でも掘立柱建物跡や柵列などが見つかっている。調査成果からは、当初は主郭部分に小規模な掘立柱建物が建てられているのみであったものが、戦国時代に諸雄の活動が激しくなる中で、主郭に新たに2棟の掘立柱建物やその他の曲輪にも建物や柵列などが建てられ、本格的な城郭として形成されていったことが明らかとなった。

調査後、「足助城跡公園整備基本計画書」が作成され、主郭に高櫓や長屋、その他の曲輪に櫓や厨などが復元され、城跡公園足助城として整備されている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／名古屋から地下鉄・名鉄浄水駅
  - ⇒とよたおいでんバスーの谷口から徒歩約40分
  - 名鉄東岡崎駅⇒名鉄バス香嵐渓一の谷口下車徒歩40分
- ●自家用車／猿投グリーンロード力石ICから国道153号経由約20分、東海環八ICから約25分

■所在地／豊田市足助町須沢39－2
■問合せ先／城跡公園足助城 0565-62-0770



◀足助城
赤色立体図



▲足助城－空撮



▲足助城－全景

市史跡	武節城跡（ぶせつ）	愛知県豊田市

武節城跡は、名倉川左岸の標高545m、北側からの比高約40mの丘陵一帯に築かれる。城跡からは、南側に尾根が続き、他の三方を平地部に囲まれ、北側山麓には近世の飯田街道が位置している。地伏城とも呼ばれる。

東西150m×南北200mの範囲に平坦面が多く広がるが、畑や墓地として改変を受けており、城域や曲輪としての形態を留めているかはっきりとしない。主郭の背後に大規模な土塁と主要曲輪群を囲い込むように西から南にかけて堀が残されている。

永正年間(1504～1521)に菅沼定信が築いたとされ、永禄3年(1560)に菅沼久助が今川氏真より桶狭間の戦いの際に「武節筋堅固走廻」ったとして判物を受け取っている。元亀2年(1571)には、菅沼氏は武田方に属するようになり、元亀3年(1572)に徳川家康は松平真乗に武節への出陣を命じ、時期は不詳であるが、本城は徳川方の支配下になったと考えられている。しかし、天正2年(1574)には武田勝頼の侵攻を受け、再び武田方に属するようになる。天正3年(1575)の長篠の合戦後、織田方の佐久間信盛らにより落城、松平真乗が『三信の境武節を守るべき旨御書を賜ふ」との記録があり、境界の防衛の拠点として機能していたと考えられる。その後、徳川方の奥平氏の支配となるが、天正18年(1590)の徳川氏の関東地方移封時、もしくは奥平氏が慶長6年(1601)に転封になった際に廃城になったとされている。今川・徳川・武田・織田氏によって争奪が繰り返された信濃国との境目近くの城郭である。

天正3年の長篠の合戦後に、敗走する武田勝頼が本城に立ち寄り、梅酢湯一杯で命を永らえたという伝承も残る。

■交通アクセス
●公共交通機関：おいでんバス稲武・足助線快速いなぶ（豊田市駅⇒令どんぐりの湯前）で「豊田市（東口）」から「どんぐりの湯前」で下車、約80分
●自家用車：猿投グリーンロード「力石IC」から国道153号線を通って約45分
東海環状自動車道「豊田勘八IC」から国道153号線を通って約50分。
■所在地／愛知県豊田市武節町シロ山
■指定年月日／昭和59年3月30日
■問合せ先／いなぶ観光協会観光案内所 0565-83-3200(10:00～16:00)
いなぶ観光協会 0565-77-6283(平日／9:00～17:00)



◀武節城赤色立体図



▲武節城－空撮



▲武節城－堀切

亀山城跡（かめやま）

愛知県新城市

応永31年（1424）8月、奥平貞俊が川尻城から移り、その後貞久・貞昌・貞勝・定能・信昌の5代が居城とした。奥平氏は山家三方衆と呼ばれる有力土豪となり、天正3年（1575）の長篠の戦いで徳川方として長篠城の城主となった奥平信昌の功績は有名である。

立地場所は東西三河地域の平野部へと至る陸上交通の要所地にあたり、亀山城跡を中心にして周辺には古宮城跡、文殊山城跡、塞之神城跡など武田氏と関係の深い城跡が集中している。

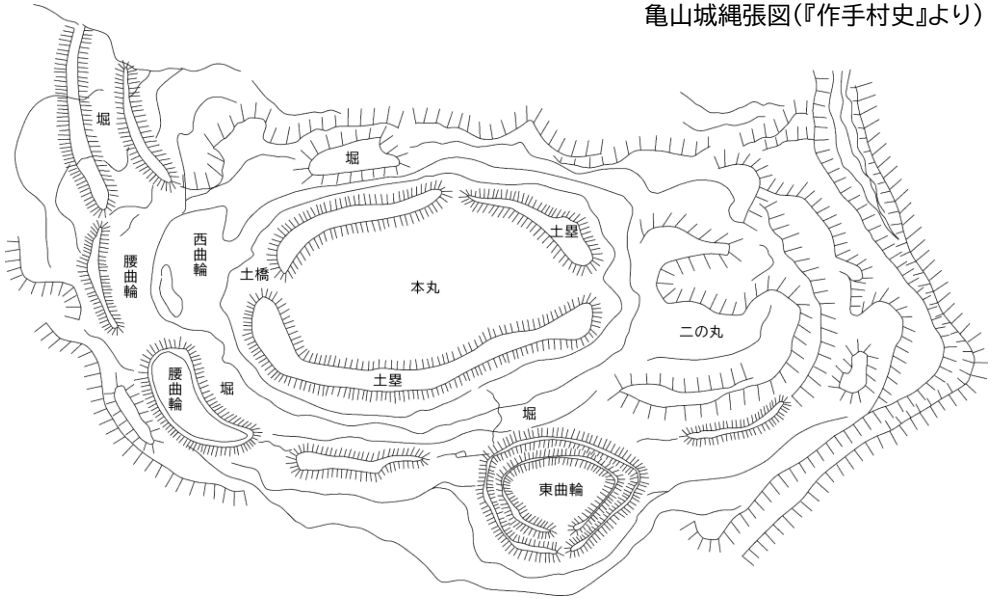
山腹に配置された曲輪群から、この城跡は登城の防備を意識した構造を持ち、地形に即した土木工事が行われた縄張りであったことがうかがわれる。さらに主郭で実施した発掘調査の結果から、この城は奥平氏の居住的役割でなく、軍事的拠点であった可能性が高いと考えられている。

天正元年（1573）8月、貞能・信昌父子は古宮城に本拠を持つ武田勢の攻撃を受けたが、石堂ケ根・田原坂などに転戦してこれを敗走させた。天正3年（1575）、この戦功によって信昌は徳川家康から長篠城主を命ぜられた。

同年5月、長篠・設楽原の戦いが勃発。長篠城は武田勢15，000の猛攻を受けたが、籠城していた奥平軍はよく耐え、織田・徳川連合軍の援軍を受け大勝した。戦後、信昌は郷ケ原に新しい城を築き、家康の長女亀姫を妻に迎えた。

慶長7年（1602）、信昌の四男松平忠明が父祖の旧領である亀山城へ作手藩17，000石の藩主として入城し、8年間居城とした。同15年（1610）、伊勢亀山藩50，000石の藩主に転じた。

亀山城縄張図（『作手村史』より）





▲亀山城－全景



▲亀山城－虎口

■交通アクセス
●公共交通機関／Sバス作手線つくで手作り村バス停から徒歩約2分
●自家用車／新東名高速道路新城ICから国道151号、301号を経由して約40分
■所在地／愛知県新城市作手清岳字シロヤマ
■問合せ先／作手歴史民俗資料館☎0536－37－2188

町史跡	田峯城址（だみね）	愛知県設楽町

田峯城は、文明2年（1470）菅沼定信によって築かれ、その後、定忠・定広・定継・定忠の5代が居城とした。作手の奥平氏・田峯の菅沼氏・長篠の菅沼氏の三氏は山家三方衆と呼ばれ、この地域で勢力を誇っていた。

5代目城主菅沼定忠が、天正3年（1575）武田氏に従って長篠合戦に出陣し敗退、武田氏と供に逃れた定忠は、飯田において天正10年（1582）徳川方に捕らえられ、田峯城は従兄弟（菅沼定直の子）定利が徳川の命により城主となった。天正11年（1583）、定利が飯田郡代となり移住後、田峯城は廃城となった。

田峯城は県下有数の高山である段戸連峰を間近に控え、寒狭川の渓流をはるかに見下ろす標高386mの独立丘陵にある山城である。

本丸より北西に道寿曲輪、瞰曲輪、蔵屋敷、井戸曲輪が、最下段には表曲輪、裏曲輪、大手門跡が、東南方に離れ仕置場と「うまや」があったといわれる。

本丸から見下ろした寒狭川の蛇行と城をいただく山並がまさに大蛇のようであることから、田峯城は別称「蛇頭城（じゃずがじょう）、」「竜の城」とも呼ばれていた。

城の西側一帯に広がる丘陵地には、当時の重臣たちの屋敷跡が遺され、更に集落全体を防御するため、田峯城ケ峰砦、愛宕山砦、田峯平城、高野砦が築かれていた。急流寒狭川の対岸には清崎砦、一本杉砦、須山物見石砦によって防御されていた。

現在は、城の北西部分が解放され、模擬的な橋や柵が設置された城址公園として整備されている。当時の武家屋敷をしのばせる書院造りという様式を用いた御殿などが建てられ、大手門前に駐車場とトイレが完備され、自由に見学（本丸のみ有料）することができる

■交通アクセス
●自家用車／新東名高速道路新城ICから国道151号、257号経由約35分
■所在地／愛知県北設楽郡設楽町田峯字城9番地
■指定年月日／昭和43年2月1日

▼田峯城縄張り図（提供：加藤博俊氏）




▲田峯城－空撮


▲田峯城－大手門跡

県史跡	峯（みね）城跡	★三重県亀山市

峯城は、安楽川と御幣川、八島川の合流付近の丘陵上にあり、城跡東方には近世の巡見街道が、南方には鈴鹿山脈を越えて近江国へ続く安楽越えの道が走る交通の要衝の地に位置する。

峯城は、鈴鹿郡北部の国人領主であった峯氏の居城とされ、正平22年(1367)に峯政実により築城されたと伝えられるが、史料上で峯氏の名がみられるのは15世紀後半で、実際は室町後期の築城の可能性がある。

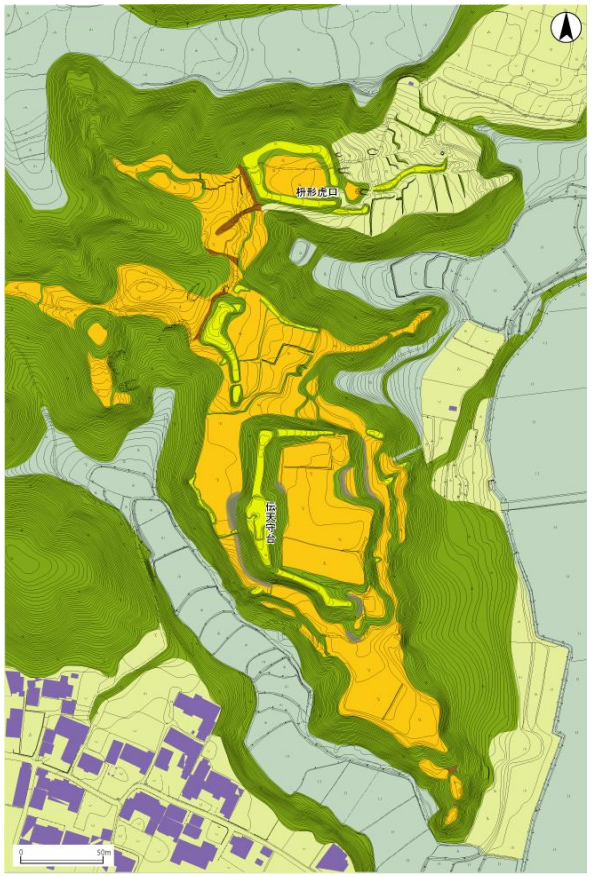
天正2年(1574)に峯八郎四郎が伊勢長嶋城で討ち死にし、代わって織田信孝の家臣であった岡本良勝が入城したとされる。

天正11年(1583)2月、本能寺の変後の織田信雄・羽柴秀吉と織田信孝・柴田勝家・滝川一益との対立の中で、滝川方に城を奪われたが、北伊勢に侵攻した秀吉軍3万により包囲された。周辺の亀山城・国府城が降伏開城する中で、4月まで持ちこたえ、賤ケ岳の合戦直前に降伏開城した。この攻防戦については戦況の趨勢を示すものとして注目され、当時の日記や宣教師の報告に記事がみられる。開城後は織田信雄に接収されたが、翌天正12年には信雄と秀吉の対立により、再び秀吉勢の攻撃を受け落城する。

廃城時期は明らかではないが、天正20年(1592)に堀尾吉晴が周辺を所領として与えられており、慶長5年ころまでは地域支配拠点として存続していた可能性がある。

現在の峯城跡には大きく3つの郭群があり、主郭には、石垣を有する伝天守台、枡形虎口を有しており、これらは瓦葺であったとみられる。また、一番北側の郭群は4回連続して折れ曲がる虎口が導入されている。なお、周囲には峯城を包囲した際の陣城の可能性がある城館跡が存在している。これらの状況から、天正年間から近世初頭に至る織豊期城郭の特徴や天正11・12年の攻防戦の実態が把握できる貴重な城跡である。

■交通アクセス
●自家用車／東名阪自動車道鈴鹿ICから国道306号線を南へ約7㎞
■所在地／三重県亀山市川崎町
■指定年月日／昭和44年3月28日



◀峯城平面図


▲峯城－近景(南から)


▲峯城－枡形虎口

県史跡	鹿伏兎城跡（かぶと）	★三重県亀山市

鹿伏兎城跡は、鈴鹿郡西部の国人領主である加太氏によって、正平年間（1346～1370）に築かれたと伝えられるが、史料上で加太氏がみられるのは14世紀末である。また、現在の「鹿伏兎」の表記は、近世以降にみられるもので、当時は主に「加太」が用いられていた。

城跡は、伊勢・伊賀国堺の山間地に位置し、小盆地内を横断する大和と伊勢を結ぶ大和街道を見下ろす標高263mの牛谷山山頂に所在する。

天正11年（1583）、本能寺の変後の織田信雄・羽柴秀吉と織田信孝・柴田勝家・滝川一益との対立で加太氏は信孝方に与したため信雄によって攻められ、加太氏は織田信包の配下に組み込まれ、このころ廃城されたとみられる。

近世の地誌類では、「上ノ城」と「下ノ城」の存在が記され、山麓部で平成12年度に行われた発掘調査で、15・16世紀代の掘立柱建物や区画溝、石垣が発見され、大量の土師器皿も出土したことから、これらが近年、「下ノ城」に相当する館跡と考察されている。

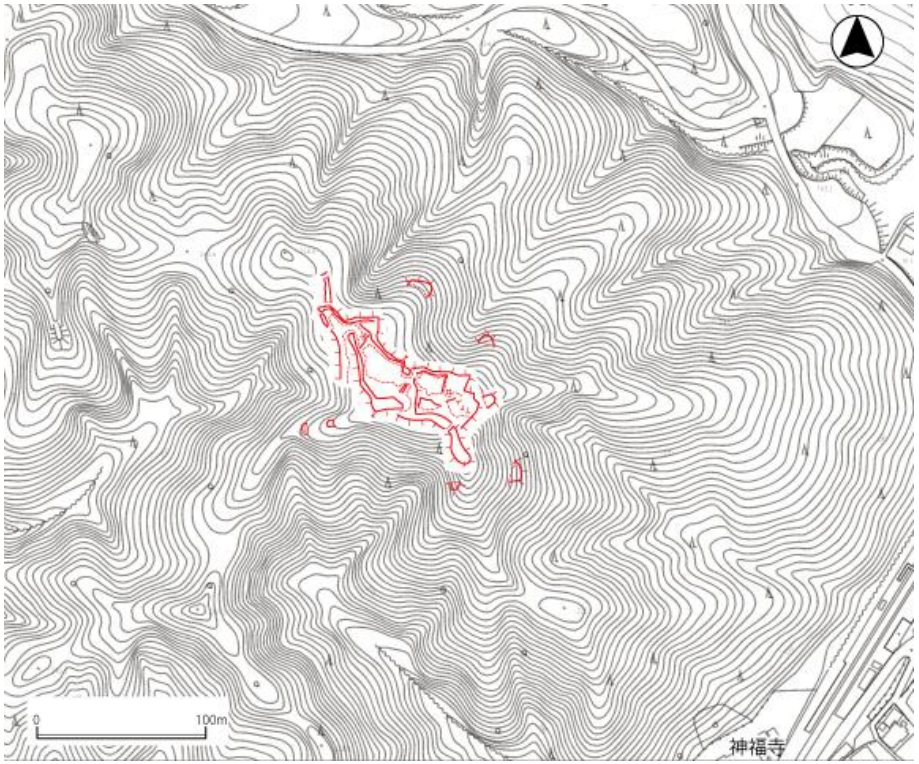
山頂部の縄張は、主に3つの郭とその周囲の土塁からなる。最大郭は山頂部に位置し、その西側土塁上の平坦面は櫓台とみられる。西側の虎口は、「下ノ城」からの城道に開くもので、虎口横には長さ17m、高さ2．3mの石垣が見られる。この石垣は隅角を持たず、虎口に対しての視覚効果を意図したものと考えられる。最大郭の低位となる東側の郭には直径2mの石組井戸があり、中段の郭と併せて居住空間として用いられていた可能性がある。

なお、山麓のJR加太駅に隣接する神福寺は、応永元年（1394）に加太氏が大檀越となって建立された寺院である。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR関西本線加太駅
- ●自家用車／名阪国道向井ICより5分

■所在地／三重県亀山市加太市場
■指定年月日／昭和56年3月30日

▼鹿伏兎城縄張り図





▲鹿伏兎城と神福寺



▲鹿伏兎城－虎口脇石垣

佐和山城跡（さわやま）

滋賀県彦根市

佐和山城跡は、彦根城跡の北東に位置する標高232．9mの典型的な山城跡である。この地は、近江における江南と江北の境目にあたり、眼下には東山道が通る要衝の地であった。こうした地理的条件より、古くから軍事的に注目されるところであった。

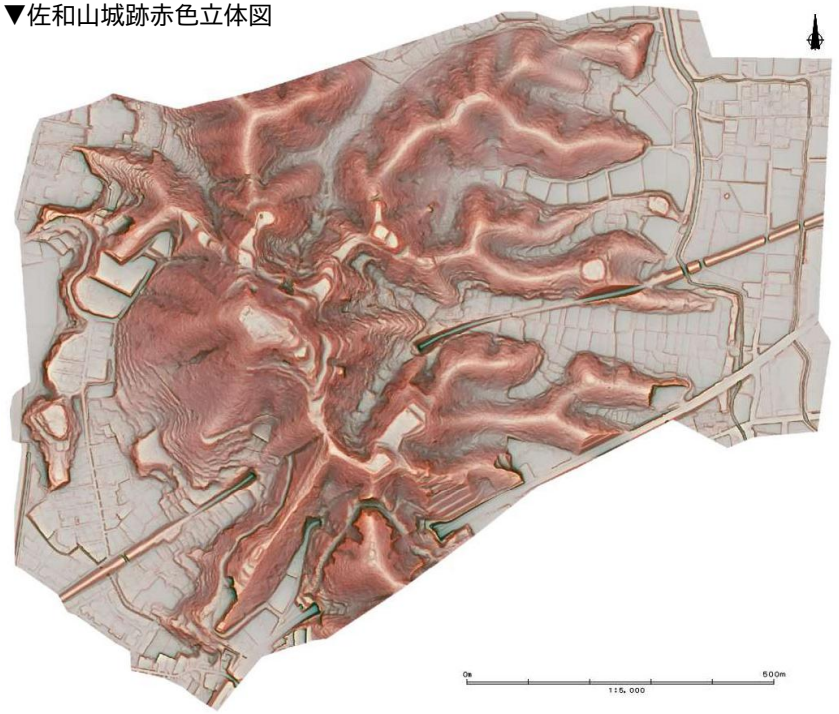
佐和山城の築城時期は定かではないが、鎌倉時代初期に佐々木定綱の六男六郎時綱の代に、佐和山付近に館を構えたのが始まりと伝えられている。その後、六角と京極（後に浅井）の境目の城として幾多の攻防戦が繰り広げられ、最終的に浅井氏が入城する。織田と浅井の攻防では浅井方の磯野員昌が籠城した。その後、織田方の丹羽長秀、秀吉の時代に堀秀政、堀尾吉晴、石田三成が城主となる。関ケ原合戦後、佐和山城攻めを行った井伊直政は、戦功により三成の旧領を与えられ、佐和山城に入城するが、彦根城の築城に伴い、最終的に廃城となった。

城跡の現状は、天守や櫓などの建造物は全く現存せず、城山全体が草木に覆われた状態だが、切岸や土塁などの各遺構は比較的良好に遺存している。また、山麓の旧東山道に面した大手側には、谷筋の侍屋敷を囲むように幅13m、高さ2m、総延長165mの巨大な土塁が残存しており、中央には伝大手門跡が開いている。

彦根市では、平成23年度から発掘調査を含む総合調査を実施し、国史跡への指定に向けて文化財的な価値付けを進めている。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR琵琶湖線彦根駅
●自家用車／名神高速道路彦根ICから約10分
■所在地／滋賀県彦根市佐和山町・古沢町・鳥居本町地内

▼佐和山城跡赤色立体図





▲佐和山城－全景



▲佐和山城跡

国史跡	小谷城跡（おだに）	滋賀県長浜市

江北（北近江）を支配した浅井氏の居城。築城時期は大永5年（1525）頃。小谷山（標高495m）は、関ケ原や木之本等各方面に繋がる交通の要衝に立地し、この山の広範囲に小谷城が築かれる。

小谷城は、土塁のある曲輪、土塁の無い曲輪、単純な動線、複雑な虎口、単純な虎口、小規模な曲輪、石垣の有無といった一つの城の中に全く構造の異なる曲輪が併存している。歴史の中で曲輪が増設され、多様な機能をもつ曲輪が有機的に繋がっている構造的特徴を有する。

指定面積は約148ha。昭和12年4月17日国史跡指定（平成7年2月14日追加指定）。

3代城主浅井長政は、織田信長の妹お市を娶り、同盟を結んだ。しかし、織田信長が越前の朝倉氏を攻めたため、織田信長との同盟を破棄し対立した。

元亀元年（1570）6月、織田信長は大軍を率いて近江に入り、浅井・朝倉勢と姉川で戦った。結果、浅井・朝倉勢は敗れ、小谷城に退いた。そして、天正元年（1573）9月1日、織田信長の総攻撃により、浅井久政・長政親子が自刃し、小谷城は落城した。

浅井氏滅亡後、羽柴秀吉が小谷城に入城する。しかし、天正2年（1574）頃から、秀吉が長浜城を築城し、その城下町へ小谷城下町の商人等を集め、小谷城は天正5年（1577）頃に廃城となる。

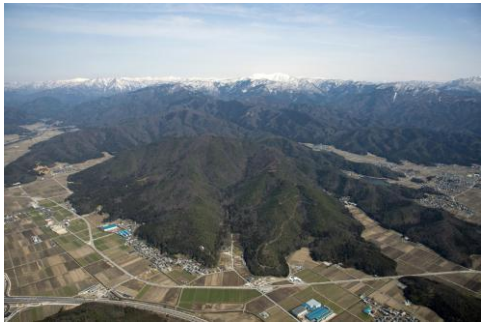
発掘調査により山上の建造物は落城時に燃えていないことが判明し、山麓の清水谷にある通称御屋敷で山上城郭遺構と同規格の建物跡を確認した。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR北陸本線河毛駅から東へ徒歩約30分
- ●自家用車／北陸自動車道長浜ICから15分
  - 木之本ICから15分
  - 小谷城スマートICから5分

■所在地／滋賀県長浜市小谷郡上町、須賀谷町ほか
■指定年月日／昭和12年4月17日（平成7年2月14日追加指定）
■指定面積／約148ha



◀小谷城赤色立体図



▲小谷城－全景



▲小谷城－黒金門

田上山城跡（たがみやま）

滋賀県長浜市

田上山城は、天正11年（1583）の余呉湖周辺で戦われた羽柴秀吉と柴田勝家との賤ヶ岳合戦において、秀吉が1ヶ月前に築城している。合戦に際して羽柴秀吉の弟の羽柴秀長が在陣した。

田上山城は、標高324mの田上山の頂部一帯に存在し、東西215m、南北450mの範囲の縄張りである。

城の遺構としては、山頂部一帯に南北に配された3つの方形の曲輪（主郭・北郭・南郭）と主郭より西方に下る西郭により構成される中心部と、三方の尾根筋先端に設けられた防御施設が観察される。

田上山城は、その立地条件や広大な城域と織豊系山城に特徴的な縄張りを持って、羽柴軍の本陣にふさわしい存在であった。賤ヶ岳合戦の結果、柴田勝家が北ノ庄城で自害し、田上山城の役割は終わる。

田上山の中腹までは林道が整備されている。城跡からは、賤ヶ岳、行市山、堂木山など賤ヶ岳合戦を代表する敵味方の砦が一望でき、眼下には木之本地蔵と北国街道の宿場町の面影を残す商家や本陣跡が軒を連ねる。



▲田上山城－全景

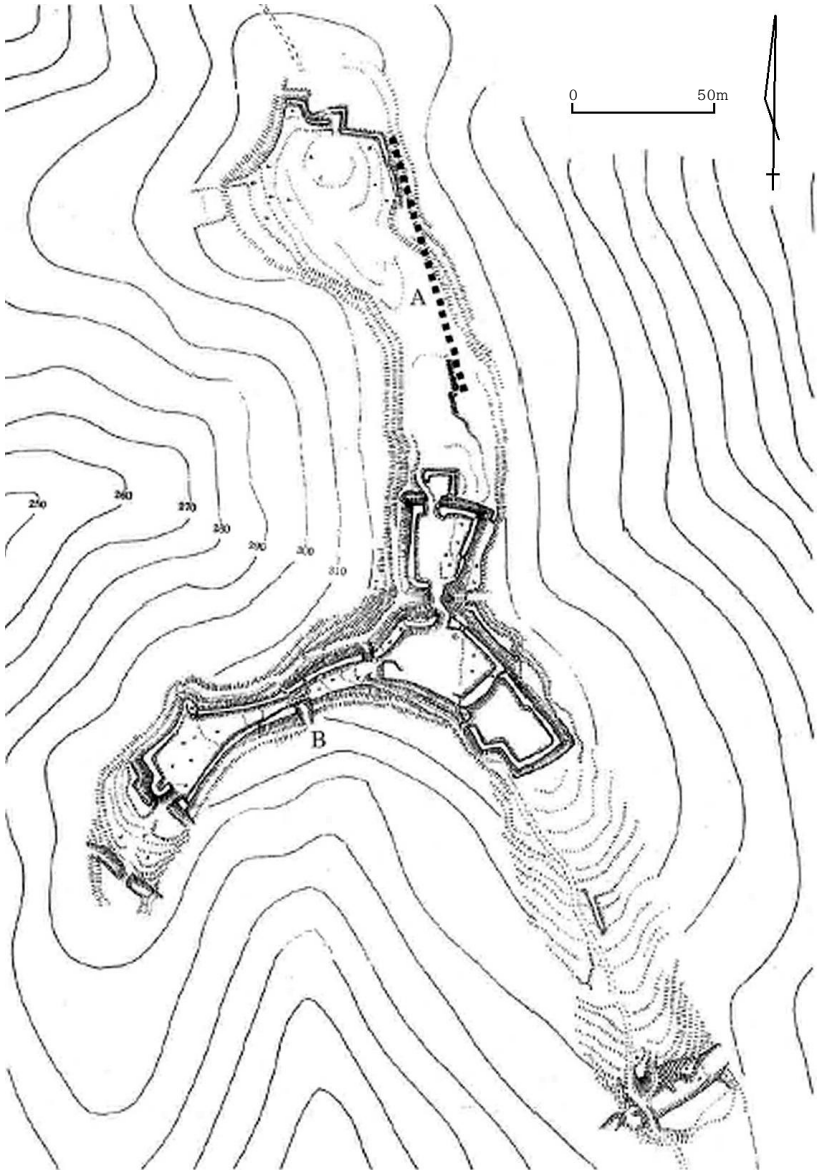


▲田上山城－馬出し

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR北陸本線木ノ本駅から徒歩約50分
- ●自家用車／北陸自動車道木之本ICから1㎞

■所在地／滋賀県長浜市木之本町木之本

▼田上山城縄張り図（髙田徹氏作図）



国史跡	観音寺城跡（かんのんじ）	滋賀県近江八幡市

観音寺城は、『太平記』にある建武2年（1335）の六角氏頼軍の立て篭もりが初見で、以後永禄11年（1568）7月の織田信長の侵攻による落城までの間、近江守護六角氏の拠点であり、16世紀には本拠となった。城跡は、標高433mの繖山山頂の尾根筋を大規模な土塁とし、主にその尾根南面の山上から山腹にかけて多数の郭群を展開させている。

主郭は山上南面西側に延びる支尾根上に位置し、発掘調査が行われた本丸、平井丸、池田丸には御殿を思わせる遺構等が見られる。また山麓にも、「上御用屋敷」、「御屋形」と称される高石垣を伴った約70m四方の郭をはじめとして多数の郭や石垣が確認できる。これらは16世紀中頃に構築されたと考えられ、城の規模や郭の数は全国でも屈指の規模を誇る。

永禄6年（1563）には「観音寺騒動」という観音寺城にまつわる事件が起きている。これは有力な家臣であった後藤賢豊父子を六角義弼が謀殺したことにより、家臣たちが六角氏の元を離れていき、結果的に六角氏の権威を失墜させる事件となった。

観音寺城の城下町は繖山南麓に広がる現在の石寺集落にあたる。石寺の名前が史料に現れるのは文明元年（1469）であり、この頃から城と城下町の整備が進められたと考えられる。また石寺は歴史上初めて楽市が実施されたことで知られており、その場所については城下町の外側、奥石神社付近とする見解や現石寺集落の南側とする意見があり、どちらも「エビス」の地名がみえることから再検討が行われている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR琵琶湖線（東海道本線）安土駅
- ●自家用車／名神高速八日市ICより20分

■所在地／滋賀県近江八幡市安土町石寺・桑実寺他
■指定年月日／昭和57年1月30日（追加指定／昭和59年10月8日）



史跡観音寺城跡縄張図
（滋賀県提供）


▲観音寺城跡－大石垣遠景


▲観音寺城跡－平井丸

国史跡	みなくちおかやま 水口岡山城跡	滋賀県甲賀市

天正13年(1585)、羽柴秀吉の側近、中村一氏によって築城された織豊系城郭。城跡は水口平野の東端に位置する独立丘陵「古城山」に立地する。山頂からは旧甲賀郡一円が見渡せるほか、琵琶湖や湖西・湖北の山並みを一望できる。

南山麓には東海道が通り、東方には鈴鹿峠を見ることができる。甲賀郡の支配の拠点であると同時に近江から東国への交通の要衝を抑える重要な拠点であった。

天正18年(1590)に増田長盛、文禄4年(1595)に長束正家が城主となる。両者は豊臣家の五奉行に名を連ねる。

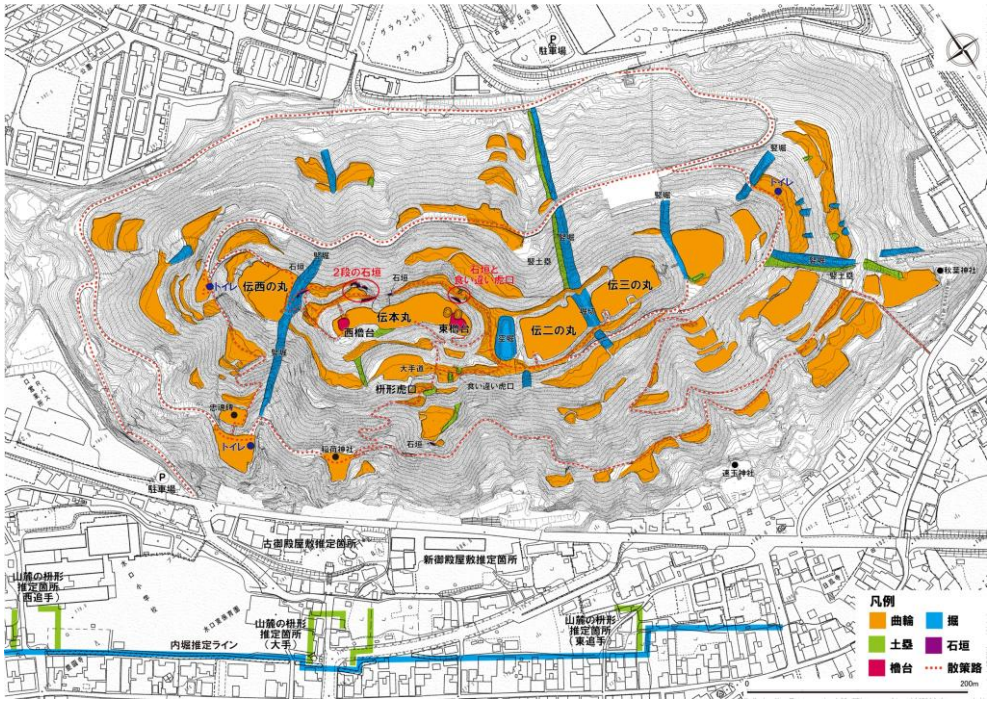
慶長5年(1600)、関ヶ原の戦いの後、西軍に属した長束正家が自刃したため、廃城となる。その後、水口は幕府直轄地となり、水口藩成立後、城跡は藩の御用林となった。

建物などは残らず、城中枢部の北側に石垣が一部残る。標高282mの古城山の山頂部を中心に曲輪が展開し、主郭部の東西両端に櫓台跡があり、いずれかが天守跡であると推定されている。

市街地に隣接する比高約100mの独立丘陵であるため、自然公園として、市民の憩いの場として親しまれている。2014年より「一般社団法人水口岡山城の会」がバルーンによる「天守復元」などのイベントを行い、注目を集めている。

■交通アクセス
●公共交通機関／登山口まで:近江鉄道水口駅から徒歩約10分
近江鉄道水口石橋駅から徒歩約20分
山頂まで:登山口から徒歩約15分
■所在地／滋賀県甲賀市水口町水口字古城地内
■指定年月日／29年2月9日
■問合せ先／甲賀市教育委員会

▼水口岡山城縄張図




▲水口岡山城－空撮


▲水口岡山城－石垣

県史跡	三雲城跡（みくも）	滋賀県湖南市

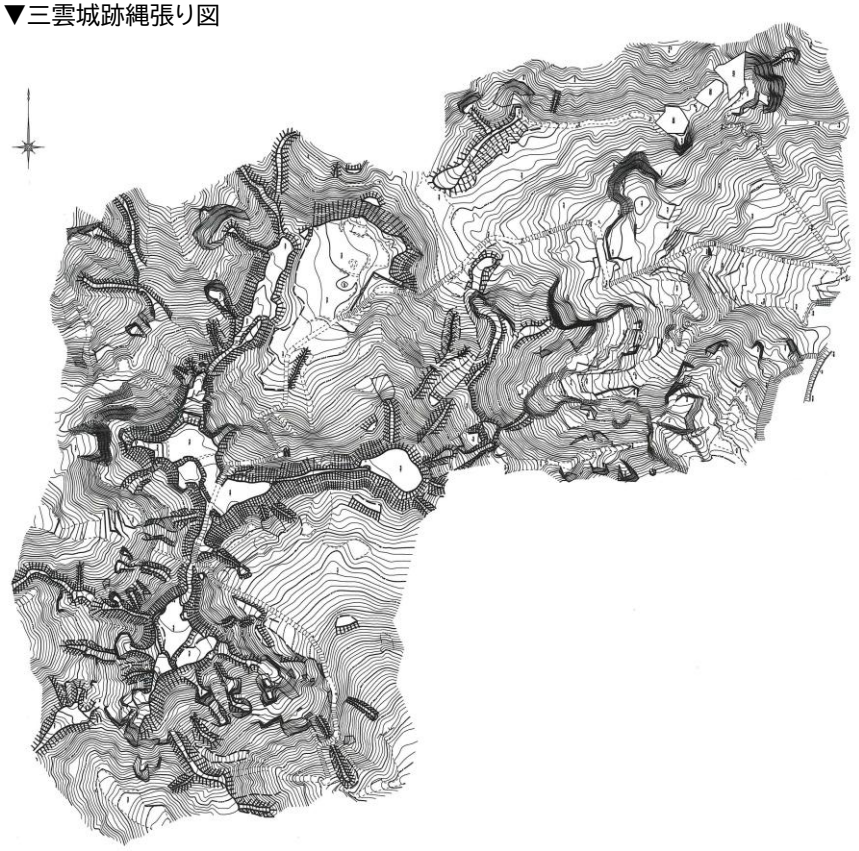
三雲城は、室町幕府の第9代将軍足利義尚の六角攻めに伴い、六角高頼が亡命用の城として、長享元年（1487年、一説には同2年）に三雲典膳に築かせた城で、後に子の行定が整備して東西約300m、南北約200mに及ぶ広大な城域を有していた。織田信長の京都進攻に際し、元亀元年（1570）、信長軍の武将佐久間信盛の攻撃を受けて落城した。

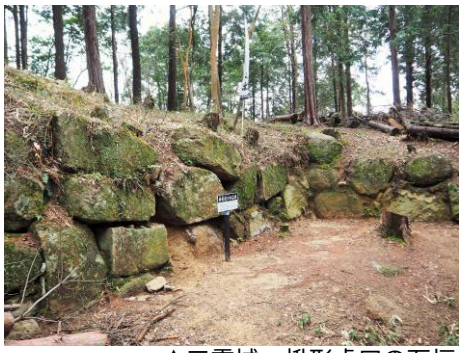
城跡は5つの郭によって構成されており、主郭は約50m×40mの広さがあり、井戸跡も残っている。また北側の郭の北東部分には三方を巨大な石材を用いて築かれた22．4m×12mの枡型虎口が残っている。甲賀群内の城館は平虎口が一般的である中、石垣を用いた桝形虎口を構えている点は特徴的で、石材は矢穴技法によって人工的に割られている。三雲氏の主君である六角氏の居城・観音寺城の流れを汲んで早い時期から石垣を導入した可能性があり、戦国時代の築城技術を伺い知るうえで重要な城といえる。

また、行定が築いたとされる三雲屋敷と呼ばれる、城主の日常の生活の居館が離れた場所にあったが、元亀元年に三雲城とともに落城した。

なお、三雲氏は甲賀武士の有力者甲賀五十三家の1つで、近江守護であった六角氏との関わりが深く、甲賀六家とも称された。永禄6年（1563）に起こった六角氏内の御家騒動「観音寺騒動」でも主家六角氏と家臣との間を取り持つ役目を果たした。

▼三雲城跡縄張り図





▲三雲城－枡形虎口の石垣



▲三雲城－八丈岩

■交通アクセス
●公共交通機関／JR草津線三雲駅下車徒歩30分またはタクシー
●自家用車／名神高速栗東湖南ICから約11㎞、
新名神高速甲南ICから約12㎞
■所在地／滋賀県湖南市吉永字城山

国史跡

清水山城館跡（しみずやま）

滋賀県高島市

史跡　清水山城館跡は、13～16世紀にかけて近江北西部を割拠した西佐々木一族の惣領家佐々木越中氏の居城と伝えられている。饗庭野台地の南東部に位置し、山頂から山腹にかけて山城や屋敷跡が築かれ、段丘上には「犬馬場」「御屋敷」などの地名が残る約1㎞四方の遺構が残存する。また、山麓を南北に縦断する西近江路には清水山城の城下が展開していた。

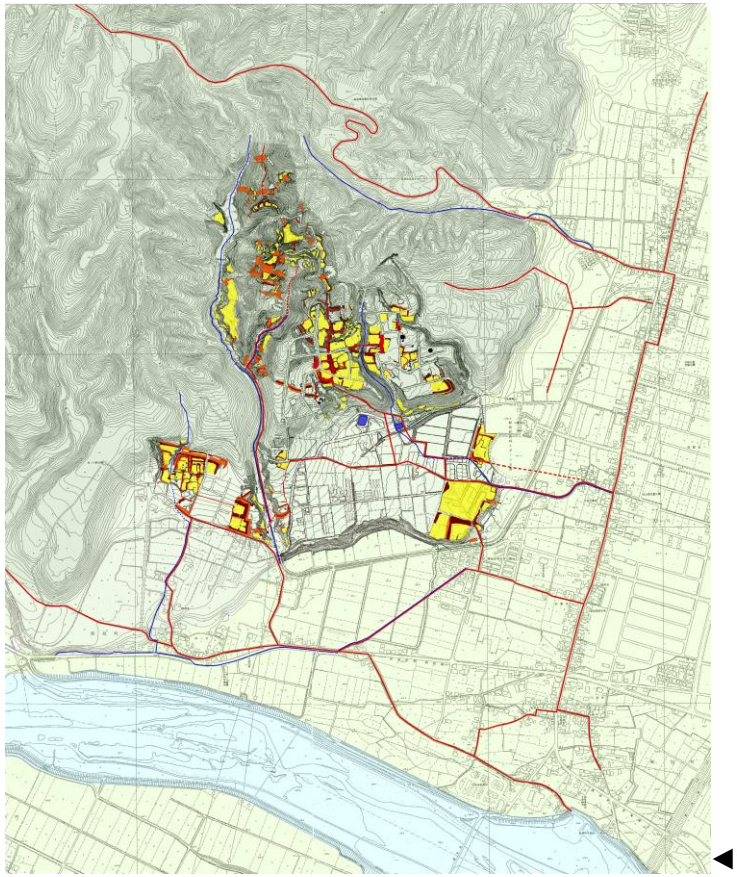
山城は標高210mの主郭を中心として北西・南西・南東の三方に尾根上に、曲輪を配置する放射状連郭式の山城であり、主郭からは高島郡中南部一帯から琵琶湖、その対岸まで一望することができる。清水山城の特徴として、湾曲した低い土塁が、縦列を敷くように配置されているほか、主郭の南面と北西屋根の二か所に畝状空堀群が築かれている。主郭の発掘調査では「常御殿」と考えられる礎石建物跡が検出され、織田信長が高島郡を攻略した時期の遺物が出土している。

山城の南方に広がる山腹一帯には「西屋敷」「東屋敷」の地名とともに、土塁や道によって方形に区画された屋敷跡が残されており、「西屋敷」の中央には幅約10mの大手道が縦断し、「オウテ」「ダイモン」等の地名も残る。遺構の特徴から山腹にあったとされる天台寺院「清水寺」の寺坊跡を屋敷に利用したと推察されている。

現在は山麓からは散策コースが設定され、主郭を中心に保存整備が行われているほか、遺構の顕在化を目的に森林整備も実施されている。地元有志で結成された「清水山城楽クラブ」のみなさんが、のろし駅伝大会への参加など山城を活かした取り組みを行っている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR湖西線新旭駅から西に徒歩約20分
- ●自家用車／国道161号線バイパス新旭ランプより西に約2㎞

■所在地／滋賀県高島市新旭町熊野本・安井川地先
■指定年月日／平成16年2月27日
（追加指定／平成26年3月18日・平成29年10月13日追加指定）
■指定面積／470，276．74㎡



◀清水山城館跡縄張り図



▲清水山城館跡－主郭



▲清水山城館跡－畝状空堀群

田屋（たや）城跡

滋賀県高島市

田屋城跡は、高島郡で活躍した海津衆（饗庭・田屋・新保）の中で、江北浅井（こうほくあざい）氏と縁戚関係にあった田屋氏の城と伝えれている。浅井亮政（すけまさ）は、田屋氏の子とされる明政（あきまさ）を養子にし、娘（鶴千代（つるちよ）／海津殿）の婿にむかえることになる。以後、田屋氏は浅井氏の高島郡進出に大きな役割を果たす。

この田屋氏の館跡とされるのがマキノ町沢に所在する長法寺で、その背後にある森西集落西側の「城山」と呼ばれる標高約310mの山の上に田屋城が位置する。

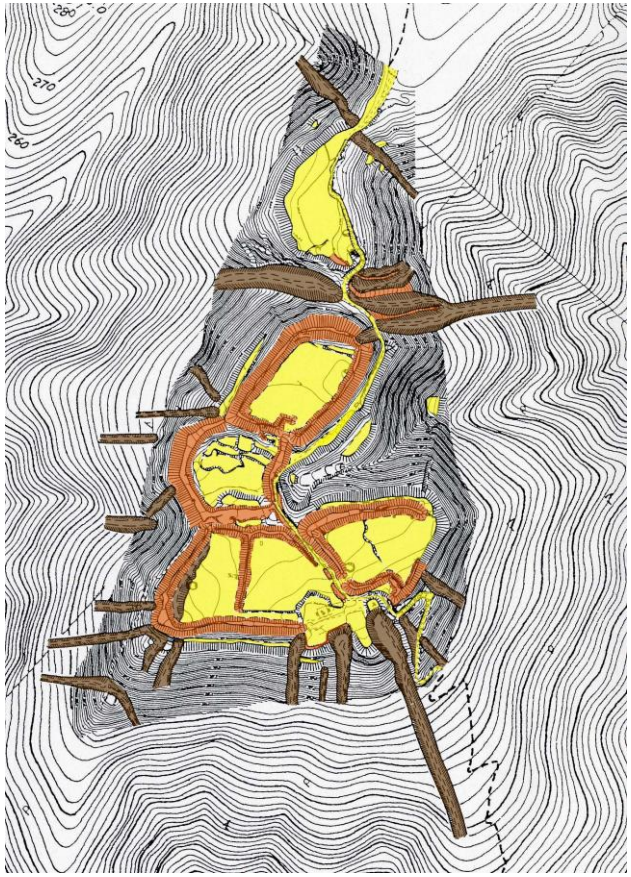
城は堅固な土塁で囲まれた6つの曲輪から構成されており、ふもとから急な坂道を登りきると、南東の曲輪側面の大手口に至る。そこに櫓台を設け、さらに曲輪の土塁を屈曲させた枡形虎口をつくり、横矢がけを意識した堅固な造りとなっている。城内に入ると、広い曲輪が連続し、曲輪群の北奥には主郭と考えられるひときわ高い土塁で囲まれた曲輪が残り、こちらも大手口同様、枡形虎口が設けられている。主郭の背後には県下の城郭でも最大級の堀切を有し、背後の曲輪と画している。

田屋城の南とされた竪堀は、他の遺構と規模の違いが認められ、元亀・天正年間に改修されたものと推定されている。その後、対柴田勝家の賤ヶ岳の合戦に備え、羽柴秀吉の命を受けた丹羽長秀によって改修が行われた可能性も指摘されている。

地元の森西区ではパンフレットの作成、案内板、ベンチの設置等が行われ、下草刈りや「のろし駅伝」の参加など継続的な取り組みが実施されている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR湖西線マキノ駅から徒歩50分
- ●自家用車／国道161号線バイパス沢ランプから北西へ約2㎞

■所在地／滋賀県高島市マキノ町森西地先



◀ 田屋城縄張り図



▲田屋城からみたマキノの平野



▲田屋城跡

伊井城跡（いい）

滋賀県高島市

伊井城跡は、長享元年（1487）に幕府と佐々木六角氏との抗争の際に、六角方によって築かれた「河上の城」に推定されている。『朽木文書』によると、幕府の命を受けた朽木貞高いや若狭の武田国信等が「河上の城」を攻撃している。

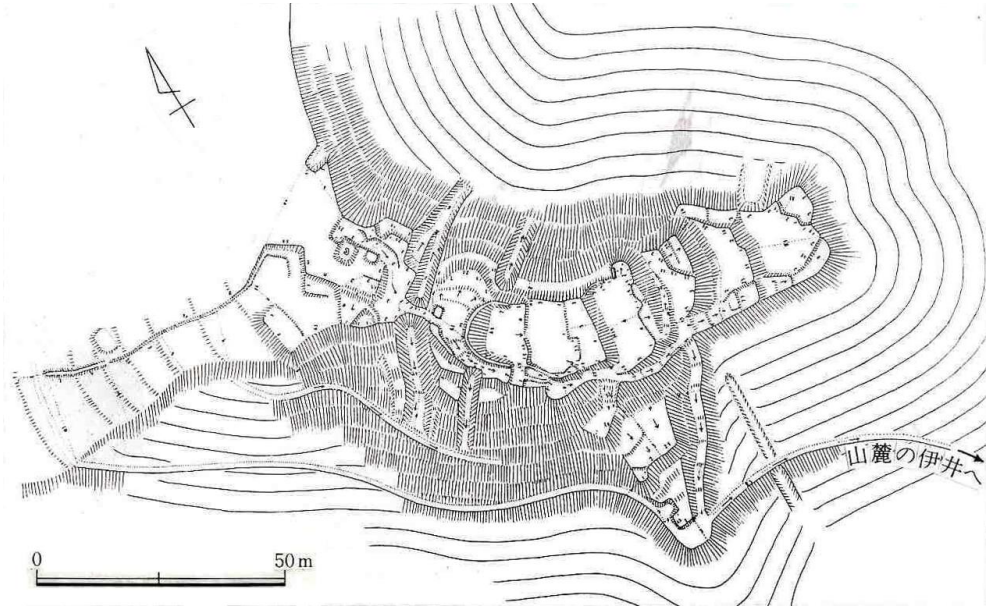
また江戸時代に記された『近江輿地志略』には、伊井村に山中秀國という武将の居城跡があることが記されている。

城跡は箱館山頂から尾根を北東に約1キロたどった、標高489mの山頂部の南東面にあって、城域は東西約80m、南北約20mとほぼ東西方向に細長く展開する。東から西に階段状に連なる曲輪が見られ、その最上段の左右の谷筋の斜面には、それぞれ一条の堀切が設けられている。自然の要害を巧みに利用した山城であり、戦時のみに用いられたものと推定されている。

地元では「鑓城（やじろ）」と呼ばれ、周辺には「城下（しろした）」・「鑓水口（やりみずぐち）」といった字名が残る。

11月に行われる「のろし駅伝」では、高島市内の最高所に位置する城として、「伊井城でのろしを上げる会」の皆さんにより、毎年のろしが上げられている。

▼伊井城跡縄張り図





▲伊井城－遠景



▲伊井城－曲輪

■交通アクセス
●公共交通機関／JR湖西線近江今津駅から徒歩約60分
近江今津駅から湖国バス総合運動公園線15分、伊井下車
●自家用車／国道161号線バイパス弘川ランプから約2㎞
■所在地／滋賀県高島市今津町日置前地先

田中城跡（たなか）

滋賀県高島市

田中城跡は、泰山寺野台地台地に位置し、西佐々木氏の一族田中氏の居城と伝えられている。標高約221mの主郭からは、安曇川や鴨川によって形成された平野や琵琶湖を一望することができる。また、山城から東方に広がる山腹一帯には、天台寺院「松蓋寺」の寺坊があり、城郭として一部改修されたと推察されている。

『近江輿地志略』には「この城上の城と号し、南市村城を下の城と称す」と記され、『信長公記』にみられる「田中の城」に推定されている。『信長公記』によると、織田信長は「元亀元年（1570）朝倉攻めのため、高島の内田中が城に泊まる。」「元亀三年（1572）和邇に出陣し、浅井・朝倉軍を木戸・田中の城に追い込む。」「元亀四年（1573）大船にて高島郡を攻撃。陸からも木戸・田中両城を攻める。」と記され、このことから信長は越前朝倉攻めにあたり当城に滞在したが、浅井氏離反後は信長と高島衆・浅井・朝倉氏との攻防の中で、「田中の城」は信長の攻撃の対象となったことがわかる。

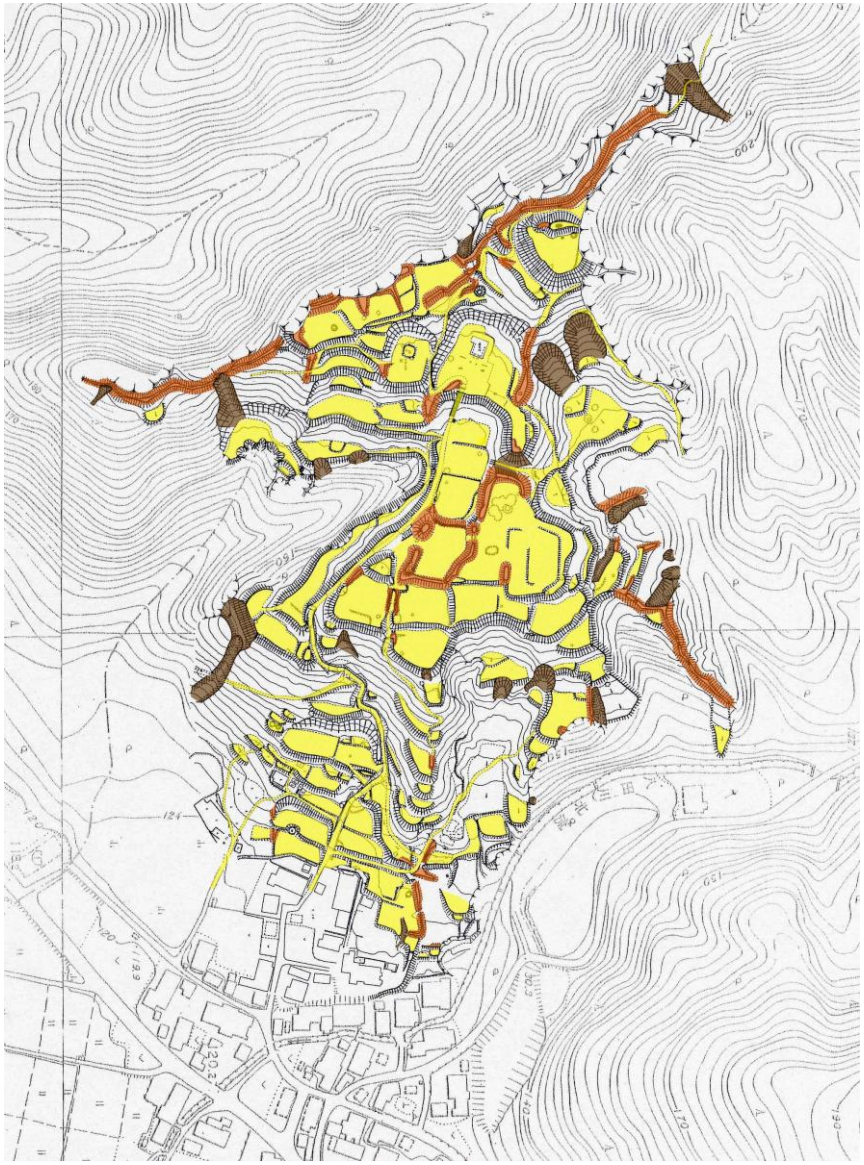
なお、西佐々木氏の一族田中氏の館跡と推定される下の城は、下の城の集落一帯に存在していたと推察されており、「堀の内」「東堀」「南堀」「北堀」などの地名が残っている。平成17年の発掘調査では館の周囲を巡る堀跡の一部が発見されている。



▲田中城－観音堂

■交通アクセス
●公共交通機関／JR湖西線安曇川駅から徒歩約50分
安曇川駅から江若バス高島線10分、上寺下車
●自家用車／国道161号線バイパス安曇川ランプより西へ約4㎞
■所在地／滋賀県高島市安曇川町田中地先

▼田中城跡縄張り図



太山寺（たいさんじ）城跡

滋賀県高島市

比良山系最北端部にあたる泰山寺野丘陵に所在し、西方浄土の信仰の対象とされる阿弥陀山の南側中腹、標高約300mに位置する。この地には聖徳太子の創建と伝える太山寺があったとされ、最上段には寺院の堂塔の基壇と推定される石積を始めとする寺院遺構が色濃く残る一方で、周辺には堀切や竪堀などの城郭遺構が認められることから、古代山岳寺院を城郭化した山城であると考えられている。

太山寺の本体部分があったと考えられる西尾根最上段には、石積みされた方形の建物基壇が残り、本堂や堂塔の建物があったことがわかる。しかし本堂跡背後の尾根上には堀切が、本堂跡東側の平坦面付近から急斜面に沿っては、竪堀が認められる。また寺院の参道と思われる直線道路は、後代に防御を意識した城郭的な虎口へと作り替えられた可能性が高く、城郭遺構としての性質は十分に確認できる。周辺には「御屋敷」、「寺屋敷」の地名も残る。

城郭遺構が武家勢力によるものか、寺院側が自衛のために築城したものか、主体、目的は不明であるが、城郭遺構は部分的に存在することから、一貫として「寺」が存在したのではないか、とも考えられている。

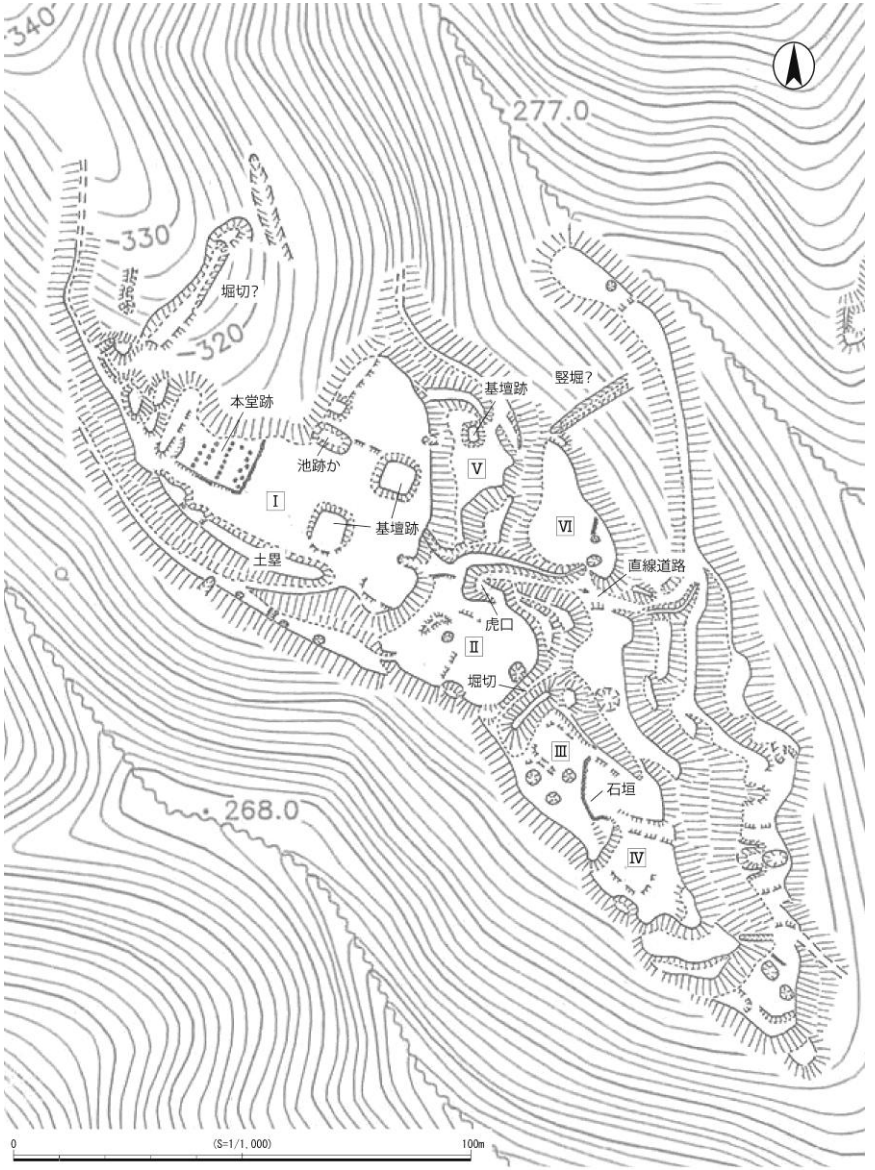


太寺山城から平野を望む ▶

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR湖西線安曇川駅から徒歩約80分
- ●自家用車／国道161号線バイパス安曇川ランプより西へ約6km

■所在地／滋賀県高島市安曇川町田中地先

▼太山寺遺跡本堂周辺概略図



西山城跡（にしやま）

滋賀県高島市

西山城は、西佐々木氏の一族である朽木氏の城であると考えられている。安曇川本流と北川の合流点近くに位置する朽木氏の居城、朽木城の背後の西山と呼ばれる標高約365mの丘陵上に位置している。若狭街道と琵琶湖方面への街道を俯瞰できる好位置といえる。

山上東西43m、南北450mの広範囲の最高部に主郭を設け、一段低い位置の南北に曲輪を配置する。虎口は西辺に2カ所開けられているが、南側の虎口から主郭に至る間は、敵の侵入を阻むための枡形が設けられている。また尾根づたいに侵入してくる敵を遮断するため、北曲輪の北方に3条と南曲輪の南方に1条の堀切を設けることで防御を強固にしている。

主郭の北側には馬蹄型の土塁に囲まれた空間があり、狼煙台の遺構だと推定されている。また、北曲輪の東端には飲料水を溜めたと思われる溜桝が良好な状態で残っている。

朽木は日本海と都を結ぶ街道沿いの要地であり、そこに築かれた城は京から北陸方面への緊急連絡用の中継地点としての性格が指摘されている。

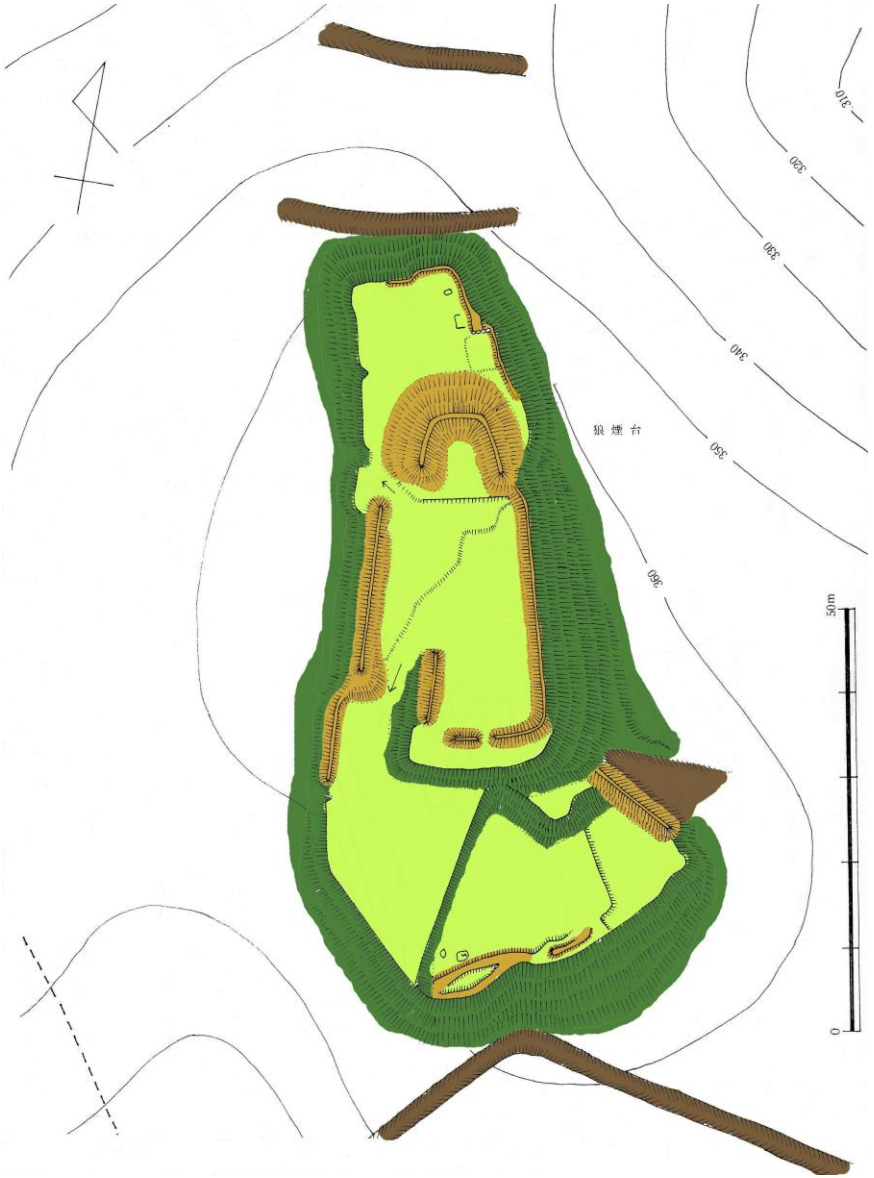
2007年度には、自然や歴史に親しめる空間づくりをめざし、遺構の顕在化や眺望の確保を目的に、間伐や案内板等の整備を行っている。



西山城－のろし台 ▶

■交通アクセス
●公共交通機関／JR湖西線安曇川駅下車江若バス朽木線30分、
朽木グランド前下車徒歩10分
●自家用車／国道367号線山神橋より東約1㎞
■所在地／滋賀県高島市朽木市場・野尻地先

▼西山城跡縄張り図



日爪（ひづめ）城跡

滋賀県高島市

日爪城は、山門領の荘園である木津荘において戦国時代に活躍した饗庭氏の一族で、山門領荘官であった日爪氏の創建によるものと推定されている。城は、日爪集落の西方の「城山」と呼ばれる標高200mの丘陵上に位置し、南方に位置する清水山城の出城としての伝承も残っている。

遺構としては、城の西背後の饗庭野台地からの尾根続きに幾重にも堀切・竪堀が設けられている他、曲輪にはL字状に土塁が巡らされ、その土塁の下方の山腹にも更に土塁が構築されており、厳重に防御された城であったことがわかる。

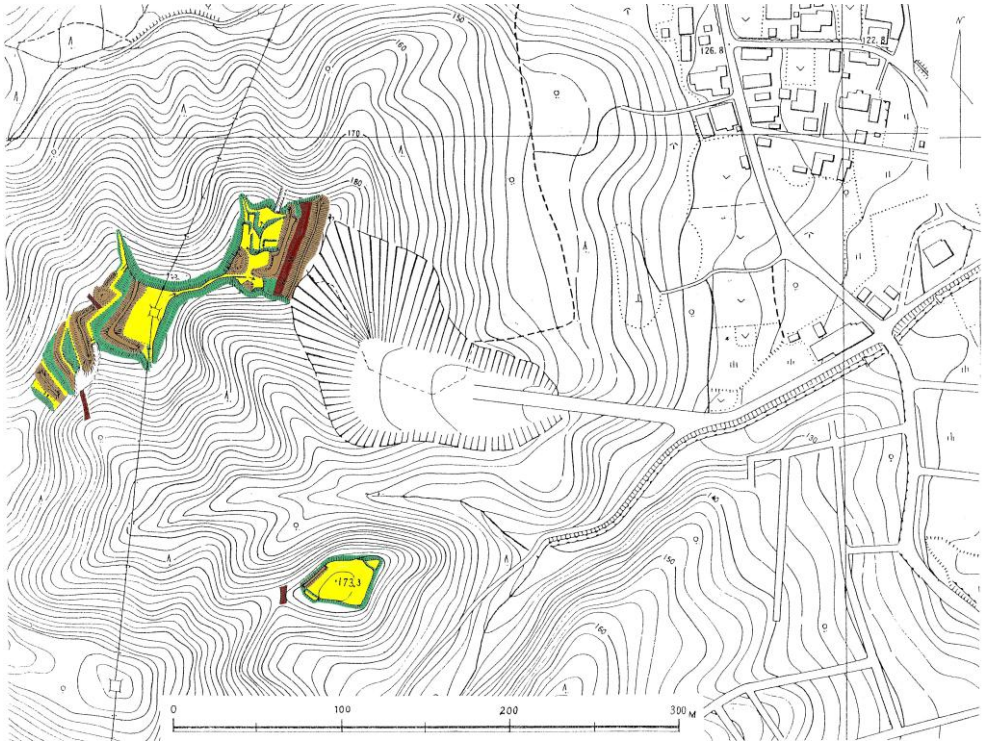
また山麓の日爪集落南西背後の竹藪と共同墓地一帯は、通称「ねごや」と呼ばれ、付近が「日爪館」の跡であると伝えられている。墓地の西方斜面には10カ所以上の削平地と櫓台・土塁・空堀の遺構と思われる複雑な地形が残っている。かつてはこの付近から山上の城に登る山道が通じていたという。

平成20年度に遺構の顕在化や眺望の確保を目的に、間伐や案内板の設置等の整備が実施され、翌年からは地域住民が中心となって「のろし駅伝」への参加も続けられている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR湖西線新旭駅から徒歩約40分
- ●自家用車／国道161号線バイパス新旭ランプより西へ約3㎞

■所在地／滋賀県高島市新旭町饗庭地先

▼日爪城跡縄張り図





▲日爪城跡－土橋



▲日爪城跡－堀切

打下城跡（うちおろし）

滋賀県高島市

打下城は、高島郡内で比良山地が最も琵琶湖に近接する丘陵上、標高約310mに位置し、安曇川や鴨川によって形成された平野や琵琶湖を一望することができる。眼下には洞海（乙女ヶ池）と呼ばれえる内湖が存在し、付近には西近江路が通る。

この城は、清水山城の出城と伝えられているほか、林員清（與次左衛門）の城とも伝えられている。林員清は、早舟あるいは囲舟を所有し、琵琶湖の制海権の一部を掌握していたと考えられている。『信長公記』によると、元亀四年（1573）信長は林員清の所（打下）を陣所として高島郡を攻撃したと記されている。

遺構は、南と北のブロックに大きく区分され、南の二段に構成された曲輪が主郭となる。虎口の通路は二重にクランクし、石積の櫓台を設けた入念な構造になっている。北側の曲輪は高い土塁によって囲まれ、土塁の一部に石積が見られ、曲輪の南東部に七条、北東部に六条の畝状空堀群が展開する。このように、この城の特徴として城の要所に石積が確認されている。

この打下城は大溝古城とも呼ばれているが、信長の高島郡侵略後、眼下の琵琶湖に面した地に、信長の甥である織田信澄によって石垣を伴う大溝城が築かれることとなる。

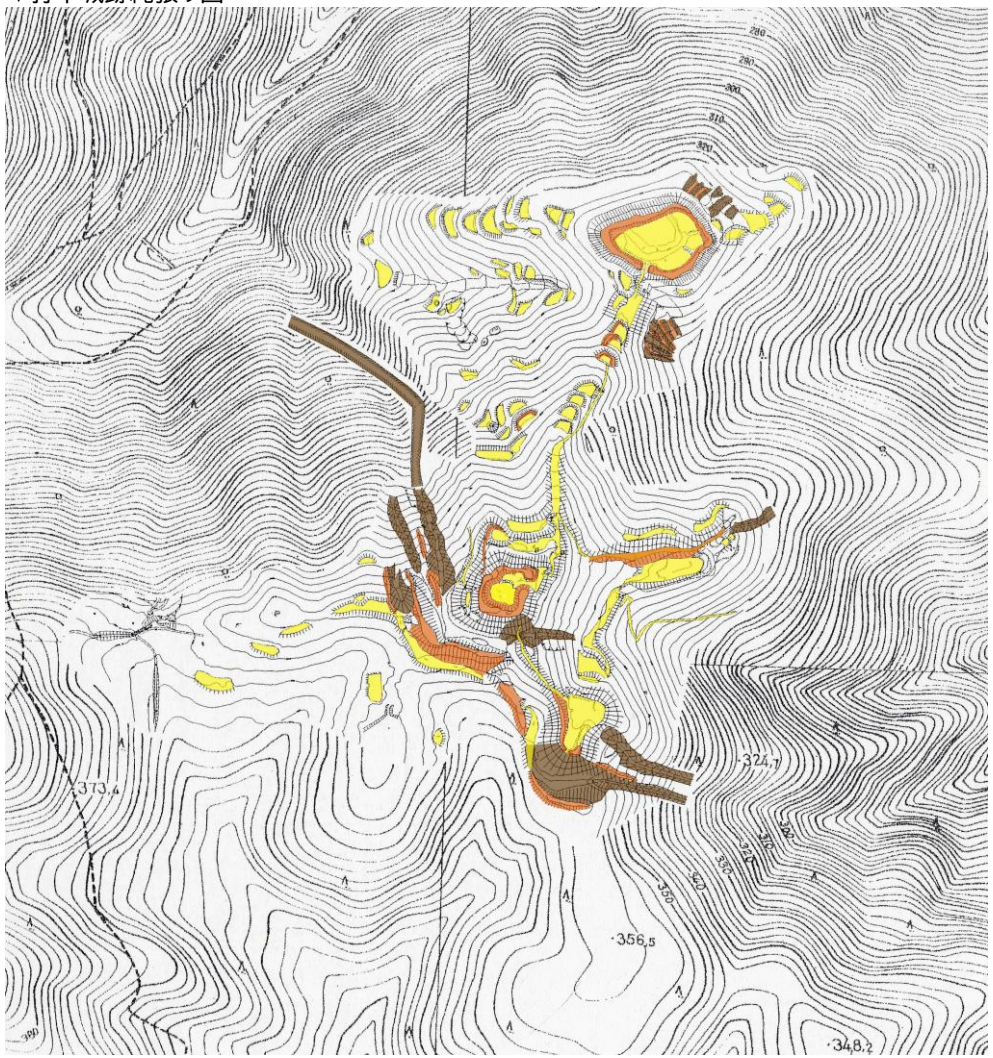


打下城跡－石積 ▶

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR湖西線近江高島駅から徒歩約10分
- ●自家用車／国道161号線バイパス勝野ランプより西へ約1㎞

■所在地／滋賀県高島市勝野地先

▼打下城跡縄張り図



箕作山城跡（みつくりやま）

★滋賀県東近江市

箕作山城跡は、近江国守護職佐々木六角氏の居城である観音寺城跡がある観音寺山（繖山）と対峙する箕作山（標高325m）に築かれた山城である。

箕作山から北に派生した清水山の山頂が箕作山城といわれている。主郭の周囲には土塁と虎口が設けられており、西側の虎口は敵の進入を防ぐため、土塁の外側が屈曲している。また、西側の虎口の前面には石垣が築かれている。主郭から北東方向には尾根に沿って小規模な曲輪が段状をなしている。

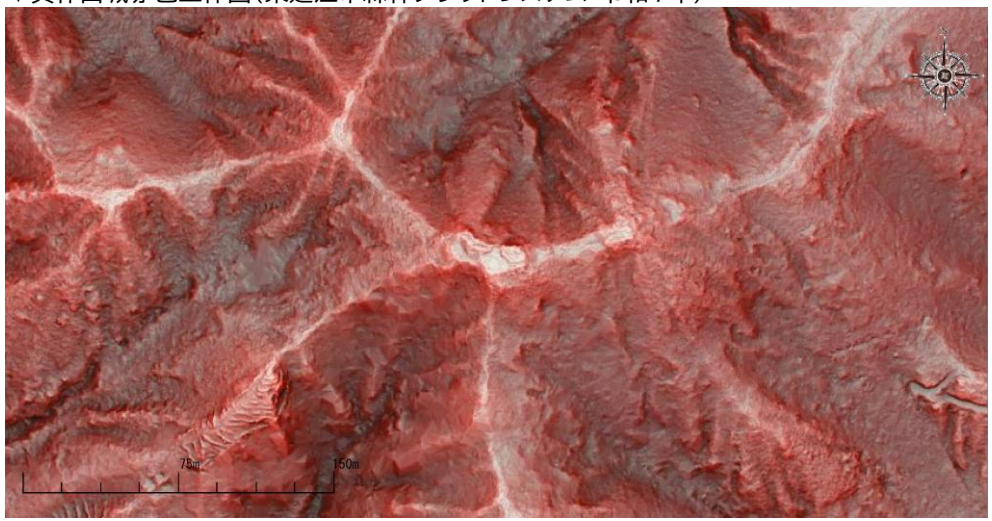
箕作山城は中山道を把握する極めて有利な要害の地に位置し、永禄11年（1568）に織田信長の近江侵攻による箕作山城の戦いにて落城し、これを機に六角氏は滅亡にむかった。

信長の近江侵攻の際に箕作山城の守りに入ったのは、六角氏家臣の建部源八郎秀明と吉田出雲守で、織田方の武将は佐久間信盛、丹羽長秀、木下藤吉郎、浅井新八郎たちである。箕作山城での戦いは織田軍に対し6時間にもおよぶ戦闘を行ったが、力及ばず降伏し落城した。箕作山城の陥落後、建部源八郎、吉田出雲守は西老蘇の東光寺（現在の滋賀県近江八幡市安土町）に落ちのび、良仙・道学と名前を改め、僧侶として生き延びたといわれている。

地元住民・地元団体によって下草刈り等が行われており、訪れやすい遺跡となっている。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR琵琶湖線能登川駅から「近江鉄道バス」山本下車徒歩10分
貴船神社から登城
●自家用車／名神高速道路八日市ICから約20分
名神高速道路蒲生スマートICから約30分
■所在地／滋賀県東近江市五個荘山本町
■問合せ先／東近江市埋蔵文化財センター

▼箕作山城赤色立体図（東近江市森林クラウドシステム　令和7年）





▲箕作山城－全景



▲箕作山城からの眺望

大森城跡（おおもり）

★滋賀県東近江市

大森城跡は布施藤九郎（布施淡路守の子藤九郎公保）の居城と伝えられている。大森城・布施山城ともに布施一族の山城である。

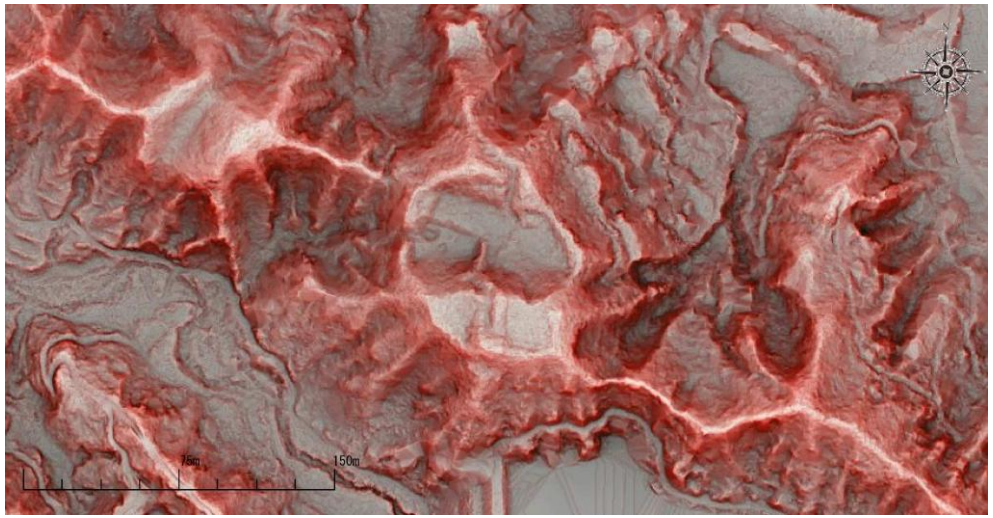
大森城は布引丘陵のうち標高約233mの尾根上に築かれた山城で、その規模は東西に約90m、南北に約108mで、布施三河守を城主とする布施山城跡（布施町）より2倍以上も大きいといわれている。大森城の縄張りは高低差のある3つの郭と土塁によって構成されている。一番高い所にある郭には、土塁・櫓台・腰郭・竪堀が存在する。

布施淡路守公雄の子である藤九朗公保は、佐々木六角氏が没落した後、織田信長の目にとまり馬廻衆として引き立てられたが、本能寺の変に際し信長と運命を共にしたとみられる。

さらに、公雄の子である布施大学友次は「出羽州山形最上に属す」とあり、豊臣秀吉の時代には最上氏の家臣であったことがうかがいしれる。

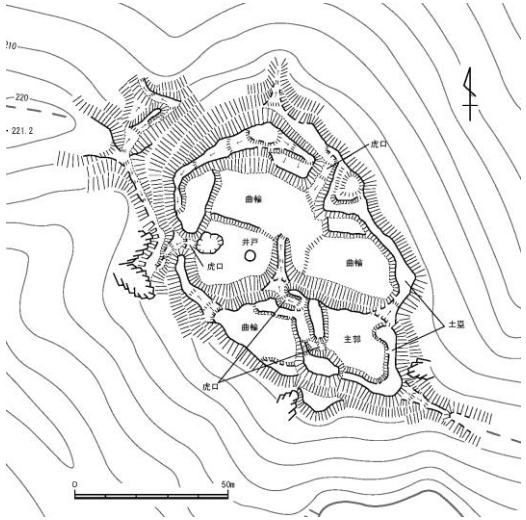
また、大森城跡より北西方向の大森町集落にある大森陣屋遺跡（現在の東近江市立玉緒小学校）は、江戸時代には最上氏の陣屋が置かれたところであるが、昭和58年（1983）、平成27年（2015）の発掘調査では室町時代の堀跡が確認されており、大森陣屋が置かれる以前には布施氏の平常時の居館があったと考えられている。

地元住民・地元団体によって下草刈り等が行われており、訪れやすい遺跡となっている。



▲大森城赤色立体図（東近江市森林クラウドシステム　令和7年）

大森城縄張図▶
（現地看板から引用）



▼大森城－虎口



■交通アクセス
- ●公共交通機関／近江鉄道八日市駅から「ちょこっとバス」大森前下車徒歩 25 分
- ●自家用車／名神高速道路八日市ICから約10分

■所在地／滋賀県東近江市大森町

■問合せ先／東近江市埋蔵文化財センター

布施山城跡（ふせやま）

★滋賀県東近江市

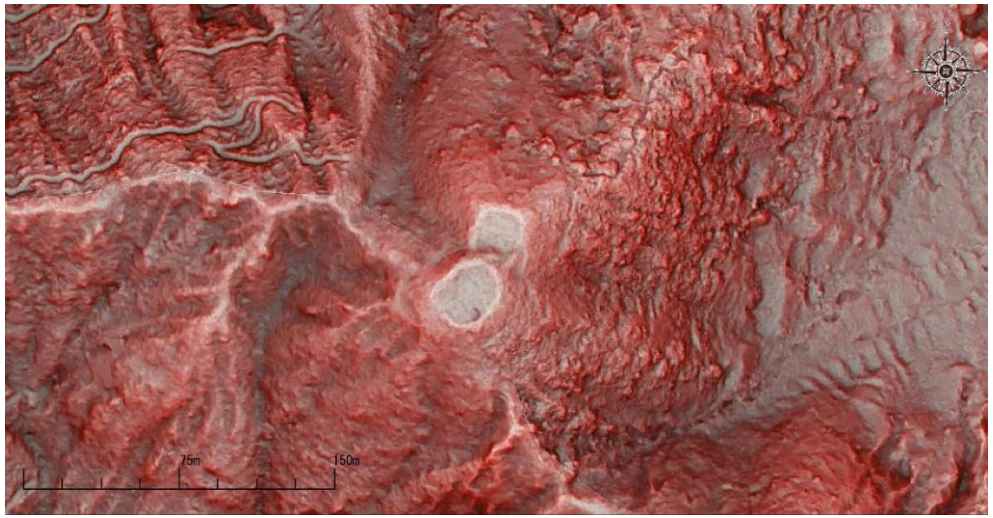
布施山城跡は、『梁塵秘抄』で名高い布施の溜池を見下すようにそびえる玉緒山の山頂（標高240m）にある。城主は佐々木六角氏の家臣で、布施氏の本家筋である布施三河守である。城跡の規模は北東から南西方向に約62mで、布施山の頂上に「8」の字状に曲輪が残る複郭式の構造である。南西部の主郭は22m×29mの大きさで高さ約80㎝の土塁に囲われている。主郭北東部の虎口には両脇に石材が残存し、古墳の石室の石材を用いた石積の門（埋門）が存在していたと考えられている。北東部の副郭は21m×18mの大きさで、高さ約50㎝の土塁に囲われ、南東部には屈曲した虎口が設けられている。また、主郭の南斜面から円筒埴輪の破片が採集されていることから、布施山の頂上には古墳時代中期の古墳が築かれていたと考えられている。

永禄6年（1563）の観音寺騒動以来、近江守護佐々木六角氏と布施氏を含む家臣団との溝は深まり、布施氏は六角氏と距離を置いたのである。

永禄9年（1566）5月には布施三河守、大塚氏、安部井氏、横山氏が布施山城に拠って佐々木六角氏に反旗をひるがえす布施山の戦いが起こる。同年7月に浅井長政は現在の東近江市五個荘小幡町まで南下して陣を張り、その先陣は蒲生野の船岡山に到達する勢いをみせている。これに対して、六角氏は三上氏、池田氏、平井氏を各地に配して蒲生野で戦いを繰り広げる。この頃まで布施山城は城としての機能を果たしていたことがわかる。

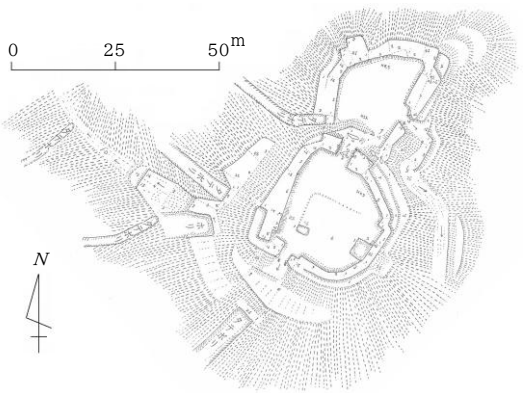
地元住民・地元団体によって下草刈り等が行われており、訪れやすい遺跡となっている。

■交通アクセス
●公共交通機関／近江鉄道大学前駅下車徒歩20分
●自家用車／名神高速道路八日市ICから約20分
名神高速道路蒲生スマートICから約10分
■所在地／滋賀県東近江市布施町
■問合せ先／東近江市埋蔵文化財センター



▲布施山城赤色立体図（東近江市森林クラウドシステム　令和7年）


▲布施山城－全景



▲布施山城縄張り図
（『滋賀県中世城郭分布調査4』より）

佐生城跡（さそ）

★滋賀県東近江市

佐生城跡は、湖東平野に特徴的な独立山塊のひとつである繖山（きぬがさやま）（標高432m）の北側に位置する標高約158mの佐生山の山頂に立地している。城主は繖山山上に観音寺城を築いた近江守護佐々木六角氏の家臣である後藤氏と考えられている。

佐生城跡の発掘調査はされておらず、正確な築城時期は不明で、文献に見当たらない城郭である。その規模は平成25・26年度に実施した測量調査によって東西47m、南北34mの広さの平坦部から構成されていることがわかり、平面形態はほぼ三角形である。また、城の南面には長さ約56m、高さ約1～4.5mの石垣が比較的良好に残っている。とくに南西隅の石垣は、高さ約4.5mの石垣が残り、そのコーナー部分にある算木積みは見ごたえ十分である。

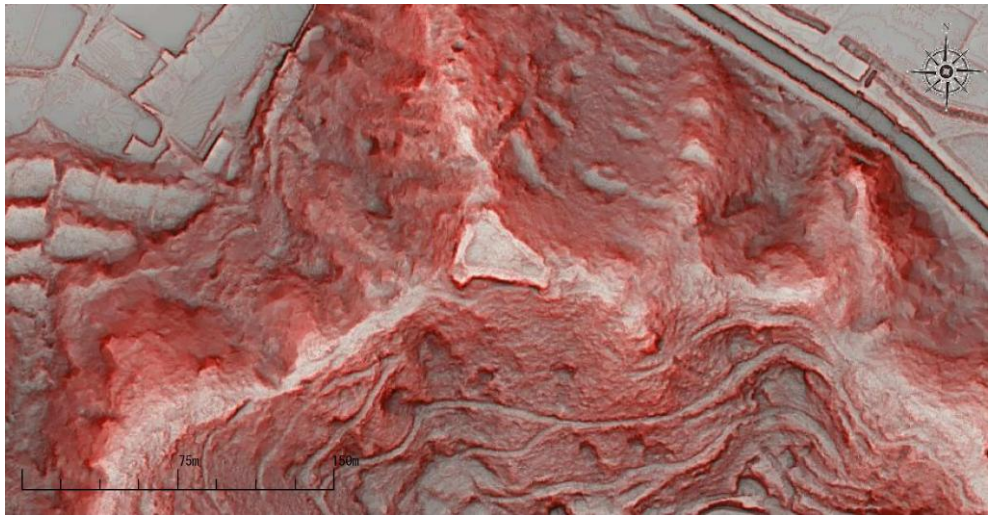
佐生城跡より東側約1.5㎞の和田山山頂（標高180m）には観音寺城の支城の1つである和田山城がみられる。城の大きさは佐生城同様に小規模ながら土塁や空堀が残されている。

和田山城及び佐生城はその立地から観音寺城北面の防衛拠点となっていたことから、織田信長の近江侵攻時において佐々木六角氏は観音寺城、佐生城、箕作山城、長光寺城をはじめとする各地の支城に兵を配し、信長軍を待ち構えていた。しかし、信長軍は永禄11年（1568）に愛知川に陣を構えると、周囲の支城には攻め込まず、観音寺城と箕作山城に攻めいり、わずか1日で箕作山城は陥落した。戦いに敗れた佐々木六角氏は夜の闇にまぎれて甲賀（現在の滋賀県甲賀市）へと出奔した。

地元住民・地元団体によって下草刈り等が行われており、訪れやすい遺跡となっている。

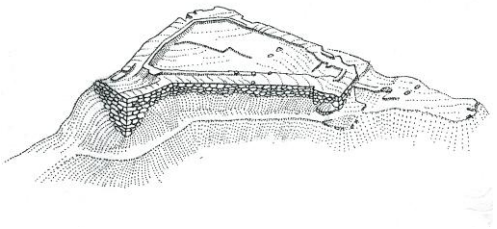
■交通アクセス
●公共交通機関／JR琵琶湖線能登川駅から「近江鉄道バス」佐生下車徒歩5分
■所在地／東近江市佐生町・五個荘日吉町
■問合せ先／東近江市埋蔵文化財センター

▼佐生城赤色立体図（東近江市森林クラウドシステム　令和7年）





▲佐生城－石垣



▲佐生城イメージ図
（『滋賀県中世城郭分布調査4』より）

国史跡	鎌刃城跡（かまは）	滋賀県米原市

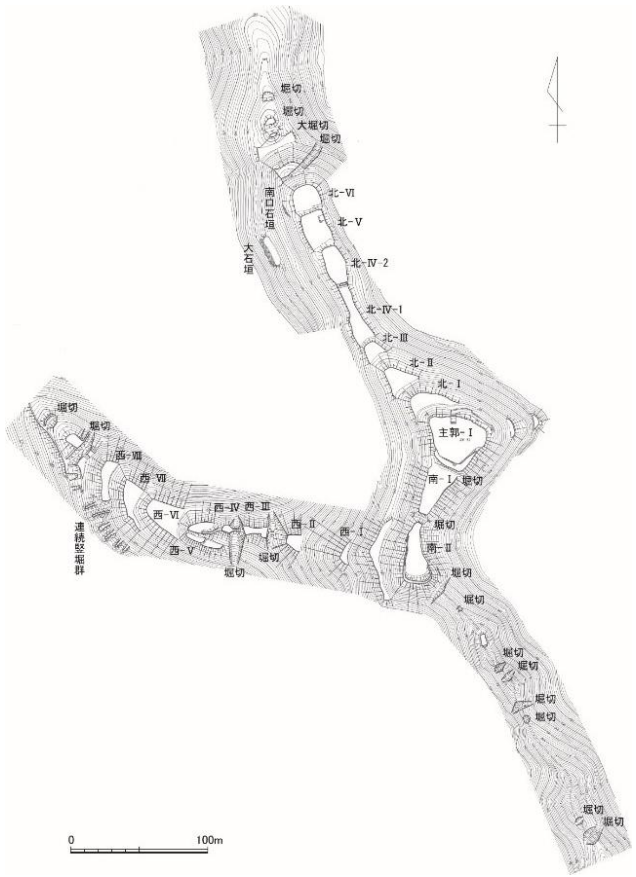
戦国時代の近江は南に六角氏、北は京極氏のちに浅井氏が支配していた。

この南北の国境となったのが坂田郡で、郡境には鎌刃城などの「境目の城」が築かれた。鎌刃城の築城年代は明らかでないが、『今井軍記』には文明4年（1472）に今井秀遠が堀次郎左衛門尉の立て籠もる鎌刃城を攻めており、この頃にはすでに堀氏の城として機能していたとみられる。天文7年（1538）には六角定頼が湖北に侵攻し、鎌刃城、太尾山城、磯山城、佐和山城がことごとく落城している。元亀元年（1570）、浅井長政が織田信長に叛旗をひるがえすが、鎌刃城主堀秀村は織田軍の調略に応じ織田方に付く。信長は戦時下の湖北支配を堀氏に任せ、一説には堀氏は坂田郡6万石を賜ったといわれている。秀村の発給した文書は坂田郡にとどまらず、浅井郡内の竹生島や菅浦にまでおよんでいる。こうして鎌刃城は単なる境目の城というだけではなく、堀氏の居城として湖北支配の拠点となった。しかし、『当代記』によると天正3年（1574）に堀氏は突然改易され、これに伴い鎌刃城も廃されたようである。

鎌刃城跡の構造は主郭と副郭を中央に構え、北西・西・南の三方へ延びる尾根上に曲輪を配置する。主郭よりも高所である南方の尾根上には、8本にものぼる堀切を設け尾根筋を遮断しており、その様が鎌の刃に似ていることが呼称の由来とする説もある。鎌刃城跡の遺構には連続竪堀群や堀切、土塁のような土の城の要素と、石垣や石塁、石段といった石の城の要素が共存し、土の城から石の城への移り変わりが感じられる。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR東海道本線米原駅下車
- ●自家用車／北陸自動車道米原ICから約10分

■所在地／滋賀県米原市番場
■指定年月日／平成17年3月2日



◀ 鎌刃城縄張り図



▲鎌刃城－主郭前石垣



▲鎌刃城－主郭虎口

国史跡

上平寺城跡（じょうへいじ）

滋賀県米原市

応仁の乱以降続いた北近江守護京極家の内紛を、16世紀初頭にようやく治めた高清が、伊吹山麓に京極氏館を構えた時、詰の城として築かれたのが上平寺城である。大永3年（1523）の浅見・浅井氏ら家臣団によるクーデターで、京極氏館は北近江の守護館としての役割を終えるが、上平寺城は越前道（北国脇往還）を見下ろす位置にあることから、江濃国境の境目の城として機能することになる。

元亀元年（1570）、浅井長政が対織田信長戦に備えて、朝倉氏の援助を受け、長比城を築城すると同時に上平寺城を改修している。しかし、堀秀村と樋口直房らが信長に内応したことで、戦わずして開城している。現在見られる遺構はこの時のもので、尾根を断ち切る巨大な堀切や、放射状に堀を巡らす連続竪堀群により周囲を守り、尾根上に土塁で囲んだ曲輪を配する典型的な中世の山城の姿を見ることができる。なかでも、土橋を渡った先の城内中心部へ至る虎口は、高い土塁で囲まれた内桝形状となっており、見どころである。

上平寺城の西側の尾根には、城塞化された山岳寺院・弥高寺跡があり、館跡の庭園遺構や城下など、戦国大名の在り方を知るうえで貴重な遺跡群である。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR東海道本線近江長岡駅
- ●自家用車／北陸自動車道米原ICから約20分

■所在地／滋賀県米原市上平寺・弥高・藤川

■指定年月日／平成16年2月27日



◀上平寺城縄張り図



▲『上平寺城絵図』



▲上平寺城－虎口

市史跡

太尾山城跡（ふとおやま）

滋賀県米原市

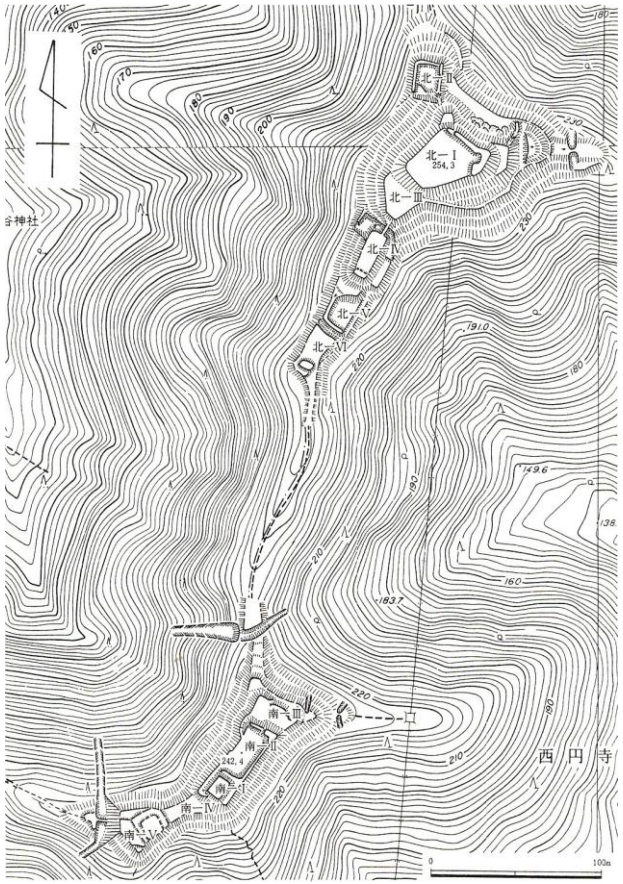
太尾山城は、JR米原駅の東にそびえる太尾山にある。築城年代は不明だが、在地の土豪米原氏によって築かれたといわれている。

文明3年（1471）、隣国美濃の守護代斎藤妙椿が近江に侵攻し、米原山で合戦したとの記録があるが、これが太尾山城と考えられている。天文7年（1538）の南近江の六角定頼による北近江侵攻では、太尾山城には六角方の永田氏などが布陣したことが記録されている。以後、「境目の城」として北近江の京極・浅井氏と、六角氏の攻防が繰り返される。永禄4年（1561）に浅井長政が太尾山城を攻略し、中嶋直頼を入れるが、元亀2年（1571）、織田信長による浅井氏攻めにより佐和山城が開城すると、中嶋直頼も太尾山城を退き、廃城となった。

太尾山城は北城と南城からなる「別城一郭」と呼ばれる構造で、比較的進んだ縄張りから「境目の城」に最新の築城技術が投入されていたことがうかがえる。

発掘調査では、櫓や御殿的居住施設、倉庫的施設と考えられる礎石建物が見つかった。投棄されたとみられる土師皿や灯明皿などから、小谷城や鎌刃城同様に山上に生活空間があったことが明らかとなった。

太尾山城の建物について、『大原観音寺文書』のなかに「太尾門矢蔵之用、上野より材木三本召寄候」という、中嶋直頼が観音寺に宛てた文書があり、伊吹山麓の上野から材木を取り寄せて櫓門を建てていたことがわかっている。



◀太尾山城縄張り図



▲太尾山城礎石建物跡



▲太尾山城礎石建物跡

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR東海道本線米原駅下車
- ●自家用車／北陸自動車道米原ICから約15分

■所在地／滋賀県米原市米原・梅ケ原・西円寺

■指定年月日／平成13年9月19日

市史跡

福知山城跡（ふくちやま）

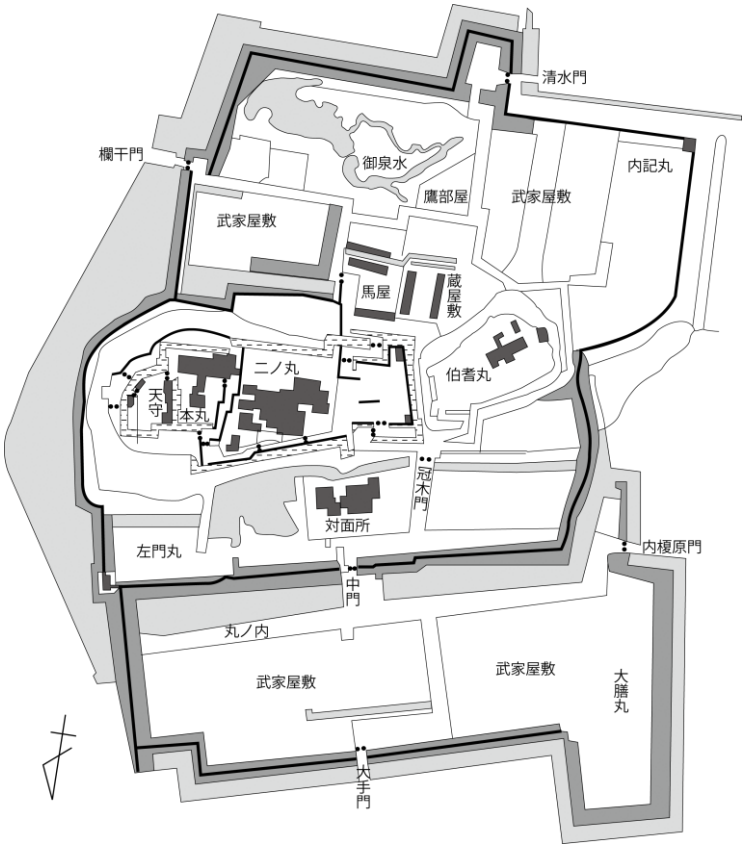
★京都府福知山市

福知山城は織田信長の命により丹波平定を成し遂げた明智光秀によって天正7年頃築城された。それ以前は土豪塩見氏（横山氏）が籠ったという。光秀は城代として明智秀満を置き、城下の経営にあたり、地子銭を免除し町場の繁栄につとめ、由良川に堤防を築いたと伝えられる。由良川に対し伸びる丘陵を中心に築城された平山城で、周辺の河川を利用して城郭及び城下町を堀で囲む「総構」の城として、伝来する絵図から17世紀前半までにはほぼ完成していたと考えられる。光秀が山崎で敗れた後は、羽柴秀長、杉原家次、小野木重次が城主となり江戸時代を迎える。慶長5年（1600）関ヶ原合戦後、有馬豊氏、岡部長盛、稲葉紀通、松平忠房と続き、寛文9年（1669）常陸国土浦から朽木稙昌が入部し幕末まで13代にわたり城主として在城する。

昭和61年天守閣の再建にあたり実施された発掘調査では、天守台から本丸にかけての一連の石垣が複数の時代に分けて組み上げられたことが判明しており、現在の再建大天守と小天守が連なる部分は3期にわたり築造されたことがわかる。この内、再建大天守の基礎になっている南側が最初期の天守台で光秀期の築造と考えられる。野面積みの石垣には宝篋印塔や五輪塔等石造物を利用した「転用石」が組み込まれており、発掘調査により出土したものを含め500個以上が確認されている。

城の周辺には佐藤太清記念美術館や丹波生活衣館、鉄道館フクレルなどが整備されている。また、市内観光にはボランティアガイドを利用できる。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR福知山駅から徒歩約15分、市バス福知山駅前から徒歩約20分
（まちなか循環路線北ルート利用）福知山城公園前から徒歩約5分
■所在地／京都府福知山市字内記5番地
■指定年月日／昭和40年10月14日
■問合せ先／福知山城天守閣☎&FAX. 0773－23－9564



▲福知山城曲輪図（松平時代）



▲福知山城（春）



▲福知山城から市街地を臨む

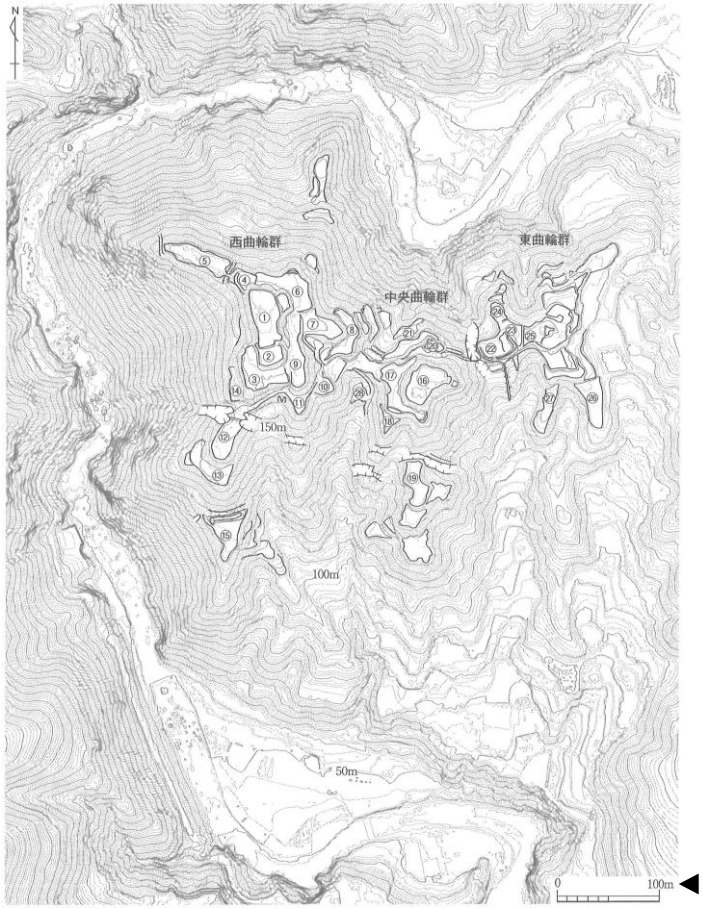
国史跡	芥川城跡（あくたがわ）	大阪府高槻市

芥川城跡は平野部との境に位置する標高182．6mの三好山にあり、その範囲は東西約500m、南北約400mに及び摂津国最大規模を持つ。山頂からは大阪平野が一望でき、山腹は南北と西側の3方で芥川が形成した険しいV字谷となる。山頂を主郭とし、急斜面を持つ自然地形を活かして尾根に取りついた多くの曲輪を配置した連郭式の山城で、山頂から延びる尾根や深く刻み込まれた谷にむけて設けた曲輪に切岸・堀切と竪土塁などの防御施設を配している。出土遺物は生活空間を兼ねていたことを示すものであり、特に主郭周辺では貯蔵・調理から供膳具に加え文具、茶道具、奢侈品類や碁石などが出土している。芥川城が権力者による政治・文化的活動の拠点であったことを裏付けている。

永正13年（1516）までに、室町幕府の管領・細川高国が築城。その後、幕府政治の主導権争いの中で高国に勝利した細川晴元が城主となる。天文22年（1553）、三好長慶が城を守る細川晴元方を攻め破り居城とした。長慶の居城として長慶の一族や、松永久秀をはじめとする家臣らが屋敷を構えるなど、畿内政治の政庁として威容を誇った。そののち、永禄11年（1568）、城から三好一族を追った織田信長と足利義昭は、この地で天下の形勢を見定めた後に上洛を遂げた。芥川城は義昭の上洛後、和田惟政に任せられ、惟政が高槻城に居城を移すと、配下の高山飛騨守（右近の父）に預けられた。

芥川城跡は、織田信長が実権を握る直前の戦国時代の政治・文化を知る上で貴重な歴史遺産として、令和4年11月10日に国の史跡に指定された。現在、城跡の再整備やスマートフォンアプリ「AR芥川城」をリリースするなどして城跡の保存と活用を進めている。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR京都線「高槻」駅北のりばから
高槻市営バス〈塚脇〉〈下の口〉行きに乗車、「塚脇」下車、徒歩約30分。
■所在地／大阪府高槻市大字原
■指定年月日／令和4年11月10日



◀芥川城跡縄張り図


▲芥川城－空撮


▲芥川城－大手石垣

国史跡	置塩城跡（おじお）	兵庫県姫路市

置塩城は、応仁・文明の乱後に播磨・備前・美作のほか加賀半国の守護職に復権した赤松氏が居城とした山城である。

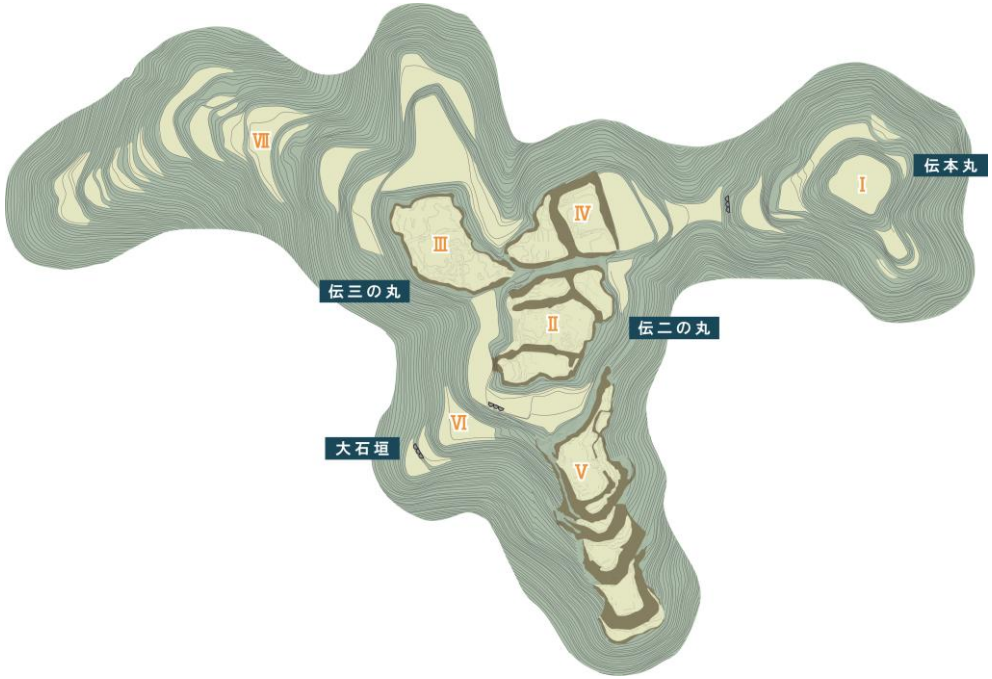
遺構は、伝本丸跡（Ⅰ郭）が位置する城山（標高370m）の山頂部とその西の伝二の丸跡（Ⅱ郭）・伝三の丸跡（Ⅲ郭）が位置する頂部を中心に曲輪が配置される。その規模は東西約600m、南北約400mを測り、播磨最大級を誇る。中心部の曲輪は屋敷地として利用され、築地土塁をめぐらせるほか、伝二の丸跡や伝三の丸跡等の一画には庭園が設けられる。通路が発達していることも特徴であり、中心部の屋敷曲輪は中央通路に対して個別に開口部を保有する。石垣は約50箇所で確認されている。大半が曲輪端部の土留めまたは築地基礎として構築されたものであるが、連郭の南西端の曲輪（Ⅳ－3郭）には唯一大型の石材を使用した「大石垣」が存在する。

平成13～17年度に行われた発掘調査の結果、伝本丸跡（Ⅰ－1郭）で城の主郭櫓とみられる塼列建物を検出した。遺物は京都系土師器皿や中国製磁器等の16世紀後半頃の生活雑器が多数出土しており、この時期に居城として整備された可能性が高い。城主で言えば、赤松晴政・義祐・則房の代に相当する。伝二の丸跡（Ⅱ－1郭）で見つかった瓦溜からは「甚六作」のヘラ書きを有す鳥衾が出土しており、永禄年間（1558～70）頃に大和系瓦工人（橘氏）によって製作されたものと想定される。

羽柴秀吉による天正9年（1581）の播磨国内九城の城割令から間もなく廃城を迎えたと考えられている。

■交通アクセス
　●公共交通機関／JR山陽本線姫路駅⇒神姫バス「宮置」
　●自家用車／中国自動車道夢前スマートICより南へ約5㎞
■所在地／兵庫県姫路市夢前町宮置・糸田地内
■指定年月日／平成10年1月30日

▼置塩城跡平面図
（『国指定史跡　赤松氏城跡　置塩城跡』パンフレットを一部修正）




▲置塩城跡－庭園跡（Ⅱ－1 郭）


▲置塩城跡－大石垣（Ⅵ－1 郭）

国史跡

三木城跡（みき）

★兵庫県三木市

三木城は、東播磨で最大の勢力を誇った別所氏の居城で、美嚢川左岸の台地上に位置する。本丸・二の丸を中心に、新城・鷹尾山城・宮ノ上要害などで構成され、各曲輪が並立する構造を呈す。規模は東西約600m、南北約700mを測り、城の北側を流れる美嚢川や切り立った崖、南側は山や谷といった自然地形を利用した堅固な城郭であった。

天正5年（1577）に羽柴秀吉が、中国地方攻略のため播磨入りした際、三木城主別所長治は当初秀吉に味方していたが、翌年3月には毛利氏側につき、三木合戦が開始される。天正8年（1580）1月、秀吉による「三木の干し殺し」と呼ばれる兵糧攻めにより、三木城は落城した。長治は、城兵の助命を条件に降状、長治一族が切腹し、1年10か月に及んだ籠城戦が終了した。

落城後も三木が播磨における京都や大坂からの入口として重要な場所であったため、杉原家次、前野長康、中川秀政・秀成が城主となった。

文禄3年（1594）の中川移封後は、豊臣家の直轄地となり、一時的に廃城となったようである。慶長5年（1600）、池田輝政の姫路入封に伴い、池田領6支城の一つとなり、家老の伊木忠次が入城した。

しかし、元和元年（1615）の一国一城令によって廃城となった。

現在は、三木城本丸跡は公園となっており、二の丸跡には「みき歴史資料館」が立地している。

また、平成29年度に策定した「国指定史跡三木城跡及び付城跡・土塁整備基本計画」を基に、保存と活用のための整備を進めている。令和8～10年度には、三木城本丸跡・二の丸跡の整備を実施する予定としている。

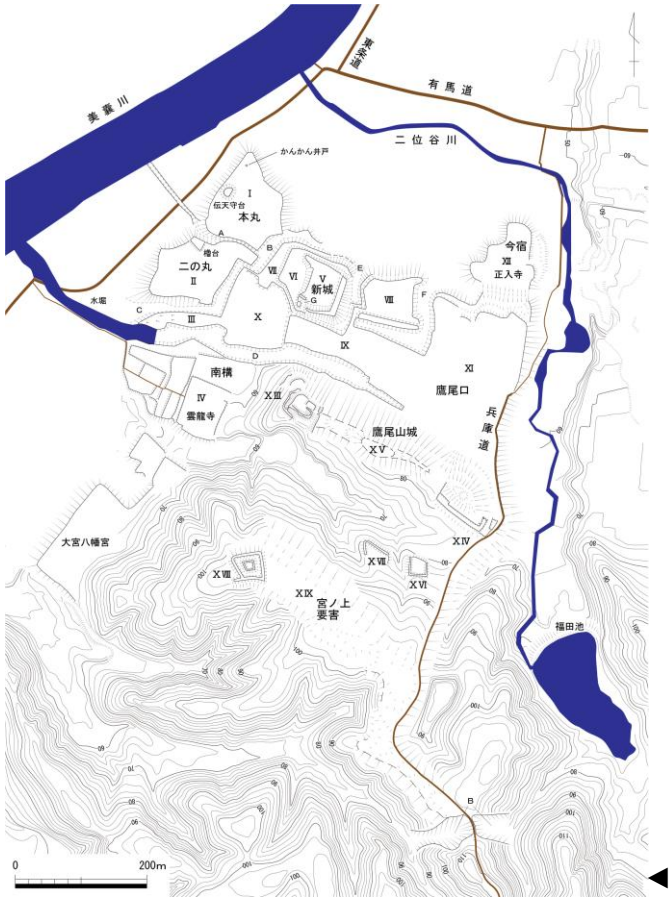


▲三木城－本丸跡（南から）

■交通アクセス
- ●公共交通機関／神戸電鉄三木上の丸駅から徒歩約3分
- ●自家用車／山陽道三木小野ICから約4㎞

■所在地／兵庫県三木市上の丸町・福井・本町1丁目

■指定年月日／平成25年3月27日



◀三木城－縄張り復元図



▲三木城－二の丸跡　堀検出状況



▲三木城－かんかん井戸（南東から）

国史跡

黒井城跡（くろい）

兵庫県丹波市

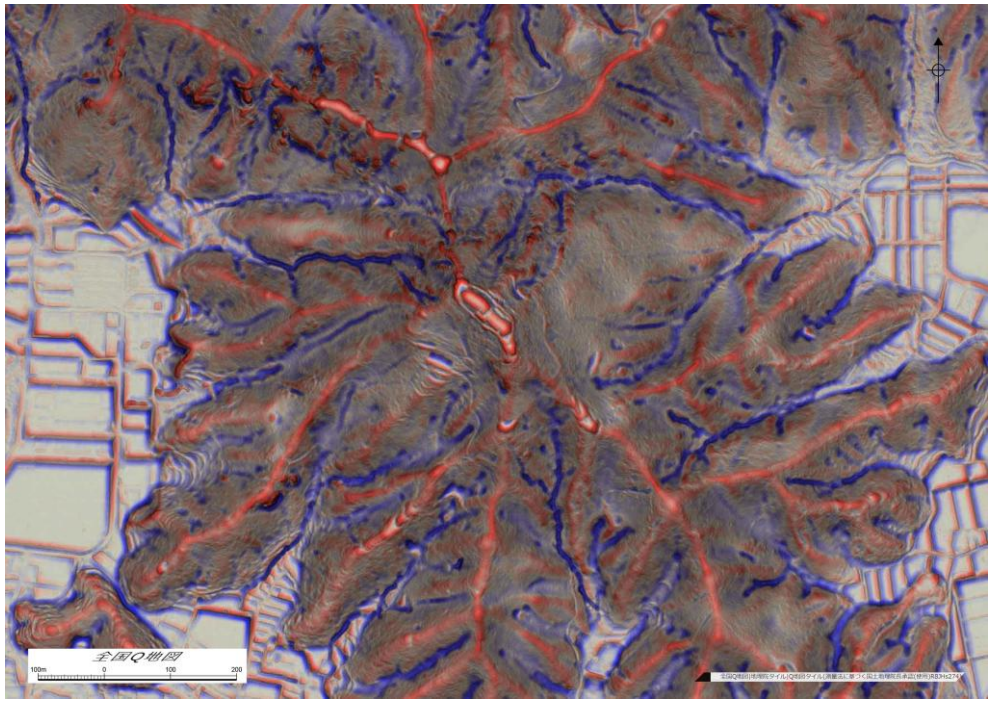
黒井城跡は南北朝時代の建武2年（1335）、春日部荘を領した赤松氏による築城からその歴史が始まったとされる。その後、赤松氏から荻野氏へと移り、天文23年（1554）に荻野直正が城主となり、山域全体を要塞化した。その後、天正7年（1579）に、明智光秀による丹波攻めにより落城した。その後、明智家臣の斎藤利三、豊臣家臣の堀尾吉晴が入城し、主郭部を現在の姿に改修している。

黒井城整備は、主郭部小曲輪の石垣の一部が雨水の排水に浸食され崩壊しており、このため平成11年度から12年度にかけて発掘調査を実施し、現代に作られた本丸と二の丸を繋ぐ土橋により、雨水が石垣のある南西部に排水されるようになり崩壊したことを明らかにした。これに対応するため、崩壊した石垣周辺に透水性の配管を埋設する等して排水対策を行った。令和元年度から令和2年度にかけては、急増する来城者への安全対策や遺構保護のための整備を行った。今後は、整備基本計画に基づきサイン整備を進めていく。

令和7～8年の2ヶ年に分けて石垣計測・石垣調査を実施しており、その過程で、主郭部北側の計4ヶ所から新たに石垣が発見された。そのうちの1ヶ所は本丸北側での発見となり、本丸を含む主郭部全体が総石垣の城郭であった可能性が浮上してきた。中世城郭から織豊系城郭、そして近世城郭への変遷を考えるうえで極めて貴重な城郭である。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR福知山線黒井駅から登山道入口まで徒歩約15分
●自家用車／舞鶴若狭自動車道・北近畿豊岡自動車道春日ICから約5分
■所在地／兵庫県丹波市春日町黒井他
■指定年月日／平成元年8月11日

▼黒井城跡立体図





▲黒井城跡－石垣



▲黒井城跡－東曲輪

県史跡	岩尾城跡（いわお）	兵庫県丹波市

岩尾城跡は和田氏五代目の和田斉頼が永正13年（1516）に築城し、その子和田師季が城主であった天正7年（1579）に明智軍の丹波攻めにより落城した。7年後の天正14年（1586）、木戸十乗坊（佐野栄有）が入城し、主郭部の一部を織豊系城郭に改修した。文禄4年（1595）国替えにより転封となり、以後城主はなく、前田玄以がこの地の代官を任されていた慶長元年（1596）、豊臣秀吉の命により廃城となった。

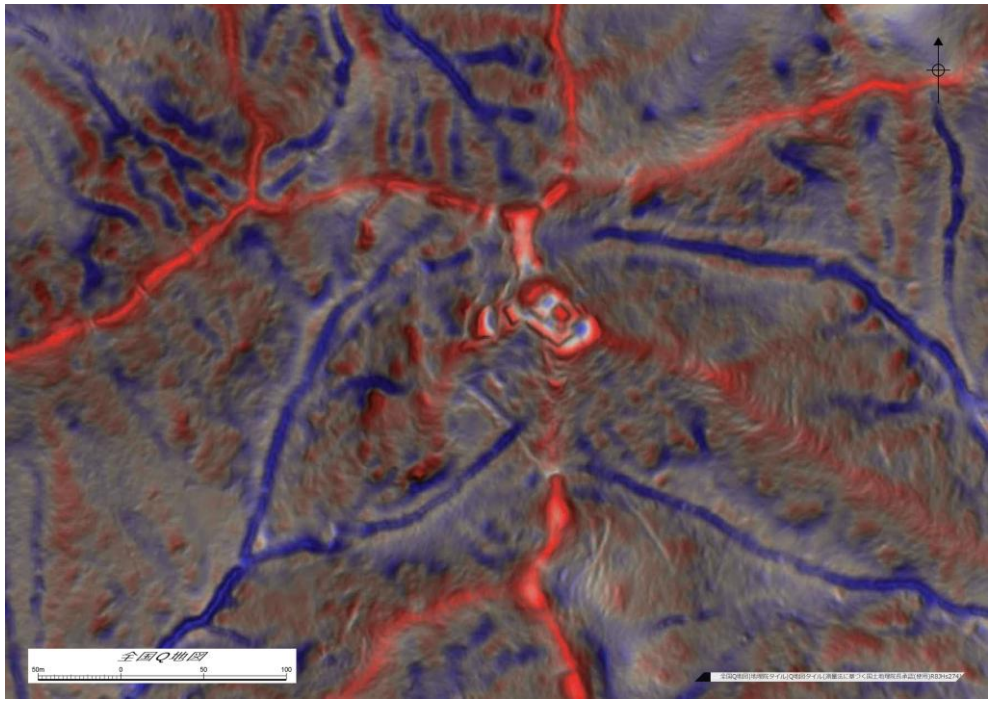
現在の城跡には黒井城と同様に在地豪族の和田氏により築かれた中世城郭と、佐野栄有改修の近世城郭とが混在している。本丸跡には、市内で唯一の天守台やそれを取り囲む付櫓台、野面積みで築かれた総石垣が残っている。石垣に加えて、主郭部には多数の瓦が散在しており、石垣上に瓦葺きの建造物や塀がそびえたっていたと考えられる。

中世城郭から織豊系城郭に移り変わる変遷を感じることができる極めて貴重な城跡となっている。

近年、木が成長したことにより主郭部が周辺から見えなくなり、地元でも岩尾城跡の姿を知らない人が増えていたため、令和2年度から4年度にかけて主郭部周辺の間伐が実施された。また、同時に主郭部南西部斜面にある石組井戸の安全対策として格子蓋の新調と三次元計測を行っている。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR福知山線・加古川線谷川駅から神姫バス和田上町
バス停・和田下町バス停・和田小学校前バス停下車より登山道入り口まで徒歩約5分
●自家用車／中国自動車道滝野社ICから約40分
舞鶴若狭自動車道丹南篠山口ICから約40分
北近畿豊岡自動車道氷上ICから約20分
■所在地／兵庫県丹波市山南町和田地内
■指定年月日日／平成13年6月12日

▼岩尾城跡立体図





▲岩尾城跡－近景



▲岩尾城跡－石垣

国史跡	竹田城跡（たけだ）	兵庫県朝来市

竹田城の築城時期については諸説あり、朝来市指定文化財『和田上道氏日記』（天明3年（1783））の記録によると、嘉吉年間（1441～43）に、山名氏の有力家臣であった太田垣土佐守の城として築かれたと記されている。しかし、地元には、嘉吉3年（1443）に山名持豊（宗全）によって築かれたとの伝承も伝わっている。

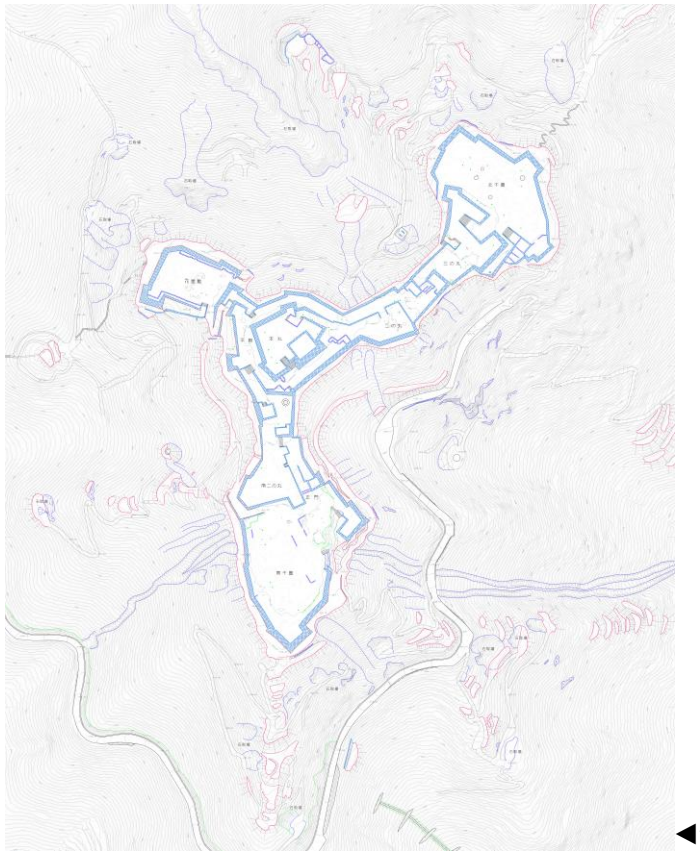
また、地元の研究者からは、遺構の特徴から竹田城の築城時期は南北朝期にさかのぼるのではないかとの指摘も受けている。竹田城の城主については、太田垣氏が7代にわたりこれを務めたとされるが、永禄12年（1569）の木下藤吉郎秀吉による但馬攻略が始まり、天正8年（1580）の三木城攻略後、2度目となる但馬攻略により太田垣氏は没落し、羽柴秀長が城代を務めた後は、天正10年（1582）頃に桑山重晴、天正13年（1585）に播磨龍野城主であった赤松広秀が竹田城の城主となった。広秀は22，000石を所領し、天正13年から慶長5年（1600）までの15年間にわたり城主を務めたが、慶長5年（1600）の関ヶ原の戦いで西軍に属し、途中で徳川方に転じて鳥取城を攻撃したものの、城下を焼き討ちにした責めを受け自刃した。これに伴い、竹田城は廃城となり、元和元年（1615）より生野奉行（享保元（1716）年以降は生野代官）の管理下に属したが城跡の石垣は大きく破却されず、今日までその姿を伝えている。

竹田城跡の整備事業は、昭和46年度から昭和55年度にかけて石垣修復工事を実施している。平成18年度からは3ヶ年計画による山麓の居館跡における発掘調査や平成30年度から整備基本計画に基づき本格的な城跡内の整備に取り組んでいる。

保存活用については、四季を通じて観光客が訪れる「国史跡竹田城跡」を活かしたまちづくりを図るため、四阿、誘導道標等を整備している。今後は、伝統的な町並みの保存や周辺遺跡の整備とともに、ボランティアガイドの育成など幅広い活動を展開し、住民が誇りを持つ地域づくりを目指している。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR播但線竹田駅
- ●自家用車／播但連絡道路・北近畿豊岡自動車道和田山ICから山城の郷まで約10分

■所在地／兵庫県朝来市和田山町竹田字古城山地内
■指定年月日／昭和18年9月8日（追加指定／平成21年7月23日）



◀竹田城縄張り図



▲竹田城－南二の丸からみる天守台



▲竹田城－天守台からみる南千畳

土田城跡（鳶ヶ城）

はんだ　とびがしろ

兵庫県朝来市

土田城跡は、大倉部山の南北に長く伸びる支尾根が円山川にぶつかるその先端部を中心に、南北2㎞以上にわたって展開している大規模な山城である。南城、北城の2つの城域で構成されている。全体の主郭と考えられる曲輪は北城にあり、標高222mの山頂に、東西15m、南北37mで周囲に帯曲輪を配置、その四方は急峻な切岸で守られている。また主郭回りには8本の竪堀が築かれ、うち1本は長さ200mに達する長大なものである。北城の大半は南北朝期に築かれたと考えられている。

南城も尾根上に小さな曲輪を連ねており、その数40以上、総延長は1㎞を超える。帯曲輪、堀切が見られるが、北城と比べると作りがあまい。山麓付近には屋敷跡と思われる遺構が集中している。

土田城の歴史は古く、但馬史研究家石田松蔵氏は「寛弘年間（1004～1012年）、土田兵部尉親子がこの城に拠ったという記録あり」と述べている。一方、日下部氏系図によれば土田氏は日下部一族の有力者であった朝倉高綱を初代としており、高綱は13世紀の人物であるため、寛弘年間には土田氏は登場していないことになる。寛弘年間は、高綱より4代前の日下部親安が一帯を治めていた時代であり、配下である土田郷の管理者によって維持されてきたと考えられている。

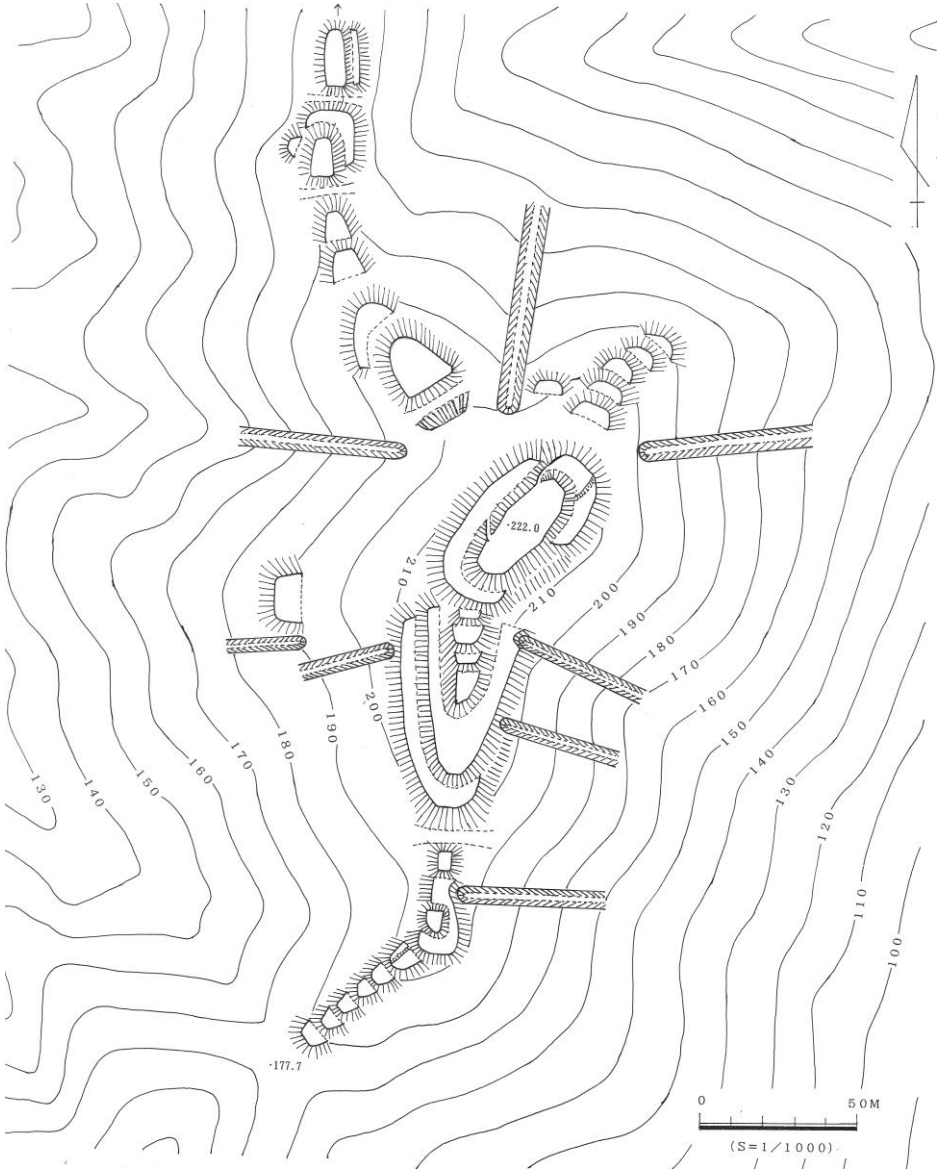
平安時代から城として存在していたと伝わることから、土田城は、律令政治が機能していた時代に築かれた烽（とぶひ）があった場所を、城として整備したものではないかと考えられる。



土田城－全景▶

■交通アクセス
●公共交通機関／JR播但線・山陰線和田山駅
●自家用車／播但連絡道路・北近畿豊岡自動車道和田山ICから約15分
■所在地／兵庫県朝来市和田山町土田字桐谷ほか

▼土田城（主郭周辺）縄張り図／西尾孝昌氏作図



法道寺城跡（中山城）

兵庫県朝来市

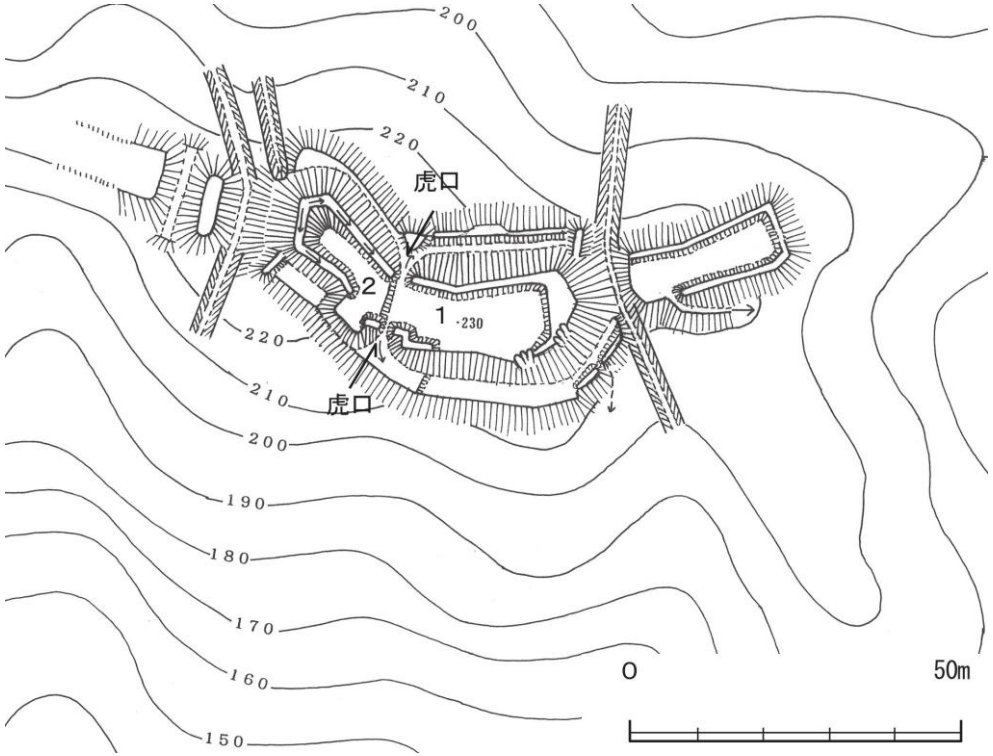
法道寺城跡は、法道寺区の中央高台山腹にある、真言宗亀岡山法道寺の山上にある。城域は東西約150m、南北約40m。地元では「中山城」と呼ばれ、江戸時代初期の記録では「阿曽沼氏砦」、「浅沼砦」の記述がある。

主郭は東西70m、南北18mの主郭と二の丸を主体とし、帯曲輪、堀切、竪堀で構成されている。主郭と二の丸は土塁で囲われており、但馬地域の城の一般的な縄張りとは大きく異なる姿を見せる。主郭は楼台をもつ大手と、搦手の2つの出入り口を持つ。山腹にはそれぞれ腰曲輪と帯曲輪を設けて守りを固めている。また山頂方面の尾根に2本の堀切、竪堀を設けると同時に主郭の土塁を大規模なものとしている。土塁の高さは2．5m、外側堀底からは6mにもなり、頂部の幅は1．5m、底部の最大幅は5mを計る。この土塁は主郭の2／3を囲んでいる。

天正５年（１５７７）羽柴秀長の但馬攻めの時、但馬の軍道整備（「道普請」）を行っているが、「法道寺・高田」が１つの起点となっている（『武功夜話』）ことを考えれば、山陰道という交通路を抑える織豊勢力の「繋ぎの城」（中継基地）と推察される。法道寺・高田は山陰道の要衝で、そこから八鹿・和田山（竹田）方面はもとより、糸井（出石）方面、養父・大屋（畑）方面へも抜けることが出来る、まさに「交通の十字路」となっている。時期的には天正５～８年（１５７７～８０）頃の築城であろう。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR播但線・山陰線和田山駅
●自家用車／播但連絡道路・北近畿豊岡自動車道和田山ICから約20分
■所在地／兵庫県朝来市和田山町法道寺字節句田ほか

▼法道寺城縄張り図／西尾孝昌氏作成





◀法道寺城－土塁

市史跡	波賀城跡（はが）	兵庫県宍粟市

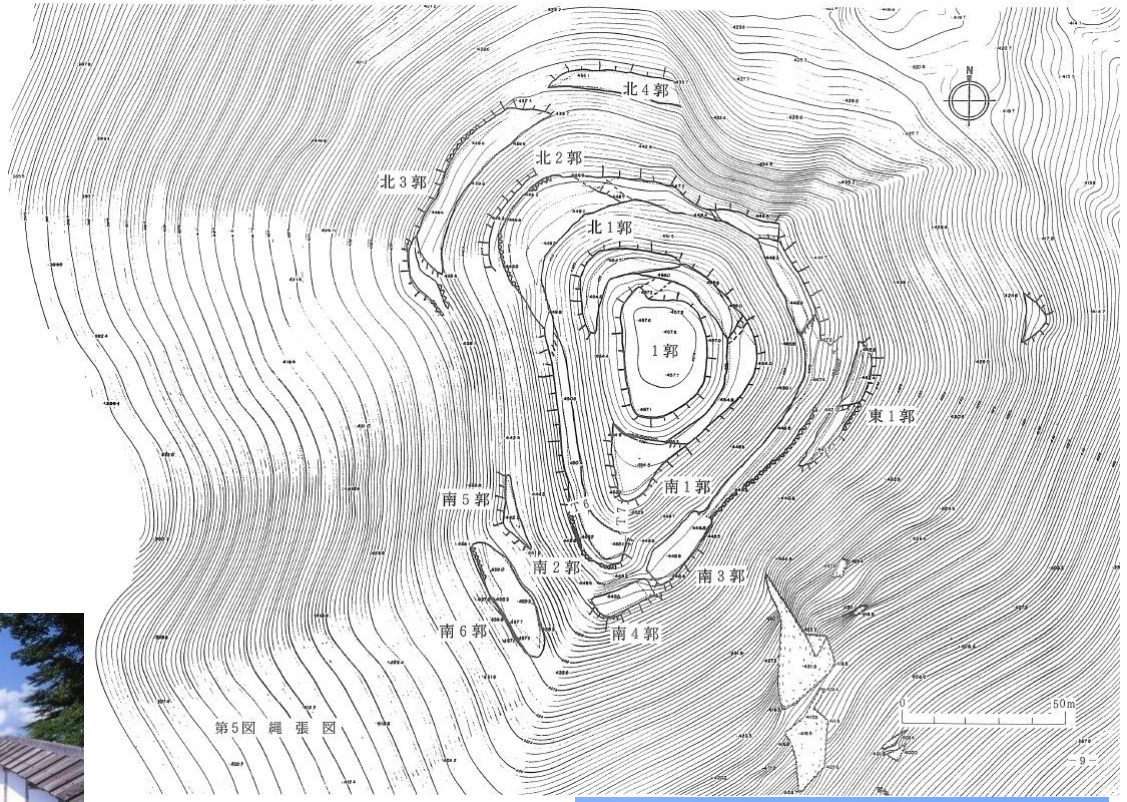
波賀城跡は、標高458mの「城山」の山頂に所在し、播磨と因幡を結ぶ因幡街道を眼下に望む交通及び戦略的要衝に位置している。鎌倉時代に芳賀氏によって築城されたと伝えられ、その後は中村氏が代々居城したといわれる。

平成3年度の発掘調査により出土した遺物の年代は、16世紀後半を示しており、戦国時代末期に整備され、羽柴秀吉の播磨平定後も存続した可能性が指摘されている。縄張りは、山頂に主郭を置き、南北に小規模な郭、東側に帯郭を配置し、さらに一段低い位置には、全体を取り巻く帯郭と数箇所の郭が設けられている。各郭の下方斜面には、随所で石積の痕跡が認められ、北2郭では隅角部を有する石積や石段を伴う通路遺構などが検出された。

現在、城跡には、櫓を模した学習資料館が建設され、発掘調査の成果を踏まえ、石積が復元されている。麓から山上駐車場までは車で入山でき、城跡まで遊歩道が設けられており、一帯は「波賀城史跡公園」として整備されている。

「城山」の麓には、築300年以上といわれる茅葺きの古民家を移築した「波賀歴史伝承の家」があり、この地域の歴史を一体的に学習できる。

▼波賀城縄張り図





◀波賀城－近景



波賀城－遠景▶

■交通アクセス
- ●公共交通機関／神姫バス「斉木口」
- ●自家用車／中国自動車道山崎ICから約40分

■所在地／兵庫県宍粟市波賀町上野

■指定年月日／昭和61年8月28日

国史跡	白旗城跡（しらはた）	兵庫県上郡町

白旗城跡は、標高440mの急峻な白旗山上に赤松円心（則村）が築いた山城です。建武3年（1336）、円心は後醍醐天皇と対立した足利尊氏に味方し、白旗山上に城を築き、そこで西国へ敗走する尊氏を追撃してきた新田義貞が率いる6万の軍勢を、わずか2千の兵で釘付けにしました。義貞は昼夜を問わず絶え間なく50日余り攻め続けましたが、要害堅固な白旗城の守りと円心の野伏戦法に苦戦し、とうとう城を落とすことはできず、九州で勢力を盛り返した尊氏が上洛する報を聞き、退却を余儀なくされました。

南北朝時代から戦国時代にかけて、戦乱の中で白旗城は何度も歴史の舞台に登場しますが、一度も落城した記録の無い難攻不落の名城です。

現在、白旗城の主要な遺構は、東西560m、南北400mにわたって残っています。尾根筋には、本丸や二の丸、三の丸、馬場丸、櫛橋丸、侍屋敷などの遺構が残り、南の谷筋に侍屋敷や大手郭などの平坦地が見られます。また、城跡の各所に堀切や石積、土塁などの防御施設が残り、戦乱に耐えた強固な山城であることを彷彿とさせます。

近年、レーザー測量地形図が公開されたことにより、今まで把握できていなかった堀切や曲輪が新たに発見され、城跡の範囲はさらに北側に拡大すると考えられ、赤松氏の初期城跡の様相が明らかになりつつあります。

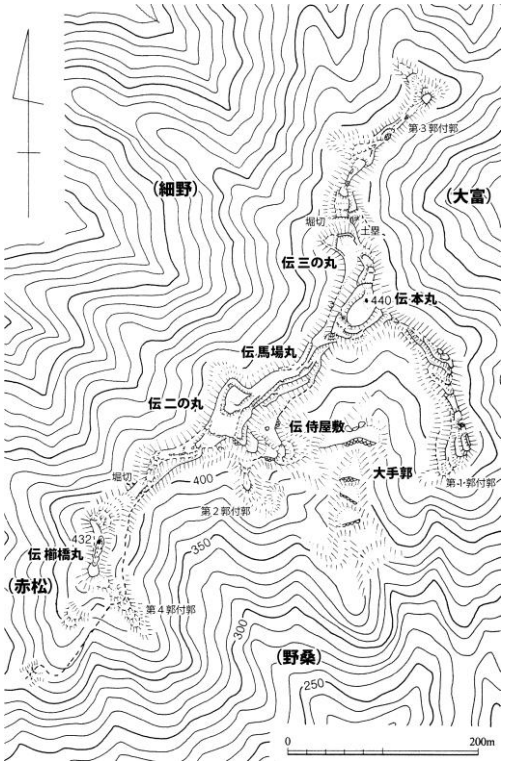
毎年11月23日に「赤松歴史まつり」が開催され、赤松氏ゆかりの寺院等を歩くウォーキングイベントが開催され、地元住民による顕彰活動が行われています。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／智頭急行河野原円心駅
- ●自家用車／山陽自動車道龍野西ICから西へ約 30 分

■所在地／兵庫県赤穂郡上郡町赤松・細野・大富・野桑地内

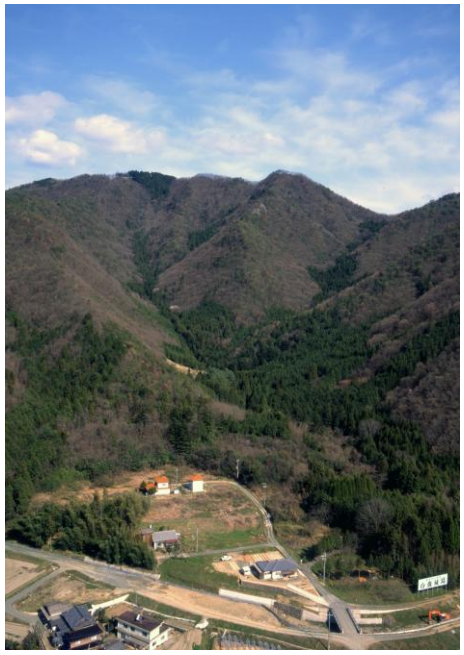
■指定年月日／平成8年3月 24 日

▼白旗城縄張り図





▲白旗城跡－（伝）本丸跡



▲白旗城跡－遠景

国史跡	宇陀松山城跡（うだまつやま）	奈良県宇陀市

宇陀松山城跡は、中世の宇陀を代表する国人領主の一人である秋山氏（伊勢国司北畠氏の配下）の城として築かれた。天正13年（1585）、豊臣秀長の大和郡山入部に伴い、豊臣秀吉の家臣である伊藤掃部頭義之が宇陀郡へ入封し、その居城となる。以後、秀吉・秀長配下の大名の知行を受け、関ヶ原の戦いの後、福島高晴が封じられる。

これら豊臣家配下の大名により城には大規模な改修が加えられた。当時の石垣や礎石の名残が現在も城山に一部残っている。また、この時期に城下町の整備も進んだと考えられ、文禄年間に描かれた絵図の写しも残っている。しかし、元和元年（1615）に福島高晴が改易されたことにより城は破城される。その破城を担当した小堀遠州の書状が現存している。

平成7年度～11年度、平成16年度に範囲確認調査を実施し、織豊系城郭の特徴をきわめて良好に残している城郭であることが明らかとなった。

平成19年度に史跡地の保存管理計画を策定し、平成20年度から保存整備事業を進めていたが、平成29年10月の台風21号の豪雨のため、及び令和5年6月の台風2号及びそれに伴う大雨により、城山の複数箇所で大規模に崩落が起きた。

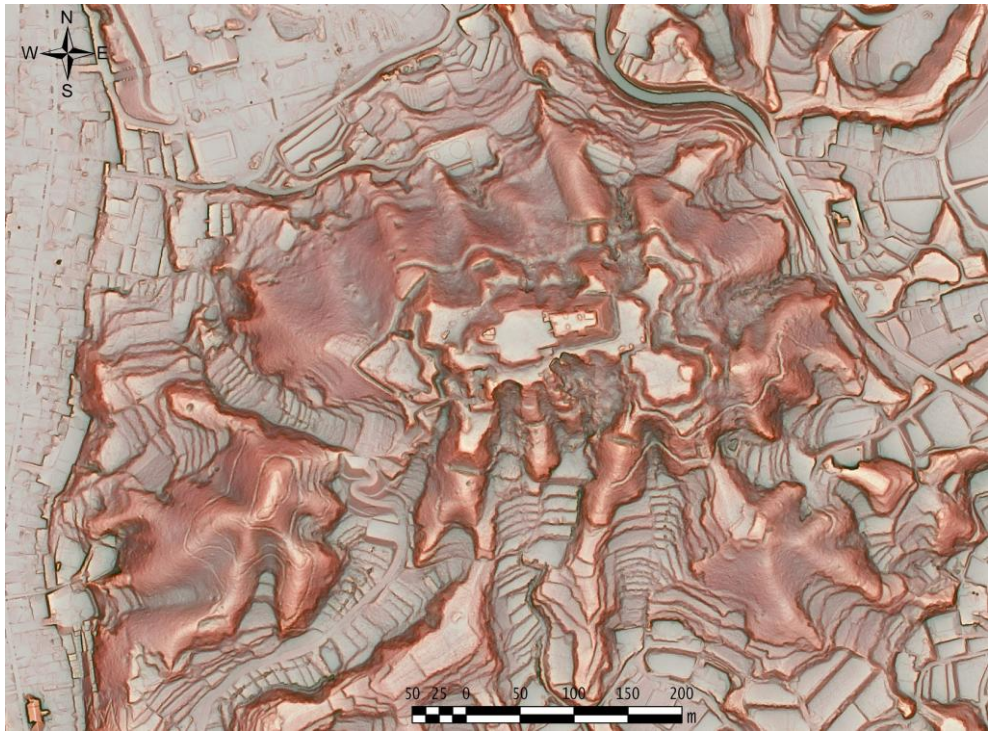
現在、保存整備事業を中断し、災害復旧工事を行っており、その本復旧工事を令和8年から実施している。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／近鉄大阪線榛原駅から奈良交通バス大宇陀行大宇陀バス停から1㎞
- ●自家用車／名阪国道針ICから約30分、道の駅「宇陀路大宇陀」東へ1㎞

■所在地／奈良県宇陀市大宇陀春日・拾生・岩清水地内

■指定年月日日／平成18年7月28日

▼宇陀松山城赤色立体図





▲宇陀松山城－空撮



▲宇陀松山城－本丸発掘調査風景

澤（さわ）城跡

奈良県宇陀市

鎌倉期には、春日社・興福寺はそれぞれの所領を宇陀にも多く持ち、その庄官として地元の土豪たちが任用される。このなかでも澤・秋山・芳野の3氏が台頭、やがて武士化し、宇陀を代表する勢力となる。戦国時代にはこの三将は伊勢国司北畠氏の武将として、「和州宇陀三将」と『勢州四家記』に記されている。

澤氏の城である澤城は、標高約538mの山頂に造られた山城である。この城は南北約700m、東西約400mに及び、東西両端を堀切で遮断された東西約300mの郭群がこの城の主要部分となっている。澤城の築城時期は、現段階では明らかでないが、澤氏の居館（下城・馬場遺跡）は12世紀後葉から機能している他、この遺跡の発掘調査では縄文時代から連綿と続く遺跡であることが分かっている。

澤城は、永禄3年（1560）には松永久秀の大和支配に伴う攻略戦が行われ、松永氏の配下、高山飛騨守（図書）が城主となり、幼少の高山右近もここで過ごしている。この城内で洗礼を受けている。



▲澤城－遠景

■交通アクセス
- ●公共交通機関／近鉄大阪線榛原駅～比布バス停から東方へ約2．5㎞
- ●自家用車／名阪国道（国道25号線）針ICから国道369号線、榛原～県道31号線

■所在地／奈良県宇陀市澤地内

国史跡

高取城跡（たかとり）

★奈良県高取町

高取城跡は、雄大な規模の近世山城の典型として知られる。麓からの比高は446mにも及び、難攻不落の呼び名にふさわしい日本一の山城である。二ノ門、壺坂口門、吉野口門の内側を城内と呼び、城内は周囲3㎞、郭内は周囲30㎞の規模を誇り、標高583．6mの高取山全体が山城と言っても過言ではない。

奈良盆地の南端に位置し、飛鳥から吉野への交通の要所であったことから南北朝時代に南朝方についた越智邦澄の支城として築城された。天正8年（1580年）に織田信長の命により一旦廃城となるが、信長の死後、筒井順慶により復興。以後大和に入場した豊臣秀長の重臣であった本多利久の時代を経て、寛永17年（1640年）に譜代植村家政が入城してからは、植村家の居城として幕末まで続くことになる。

山頂に平城方式で築かれた本丸は、大天守と小天守、三層櫓群を多聞櫓（長屋状の櫓）でつなぐ壮大な構えだったとされ、高さ12mを誇る天守台石垣は見る人を圧倒する。現在も場内一帯に延々と連なる石垣が残り、当時の威容をしのぶことができる。また、二ノ門外には山城としては珍しい水堀（池）があるほか、弥勒堀切を始めとした石垣造りの堀切、吉野口門の登り石垣など、魅力的な遺構が数多く残されていることも特徴である。

本丸からは、吉野、大峰の山々や奈良盆地を望むことができ、秋には美しい紅葉が目を楽しませてくれる。



▲高取城－本丸石垣

■交通アクセス
- ●公共交通機関／近鉄吉野線壺阪山駅から奈良交通バスきで壺阪寺前から徒歩約40分
- ●自家用車／南阪奈道路葛城ICから約40分
  西名阪自動車道郡山ICから約60分

■所在地／奈良県高市郡高取町高取

■指定年月日／昭和28年3月31日

高取城縄張り図





▲高取城－三十三間多聞跡



▲高取城－水堀

国史跡	鳥取城跡（とっとりじょうあと）	鳥取県鳥取市

標高263m（比高258m）の久松山（きゅうしょうざん）に所在する。鳥取を象徴する山として、戦国時代には鳥取山と呼ばれ、江戸時代中頃から「ひさまつやま」、後期から今日の呼称である「きゅうしょうざん」と呼ばれるようになった。

城は16世紀中頃、守護大名山名氏一族の争いの過程で誕生した。はじめ因幡山名氏の守護所の出城であったが、天正元年（1573）以降、因幡国（鳥取県東部）の本拠となった。防御性の高さなどから「日本にかくれなき名山」に築かれた城として知られ、織田信長に「名城」と言わしめ、歴史的に著名な羽柴（のちの豊臣）秀吉による「兵糧攻め」の舞台となった。この時、秀吉が主君信長の鳥取出陣のために築いたとされるのが、太閤ヶ平（鳥取城跡の東1．3㎞に所在。鳥取城跡と共に国史跡）である。

やがて、鳥取城は秀吉の武将・宮部継潤が近世城郭へ改修し、関ケ原合戦後には、姫路城を築いた池田輝政の弟・長吉が入り、姫路城と共に西国境の日本海側の拠点として、山城のまま再整備された。その後、鳥取藩32万石の居城となり、幕末期まで城として機能した。

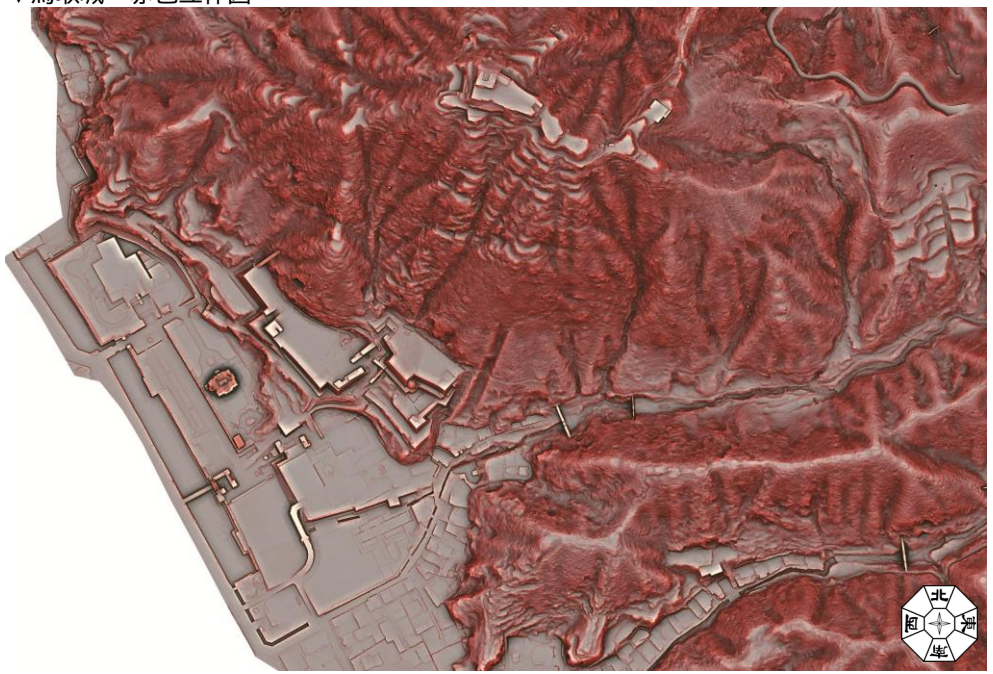
このような歴史的経緯から、城跡とその周辺は日本城郭の歴史を物語る様々な城跡の姿が残り「城郭の博物館」と言われる。城内には、国内唯一の“巻石垣”と呼ばれる球面石垣などの見どころも多い。また、2030年代に江戸時代の城の象徴であった二ノ丸三階櫓復元を盛り込んだ整備計画が進んでおり、現在、大手登城路の復元整備が進む。これまでに日本最長の城郭復元木造橋である擬宝珠橋（大手橋）と中ノ御門（大手門）が復元された。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR山陰本線鳥取駅からバス約 20 分
- ●自家用車／鳥取自動車道鳥取ICから約10分

■所在地／鳥取県鳥取市東町二丁目地内ほか

■指定年月日／昭和32年12月18日（追加指定／昭和62年8月10日）

▼鳥取城－赤色立体図





▲鳥取城－全景



▲国内唯一の球面石垣・天球丸の巻石垣

市史跡	鹿野城跡（しかの）	鳥取県鳥取市

標高150m（比高90m）の御城山（妙見山ともいう。）に所在する。創建時期は不詳ながら、16世紀中頃まで因幡山名勢力下の志加奴氏代々の居城であった。因幡（鳥取県東部）と伯耆（鳥取県中西部）を繋ぐ内陸交通の要衝にあり、「因伯仕切の城」として重要視され、山名氏、尼子氏、毛利氏の争いの舞台となった。

天正8年（1580）羽柴秀吉の命で亀井茲矩が入り、天正9年の兵糧攻めによって鳥取城が落城すると、亀井氏の居城となる。慶長5年（1600）の関ケ原合戦において、因幡で唯一東軍に属した亀井氏は加増され、3万8千石の居城として城を整備。西因幡（鳥取県東部千代川以西）の中枢として栄えた。

しかし、元和3年（1617）に池田光政が因幡・伯耆を領すと、一国一城令に伴い山城部分が破却されたという。同時に、山麓には光政の重臣が居住したようだが、寛永5年（1628）に失火によって居所を焼失、正保元年（1644）には山麓部の破城が行われたとされる。

山城部分の頂には、本瓦葺三階建の天守があったという。また、亀井茲矩は九州以外で唯一、朱印船貿易によって世界と交易をおこなった大名でもあった。城内には天守の他、オランダ櫓や朝鮮櫓という呼称の櫓も建っていた。

山麓の堀で区画された区域は、亀井家二代が居住した本丸と上級家臣が住まいとした二ノ丸である。本丸の北東角は、二カ所の入角がある。これは、本丸の凶となる鬼門の角を切り欠き魔除けとしたもので、二重のものは珍しい。また、二ノ丸は、築城史上最も防御性の高い馬出し虎口を巨大化した敷地であり、その現存例は国内に数例しかない。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR山陰線浜村駅からバス約 20分「立町」下車、徒歩約8分
●自家用車／山陰自動車道浜村・鹿野温泉ICから約10分
■所在地／鳥取県鳥取市鹿野町鹿野
■指定年月日／平成4年3月18日



鹿野城跡縄張図


▲鹿野城－全景


▲鹿野城－二重の鬼門除け

市史跡	景石城跡（かげいし）	鳥取県鳥取市

用瀬のシンボル三角錐を呈する三角山（標高503m）から北側の稜線、標高325m（比高255m）に築かれた山城である。創建時期は不詳ながら、16世紀中頃まで因幡山名勢力下の国人・用瀬氏の居城であった。天正元年（1573）には尼子再興群の攻撃を受けている。

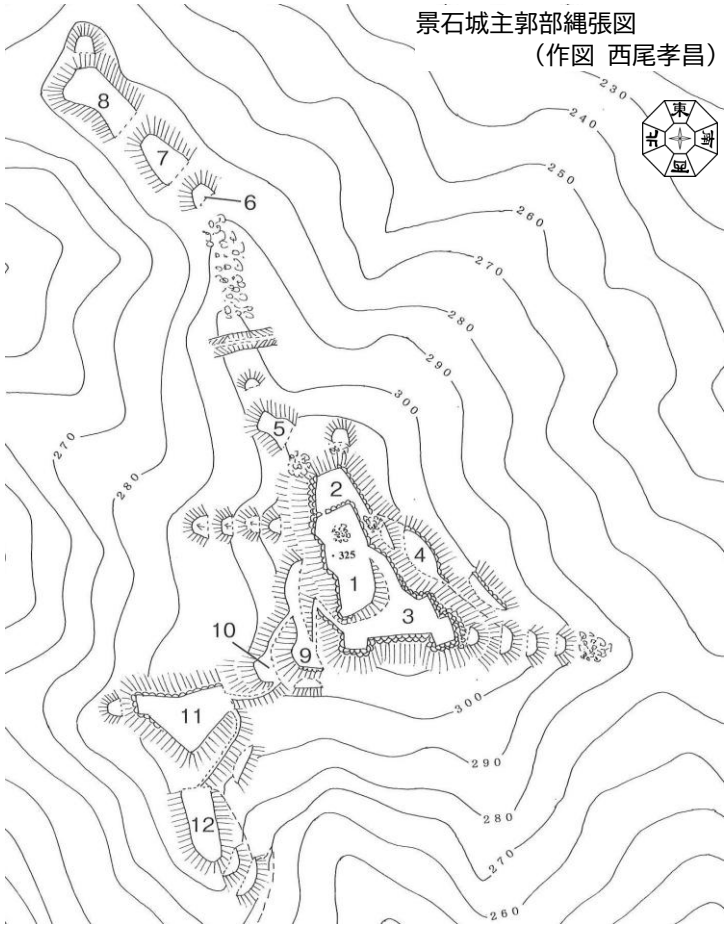
天正8年（1580）に羽柴秀吉に攻略され、秀吉は磯部豊直を入れ守備させたものの、当時毛利方に与する鳥取城主の山名豊国が奪回し、吉川元春の家臣が城を守った。しかし、天正9年（1581）の鳥取城攻めに際しては、軍功をあげた磯部氏が智頭郡半分を与えられ再び景石城主となる。その後、磯部氏は若桜鬼ヶ城の木下重堅の与力となり、3，000石を与えられた。なお、磯部氏は但馬の朝来郡磯部の国人で、秀吉の但馬進攻の時、配下に入った。慶長5年（1600）の関ケ原合戦において、磯部氏が木下氏と共に西軍に与して改易されたため、若桜鬼ヶ城の支城として、山崎家盛の家臣が入った。元和元年（1615）には一国一城令によって破却されたと言われる。

主郭周辺が総石垣化されているが、石垣は隅角部が完成した算木積みとなっていないなどの点から、天正9年頃までの普請と推定されている。最高所の主郭は、本来は石垣が曲輪を全周していたようであり、城下側の北西隅の張り出し部が櫓台と想像される。主郭西側の一段低い曲輪にも石垣が巡り、城下側の北西隅と南西隅に櫓台と思われる張り出し部がある。主郭から南西側、標高150mの地点の谷部には、磯辺氏の居館跡と思われる石垣で区画された平場が所在する。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR因美線用瀬駅から徒歩15分、山麓から本丸まで徒歩1時間
- ●自家用車／鳥取自動車道用瀬ICから約10分、山麓から本丸まで徒歩1時間

■所在地／鳥取県鳥取市用瀬町用瀬
■指定年月日／昭和51年10月1日

景石城主郭部縄張図
（作図 西尾孝昌）



▼景石城－全景



▼主郭に残る石垣



国史跡	太閤ヶ平（たいこうがなる）（附指定）	鳥取県鳥取市

太閤ヶ平は、鳥取城跡から東に1．3㎞の地点、本陣山と呼ばれる山の頂き（標高251m）にある。天正9年（1581）、毛利方の日本海側の拠点であった鳥取城の兵糧攻めに際して築かれた陣城（戦いのために臨時的に築かれた城）は、鳥取城と共に兵糧を海路補給するために築かれた毛利方の丸山城や雁金山城を取り囲むように70以上築かれ、総延長は約12㎞に及んだ。これら包囲網を成す陣城群の本陣が太閤ヶ平で、織田信長の家臣であった羽柴秀吉が約100日間全軍指揮にあたった場所である。

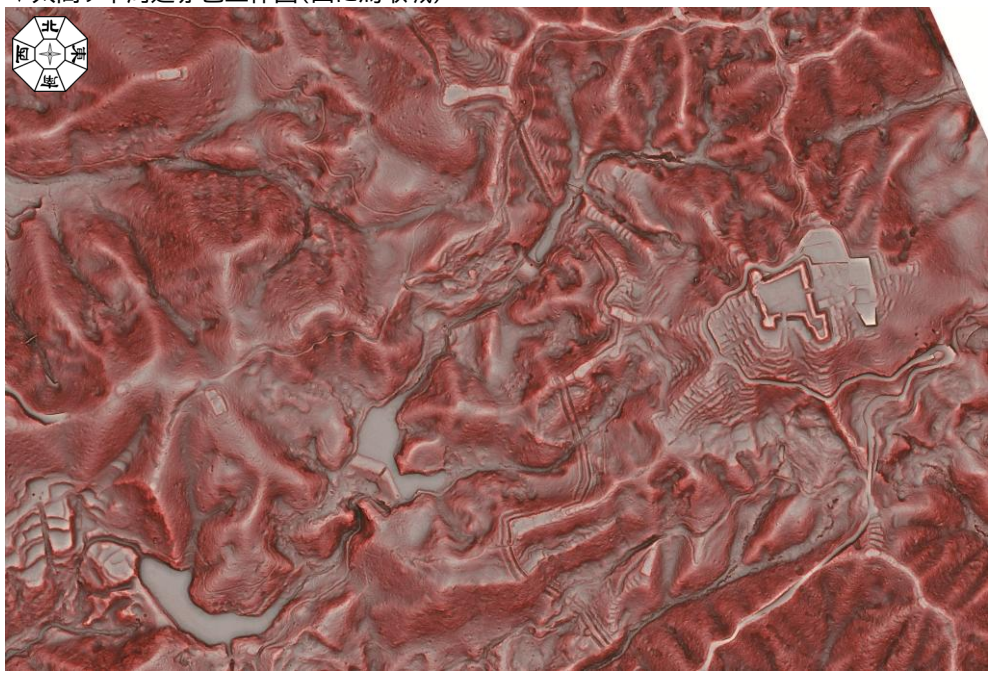
その構造は秀吉の三大城攻めとされる三木城攻めや、備中高松城攻めの本陣と比較しても圧倒的な土木量を誇り、日本最高傑作の土の陣城と称される。鳥取城の兵糧攻めは、織田信長にとって毛利と雌雄を決する場として予告した戦場であったことや、『信長公記』に「大将軍の居城に拵へ」とあることから、太閤ヶ平は織田信長の出陣を前提に築かれたと考えられる。

中心部は50m以上の方形平面プランの内郭を超巨大な土塁と堀が囲む。二つある虎口は土橋によって外部とつながり、平虎口だがいずれも横矢がかかる。特に大手虎口は圧巻で、幅10m以上を誇る直線的な登城路が接続し、その場に立つと両側に立ちはだかる土塁が眼前に迫る。また、鳥取城から最奥部となる南東隅は、四方が土塁に囲まれた穴蔵を伴う天主のような高層櫓があり、実現はしなかったが、この場所こそ織田信長を迎え入れる「御座所」ではないかと指摘されている。

また中心部から鳥取城側へ約200mの地点には、総延長1，000mにもおよぶ竪堀などの大防衛ラインがほぼ完存する。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR山陰本線鳥取駅
⇒バス「くる梨赤コース」で樗谿公園・やまびこ館前から徒歩約1時間
●自家用車／鳥取自動車道鳥取ICから車で15分
鳥取市歴史博物館駐車場から徒歩約1時間
■所在地／鳥取県鳥取市栗谷町ほか
■指定年月日／昭和32年12月18日（追加指定／昭和62年8月10日）

▼太閤ヶ平周辺赤色立体図（西に鳥取城）





▲推定信長御座所内部



▲大手空堀底から大手虎口土橋越しに櫓台を望む

国史跡

米子城跡（よなご）

鳥取県米子市

米子城は戦国時代末期から江戸時代のはじめにかけて築城された山陰地方を代表する近世城郭である。中海に面し、内堀で囲った湊山（みなとやま）（標高約90m）に本丸・二の丸・三の丸を、その北側に位置する丸山に内膳丸を、東側に位置する飯山に采女丸（うねめまる）を設けた平山城で、外郭に武家屋敷を配して外堀を巡らせていた。

米子城の歴史は室町時代に山名宗之（やまなむねゆき）が砦を築いたことに始まると伝わるが、石垣・堀・天守を備えた近世城郭の形を整えたのは、天正19年（1591）に東出雲、西伯耆、隠岐の領主となり湊山の築城に着手した吉川広家（きっかわひろいえ）である。しかし、慶長5年（1600）の関ケ原の戦いに西軍（豊臣方）として参戦した広家は、東軍（徳川方）の勝利によって周防国（山口県）の岩国に転封となり、米子城の完成を見届けることができなかった。

米子城は、慶長5年（1600）に伯耆国18万石の領主となった中村一忠（なかむらかずただ）によって慶長7年（1602）頃に完成したと伝えられている。慶長14年（1609）に一忠が急死すると、世継ぎのなかった中村氏に代わり慶長15年（1610）に加藤貞泰（かとうさだやす）が米子城主となったが、貞泰も元和3年（1617）に伊予国（愛媛県）の大洲に国替えとなり、播磨国（兵庫県）の姫路城主だった池田光政（いけだみつまさ）が国替えにより因幡・伯耆をおさめる鳥取藩主として米子城を管理することになった。寛永9年（1632）に備前国（岡山県）の池田光仲（いけだみつなか）が光政との国替えによって鳥取藩主になると、家老の荒尾氏が11代にわたって幕末まで米子城預かりとなった。

明治維新後、天守をはじめとする建物は取り壊されたが、良好な状態の石垣は残り、本丸の天守台からは大山、日本海、市街地、中海が一望できる。平成18年（2006）に本丸、内膳丸、二の丸などが国の史跡に指定され、令和3年（2021）には三の丸の中心部が追加指定された。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR山陰本線米子駅
- ●自家用車／山陰道米子中ICから約10分

■所在地／鳥取県米子市久米町
■指定年月日／平成18年1月26日（追加指定／令和3年3月26日）
■指定面積／23，993．49㎡

▼米子城縄張り図





▲米子城跡－全景



▲ライトアップされた米子城跡

国史跡

若桜鬼ヶ城跡（わかさおにがじょうあと）

鳥取県若桜町

若桜鬼ヶ城は若桜の中心街の南側にそびえる標高452mの鶴尾山一帯に築かれた。正確な築城期は不明だが、在地領主の矢部氏によって築城されたとされる。

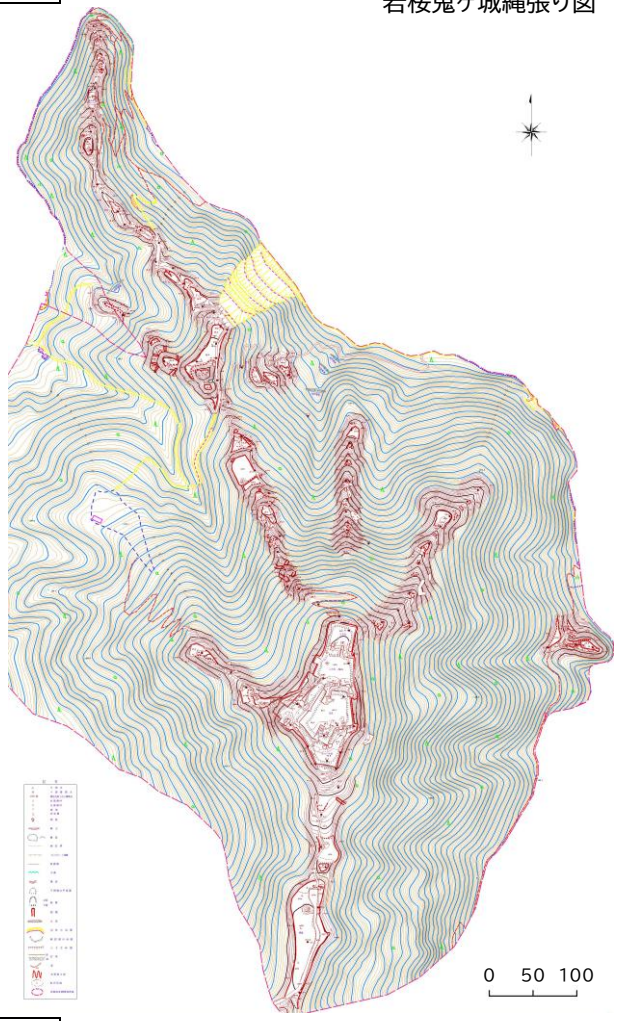
なお、「鬼ヶ城」の文献上の初出は天正3年（1575）である。鶴尾山は播磨道、但馬道並びに鳥取方面に向かう街道の結節点に位置しており、戦国期は重要拠点として尼子・毛利・織田の各有力大名の攻防が繰り広げられた。羽柴秀吉による因幡平定後は、木下・山崎両氏によって城内並びに城下の修築が行われたが、池田氏が因幡・伯耆の領主となると、一国一城令により廃城となった。

若桜鬼ヶ城は中世から近世期にかけての城郭遺構が折り重なるように築かれている。山頂部は総石垣造の比較的大規模な縄張となっており、上端部の多くが破却されている。また各街道の状況をよく見渡すことができ、この地に城が築かれた理由がよく分かる。山内は各尾根沿いに中～小規模な郭が築かれ、中世城郭としての特色が残る区域となっている。

調査により土器・陶磁器・瓦などが発見されている。土器・陶磁器は備前焼、白磁、青磁、土師器などが、瓦は軒丸瓦、軒平瓦、鯱瓦、鬼瓦などが出土している。このうち軒平瓦は木下氏の家紋である桐・沢瀉紋、小槌・沢瀉紋のものや山崎氏の家紋である檜扇紋のものなどが発見されている。

鶴尾山は昔から「鬼山・城山」などと呼ばれ、地域住民に親しまれてきたシンボルである。地元の小中学生が現地に赴き、地域の歴史を学ぶ教材として活用されている。

若桜鬼ヶ城縄張り図





▲二の丸から本丸方面を望む



▲天守台からの眺望

■交通アクセス
- ●公共交通機関／若桜鉄道若桜駅から徒歩約45分
- ●自家用車／山頂駐車場へは若桜駅より車で15分

■所在地／鳥取県八頭郡若桜町大字若桜・三倉地内

■指定年月日／平成20年3月28日

国史跡	羽衣石城跡（うえし） 新	鳥取県湯梨浜町

羽衣石城跡は、鳥取県の中央に位置する湯梨浜町の羽衣石山（標高372m）山頂を中心に築かれた山城である。伝承では、出雲守護の塩冶判官高貞の次男・南条貞宗が貞治5年（1366）に築いたとされ、以後、東伯耆の国人領主・南条氏の本拠として長く用いられた。北に日本海、眼下に東郷池と羽合平野などの交通の要衝を望む。

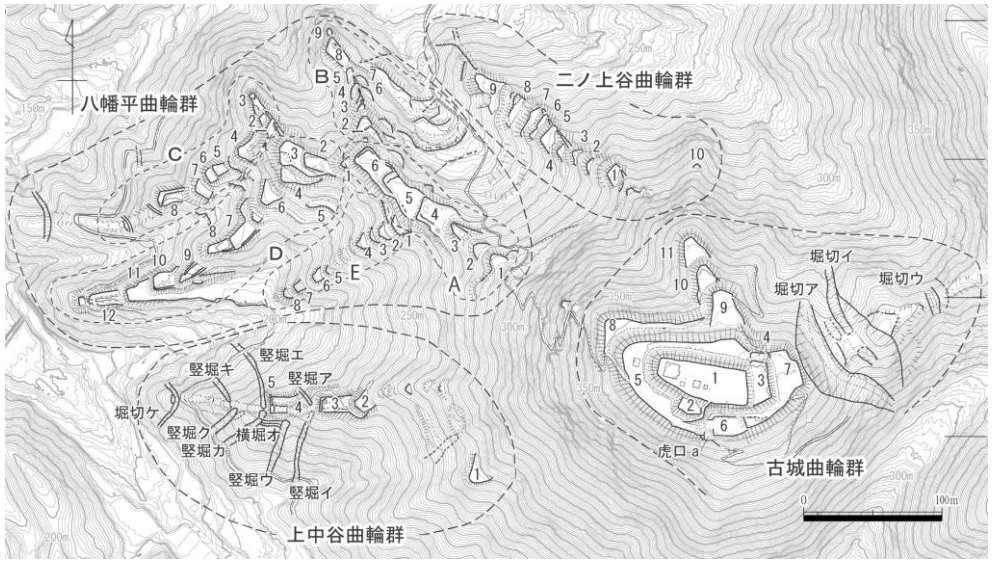
城域は、山頂部の古城曲輪群を中心に、二ノ上谷曲輪群、八幡平曲輪群、上中谷曲輪群が尾根上に広がり、伯耆国内で最大級の規模を有する。古城曲輪群は三重の堀切や桝形状の虎口を有し、主郭部の発掘調査では備前焼を埋納した土坑や土師器皿を中心とする陶磁器、建物や木戸の痕跡が確認され、16世紀頃に籠城に実用されていたことが明らかになった。

八幡平曲輪群の発掘調査では、建物の礎石や柱穴と共に、天目茶碗や茶臼など茶事に関わる遺物も出土しており、居館的な場であった可能性が考えられる。上中谷曲輪群は竪堀や堀切を多用しており、他の曲輪群とは造られた時期が異なるとみられ、天正年間の毛利方との戦いに備えて改修された可能性がある。

天正7年（1579）、城主南条元続が毛利方から離反して織田方につくと、東伯耆は織田・毛利両勢力がせめぎ合う最前線となった。天正9年には、鳥取城を攻略した羽柴秀吉が東伯耆へ進軍し、南条氏救援のために羽衣石城の付城として十万寺城や番城城を築いた可能性が高いと考えられている。史料に残る戦国末期の緊迫した軍事的動向と、現存する城郭遺構を一体として確認できる点が評価され、令和8年に国の史跡に指定された。

現在は史跡公園として整備され、登山道では、土塁や堀切、尾根状にひな壇状に築かれた曲輪など、急峻な自然地形を利用した遺構沿いに見ることができる。山頂には、昭和6年に南条氏の子孫によって建立され、平成2年に旧東郷町が改築した模擬天守がある。山頂からは東郷池や日本海、中国地方最高峰の大山などを一望でき、戦国の雄たちがこの山城を重視した理由を、地形と眺望から体感できる。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR倉吉駅または松崎駅から日本交通路線バス松崎線⇒「長和田」停留所下車後徒歩約1時間
JR倉吉駅からタクシーで約15分⇒本丸跡まで登山道約30分
●自家用車／山陰自動車道はわいICから約15分⇒本丸跡まで登山道約30分
■所在地／鳥取県東伯郡湯梨浜町羽衣石地内
■指定年月日／令和8年2月17日



▲羽衣石城跡縄張り図



▲羽衣石城跡－全景


▲羽衣石城跡と東郷池

国史跡	十万寺城跡（じゅうまんじ） 新	鳥取県湯梨浜町

十万寺城跡は、羽衣石城跡の南西約850m、標高423mの十万寺山に築かれた山城である。三朝方面から羽衣石の谷へ入る地点を押さえ、羽衣石城を見下ろすとともに、北方の東郷池方面まで見通すことができる。南条氏の本拠である羽衣石城とは性質が異なり、天正9年（1581）、羽柴秀吉が南条元続を救援するため東伯耆へ進軍した際、羽衣石城への補給線を確保し、秀吉が着陣するために急造された陣城と考えられる。

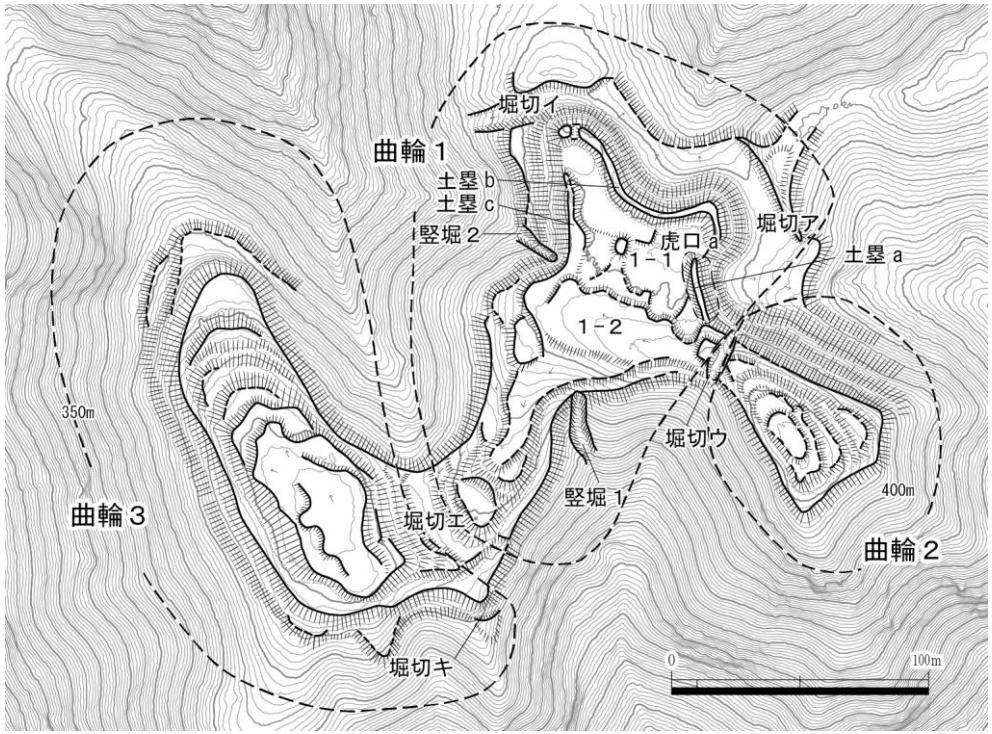
城は大きく三つの曲輪からなり、それぞれが堀切によって遮断される。主郭を含む曲輪1には、羽衣石城の方向にあたる北側をはじめ、東側、北西側に大規模な土塁が築かれ、北東辺では高さ約3mに達する。その外側は急峻な切岸となり、北面・東面の尾根筋には大規模な堀切を設けて進入を遮断している。こうした強固な防御施設に対し、曲輪内部は十分に平坦化されず、土壇状の高まりや自然地形が残る。このアンバランスな構造は、恒常的な居城ではなく、短期間の軍事行動のため急造された付城の特徴を示すものと考えられる。

天正9年10月、鳥取城を落とした秀吉は、毛利方の吉川元春が馬ノ山に布陣する中、南条氏の救援に向かった。史料には、秀吉が羽衣石近くで「城」と呼べる場所に滞在し、南条氏に翌春まで持ちこたえられる兵糧や弾薬を補給したことが記される。従来、秀吉の着陣地は東郷池東岸の御冠山とされてきたが、近年の十万寺城跡の調査によって、在地の山城にはみられない大規模な土塁・堀切など、織豊系城郭に通じる特徴が明らかとなり、十万寺城を秀吉の陣城とみる説が有力になっている。

敵城を攻め落とすためではなく、味方の羽衣石城を「救援・補給」するために築かれた点が大きな特色である。毛利軍に対する警戒・監視と、補給線の確保を担っており、番城城跡と共に羽衣石城を支えた防御拠点として、織田対毛利の最前線となった東伯耆の軍事情勢を具体的に伝える遺構としての価値が評価され、令和8年に国の史跡に指定された。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR倉吉駅または松崎駅から日本交通路線バス松崎線⇒
「長和田」停留所下車後徒歩約1時間20分
JR倉吉駅からタクシーで約20分⇒本丸跡まで登山道約45分
●自家用車／山陰自動車道はわいICから約20分⇒本丸跡まで登山道約45分
■所在地／鳥取県東伯郡湯梨浜町羽衣石地内
■指定年月日／令和8年2月17日

▼十万寺城跡縄張り図





▲十万寺城跡－全景



▲十万寺城跡－曲輪1の北側切岸

国史跡	番城（ばんじろ）城跡 新	鳥取県湯梨浜町

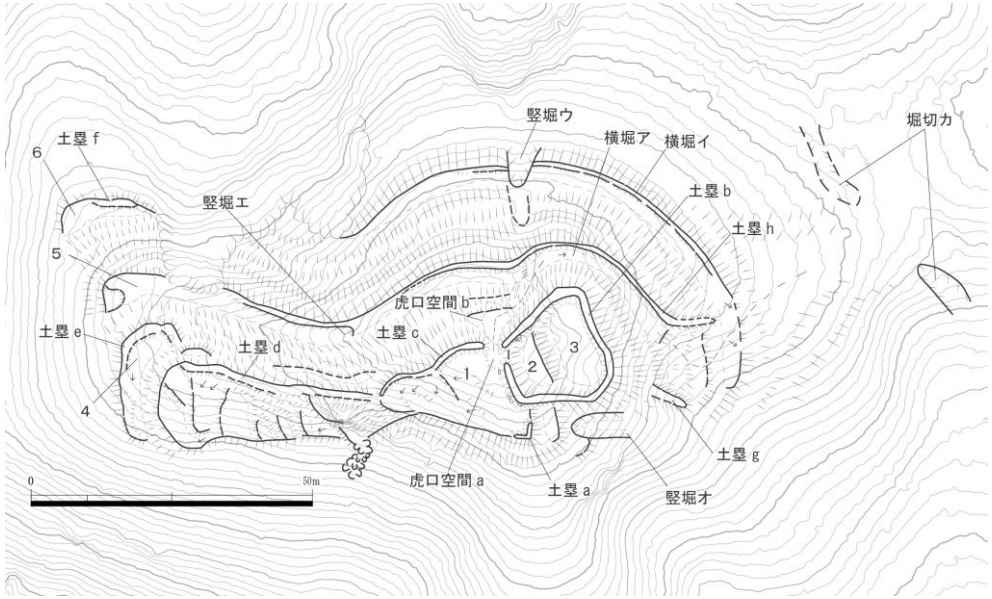
番城城跡は、羽衣石城跡の北東約450m、標高413mの山頂部に築かれた山城である。羽衣石城の北側から東へ樹枝状に延びる尾根の結節点に位置し、東郷池南岸の集落方面から羽衣石城へ至る経路を意識した要衝にあたる。十万寺城跡と同様、天正9年（1581）に羽柴秀吉が南条氏を救援した際、羽衣石城の防御を補うために築かれた付城であったと考えられる。

番城城跡の大きな特徴は、北側を強く意識した縄張りにある。最高所付近の曲輪に土塁を設け、その東側には四方を土塁で囲む曲輪が置かれる。さらに城郭の北辺から西へ長く延びる土塁と、その北側を取り巻く二重の横堀が築かれている。このような横堀を用いた構造は因幡・伯耆地方の在地領主の山城では類例がなく、織豊系城郭に通じる特徴である。また、土塁や堀などの防御施設が明瞭である一方、曲輪には十分に整地されていない部分が残り、長期の籠城よりも短期間の軍事利用を想定していたことがうかがえる。北方からの攻撃を警戒し、後方に位置する羽衣石城を守るための前衛拠点であったと考えられる。

天正7年に南条元続が毛利方から離反すると、羽衣石城周辺は織田・毛利の戦いの最前線となった。毛利方は羽衣石城への攻撃を繰り返し、天正9年には吉川元春が東郷池北岸の馬ノ山に布陣した。これに対し、鳥取城攻略後に南条氏の救援へ向かった秀吉が、羽衣石城周辺に陣を構えた。番城城跡は、南側の十万寺城跡と呼応して羽衣石城を挟む位置にあり、両城が連携することで、南条氏の本拠を守る防御網を形成したと考えられる。

羽衣石城跡、十万寺城跡と一体で捉えることで、戦国末期の緊迫した軍事状況と、目的に応じて臨時的に城を築いていく当時の築城の実態を具体的に読み取ることができる点が評価され、令和8年に国の史跡に指定された。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR倉吉駅または松崎駅から日本交通路線バス松崎線⇒
「長和田」停留所下車後徒歩約1時間
JR倉吉駅からタクシーで約15分⇒
羽衣石城本丸跡を経由して登山道約50分
●自家用車／山陰自動車道はわいICから約15分
羽衣石城本丸跡を経由して登山道約50分
■所在地／鳥取県東伯郡湯梨浜町羽衣石地内
■指定年月日／令和8年2月17日



▲番城城跡縄張り図


▲番城城跡－十万寺城からの眺望


▲番城城跡－遠景

国史跡	七尾城跡（益田氏城館跡）	島根県益田市

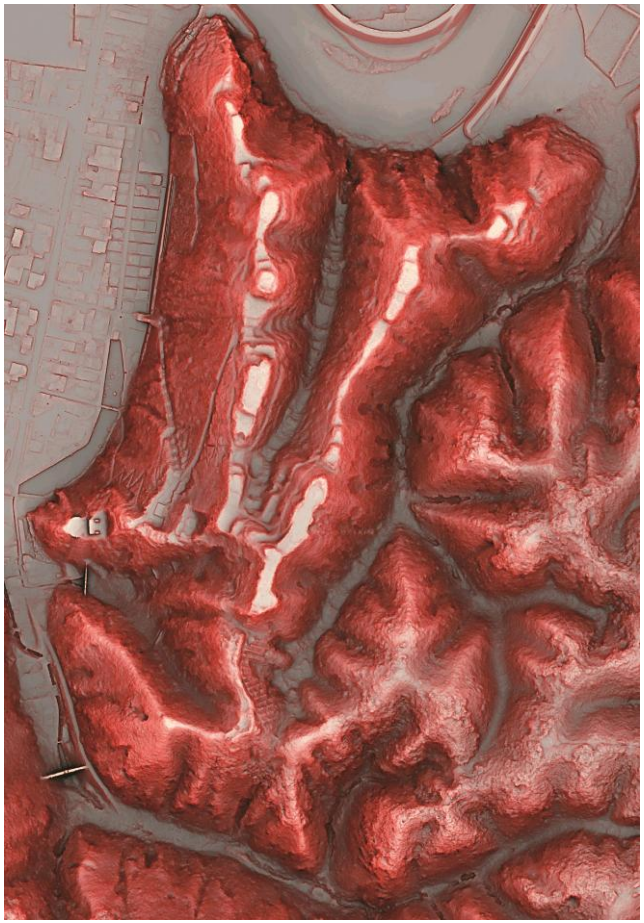
七尾城跡は、益田平野の南東に位置する七尾山の丘陵上に築かれた山城跡であり、中世の石見において大きな勢力を誇った益田氏の居城である。益田川をはさんだ対岸には居館跡の三宅御土居跡が位置し、両遺跡は平成16年に「益田氏城館跡」として国の史跡に指定された。

城は、Y字状に開く東西二つの尾根に曲輪を展開し、その結節点に主郭部が位置する。北向きの谷あいは大手と家臣団の屋敷地が推定されており、谷を登り切って到達する厩の段の近くには直径1．2mの円形石積井戸が残る。本丸から堀切により切り離された南側の曲輪と、北東尾根先端の通称「艮の出丸」には、東側と北側からの進入を防ぐため、斜面を埋めつくすように畝状空堀群が配置されている。

発掘調査では、本丸や二の段において瓦葺きの櫓門や御殿と考えられる礎石建物跡、庭園跡などが確認されている。「かわらけ」と呼ばれる土師器皿が出土遺物全体の9割を占めるほど多量に出土しており、益田氏が権威を誇示する儀式や宴会を行っていたことが推測される。

七尾城の城下には、雪舟庭園（史跡及び名勝）を有する萬福寺・医光寺をはじめ、式内社であり1583年に益田氏によって建てられた本殿（重要文化財）を有する染羽天石勝神社、益田氏の菩提寺である妙義寺、中世以来大きく改変されていない地割などが残っている。これらの文化遺産を含む中世益田をテーマとしたストーリーは、令和2年に「中世日本の傑作益田を味わう」として日本遺産に認定された。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR山陰本線益田駅
●自家用車／益田駅より車で5分
■所在地／島根県益田市七尾町地内
■指定年月日／平成16年9月30日



◀七尾城跡赤色立体地図
（作成：アジア航測株式会社、株式会社四航コンサルタント、日本遺産を応援する益田市民会議）



▲七尾城跡－全景



▲本丸跡北端の礎石建物跡

国史跡

月山富田城跡（がっさんとだ）

★島根県安来市

月山富田城跡は中国地方において大きな影響力を有していた戦国大名尼子氏の居城として知られ、天文12年（1543）の大内義隆、そして永禄8年（1565）の毛利元就による攻撃、さらには永禄12年（1569）に尼子家再興と富田城奪還を目指して出雲に侵攻した尼子勝久・山中幸盛（鹿介）ら尼子再興軍でも力攻めでは攻略することができなかった堅固な山城であった。

永禄9年（1566）に尼子氏が滅亡すると毛利氏、吉川氏、堀尾氏と城主が交代した後、慶長16年（1611）に堀尾吉晴が松江城を築いて本拠を移してからは、出雲国内にある4つの支城の一つとなったが、元和元年（1615）の一国一城令の発布により廃城されたと推定される。

城の構造としては本丸、二ノ丸、三ノ丸などの主郭部を標高190mの急峻な月山の山頂に配し、山麓に馬蹄形に伸びる低丘陵上に、山中御殿や千畳平、馬乗馬場など大小多数の曲輪や土塁、堀切などの防御施設を配している。

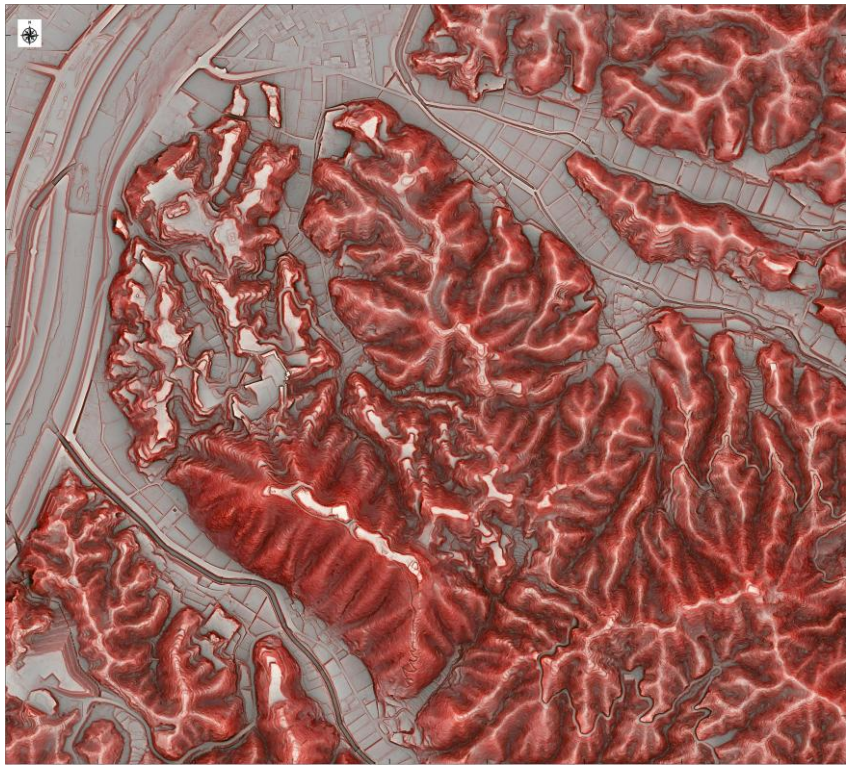
史跡整備に伴って実施された発掘調査によって、天正19年（1591）に吉川広家が城主となって以降に山頂や山麓の主要な曲輪には石垣の構築や瓦葺建物の建設などが行われ、中世城郭から近世城郭へと大きく変貌を遂げていった事がわかっている。

昭和9年（1934）に国指定史跡となり、平成18年（2006）には日本百名城（63番目）に認定された。平成27年度（2015）から令和3年度（2020）には観光資源や生涯学習の場として広く活用できるよう、遺構・園路・施設の整備、ガイダンス整備、サイン整備などの整備を実施した。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR山陰本線安来駅
- ●自家用車／山陰道安来ICより20分

■所在地／島根県安来市広瀬町富田地内
■指定年月日／昭和9年1月22日
■指定面積／726，000㎡

▼月山富田城赤色立体図





▲月山富田城－三ノ丸の石垣



▲月山と山中御殿の石垣

市史跡

本明城跡（ほんみょう）

★島根県江津市

鎌倉時代に、在地豪族福屋氏により築城されたと伝えられ417m、比高280mの高所にある居城クラスの大規模山城である。本明山の山頂の尾根部には8つの単位の郭群が残っており、主郭と判別できるほどの郭は存在せず、ほぼ同じ規模の郭群が並列的に配置される珍しい構造となる。山頂には、金刀比羅神社が祀られており、そこからの眺めは絶景である。四方は山地だが、見晴らしがよく、北方は日本海を望むことができる。

城跡のある本明山の麓には福屋氏居館跡とされる福田城跡（現在の福田八幡宮）が所在するほか、福屋氏の開基とされる四明山東光寺など、本明城に関係する施設が所在している。

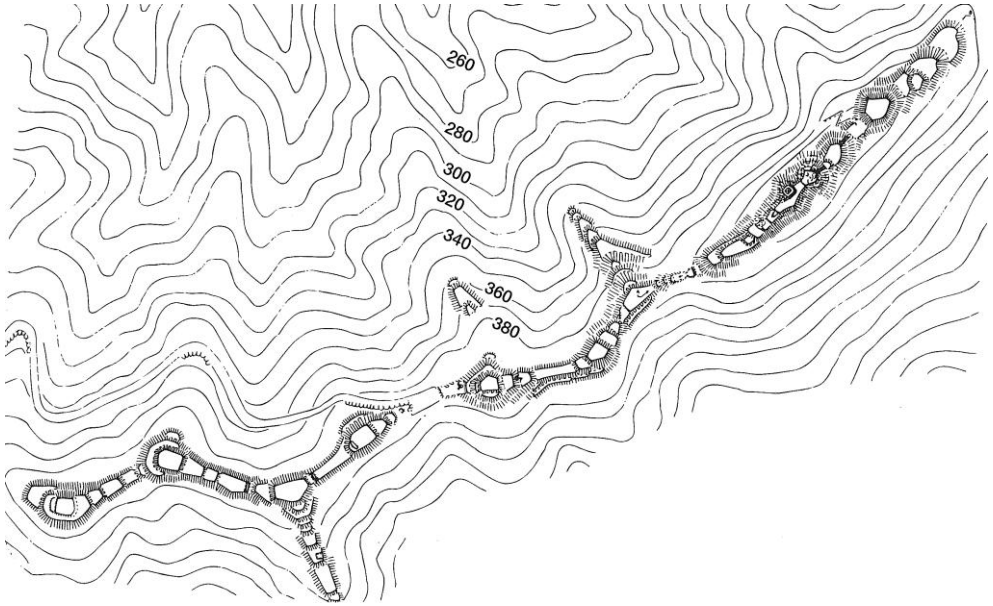
福屋氏は、戦国時代に安芸の戦国大名毛利氏に従い勢力を拡大した在地豪族である。永禄4年（1561）に福屋隆兼が、毛利氏を離反し、毛利側の居城である物不言城（大田市）を攻める。その後、福屋氏は永禄5年（1562）に毛利氏から前線の松山城（江津市）、市山城（江津市）を攻め落とされ、最後に本明城が落城し、滅ぼされたとされている。

本明城跡では白磁・青磁・陶器が多く表採されている。白磁や青磁は国外のもので、陶器は天目や備前焼などがある。陶磁器類が16世紀中頃から後半の時代を示していることから、永禄5年に福屋氏が滅ぼされた後も、付近の松山城と同様に戦国時代末期まで毛利氏の管理下で存続していた可能性が指摘されている。

本明山は地元住民により、登山道への案内表示や看板が設置されており、季節の良い頃は、軽登山の愛好家や神社の参拝者が訪れる。

■交通アクセス
●公共交通機関／江津道路江津西ICから約15分（駐車場から山頂まで徒歩約60分）
■所在地／島根県江津市有福温泉町本明
■指定年月日／昭和55年7月14日

▼本明城－縄張り図（『石見の城館跡』島根県教育委員会1997）





▲本明城－遠景



▲本明城－頂上の金刀比羅神社

県史跡	三刀屋城跡（尾崎城跡・じゃ山城跡）	島根県雲南市

三刀屋城は、承久の変（1221）で戦功のあった諏訪部扶長が三刀屋郷の地頭に補せられ、この地に築城したとされる。以来、諏訪部（のちに三刀屋に改姓）氏は、尼子氏や大内氏、毛利氏が覇権を争うなかで離合を繰り返し、天正16（1588）年に毛利輝元に所領を没収されるまで、14代368年にわたって居城とした。

三刀屋氏は、眺望のよい尾根続きのじゃ山城を先に築き、のちに山稜の先端に位置する尾崎城へと居城を移したとされる。『雲陽軍実記』では、「尼子十旗」の一つに数えられた。

三刀屋尾崎城は東西約450m、南北約260mの大規模な山城で、山頂部に構えられた主郭は東西約120m、南北15～20mを測る。主郭のほぼ中央にはL字状の石塁による仕切りが構えられ、東側が本丸、一段下がった西側が二の丸にあたる。本丸の東端寄りに石垣による方形壇があり、天守台とみられている。石垣石材には楔によって石を割った矢穴の痕跡が残っており、これは慶長5（1600）年の関ヶ原合戦の戦功により出雲に入国した堀尾氏によるものと考えられている。

三刀屋の地は斐伊川上・中流域と下流域とをつなぐ位置にあり、古くから交通の要衝として重要視されており、堀尾氏による出雲国西部の支配を担った支城として整備された。なお、主郭の天守台などは石垣が基底部のみを残して大規模に崩落しており、元和元（1615）年の「一国一城令」による城の破却（破城）が行われたと考えられている。

現在、三刀屋尾崎城跡は公園として整備され、城跡周辺は桜の名所として多くの花見客で賑わっている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR木次線木次駅よりタクシーで約15分・徒歩で約1時間
- ●自家用車／松江自動車道三刀屋木次ICから約10分

■所在地／島根県雲南市三刀屋町古城地内
■指定年月日／昭和61年9月19日

▼三刀屋尾崎城縄張り図
『島根県中近世城館跡分布調査報告書〈第2集〉出雲・隠岐の城館跡』を一部改変





◀三刀屋尾崎城－全景

県史跡	みざわ 三沢城跡	島根県奥出雲町

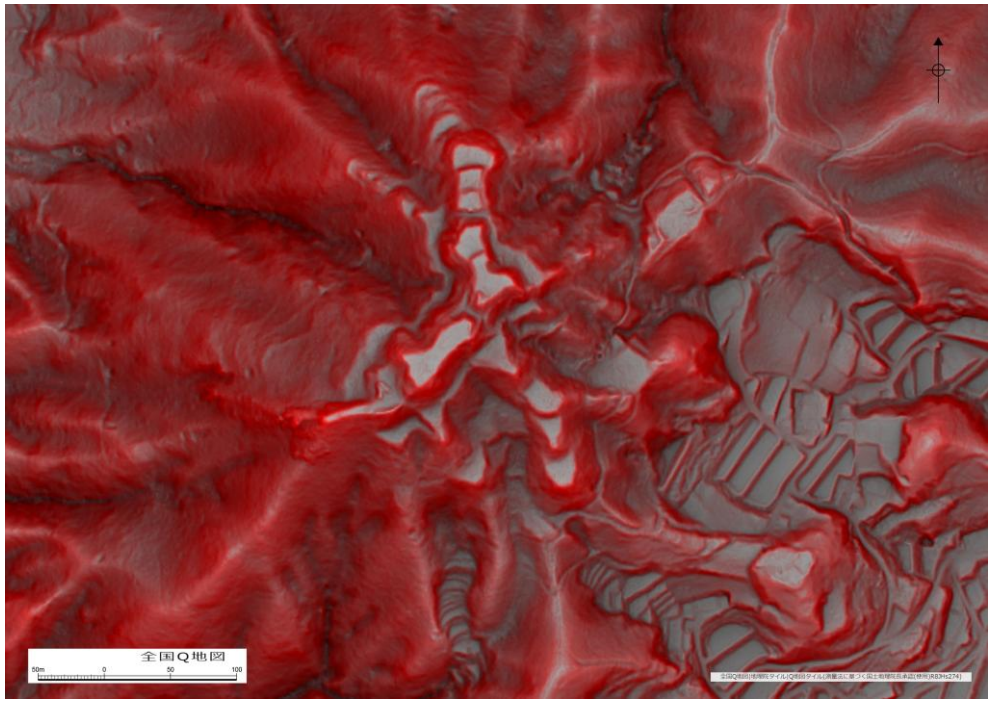
三沢城は、出雲最大の国人領主三沢氏の居城である。嘉元3年(1305)の築城から、毛利氏の命による天正17年(1589)の長門国転封まで、280余年にわたる三沢氏支配の拠点であった。三沢氏は、良質な砂鉄を産出する奥出雲の地の利を活かし、たたら製鉄により力をつけた。出雲国内に隠然たる勢力を扶植し、最盛期は備後、伯耆にも所領をもつに至った。尼子氏の台頭後は策により勢力が削がれ服属したが、なお出雲国最大の国人領主として大きな影響力を保持し続けた。

城跡は奥出雲町三沢地区に位置し、標高419mの独立峰、要害山にある。北に斐伊川、南に阿井川、東に三沢川が流れ、西の山の裏はきりたった崖と、周囲の自然地形をうまく守りに利用している。頂上部の本丸を中心に各尾根部に多くの郭が設けられ、堀切や土塁も部分的に残るなど、山全体が要害化され堅固な守りを誇っていたことがわかる。また、低い山にも関わらず眺望が良く、奥出雲町の大部分が見渡せる。出雲国人の築いたものでは、県内最大規模といわれ、中世山陰屈指の山城であることから、昭和39年5月26日に島根県の史跡に指定されている。

現在では、地元の三沢城跡保存会を中心に、三沢氏の発祥とされる長野県上伊那郡飯島町との交流や、甲冑に身を包んだ子どもたちによる武者行列が行われる要害山山城祭などの活動が行われており、歴史を活かした地域づくりが行われている。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR木次線三成駅⇒奥出雲交通路線バス三沢線四日市バス停
●自家用車／中国横断自動車道尾道松江線三刀屋木次ICより約30分
高野ICより約30分
■所在地／島根県仁多郡奥出雲町三沢
■指定年月日／昭和39年5月26日(追加指定／昭和49年12月27日)

▼三沢城跡赤色立体図





▲三沢城跡－全景



▲三沢城跡-石碑

国史跡	津和野城跡（つわの）	島根県津和野町

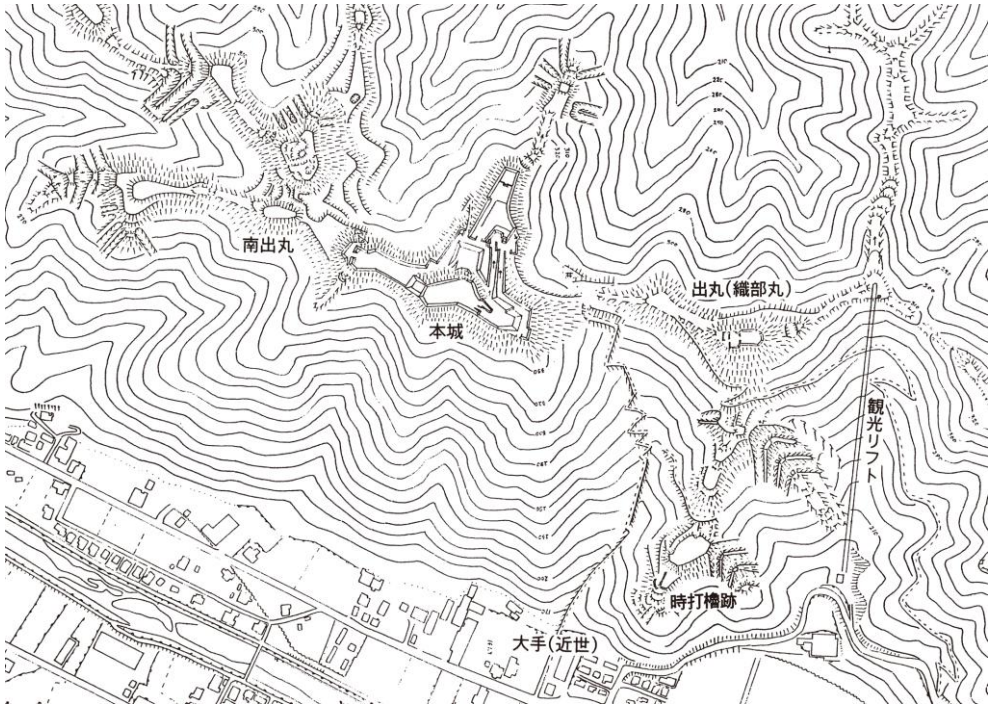
津和野城は、津和野川に囲まれた霊亀山（標高362m）に築城された山城である。13世紀末に石見国へ下向した御家人吉見頼行・頼直によって、正中元年（1324）に築城されたと伝わり、中世末期まで吉見氏が領有した。天文23年（1554）には、陶晴賢との合戦で100日余りの籠城戦に耐えている。慶長6年（1601）に備前国から坂崎直盛が入城し、近世城郭に改修した。その後、元和3年（1617）に因幡国から亀井氏が転封し、歴代亀井氏の居城となる。貞享3年（1686）の雷火によって天守等が焼失したが再建されずに幕末を迎えた。

津和野城跡は、中世・近世の両時期の山城を見ることができ、その規模は日本一の山城と称されている。中世城郭は南北約2km、東西約1kmの広大な城域を有しており、曲輪・堀切・竪堀などの遺構が山中に点在している。近世城郭としては、かつて三重の天守や櫓・門などの城郭建築が山上に存在しており、VRで体感できる。現在は、山麓にあった津和野藩庁の物見櫓と馬場先櫓のみが現存し、山城に伴う藩庁建物としては国内唯一の遺構である。

津和野城跡は国指定史跡であり、日本遺産「津和野今昔～百景図を歩く～」の構成文化財、そして「日本100名城」に選定されている。観光リフトで手軽に登城でき、山上からは「山陰の小京都」津和野の美しい町並みを一望できる。令和4年度には出丸石垣修理・登城路・サイン等の整備事業が完了しており、現在本城石垣の整備事業が進められている。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR 山口線津和野駅から観光リフト乗り場まで徒歩約 40 分
●自家用車／中国自動車道六日市 IC から観光リフト乗り場まで約 50 分
■所在地／島根県鹿足郡津和野町後田・田二穂・鷲原地内
■指定年月日／昭和17年10月14日（追加指定／昭和47年5月26日、平成19年7月26日）

▼津和野城縄張図




▲津和野城－全景


▲津和野城－石垣

県史跡	矢筈城跡（やはず）	★岡山県津山市

矢筈城跡は、天文元年（1532）から翌2年にかけて、戦国武将の草苅衡継が標高756mの矢筈山に築いた、全国でも指折りの高地にある中世山城跡である。比高426m、東西1，600m、南北500mの壮大な規模を誇り、城内には石垣、礎石、土塁、石塁、堀切、狼煙場等の遺構が良く残っており、矢筈山麓の知和の大ケ原には「内構」と呼ばれる城主草苅氏の大規模な居館跡が、また城跡の北東の山下には第二代城主草苅景継の墓所があり、いれも県史跡に指定されている。

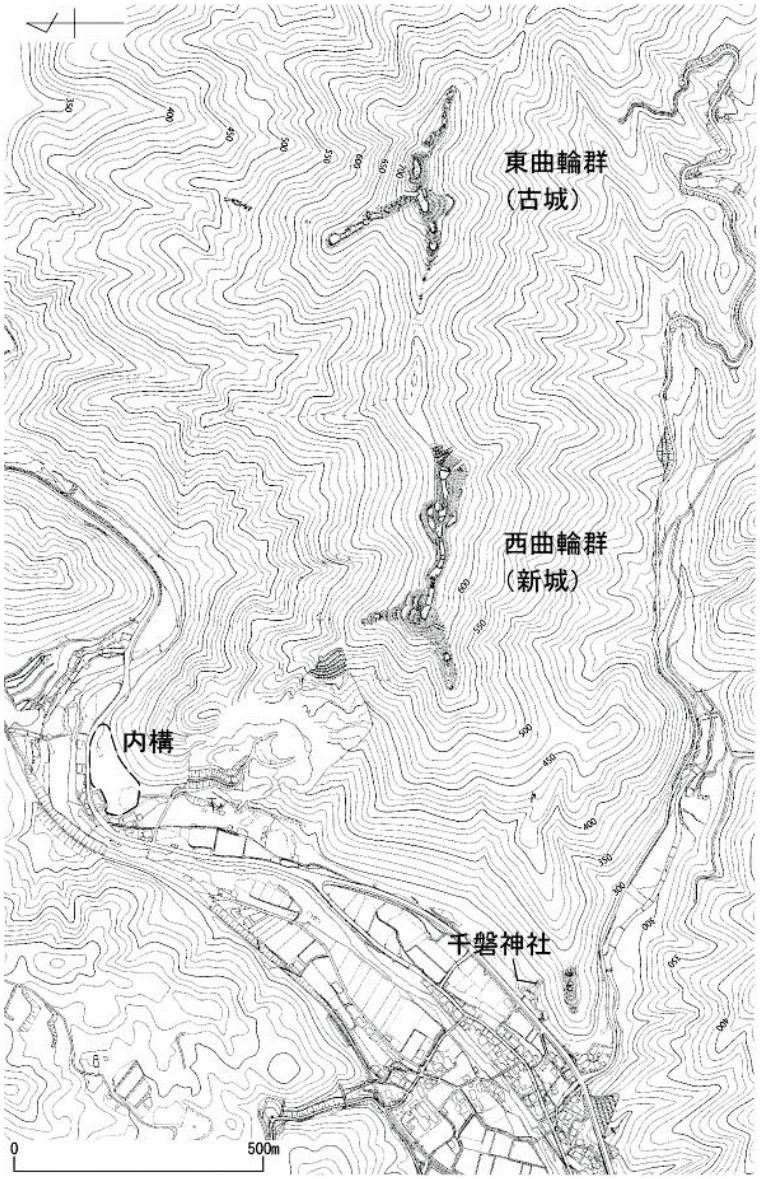
第3代城主の草苅重継は戦国大名の毛利氏に属したため、宇喜多氏や織田方の羽柴秀吉（後の豊臣秀吉）等の軍勢からたびたび攻撃を受けたが、そのつど撃退し、毛利氏の要請によって重継が天正12年（1584）に退城するまで、築城以来一度も落城することの無かった難攻不落の堅城として知られている。



◀矢筈城－遠景

■交通アクセス
●公共交通機関／JR因美線知和駅下車千磐神社脇の登山口まで徒歩10分
登山口から山頂まで徒歩約120分
JR因美線美作河井駅下車、駅南側の登山口から山頂まで徒歩約90分
■所在地／岡山県津山市加茂町山下・知和
■指定年月日／平成18年3月17日

▼矢筈城縄張り図
（岡山県教育委員会2020『岡山県中世城館跡総合調査報告書 第3冊―美作編―』を一部改変）



県史跡	岩屋城跡（いわや）	岡山県津山市

岩屋城跡は、嘉吉元年（1441）、山名教清が赤松満祐討伐の功により、美作国の守護に任ぜられたときに築城されたといわれている。応仁の乱以降、山名・赤松・浦上・尼子・宇喜多・毛利の各氏の支配下となった。

戦国期において、美作国は周辺の大勢力の草刈場の様相を呈していたため、岩屋城は数多くの武将にねらわれる、美作国内における重要な拠点であった。

城郭のある岩屋山（標高482m）は、東・北・西が急峻で、遺構は本丸と呼ばれる岩屋山の山頂から延びる尾根上に多く分布している。また、本丸からは津山市及び真庭市久世地域の主要部を望むことができ、眼下にはのちに出雲往来と呼ばれる陰陽を結ぶ主要な交通路をも見ることができる。

なお、周辺の尾根上には、岩屋城を取り囲むように配された、天正12年（1584）の宇喜多氏による攻城戦に伴うと考えられる曲輪群の遺構が良好に残っている。城郭研究のうえで貴重な遺構として注目される。



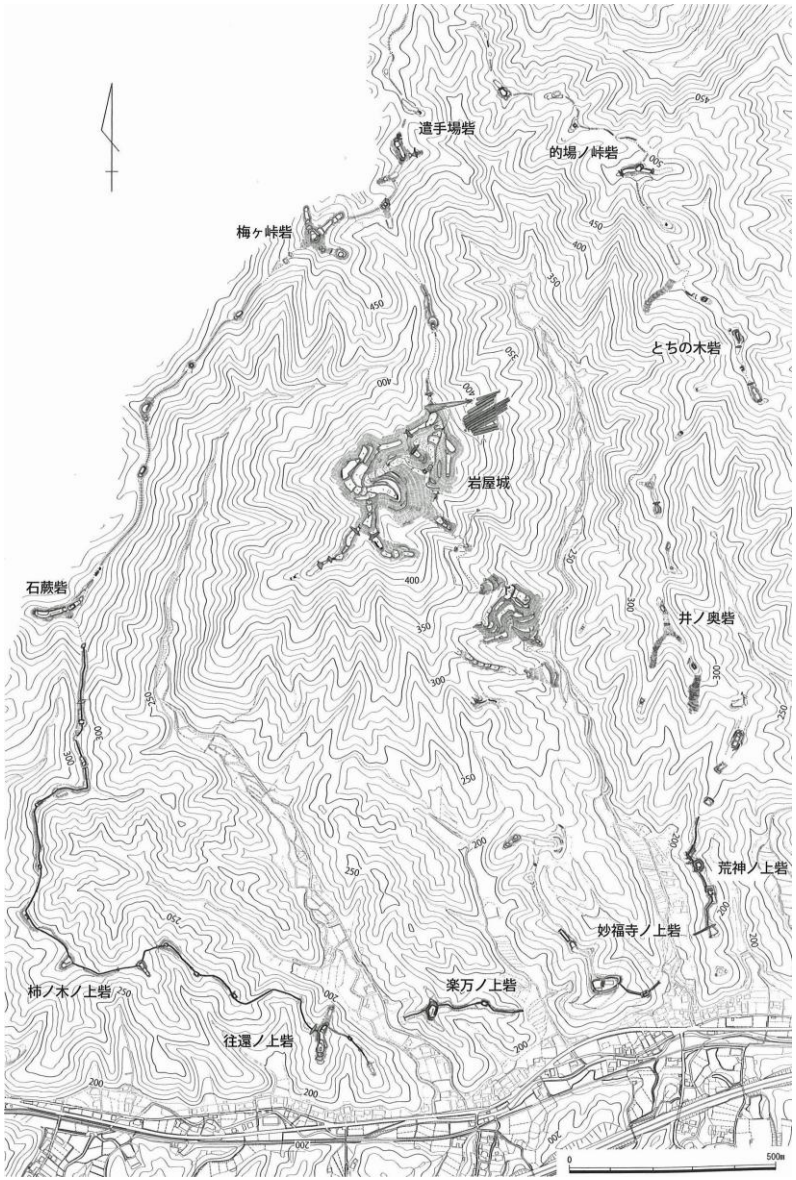
▲岩屋城－全景



▲岩屋城－馬場跡から本丸をみる

■交通アクセス
●自家用車／中国自動車道院庄ICから真庭方面へ約9㎞
米子自動車道久世ICから津山方面へ約5㎞
■所在地／岡山県津山市中北上
■指定年月日／昭和62年4月3日

▼岩屋城縄張り図
（岡山県教育委員会2020『岡山県中世城館跡総合調査報告書 第3冊―美作編―』を一部改変）



国史跡	かがみやま 鏡山城跡	広島県東広島市

鏡山城跡は、東広島市の中心部、西条盆地のほぼ中央に位置する山城跡である。南北朝時代後期、周防国から安芸国に侵攻した山口の大名の大内氏は当時東とう西さい条じょうと呼ばれた西条盆地周辺を直轄領とし、鏡山城を拠点としたと考えられる。

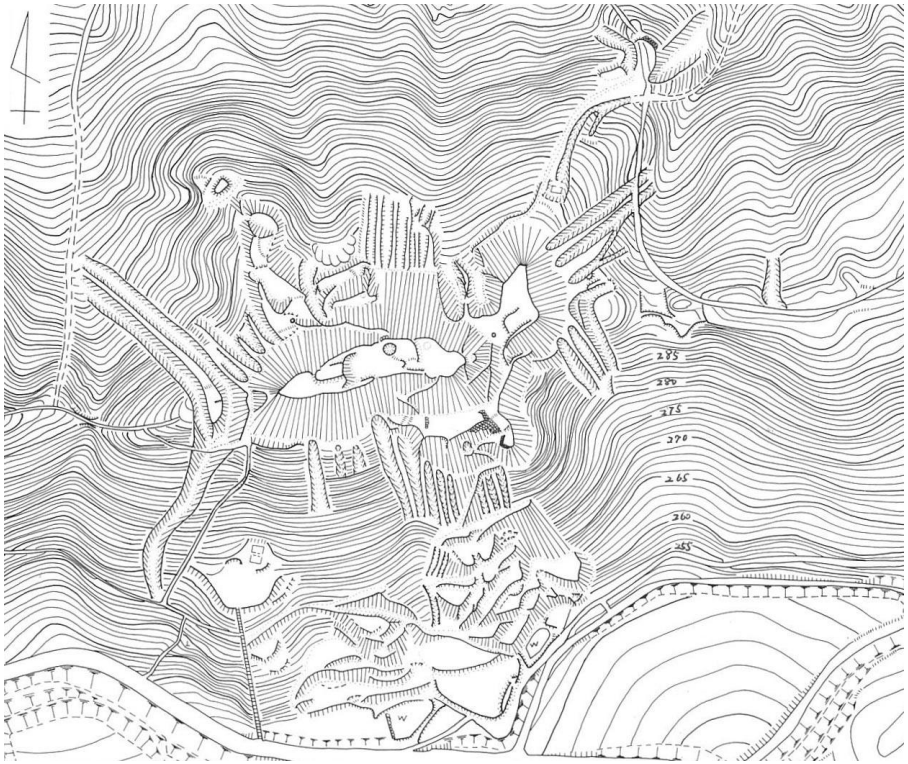
15世紀後半になると、鏡山城には守護代に相当する「東西条代官（東西条郡代）」が置かれ守護所として機能した。応仁・文明の乱では、東西条代官の仁保弘有が摂津で東軍に寝返り鏡山城に帰って東軍として活動したが、新たに代官に任じられた安富行房と安芸国人の軍勢に包囲され鏡山城は落城した。乱後の文明10年（1478）、京都から帰国した大内政弘は、現存最古の城掟である「西条鏡城法式条々」を定めた。

大永3年（1523）、安芸国西部で起きた大内氏に対する反乱に乗じて出雲の戦国大名尼子経久が鏡山城を攻撃。鏡山城への進路をふさがれた大内氏は援軍を送ることができず、鏡山城は落城した。大内氏は大永5年には失地を回復するが、その拠点は盆地西方の杣城に移され、鏡山城はその役割を終えた。

比高100m程の山頂から山麓まで、300m四方に遺構が良好に残る。比高差のある切岸や通路、虎口や井戸跡などが明瞭で、各郭が機能分化するとともに多数が城内で生活していたことが明らかになっている。本城跡は戦国時代初期の守護大名の地方拠点を知ることができる貴重な城跡である。

■交通アクセス
　●公共交通機関／JR山陽本線西条駅より南西に約3㎞
　●自家用車／山陽自動車道西条ICから約15分
■所在地／広島県東広島市鏡山二丁目鏡山公園内
■指定年月日／平成10年1月14日

▼鏡山城跡測量図





▲鏡山城跡－遠景



▼鏡山城跡－主郭南側

国史跡

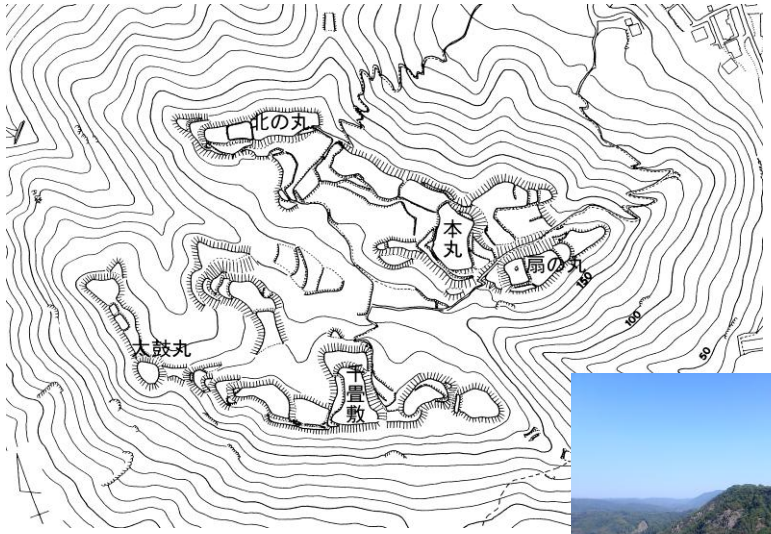
小早川氏城跡（高山城跡・新高山城跡）

広島県三原市

高山城は、沼田小早川氏の本拠地として築かれた。標高は約190m、築城時期は不明だが、文献上の初見は建武5（1338）年である。北側の本丸・扇の丸など8つの郭、南側の千畳郭・太鼓丸など5つの郭が東西に平行して二つの尾根上に配置。これらの郭の高さがほぼ同じであることが特色である。

城内にはわずかながら石積みがみられ、南東端の郭には土塁が確認できる。

応仁の乱では、竹原小早川氏が高山城を攻め、落城寸前に追い込まれた。また天正12（1543）年には山陰を拠点とした尼子氏が小早川氏の勢力圏に攻め込み、翌年には尼子氏が高山城を包囲し攻撃するなど何度か戦場となった。



▲高山城縄張図

▼高山城－全景



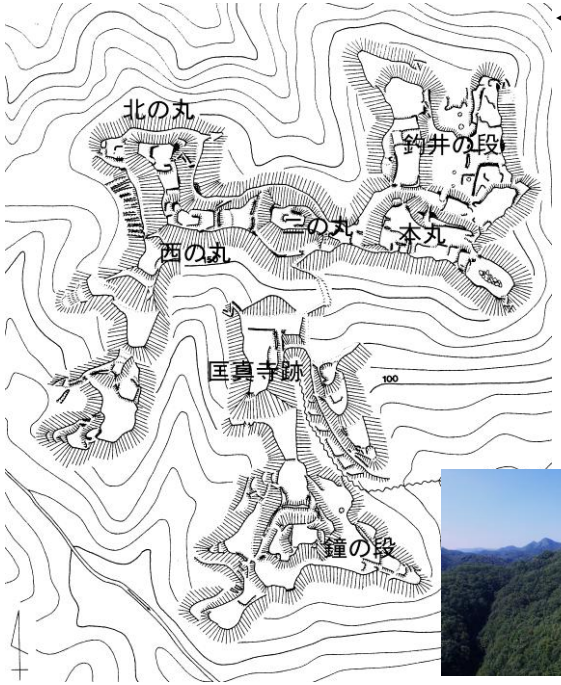
新高山城は、小早川隆景により天文21年（1552）に築かれ、沼田川の対岸にある高山城から本拠地が移された。その標高は197.6m。

本丸・中の丸・釣井の段など7つの郭からなる内郭部を、鐘の段・シンゾウス郭などの外郭部が防御を固める構造である。本丸・釣井の段には石垣が見られ、釣井の段には井戸が6基現存する。空堀や竪掘を設け、枡形虎口も確認できる。

永禄4（1561）年には小早川隆景の父・毛利元就と兄・隆元が新高山城を訪れ、連日饗応が行われた記録が残る。

平成29年4月、新高山城は（公財）日本城郭協会により「続日本100名城」に選定された。

◀新高山城縄張図



▼新高山城－全景



■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR山陽本線本郷駅から徒歩約25分（登山口）
- ●自家用車／山陽自動車道本郷ICから南へ約3㎞（登山口）

■所在地／広島県三原市高坂町・本郷町

■指定年月日／昭和32年12月11日指定

国史跡	こおりやま 郡山城跡	広島県安芸高田市

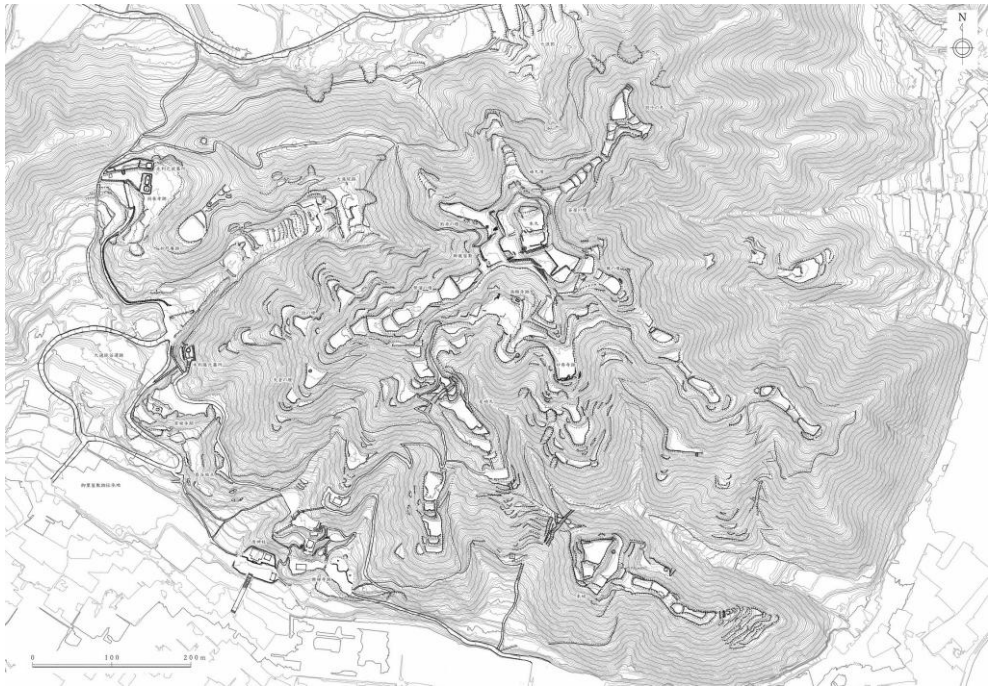
郡山城は、南北朝時代に安芸国吉田荘の地頭職として土着した毛利氏が、その勢力を拡大していくなかで、一貫して本拠とした山城である。15世紀中頃には存在が確認でき、当初郡山南東の一支尾根(＝本城)であったが、毛利元就(1497～1571)が長男隆元に家督を譲った後(天文20年(1551)頃)には全山に城域が拡大されたと考えられている。その後元就の孫輝元が、改修を加えつつ継承した。豊臣大名となった後、天正17年(1589)に輝元は広島城の築城を開始。その後本拠を移すが、郡山城は慶長5年(1600)の関ヶ原合戦まで維持されていたと考えられる。

城域は、東西約1．1㎞、南北約0．9㎞の郡山全山に及び、当時は南側の麓には内堀が巡り東側の江の川に繋がっていたと考えられる。城内には本丸のある山頂部を中心に300以上の郭や、大通院、興禅寺、妙寿寺、満願寺などの寺院も建立されていた。

城内の中心部である、山頂部周辺には崩された石垣が各所に残る。これは元就の死後、孫の輝元によって石垣の城として改修されたもので、一部の郭では瓦片も採取されている。史料の多さも郡山城の特徴の一つで、全国の戦国期山城の中でも突出している。これらから、元就～輝元期にかけて城内に当主や家臣団が居住していたことが知られており、城内の郭の多くはそれらの屋敷跡と考えられる。

西麓には元就菩提寺である洞春寺跡や元就・毛利氏一族墓所、さらに毛利隆元墓所がある。また城下には、祇園縄手、香取縄手、たて縄手などの道路が整備され、三日市、六日市などの市が形成されていた。

■交通アクセス
●公共交通機関／広島バスセンターから吉田行きバスで約100分
JR可部駅から吉田行きバスで約50分
●自家用車／中国自動車道高田ICから約15分
山陽自動車道広島ICから約50分
■所在地／広島県安芸高田市吉田町吉田
■指定年月日／昭和15年8月30日(追加指定／昭和63年2月16日)
■指定面積／43ha



▲郡山城縄張り図



▲郡山城－御蔵屋敷跡の石垣跡



▲毛利元就墓所内部

国史跡　小倉山城跡（おぐらやま）　広島県北広島市

小倉山城跡は15世紀前半に石見吉川家の系譜をひく吉川経見が、大朝新庄の地を得て築いた城とされる。経見から5代後の当主興経が、天文年間（1545年）に城を火野山へ移すまでの約130年間吉川氏の本拠城として機能する。

城は、標高460m、比高80mの小倉山の山頂を中心とし、三方に延びる尾根を利用している。中央の本丸郭群と二の丸郭群、三の丸郭群は堀切で区切られており、史跡整備に伴い発掘調査した本丸郭群では、堀切・土塁・切岸などの防御施設、堀立柱建物跡・礎石建物跡・門跡・塀跡、登城路等が検出されている。

建物跡・門跡などの施設や、登城路・説明板の設置等を整備し活用されている。



▲小倉山城跡

■交通アクセス
●自家用車／浜田自動車道大朝ICから徒歩約約20分
■所在地／広島県山県郡北広島町新庄
■指定年月日／昭和61年8月28日（追加指定／平成9年9月2日）
■指定面積／93，421．96㎡

MAP

国史跡　日山城跡（ひのやま）　広島県北広島町

日山城跡は、天文14年（1545）頃、吉川興おき経つねが小倉山から本拠を移し築いた城とされる。その後、毛利元就の次男である元春が吉川家を相続し、天文19年（1550）日山に入城、永禄10年（1567）頃大改修された。元春とその長男元長の死後、家督を継いだ元春の三男広家によって改修されたが、天正19年（1591）、豊臣秀吉の命により出雲富田城に移る。この間約50年、吉川氏の本拠城として機能する。

城は、標高705m、比高約300mの火野山の山頂を中心とし、東西700m、南北300mの範囲に本丸、二の丸、三の丸、中城など計28の郭を配する大規模な山城である。城内各所には石垣や石塁・土塁・土橋が多用されている。

城の麓には中山市跡、舞綱の屋敷群、万徳院跡、吉川元春館跡など中世末期の遺跡が広がっている。



▲日山城跡

■交通アクセス
●自家用車／中国自動車道千代田ICより車で約10分
■所在地／広島県山県郡北広島町新庄・中山・舞綱
■指定年月日／昭和61年8月28日（追加指定／平成9年9月2日）
■指定面積／1，160，182㎡

MAP

国史跡	高嶺城跡（こうのみね）	山口県山口市

高嶺城跡は、山口市街の北西に所在する鴻ノ峰（標高338m）上に位置する。

本城跡は、大内氏の家名を継いだ最後の当主義長（大友宗麟の実弟）が、毛利氏の侵攻に備えて弘治2年（1556）に築城を開始したとされる。

翌年、大内氏を滅ぼした毛利氏は高嶺城の修築を続け、城番を置き山口及び周辺域を支配させた。元和元年（1615）の一国一城令により毛利氏は居城萩城（指月城）以外の城を破却することとなり、高嶺城は破却される。また、寛永15年（1638）および慶安元年（1648）にも破却の記録が見られる。

主郭は鴻ノ峰の山頂に築かれ、山頂に連なる尾根及びそこから放射状に派生する尾根に築かれた曲輪群と、主郭から東側に約300m離れた丘陵上に築かれた曲輪群が確認されている。主郭には礎石が点在しており、少なくとも2棟以上の建物が存在していたと推測される。

現在、主郭を中心に石垣が残っているが、多くは天端隅角の石積が崩落している。これらの状況は、破却の痕跡とみられる。

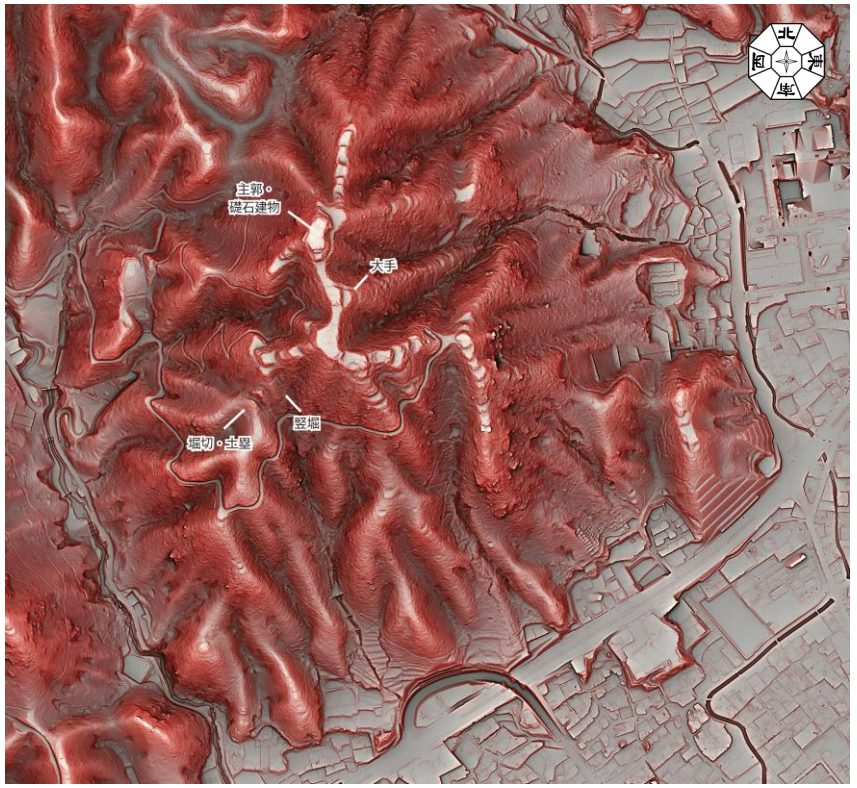
また、防御施設としては、南西側に延びる尾根の先に大型の2条の堀切と土塁が確認できるほか、堀切に隣接して小規模な竪堀が確認されている。

本城跡は、昭和34年に「館跡」「築山跡」「凌雲寺跡」とともに史跡大内氏遺跡附凌雲寺跡として国の史跡に指定され、保存が図られているほか、平成29年には、公益社団法人日本城郭協会により、高嶺城と大内氏館が「続日本100名城」のひとつに選定された。また、近年では赤色立体地図の作成、これをもとにした模型の作成や踏査、石垣の詳細調査が行われている。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR山口線山口駅⇒バス「県庁前」から徒歩約10分
  山口大神宮境内の「鴻ノ峰」登山口から山頂まで徒歩で約60分。
- ●自家用車／中国自動車道山口ICから約15分
  中国自動車道小郡ICから約15分

■所在地／山口県山口市上宇野令字高嶺
■指定年月日／昭和34年11月27日
■指定面積／19，766 ㎡

▼高嶺城赤色立体図（S＝1／12，000）





▲高嶺城－遠景
（手前は大内氏館跡の池泉庭園）



▲主郭南側の石垣

国史跡	能島（のしま）城跡	愛媛県今治市

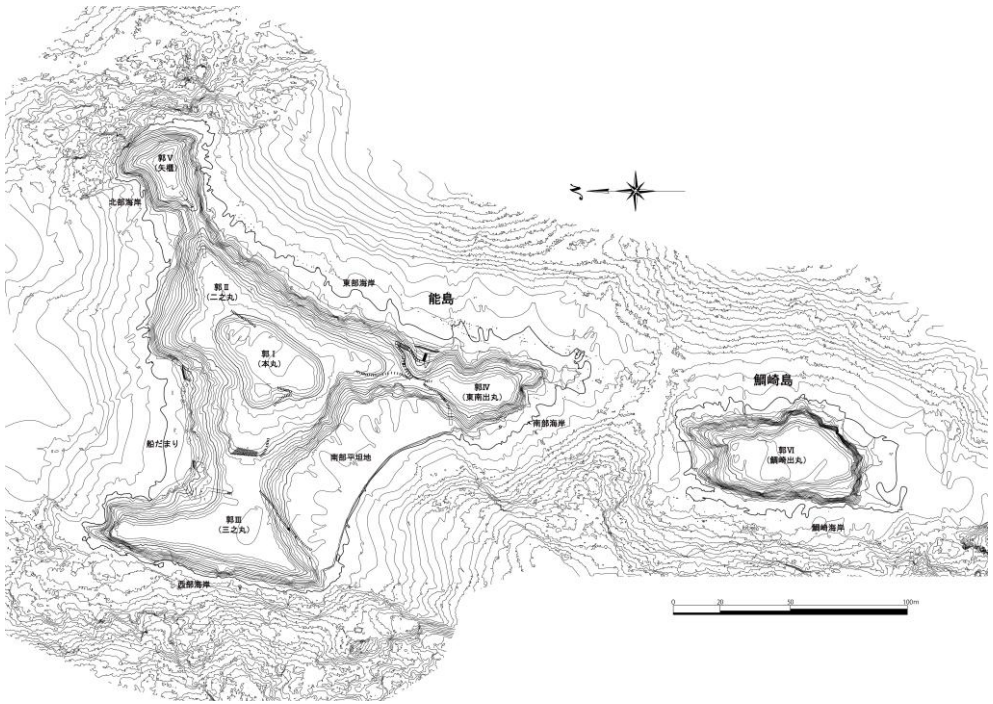
能島城は、戦国時代「日本最大の海賊」と称された村上海賊のうち、能島村上氏の拠点的城郭。瀬戸内海のほぼ中央に位置する芸予諸島にあり、宮窪港沖合の能島・鯛崎島の両島を城域としている。両島で面積17，829㎡ほどの小島全体を城郭化し、その立地的特徴から「海城」とも称される、全国的にも珍しい城である。

標高約25mの能島は、三段に削平、あるいは一部を盛土によって造られた三つの郭（上から本丸、二之丸、三之丸）があり、さらに東、南方の尾根にはそれぞれ出曲輪が展開している。鯛崎島にも郭があり、能島城の一部として東の海域の監視などに利用されていたと考えられている。また、岩礁部には繋船施設などの機能が想定される岩礁ピットや海蝕テラスがめぐっており、船の発着の利便性を高めている。島の周囲には最大で10ノット（時速約18㎞）にもなる複雑で激しい潮流が取巻く時があるが、約6時間ごとの潮止まりや、潮流の穏やかな小潮もあるため、常に完璧な守りだったわけではない。また、切岸のような天然の崖以外には防御施設は見られず、簡素な縄張りとなっている。海に対して開放的な構造となっており、海賊たちの日常的な活動拠点となっていたと考えられている。

生活容器や漁具も多く出土していることから、海賊たちの生活の場でもあったことがうかがえる。岩礁ピットなど芸予海域の城郭に特徴的な遺構がよく残り、村上海賊関連の代表的な遺跡の一つとして重要である。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR予讃線今治駅⇒急行大三島行きバス大島営業所
⇒友浦行き島内バス村上水軍博物館
●自家用車／西瀬戸自動車道大島北IC（広島方面より）
大島南IC（今治方面より）から村上海賊ミュージアム
※能島城跡は定期航路の無い無人島。民間会社等による上陸ツアー及び潮流体験船の発着は村上海賊ミュージアム前の漁場桟橋。
■所在地／愛媛県今治市宮窪町宮窪（能島・鯛崎島）
■指定年月日／昭和28年3月31日

▼能島城縄張り図





▲能島城跡－空撮



▲船だまりの岩礁ピット

国史跡	河後森城跡（かごもり）	愛媛県松野町

河後森城は、四国西南部で愛媛県と高知県の県境に位置する松野町にあり、広見川を含む三つの川に囲まれた独立丘陵上に立地する。標高が最大で約172m、平地部分からの比高差は約88mを測る。城域は約21haで、最高所の本郭を中心に多数の曲輪が東西方向へ「馬蹄形」に展開する県内でも最大規模の中世山城である。

河後森城に関する文献史料は乏しく不明な点が多いが、「黒土郷河原渕領（くろつちごうかわらぶちりょう）」と呼ばれていた当地域は、伊予・西園寺氏と土佐・一条氏－長宗我部氏の諸勢力が及ぶ「境目」地域であった。地域に伝わる古文書等から、河後森城には永禄年間初期までに一条氏側から迎えられた領主「河原淵教忠（のりただ）」の存在が知られている。

その後、天正十二年（1584）頃までにはこの地域が長宗我部氏の配下に置かれた可能性が高く、その翌年に行われた秀吉による四国平定以後、松野町を含む宇和郡一帯は小早川氏、戸田氏、藤堂氏、冨田氏の所領となり、その間河後森城にはそれぞれに城代が置かれていたと伝わる。その後も伊達秀宗筆頭の家臣桑折（こおり）氏が七千石を領し河後森城に居住したといわれている。なお、城の終焉については明確ではないが、伝承が残る慶長九年（1604）の藤堂高虎による板島城月見櫓への天守移築時、または元和元年（1615）の幕府による一国一城令が契機となった可能性が指摘されている。

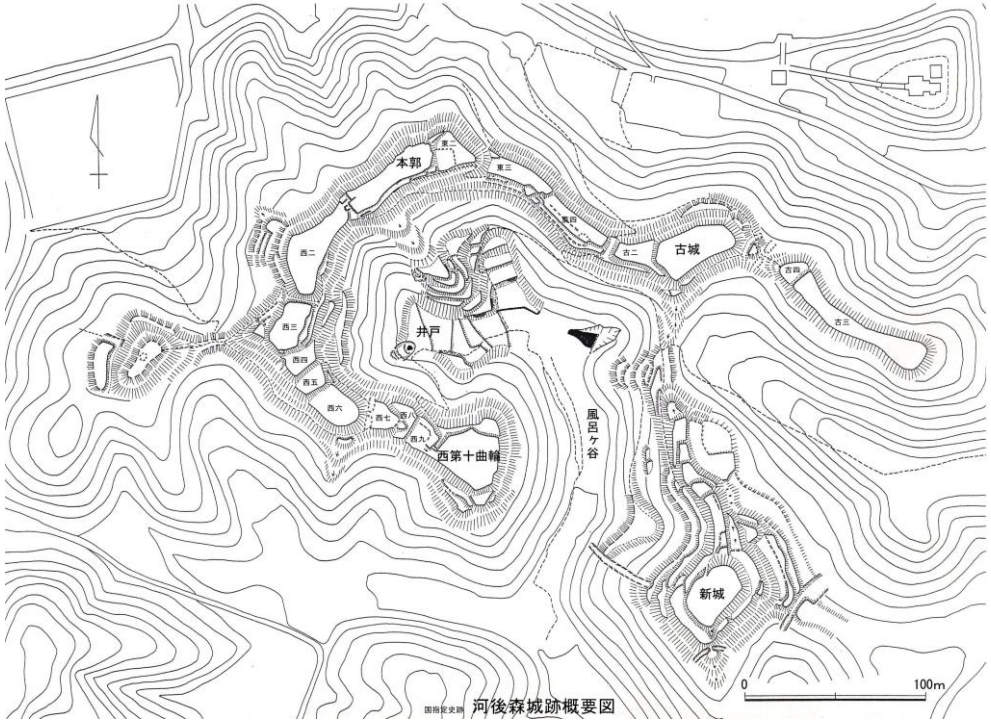
河後森城は、平成3年度から本格的な発掘調査が行われ、平成9年9月11日に国史跡に指定された後は、平成11年度から整備に伴う発掘調査が継続的に実施されている。これまでの調査は山の稜線部に形成された曲輪や谷部が主体で、多くの遺構を検出した。特に西第十曲輪や本郭では発掘調査によって曲輪の利用が具体的に明らかになっている。

現在、当時のくらしや戦いを体感できるような活用事業にも取り組んでいる。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR予土線松丸駅、宇和島自動車バス松丸停留所から約1㎞
- ●自家用車／松山自動車道三間ICから30分

■所在地／愛媛県北宇和郡松野町大字松丸・富岡地内
■指定年月日／平成9年9月11日

▼河後森城跡概要図



国指定史跡 河後森城跡概要図


▲河後森城本郭からの景観


▲河後森城跡－西第十曲輪

県史跡	猫尾城跡（ねこお）	福岡県八女市

猫尾城跡は、八女市黒木に所在する。矢部川とその支流である笠原川が合流する地点にあり、標高240mの城山（猫山）山頂に位置する。『軍談』では「木屋村猫尾城跡」として「山城也、本丸西面南北三十間、東西十五間、二ノ丸ハ西ニアリ」とし、本丸と二ノ丸との間には五十間の馬場、本丸の東側に三ノ丸の存在を記す。また『黒木物語』等によると、薩摩出身の源助能が黒木に移り黒木姓を名乗り、猫尾城を黒木氏代々の居城としたこと、天正12年（1584）には豊後勢が攻めたこと、田中吉政の時代には辻勘兵衛を城代としたことなどが記されている。

山頂部には東西約50m、南北約80mの主郭を築き、主郭周りには虎口やそれに付随した櫓台、さらには横矢を効かせるための塁線の屈曲が見られ、周囲は石垣で固められている。石垣の石材は近隣で採取できる板石状の結晶片岩で、その石材を用いて垂直に積まれている。石垣のすべてが城に伴うものかは判断が難しい。

昭和63年度～平成2年度にかけて発掘調査が行われ、主郭の曲輪面上で礎石建物に用いられたとみられる礎石、虎口に門礎とみられる礎石が検出された。

主郭の東側に大型の堀切、南側斜面に4本の竪堀群があり、大型の堀切は『軍談』に天正12年の戸次道雪をはじめとする豊後勢の猫尾城攻略の際に掘られたものと記される。

大型堀切の東側は緩斜面となっており、こちらが『軍談』にある三ノ丸と考えられている。現在では、城山公園として駐車場・トイレが整備され、山頂付近まで車で訪れることができる。本丸跡や二ノ丸跡の散策が可能で、山頂から黒木の町並みを眺めることができる。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR鹿児島本線羽犬塚駅から堀川バス黒木中学前から徒歩約35分
- ●自家用車／九州自動車道八女ICまたは広川ICから約35分

■所在地／福岡県八女市黒木町北木屋地内
■指定年月日／昭和58年3月19日

▼猫尾城跡縄張り図
（出典／木島孝之編『城郭の縄張り構造と大名権力』九州大学出版会）





▲猫尾城－遠景（南西から）



▲猫尾城－本丸跡

町史跡

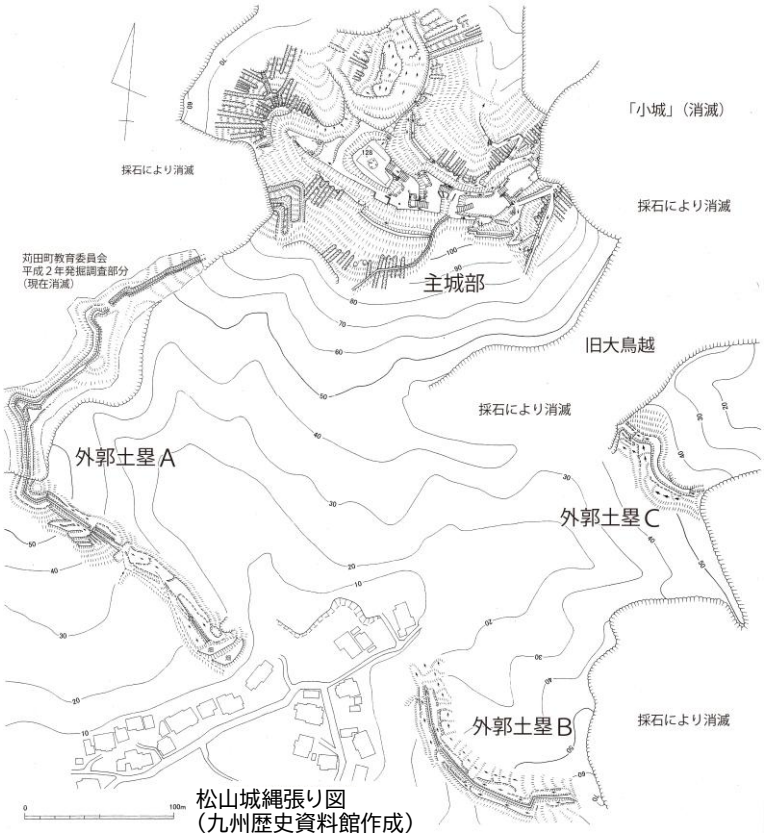
松山城跡（まつやま）

福岡県苅田町

松山城跡は、標高128メートルの松山の頂に築かれた山城であり、天平12年（740）、藤原広嗣によって築かれたといわれている。廃城となる慶長11年（1606）まで重要な拠点として位置づけられ、城を巡る争奪戦が幾度となく行われた。黒田官兵衛が豊前国を統治する際にも、黒田領の北端を守る支城として役割を果たした。現在の松山城跡の周囲は埋め立てられているが、城があった当時は瀬戸内海に向かって半島状に突き出た要塞であった。永禄4年（1561）に名将・小早川隆景が入城した際には、「国中見渡堅固之在所之第一（豊前一堅固である」と賞賛している。

また、松山城から出土した瓦の中に、「桐葉」の紋様が施された軒平瓦がある。この瓦は、黒田官兵衛と深い関連があると考えられており、苅田町に展示されている。

山頂まで約30分と気軽に登ることができ、山頂からの見晴らしも素晴らしく北九州空港を一望することができ、晴天時には国東半島まで確認することができる。四季折々の自然と、雄大な眺望を楽しみながら、かつての城郭の面影を残す松山城跡ならではの貴重な歴史的遺産・価値を感じていただきたい



松山城縄張り図
（九州歴史資料館作成）


▲松山城跡


▲松山城跡

■交通アクセス
- ●公共交通機関／JR日豊本線苅田駅
- ●自家用車／東九州自動車道苅田北九州空港ICから約5分
- ●コミュニティバス／JR日豊本線苅田駅よりコミュニティバスで松山城登山口から徒歩5分

■所在地／福岡県京都郡苅田町大字松山
■指定年月日／平成5年12月22日

国史跡	かつのお　ちくしし 勝尾城筑紫氏遺跡	佐賀県鳥栖市

勝尾城筑紫氏遺跡は、市北西部の山麓一帯に位置し、戦国時代後期に肥前、筑前、筑後の国境地帯を中心に勢力を拡げた北部九州の国人領主である筑紫氏の城館群である。

遺跡の規模は、東西約2．5㎞、南北約2㎞に及び、現在見ることのできる城館跡は、主に15世紀末か16世紀後半の約90年間にかけて筑紫氏が整備したものである。

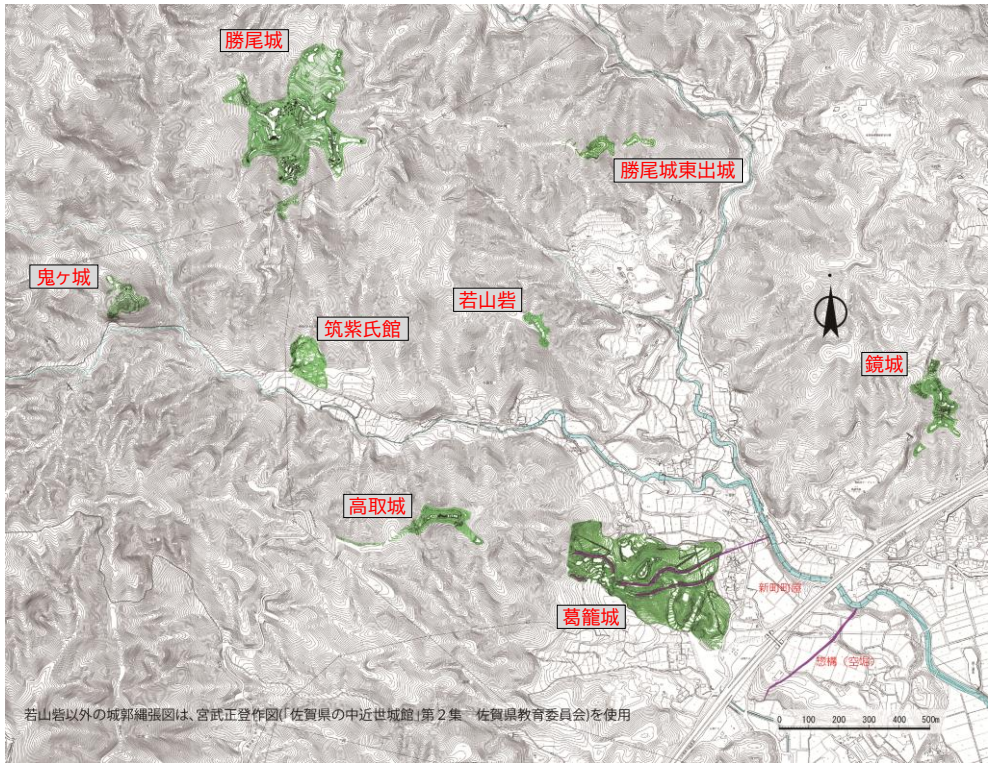
遺跡は、本城の勝尾城（標高約500m）を中心に、狭長な谷をぐるりと取り囲むように支城の鬼ヶ城、高取城、葛籠城、鏡城、若山砦、勝尾城東出城が配置され、勝尾城の南麓の谷筋に城主の居館、家臣団屋敷、町屋が形成され、谷の最も外側には惣構と呼ばれる長大な空堀や随所に石垣などの遺構が良好な状態で残っている。

勝尾城は、天正14年（1586）、九州制覇を目指す薩摩島津氏の攻撃によって落城し、城主の筑紫広門は、久留米の大善寺に幽閉されるが、脱出して勝尾城を奪回する。その後、広門は天正15年（1587）の豊臣秀吉の島津攻めに加わり、その功績により、筑後国上妻郡1万8000石の大名として転封し廃城となった。

現在、春と秋の年2回見学会の開催やボランティアガイドの育成、案内板等の設置、近年では、山林の環境整備を行う団体と協同で体験型のイベントを実施し、史跡の活用事業に取り組んでいる。

■交通アクセス
　●公共交通機関／JR鳥栖駅よりバスで約20分（東橋バス停下車）
　　館跡まで：東橋バス停下車後、徒歩約40分
　　勝尾城まで：館跡から徒歩約50分
　●自家用車／九州・長崎自動車道鳥栖ICから約10分（東屋バス停まで）
■所在地／佐賀県鳥栖市牛原町・山浦町・河内町
■指定年月日／平成18年1月26日
　（追加指定平成22年2月22日、平成24年1月24日）
■指定面積／約230ha

▼勝尾城筑紫氏遺跡全体図




▲勝尾城－石垣


▲葛籠城－堀

国史跡	勝本城跡（かつもと）	長崎県壱岐市

壱岐島の北部に位置する勝本城跡は、勝本港を見下ろす標高の丘陵に立地する山城で、風本城・武末城とも呼ばれている。豊臣秀吉は、朝鮮出兵に際して肥前名護屋城を本陣とし、兵站基地として壱岐・対馬にそれぞれ出城を築いた。壱岐島の出城として、海上交通上の要路であり、対馬を眺望できる島の北部にある城山が候補地として選ばれた。

勝本城の築城には平戸藩主の松浦鎮信が主としてこれにあたり、肥前日野江藩主の有馬晴信・肥前大村藩主の大村喜前・肥前福江藩主の五島純玄がこれを支援し、4ケ月の月日をかけて天正19年（1591）末に完成。その後天正20年（1592）から慶長3年（1598）までの間、城代として豊臣秀長の家臣・本多正武が家来500人とともに駐屯したとされる。

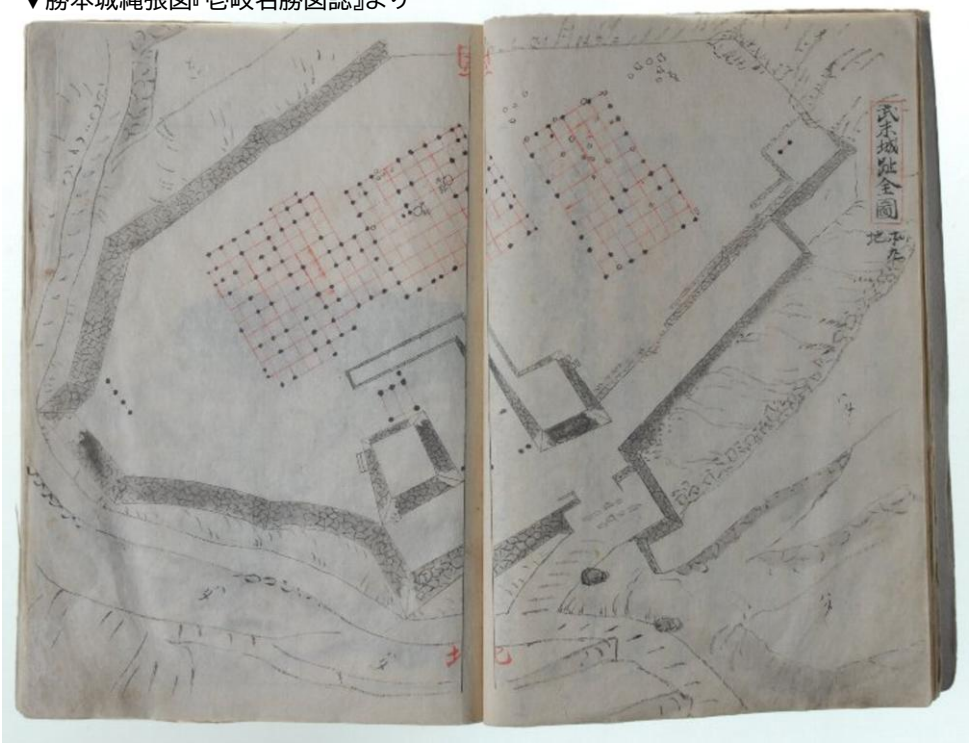
現在は、城山の山頂に残る本丸跡にある虎口の枡形をなす石垣が当時の面影を残しており、破城跡をみることができる。

江戸時代末期の文久元年（1861）に記された『壱岐名勝図誌』の本文に勝本城に関する情報として「主体部は東北東―西南西方向47間1尺〔約90メートル〕、北北西―南南東方向が24間（約44メートル）を測る、北北西の方向に門跡、複数の建物礎石と井戸跡が見られる場所が2箇所残る」と記録されており、江戸時代末期の城跡の様子が挿絵で鮮明に描かれている。

勝本城跡は、野面積から切石積に移行する過渡期を示す文禄・慶長期を代表する石垣が当時のまま残っており、築城工学史上においても指標となる山城であることが評価され、平成14年（2002）に国史跡の指定を受けた。

■交通アクセス
●自家用車／郷ノ浦港から約25分
芦辺港から約15分
壱岐空港から約35分
■所在地／長崎県壱岐市勝本町坂本触757他
■指定年月日／平成14年3月19日

▼勝本城縄張図『壱岐名勝図誌』より





◀勝本城跡（大手門）

国史跡

日野江城跡（ひのえ）

長崎県南島原市

日野江城跡は、戦国大名有馬氏の居城である。南北朝時代から江戸時代の初め頃まで島原半島を領有し、16世紀前半の最盛期においては、現在の佐賀市付近まで影響力を及ぼした。16世紀後半以降、城主の有馬義貞、晴信がイエズス会の洗礼を受けたことから、キリシタン大名の居城としても知られている。

慶長19年（1614）、有馬直純が日向延岡に国替えとなった後、有馬藩領は一時天領となった。元和2年（1616）、二見城より松倉重政が入城したのち、島原城（森岳城）の築城に伴い廃城になった。

立地・構造としては、雲仙山系から南へ延びる丘陵先端に位置し、東西には有馬川と大手川が流れている。城域は約12haと広大で、標高80m ほどの本丸を中心に、周囲に複数の曲輪が存在する。また城内には字城山、字二ノ丸といった城郭に関連する字名が残っている。本丸の北側には物見台と考えられる曲輪があり、自然地形を生かした長大な堀のほか、土橋、堀切、切岸なども残存している。

これまでの発掘調査の成果によって、本丸においては、池状遺構や掘立柱建物跡などを確認している。池状遺構からは風炉や法花が出土し、茶室を伴う庭園の存在が想定される。

二ノ丸においては、曲輪の巨大化、織豊系城郭の影響と考えられる桝形虎口、石垣、礎石などを確認している。また、桝形虎口の隅角からは金箔瓦も出土し近世化の動向がうかがえる。桝形虎口においては、宝篋印塔の基礎・搭身、五輪塔の地輪などを階段の踏石に転用している。階段の袖石垣には溶結凝灰岩を石材とする整った方形、あるいは薄いパネル状の加工、また石材の角に刳り込みを入れた切石を使用するなど、当時の国内において例のない技術が見られ、有馬氏の城づくりの独自性がうかがえる。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／島原鉄道バス日野江城入口バス停
- ●自家用車／県道30号線橋口バス停を北に350m
  県道30号線JA島原雲仙北有馬給油所を北に300m

■所在地／長崎県南島原市北有馬町谷川名

■指定年月日／昭和57年7月3日

▼日野江城赤色立体図





▲日野江城－空撮



▲日野江城－階段遺構

国史跡	岡城跡（おか）	大分県竹田市

文治元年（1185）に大野郡緒方荘の緒方惟栄が、源頼朝と仲違いした弟義経を迎えるために岡城を築いたという伝説がある。やがて、室町時代には大友氏の支族である志賀氏の居城となった。天正14年（1586）から翌年にかけての豊薩合戦では、志賀親善（親次）が要害堅固な岡城を拠点に、攻め寄せる島津義弘の大軍を退けた。

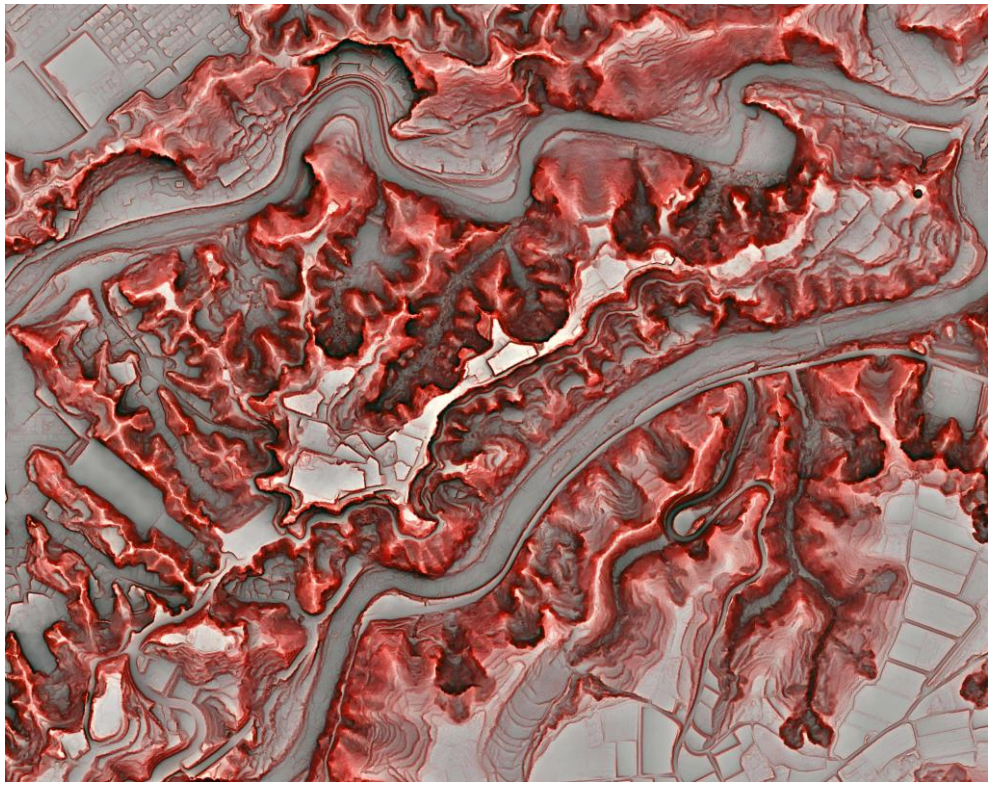
文緑3年（1594）、中川秀成が岡66，000石（後に岡藩70，000石）の領主として岡城に入城した。秀成はすぐに岡城の普請に着手し、天神山に本丸・二の丸・三の丸を築き、さらに西側へ城域を拡大し、断崖絶壁上に長大な石垣を連ねる総石垣造りの近世城郭へと岡城を大改修した。寛文3年（1663）には3代藩主久清により西の丸が整備された。

岡城は稲葉川と白滝川に挟まれた台地状の山上に築かれた山城である。細長く東西にのびる尾根伝いに曲輪が並び、周囲は断崖絶壁と深い谷に囲まれているため、限られた登城口から攻め上がるほかなく、圧倒的に守る側が有利となっている。その上、要所要所に櫓・枡形虎口・横矢掛りを配置し、地形を最大限に活用した効率的かつ鉄壁の守りが構築されていた。

廃藩置県後の明治7年（1874）、「廃城令」により城内の建造物はすべて取り壊されてしまう。瀧廉太郎は12歳からのおよそ2年半を竹田で過ごし、荒れ果てた跡に登ってよく遊んでいたという。この少年時代の体験が後の中学唱歌「荒城の月」の作曲に大きな影響を与えたともいわれている。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR豊肥本線豊後竹田駅から徒歩20分
●自家用車／東九州自動車道・大分自動車道米良ICから約50分
九州自動車道熊本ICから約70分
■所在地／大分県竹田市大字竹田2761（岡城駐車場）
■指定年月日／昭和11年12月16日
■問合せ先／竹田市教育委員会文化財課☎0974-63-4818

▼岡城赤色立体図





▲岡城－空撮



▲岡城－三の丸高石垣

国史跡	角牟礼城跡（つのむれ）	大分県玖珠町

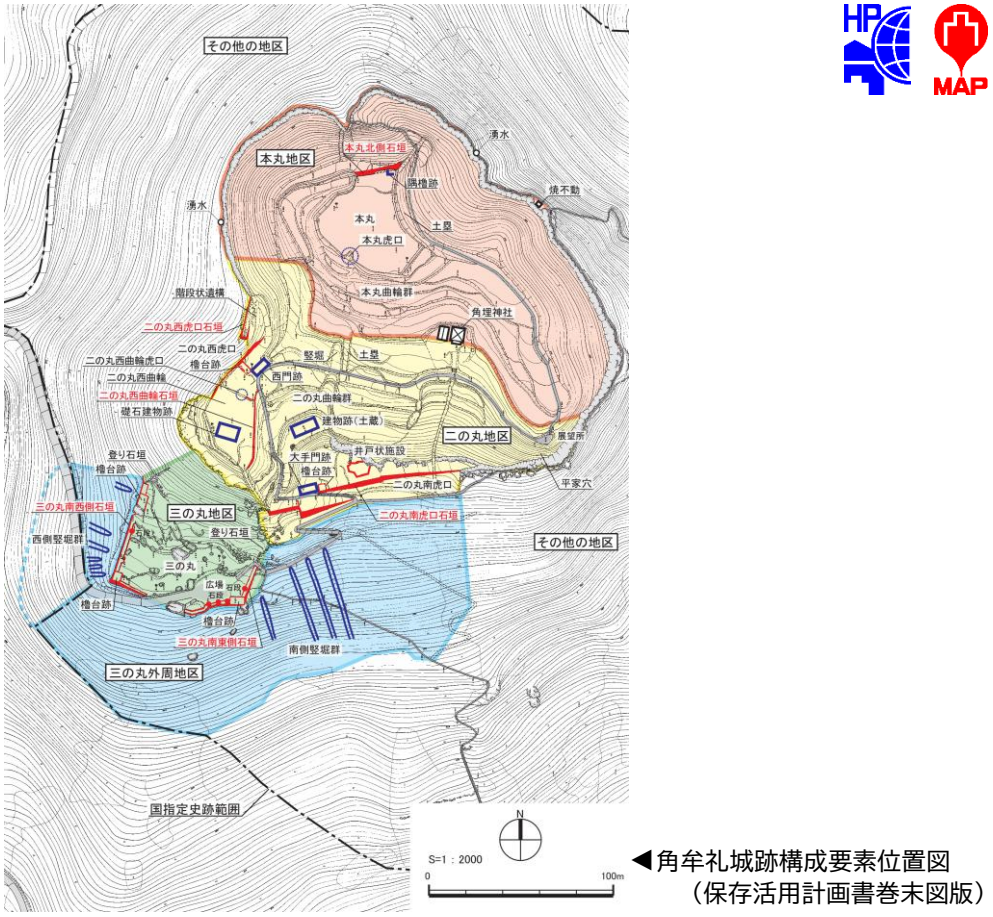
大分県西部の玖珠町にある角牟礼城跡は、中世的要素と近世的要素を同時に見ることができる山城で「土づくりの城から石垣を主体とした城への変遷を知るうえで重要」として、平成17年に国の史跡となった。戦国期の角牟礼城は豊前側（北側）の押えとしての役割を担い、天正14年（1583）の島津軍の侵攻（豊薩戦）では島津軍の豊後撤退まで守りきった。大友氏除国後の文禄3年（1594）に毛利高政が入国し、石垣を持つ近世城郭への改修が行われた。慶長6年（1601）に入国した来島氏（伊予の村上海賊、のち久留島）は角埋南麓に陣屋を築き、角牟礼城は使用せず一般の入山を制限する御留山として管理した。

角埋山頂は三方を数mから30mの断崖で囲まれているため、主に南側斜面の守りを固めている。毛利高政がつくった石垣（本丸北側・二の丸・三の丸）はいずれも角埋山の断崖の切れ目を繋ぐように配置されており、断崖を天然の石垣とみなせば、総石垣の考え方でつくられたと思われる。

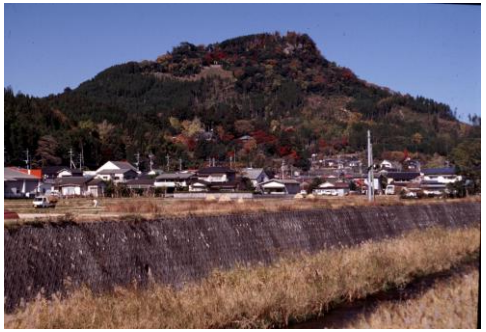
大手側の南虎口石垣は最大高7m、全長約100mと城内最大で、実際の防御効果だけでなく南麓にある城下町からの見栄え効果もあったと思われる。また、二の丸南西にコの字状に張り出す三の丸は全体を石垣で囲み、斜面には二の丸に向かって登り石垣跡が確認できる。

大手門は、礎石が検出されており、その配置から桁行約9m、梁行約4．5mであると推測される。門は、瓦の出土により瓦葺きであったことが確認され、扉と思われる位置からかんぬき金具も出土している。

■交通アクセス
　●公共交通機関／JR久大線豊後森駅
　●自家用車／大分自動車道玖珠ICから約10分
■所在地／大分県玖珠郡玖珠町大字森字角埋山地内
■指定年月日／平成17年3月2日



◀角牟礼城跡構成要素位置図
（保存活用計画書巻末図版）



▲角牟礼城－全景（北から）



▲角牟礼城－紅葉の大手門

国史跡	佐土原城跡（さどわら）	宮崎県宮崎市

佐土原城跡は、宮崎平野の中央部を流れる一ツ瀬川の南側丘陵上に位置し、中世の山城から近世城郭への移り変わりをみることのできる城跡である。

佐土原城は南北朝時代に田島氏によって築かれたと伝えられる。戦国時代には日向国を治めた伊東義祐によって、政治・経済・文化の中心として繁栄した。1577年（天正5年）以降は島津氏の領有となり、島津家久・豊久父子らが拠点とした。江戸時代に入ると一時幕府領となったが、1603年（慶長8年）に初代藩主となる島津以久が入城してからは、佐土原藩3万石の藩庁および城下町として整備され、1870年（明治3年）の広瀬転城まで存続した。

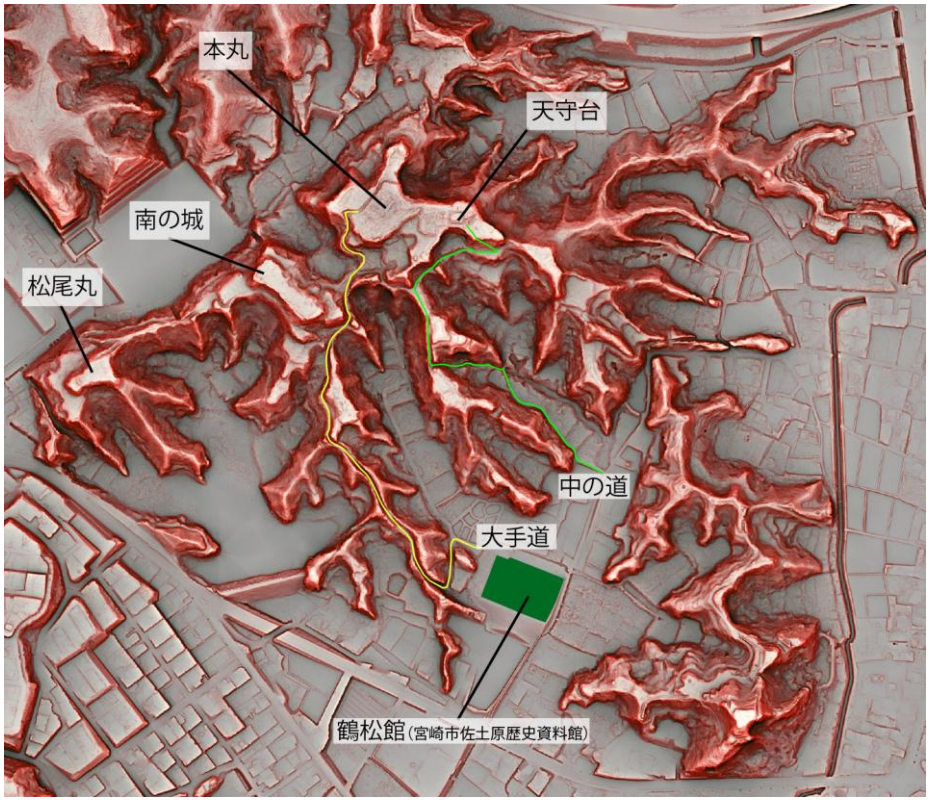
佐土原城跡の特徴としては、宮崎層群と呼ばれる岩盤層からなる丘陵の自然地形を巧みに利用した「山城部」と、麓の「居館部」で構成されている点が挙げられる。山城部には本丸や南の城、松尾丸などの曲輪が配置され、空堀や切岸といった防衛構造が残されている。特に城の最も主要な登城路である「大手道」は、長さ約200mにわたって尾根を縦に断ち割って造られており、両側に崖がそびえる堀底道のような非常に珍しい構造を持つ。また、最大の注目点は、南九州の山城で唯一「天守」が存在したことである。本丸北側の発掘調査によって、天守台の石垣が確認され、金箔鯱瓦も出土している。この天守は、文献によると江戸時代初期の1611年～1612年（慶長16年～17年）頃に、2代藩主の島津忠興によって城の大改修とともに建てられたが、1625年（寛永2年）には山城部分を破却して、藩庁を麓の二の丸へと移した。

現在、二の丸跡に宮崎市佐土原歴史資料館「鶴松館」が建てられており、出土遺物や歴史資料を展示している。山城部への散策路も整備されており、歩きながら当時の縄張りや自然地形を利用した防衛構造を体感することができる。

■交通アクセス
- ●公共交通機関／宮崎交通西都方面行きバス「交流センター前」下車徒歩約1分
- ●自家用車／市内中心部から国道219号線、県道14号線を経由して約40分

■所在地／宮崎県宮崎市佐土原町上田島
■問合せ先／宮崎市教育委員会文化財課0985－85－1178
宮崎市佐土原歴史資料館鶴松館
開館日：年末年始を除く土日、祝日のみ（9時～16時30分）
■指定年月日／平成16年9月30日

▼佐土原城赤色立体図




▲佐土原城－大手道


▲佐土原城－天守台跡

国史跡	穆佐城跡（むかさ）	宮崎県宮崎市

穆佐城跡は、宮崎県下最大の河川である大淀川の南側丘陵上に位置する。この丘陵周辺には宮崎平野から都城盆地に抜ける陸路があり、陸路と大淀川の水運が交差する、交通・物流の要衝であった。

穆佐城の史料上の初見は、南北朝初期の1335年（建武2年）であり、宮崎県内で最も古い時期から存在する山城の一つである。14世紀中頃には室町幕府が派遣した日向国大将の畠山直顕が穆佐城に入城して拠点とした。15世紀前半には南九州の二大勢力である島津氏と伊東氏による約50年間に及ぶ激しい争奪戦の舞台となった。この間、島津家第9代当主となる島津忠国が誕生した地とも伝えられる。その後は約130年間にわたり伊東氏の支配が続いたが、戦国末期には島津氏の領有となり、1615年（元和元年）の一国一城令によって廃城を迎えた。

穆佐城跡の特徴としては、東西約600m、南北約400mの広大な城域を持ち、上端幅最大40m、深さ約13mにおよぶ3本の大規模な空堀によって、丘陵が4つの区画（A～D地区）に大きく分割されている点が挙げられる。標高約50mの曲輪群は、明確な高低差がなく、各地区が独立性の高い防衛構造を持つ。このような特徴を持つ山城は、「群郭式城郭」と呼ばれている。また、曲輪群の特徴から、それぞれの機能も推定されている。中央のB地区は主郭や上級武士の屋敷地が置かれた中枢部で、大規模な空堀や土塁、屈曲する虎口により厳重に守られていた。C地区は上級武士の屋敷跡とされ、A・D地区は見張りや戦闘用としての機能が考えられている。

現在は、城内の散策路や解説板、ガイダンス施設が整備されている。西側に高い土塁を有する主郭や、シラス地質特有の垂直に近い切岸や、大規模な空堀等の中世山城の高度な防衛構造が良好な状態で残存している。

■交通アクセス
●公共交通機関／宮崎交通尾頭・赤谷方面行きバス「穆佐小前」下車徒歩約5分
●自家用車／市内中心部から国道10号線、県道352号線を経由して約30分
■所在地／宮崎県宮崎市高岡町小山田
■問合せ先／宮崎市教育委員会文化財課0985－85－1178
穆佐城跡ガイダンス施設／開館日：年末年始を除く土日のみ（10時～15時）
■指定年月日／平成14年3月19日

▼穆佐城縄張り図



千田嘉博氏原図作成



▲穆佐城－曲輪群



▲穆佐城跡ガイダンス施設

国史跡	知覧（ちらん）城跡	鹿児島県南九州市

知覧城跡は、シラス台地縁辺部に形成された侵食谷を深い空堀として利用した、大規模な縄張りを持つ城跡である。城を構成する曲輪がそれぞれ独立性を持つ「群郭式」と呼ばれる構造を特徴とし、南九州を代表する城館遺跡の一つとして、「続日本100名城」にも選定されている。

城の構造は、本丸・蔵之城・今城・弓場城を中心とする曲輪群を、西ノ栫・東ノ栫・式部殿城などの周辺の曲輪群が取り囲む構成となっている。城域の面積は約41万㎡で、このうち約22．4万㎡が国の史跡に指定されている。

築城年代は明らかではないが、記録によれば、文和2・正平8年（1353）に足利尊氏から島津忠宗の三男・佐多忠光に知覧の領地が与えられて以後、佐多氏の居城となった。天正19年（1591）佐多氏11代久慶のときには宮村（現在の南九州市川辺町宮）へ転封となり、知覧は一時、種子島久時の所領となった。これは、佐多氏の家人による海賊行為を久慶が内々に処理しようとしたことが島津義弘の怒りに触れたためとされる。その後、知覧城は火災に遭い、廃城となったと考えられている。

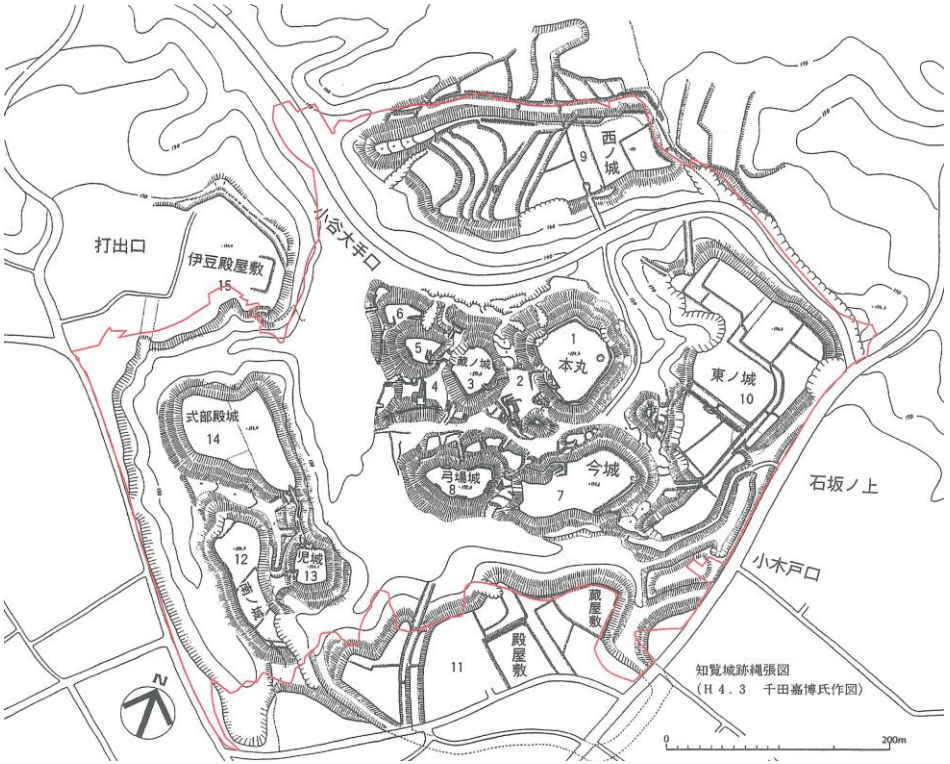
江戸時代に入り、佐多氏が知覧の地頭として復帰すると、領主や家臣たちは城から北へ約1km離れた場所に領主館（御仮屋）を設け、その周辺に武家屋敷を構えた。特に、島津家から養子に入り佐多氏を継いだ島津久峯の時代には、武家屋敷群や庭園の整備が進められ、現在の知覧武家屋敷（重要伝統的建造物群保存地区や国指定名勝）の景観につながる町並みが形づくられた。

これまでの発掘調査によって、建物跡を示す柱穴や空堀、虎口などの遺構が確認されている。また、15～16世紀を中心とする青磁・白磁・青花などの中国産陶磁器をはじめ、備前焼や薩摩焼などの国内産陶磁器のほか、かんざし、金銅製十一面観音菩薩像、鉄釘など、多くの遺物が出土している。

現在、蔵之城跡には解説板や半立体による復元表示などが設置され、史跡への理解を深めるための整備が行われている。また、近隣のミュージアム知覧が、知覧城跡の歴史や出土資料などを紹介するビジターセンターとしての役割を担っている。

■交通アクセス
●公共交通機関／JR九州新幹線鹿児島中央駅
⇒鹿児島交通バス知覧行中郡から徒歩約15分
●自家用車／指宿スカイライン知覧ICから知覧方面約10㎞
■所在地／南九州市知覧町永里字城内山
■指定年月日／平成5年5月7日

▼知覧城跡縄張り図




▲知覧城－空撮


▲知覧城－蔵之城跡整備

国史跡

浦添城跡（うらそえ）

沖縄県浦添市

沖縄本島南部浦添市の東側に、南東－北西方向に細長く伸びる石灰岩丘陵上に所在するグスク（城）で、周囲から突出した丘陵の頂部、標高約130～140mに構築されている。13世紀末～14世紀初頭には出現したと考えられ、三山時代、中山王が居城としていたとされる。当初は野面積みによる城壁が南東側の一隅に構築され、その後14世紀半～15世紀初頭にかけて布積みによる城壁が増築され、最大規模となった。中山の拠点が首里城に移った後は、城の規模は急激に小さくなったとされるが、16世紀には王族の分家の居館となり、人は住み続けていた。しかしながら、1609年の薩摩侵攻により焼き討ちにあい、1617年に修復が行われたが、その後の状況は不明である。1945年の沖縄戦では日本軍の陣地となったことから激戦地となり石積城壁は崩落、さらには崩落した石は沖縄の戦後復興のための資材として持ち出され、かつてのグスクの姿は失われた。

昭和57年の第一次調査を皮切りに現在まで発掘調査が続けられ、残存する遺構が徐々に確認されてきたことで、グスクの構造が明らかとなってきた。琉球石灰岩の切石を用いた外郭城壁に囲まれ、その内側は石牆により区切られ複数の内郭を有した構造とみられる。郭内からは他に類を見ないほどの大量の高麗系瓦が出土しており、瓦葺きの建物が立ち並ぶ様子が想起される。また、城の北側の丘陵中腹に横穴を掘り込んで造営された王陵浦添ようどれが所在し、英祖王・尚寧王の一族が葬られている。

浦添城跡は平成元年に国の史跡に指定された後、復元整備を開始し、平成16年にグスクの北東側に造営された王陵「浦添ようどれ」の復元を完了した。現在はグスクの外郭城壁の復元を進めており、平成19年には一部の石積城壁を復元した。これに続いて外郭城壁の復元を進めるべく、調査等を進めているところである。

■交通アクセス
●公共交通機関／琉球バス55系統牧港線仲間バス停
モノレール「浦添前田駅」から徒歩約10分
●自家用車／国道330号大平ICから約5分
■所在地／沖縄県浦添市仲間・前田・当山各地内
■指定年月日／平成元年8月11日■指定面積／124，209．97㎡

▼浦添城跡地形図





▲浦添城跡－空撮



▲浦添城跡

全国山城サミット連絡協議会
これまでの開催の歩み

全国山城サミット連絡協議会開催の歩み

●第1回全国山城サミット　兵庫県和田山町
（戦国山城サミット）
【日時】平成6年10月2日(日)～10月10日(月)
【会場】和田山町文化会館、竹田城跡周辺、幸徳殿
【主催】和田山町祭典企画実行委員会
【開催内容】
①戦国山城サミット(8日・幸徳殿)
山城の保存と山城を活かしたまちづくりをテーマに開催
②基調講演(8日・文化会館)
講師：市川森一氏(平成6年度NHK大河ドラマ「花の乱」原作並びに脚本家)
演題：「歴史の視点から山城を活かしたまちづくりへの提言」
③参加市町の山城紹介(8日・文化会館)
④参加市町村山城写真展(2日～10日・文化会館リハーサル室)
⑤竹秋祭りパレード(9日)「戦国山城サミット宣言」を開催
⑥竹田城跡写真展(2日～10日・文化会館展示室)
【参加自治体】
春日山城跡(新潟県上越市)、七尾城跡(石川県七尾市)、八王子城跡(東京都八王子市)、石垣山一夜城跡(神奈川県小田原市)、山中城跡(静岡県三島市)、杣山城跡(福井県南条町)、小谷城跡(滋賀県湖北町)、高取城跡(奈良県高取町)、和歌山城跡(和歌山県和歌山市)、此隅山城跡・有子山城跡(兵庫県出石町)、竹田城跡(兵庫県和田山町)、、八木城跡(兵庫県八鹿町)、黒井城跡(兵庫県春日町)、白旗城跡(兵庫県上郡町)、感状城跡(兵庫県相生町)、洲本城跡(兵庫県洲本市)、鳥取城跡(鳥取県鳥取市)、金山要害山城(島根県宍道町)、月山富田城跡(島根県広瀬町)、備中松山城跡(岡山県高梁市)、郡山城跡(広島県吉田町)、勝賀城跡(香川県高松市)

●第2回全国山城サミット　静岡県三島市
（全国戦国山城サミット連絡協議会設立準備会）
【日時】平成7年10月26日(木)～10月27日(金)
【会場】みしまプラザホテル、三島神社、山中城跡
【主催】三島市
【開催内容】
①全国山城サミット連絡協議会の設立
②同協議会の規約の制定
③山城の保存方法や活用についての情報交換
【参加自治体】
春日山城跡(新潟県上越市)、七尾城跡(石川県七尾市)、杣山城跡(福井県南条町)、興国城跡(静岡県沼津市)、丸子城跡(静岡県静岡市)、山中城跡(静岡県三島市)、深沢城跡(静岡県御殿場市)、修善寺城跡(静岡県下田市)、下田城跡(静岡県下田市)、丸山城跡・高谷城跡(静岡県土肥町)、小山城跡(静岡県吉田町)、諏訪原城跡(静岡県金谷町)、横須賀城跡(静岡県大須賀町)、高天神城跡(静岡県大東町)、小谷城跡(滋賀県湖北町)、高取城跡(奈良県高取町)、竹田城跡(兵庫県和田山町)、八木城跡(兵庫県八鹿町)、白旗城跡(兵庫県上郡町)、鳥取城跡(鳥取県鳥取市)、郡山城跡(広島県吉田町)

●第3回全国山城サミット　新潟県上越市
【日時】平成8年8月16日(金)
【会場】リージョンプラザ上越コンサートホール
【主催】上越市
【開催内容】
①基調講演
講師：石森秀三氏(国立民族学博物館教授)
演題：「観光立都のすすめ－山城を活かしたまちづくり」
②サミット
コーディネーター：加藤章氏(上越教育大学長)
助言者：石森秀三氏(国立民族学博物館教授)
パネリスト：参加16市町村長
【参加自治体】
春日山城跡(新潟県上越市)、七尾城跡(石川県七尾市)、鳥越城跡(石川県鳥越村)、杣山城跡(福井県南条町)、坂戸城跡(新潟県六日町)、八王子城跡(東京都八王子市)、石垣山一夜城跡(神奈川県小田原市)、平井城跡・金山城跡(群馬県藤岡市)、興国城跡・長浜城跡(静岡県沼津市)、山中城跡(静岡県三島市)、下田城跡(静岡県下田市)、諏訪原城跡(静岡県金谷町)、小谷城跡(滋賀県湖北町)、高取城跡(奈良県高取町)、竹田城跡(兵庫県和田山町)、郡山城跡(広島県吉田町)

●第4回全国山城サミット　広島県吉田町
【日時】平成9年10月30日(木)～10月31日(金)
【会場】吉田町中央公民館、郡山城跡、元就墓所
【主催】吉田町
【開催内容】
①記念講演
講師：三浦正幸氏(広島大学工学部助教授)
演題：「山城の保存と活用」
②サミット
テーマ：「山城の保存と活用」
コーディネーター：三浦正幸氏(広島大学工学部助教授)
パネリスト：参加9市町村長
③現地研修
元就寺、吉田町歴史民俗資料館、元就墓所、郡山城本丸
【参加自治体】
春日山城跡(新潟県上越市)、七尾城跡(石川県七尾市)、鳥越城跡(石川県鳥越村)、杣山城跡(福井県南条町)、坂戸城跡(新潟県六日町)、八王子城跡(東京都八王子市)、石垣山一夜城跡(神奈川県小田原市)、平井城跡・金山城跡(群馬県藤岡市)、興国城跡・長浜城跡(静岡県沼津市)、山中城跡(静岡県三島市)、下田城跡(静岡県下田市)、諏訪原城跡(静岡県金谷町)、小谷城跡(滋賀県湖北町)、高取城跡(奈良県高取町)、竹田城跡(兵庫県和田山町)、郡山城跡(広島県吉田町)、

第5回全国山城サミット　滋賀県湖北町
【日時】平成10年10月3日(土)～10月4日(日)
【会場】滋賀県湖北町
【主催】湖北町
【開催内容】
①基調講演
講師：藤村泉氏(滋賀県立安土城郭調査研究所長)
演題：「城郭建築について」
②サミット
テーマ：「山城～現代に生かすその大いなる遺産」
コーディネーター：近藤滋氏(滋賀県文化財保護課専門員)
パネリスト：第1回～第5回サミット開催地の自治体

【参加自治体】
春日山城跡(新潟県上越市)、坂戸城跡(新潟県六日町)、七尾城跡(石川県七尾市)、鳥越城跡(石川県鳥越村)、杣山城跡(福井県南条町)、山中城跡(静岡県三島市)、八幡山城跡(滋賀県近江八幡市)、補陀楽城跡(滋賀県甲賀町)、小川城跡(滋賀県信楽町)、上平寺城跡(滋賀県伊吹町)、小谷城跡(滋賀県湖北町)、高取城跡(奈良県高取町)、竹田城跡(兵庫県和田山町)、八木城跡(兵庫県八鹿町)、月山富田城跡(島根県広瀬町)、郡山城跡(広島県吉田町)

●第6回全国山城サミット　奈良県高取町

【日時】平成11年11月22日(月)～11月23日(火)
【会場】奈良県高取町
【主催】高取町
【開催内容】
①記念講演
講師:松村みち子氏(タウンクリエーター)
演題:「山城よもやま話」
②交流会アトラクション
和太鼓演奏「山城の風」、「竹取物語」
森下明氏(和太鼓グループ鼓城代表)
【参加自治体】
春日山城跡(新潟県上越市)、鳥越城跡(石川県鳥越村)、山中城跡(静岡県三島市)、小谷城跡(滋賀県湖北町)、高取城跡(奈良県高取町)、竹田城跡(兵庫県和田山町)、八木城跡(兵庫県八鹿町)、郡山城跡(広島県吉田町)、
【特別参加】
岩村城跡(岐阜県岩村町)、宇陀松山城跡(奈良県大宇陀町)

●第7回全国山城サミット　兵庫県和田山町

【日時】平成12年4月22日(土)～4月23日(日)
【会場】文化会館大ホール、幸徳殿、竹田城跡
【主催】和田山町
【開催内容】
①基調講演
講師:渡辺武氏(大阪城天守閣館長)
演題:「秀吉と竹田城」
②座談会
テーマ:「竹田城跡を活かしたまちづくり」
出席者:渡辺武氏(大阪城天守閣館長)
栗田純司氏(穴太流石積第14代当主)
水島元氏(但馬文学会会長)
生田隆氏(地名による郷土史研究家)
③研修視察
竹田城跡、わだやま「竹田」お城まつり
【参加自治体】
春日山城跡(新潟県上越市)、鳥越城跡(石川県鳥越村)、興国寺城跡(静岡県沼津市)、山中城跡(静岡県三島市)、小谷城跡(滋賀県湖北町)、高取城跡(奈良県高取町)、白旗城跡(兵庫県上郡町)、竹田城跡(兵庫県和田山町)
【特別参加】
若桜鬼ヶ城跡(鳥取県若桜町)、直見城跡(京都府夜久野町)、黒井城跡(兵庫県春日町)、山名氏城跡(兵庫県出石町)、ウスギ城跡(兵庫県養父町)、山口城跡(兵庫県朝来町)、夜久野城跡(兵庫県山東町)

●第8回全国山城サミット　石川県鳥越村

【日時】平成13年8月13日(月)～8月14日(火)
【会場】鳥越村山村開発センター3階ホール、鳥越城跡、一向一揆歴史館
【主催】鳥越村
【開催内容】
①特別講演
講師:加来耕三氏(歴史家・作家)
演題:「山城の保存と活用」
②研修視察
一向一揆まつり、薪能、鳥越城跡、一向一揆歴史館
【参加自治体】
春日山城跡(新潟県上越市)、鳥越城跡(石川県鳥越村)、杣山城跡(福井県南条町)、山中城跡(静岡県三島市)、小谷城跡(滋賀県湖北町)、高取城跡(奈良県高取町)、竹田城跡(兵庫県和田山町)、若桜鬼ヶ城跡(鳥取県若桜町)、猫尾城跡(福岡県黒木町)

●第9回全国山城サミット　鳥取県若桜町

【日時】平成14年10月13日(日)～10月14日(月)
【会場】若桜氷ノ山高原の宿「氷太くん」
【主催】若桜町
【開催内容】
①記念講演「未知なる名城若桜鬼ヶ城」
講師:角田誠氏(城郭談話会会員)
演題:「若桜鬼ヶ城と織豊政権による因幡統一」
講師:宮田逸民氏(城郭談話会会員)
演題:「若桜鬼ヶ城の防御・火縄銃と弓矢」
②研修視察
若桜鬼ヶ城、岩屋堂、若桜郷土文化の里
【参加自治体】
石川県鳥越村、福井県南条町、滋賀県湖北町、奈良県高取町、兵庫県和田山町、兵庫県八鹿町、兵庫県夢前町、鳥取県鳥取市、鳥取県若桜町
【特別参加】、
兵庫県波賀町

●第10回全国山城サミット　兵庫県夢前町

【日時】平成15年10月18日(土)～10月19日(日)
【会場】置塩構造改善センター多目的研修室
【主催】置塩城まつり実行委員会、夢前町、夢前町教育委員会、夢前ライオンズクラブ
【開催内容】
①基調講演
講師:村田修三氏(大阪大学大学院名誉教授)
演題:「城郭史の中の置塩城」
②シンポジウム
テーマ:「郷土の歴史を見直そう！播磨の置塩城」
コーディネーター:村田修三氏(大阪大学大学院名誉教授)
パネラー:山上雅弘氏(兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所主任)
山田修氏(夢前町文化財審議会委員長)
③現地研修
置塩城跡第3次発掘調査現地説明会
【参加自治体】
石川県鳥越村、福井県南条町、滋賀県湖北町、滋賀県新旭町、奈良県高取町、兵庫県和田山町、兵庫県八鹿町、兵庫県夢前町、兵庫県上郡町、兵庫県波賀町、鳥取県若桜町、愛媛県松野町

●第11回全国山城サミット　愛媛県松野町

【日時】平成16年10月9日(土)～10月10日(日)
【会場】松野町コミュニティーセンター、河後森城跡

【主催】松野町、松野町教育委員会、森の国山城の会
【開催内容】
①基調講演
講師：三浦正幸氏（広島大学大学院文学研究科教授）
演題：「中世山城の建物と河後森城」
②シンポジウム
テーマ：「河後森城跡にみる中世山城の世界―四万十川をつなぐ城と城―」
コーディネーター：下條信行氏（愛媛大学教授）
パネラー：木戸雅寿氏（滋賀県文化財保護協会）
松田直則氏（高知県埋蔵文化財センター）
山本栄作氏（森の国山城の会）
高山剛氏（松野町教育委員会）
③現地研修
河後森城跡の整備、発掘見学会、松丸街道の町並み
【参加自治体】
滋賀県新旭町、兵庫県和田山町、兵庫県夢前町、鳥取県若桜町、愛媛県宮窪町、愛媛県松野町、鹿児島県知覧町
【特別参加】
美作の中世山城サミット実行委員会

●第12回全国山城サミット　滋賀県高島市

【日時】平成17年10月1日（土）～10月2日（日）
【会場】高島市生涯学習センター「ガリバーホール」、清水山城館跡
【主催】高島市、高島市教育委員会、高島市の山城サミット実行委員会
【開催内容】
①基調講演
講師：山村亜希氏（愛知県立大学文学部講師）
演題：「戦国期清水山城・城下の景観」
②記念講演
講師：小野正敏氏（国立歴史民俗博物館教授）
演題：「戦国時代の山城と城下がもつ多様な機能
～越前を中心に」
③記念フォーラム
テーマ：「高島の山城と北陸街道～城下の景観」
コーディネーター：金田章裕氏（京都大学教授）
パネラー：小野正敏氏（国立歴史民俗博物館教授）
仁木宏氏（大阪市立大学大学院助教授）
山村亜希氏（愛知県立大学文学部講師）
横井川博之氏（高島市教育委員会文化財課）
④現地研修
清水山城跡館跡見学会、高島の城と琵琶湖対岸のお城のろしリレー、高島衆市場
【参加自治体】
群馬県太田市、福井県南越前町、福井県美浜町、福井県小浜市、滋賀県高島市、滋賀県木之本町、滋賀県安土町、兵庫県養父市、兵庫県朝来市、兵庫県夢前町、広島県三原市、愛媛県松野町
【特別参加】
美作の中世山城サミット実行委員会、近江中世城郭保存団体連絡会

●第13回全国山城サミット　群馬県太田市

【日時】平成18年10月14日（土）～10月15日（日）
【会場】太田市新田文化会館（エアリスホール）、金山城跡
【主催】太田市、太田市教育委員会
【テーマ】山城の整備からまちづくりへ
【開催内容】
①基調講演1
講師：為国孝敏氏（足利工業大学工学部教授）
演題：「まちづくりの視点から山城を考える」
②基調講演2
講師：小島幸雄氏（上越市教育委員会生涯学習推進課副課長）
演題：「地域の力が守る山城～春日山城の植生管理から」
③基調講演3
講師：高橋修氏（茨城大学人文学部教授）
演題：「“熊野水軍”とともにくらす～和歌山県白浜町日置地区の取り組みを中心に」
④記念フォーラム
テーマ：「山城の整備からまちづくりへ」
コーディネーター：為国孝敏氏（足利工業大学工学部教授）
パネラー：伊藤正義氏（文化庁記念物課主任文化財調査官）
高橋修氏（茨城大学人文学部教授）
小島幸雄氏（上越市教育委員会生涯学習推進課副課長）
⑤現地研修
金山城跡
【参加自治体】
山形県大江町、福島県桑折町、栃木県佐野市、群馬県高崎市、群馬県藤岡市、群馬県太田市、千葉県酒々井町、新潟県胎内市、富山県魚津市、富山県砺波市、福井県美浜町、静岡県島田市、三重県亀山市、滋賀県高島市、兵庫県朝来市、広島県三原市、愛媛県今治市、宮崎県宮崎市
【特別参加】
美作の中世山城サミット実行委員会、比企地区文化財振興協議会、金山城保存会

●第14回全国山城サミット　広島県三原市

【日時】平成19年10月13日（土）～10月14日（日）
【会場】三原市本郷生涯学習センター、高山城跡、新高山城跡
【主催】三原市、三原市教育委員会、第14回山城サミット連絡協議会三原大会実行委員会
【テーマ】地域に根ざした山城の保存と活用
【開催内容】
①記念講演
講師：本中眞氏（文化庁記念物課主任文化財調査官）
演題：「歴史遺産を現代に活かし、次世代へと伝えるために…」
②基調講演1
講師：三浦正幸氏（広島大学大学院文学研究科教授）
演題：「山城の歴史と構造」
③基調講演2
講師：岸田裕之氏（龍谷大学教授・広島大学名誉教授）
演題：「小早川隆景の役割と動向」
④現地研修
新高山城跡
【参加自治体】
山形県大江町、福島県桑折町、栃木県佐野市、群馬県高崎市、群馬県藤岡市、群馬県太田市、千葉県酒々井町、新潟県胎内市、富山県魚津市、富山県砺波市、福井県美浜町、静岡県島田市、三重県亀山市、滋賀県高島市、兵庫県朝来市、広島県三原市、広島県東広島市、広島県北広島町、愛媛県今治市、宮崎県宮崎市
【特別参加】
新旭観光ガイドボランティアグループ、近江中世城跡保存団体連絡会、竹田城保存会、美作の中世山城連絡協議会、森の国山城の会、新高山城を守る会

●第15回全国山城サミット　山形県大江町

【日時】平成20年10月18日(土)～10月19日(日)
【会場】大江町町民ふれあい会館、左沢楯山城跡
【主催】山形県大江町、大江町教育委員会
【テーマ】ロマン秘める左沢楯山城
～中世の山城とその景観をまちづくりにどう活かし伝えるか～
【開催内容】
①記念講演
講師:鈴木地平氏(文化庁記念物課文化的景観部門文部科学技官)
演題:「地域の歴史と風土を活かしたまちづくり」
②シンポジウム
テーマ:「中世の山城とその景観をまちづくりにどう活かし伝えるか」
助言者:鈴木地平氏(文化庁記念物課文化的景観部門文部科学技官)
コーディネーター:伊藤清郎氏(山形大学地域教育文化学部地域教育学科教授)
パネラー:入間田宣夫氏(東北芸術工科大学芸術学部歴史遺産学科教授)
藤井尚夫氏(左沢楯山城跡イメージ図製作者)
佐々木浩一氏(八戸市教育委員会市史編さん室長)
志村直愛氏(東北芸術工科大学芸術学部建築環境デザイン科准教授)
③現地研修
左沢楯山城跡
【参加自治体】
秋田県男鹿市、山形県上山市、福島県桑折町、群馬県太田市、新潟県村上市、新潟県胎内市、富山県魚津市、福井県美浜町、滋賀県安土町、兵庫県朝来市、岡山県津山市、広島県三原市、山形県大江町
【特別参加】
竹田城保存会、美作の中世山城連絡協議会、桑折町文化財保護審議会、三遠南信広域観光文化研究会、山形県城郭研究会、西村山地域史研究会、うきたむ考古の会、大江町観光ボランティアの会、左沢楯山城跡調査関連委員会、大江町文化財保護員会

●第16回全国山城サミット　滋賀県安土町

【日時】平成21年10月17日(土)～10月18日(日)
【会場】観音寺城跡、安土町文芸セミナリヨ
【主催】第16回全国山城サミット連絡協議会安土大会実行委員会
【テーマ】観音寺城を活かしたまちづくり
～安土町歴史文化基本構想との関わりを求めて～
【開催内容】
①現地研修
観音寺城跡
②記念講演
講師:近藤滋氏(元滋賀県教育委員会滋賀県安土城郭調査研究所所長)
演題:「観音寺城を活かしたまちづくり」
③基調報告
講師:伊庭功氏(滋賀県教育委員会事務局文化財保護課城郭担当)
演題:「観音寺城発掘調査成果」
④シンポジウム
テーマ:「歴史文化基本構想とまちづくり
～観音寺城がいまに残すものとその活かし方」
【参加自治体】
山形県大江町、群馬県太田市、新潟県村上市、富山県魚津市、福井県美浜町、静岡県浜松市、三重県亀山市、滋賀県高島市、滋賀県米原市、兵庫県朝来市、島根県安来市、岡山県津山市、広島県三原市、愛媛県松野町、滋賀県安土町

●第17回全国山城サミット　岡山県津山市

【日時】平成22年10月30日(土)～10月31日(日)
【会場】音楽文化ホール・ベルフォーレ津山、神楽尾城跡、岩屋城跡
【主催】文化庁、岡山県、岡山県教育委員会、津山市、津山市教育委員会、第17回全国山城サミット連絡協議会津山大会実行委員会、第25回国民文化祭津山市実行委員会
【テーマ】山城を活かす地域交流と文化の再発見
【開催内容】
①史跡現地見学会
②記念講演
講師:千田嘉博氏(奈良大学文学部文化財学科教授)
演題:「山城に歴史を読む―城跡の見方・見せ方」
③シンポジウム
テーマ:「山城を地域に活かすために」
～山城を活かす地域交流と文化の再発見
事例発表
パネルディスカッション
コーディネーター:目瀬守男氏(美作大学名誉学長)
パネラー:千田嘉博氏(奈良大学文学部文化財学科教授)
三宅克広氏(文化庁文化財部記念物課調査官)
長瀧薫氏(美作の中世山城連絡協議会事務局長)
行田裕美氏(津山市文化財課課長)
中西義昌氏(城郭談話会会員)
【参加自治体】
群馬県太田市、富山県魚津市、福井県美浜町、静岡県浜松市、三重県亀山市、滋賀県高島市、滋賀県近江八幡市、兵庫県朝来市、広島県三原市、愛媛県今治市、岡山県津山市
【特別参加】
清水山城楽クラブ(滋賀県高島市)、吉永の里山と文化財を守る会(滋賀県湖南市)

●第18回全国山城サミット　静岡県浜松市

【日時】平成23年11月19日(土)～11月20日(日)
【会場】アクトシティ浜松中ホール、二俣城、鳥羽山城
【主催】浜松市、浜松市教育委員会、第18回全国山城サミット連絡協議会浜松大会実行委員会
【テーマ】徳川・武田争奪の城郭群を活かしたまちづくり
【開催内容】
①基調講演
講師:小和田哲男氏(静岡大学名誉教授)
演題:「徳川・武田その抗争と遠州の山城」
②シンポジウム
テーマ:「徳川・武田争奪の城郭群を活かしたまちづくり」
事例発表①
「二俣城・鳥羽山城における近年の調査成果について」
講師:浜松市文化財課
事例発表②
「徳川・武田・今川氏が競った城郭群を活かしたまちづくり」
講師:中井均氏
事例発表③
「高根城の復元整備とまちおこし」
講師:加藤理文氏
事例発表④
「国民文化祭・城跡フェスティバルの経験」

講師：辰巳均氏
パネルディスカッション
コーディネーター：中井均氏（滋賀県立大学人間文化学部准教授）
パネラー：小和田哲男氏（静岡大学名誉教授）
加藤理文氏（織豊期城郭研究会）
辰巳均氏（前浜松市埋蔵文化財課長）
③史跡現地見学会
二俣城跡、鳥羽山城跡

【参加自治体】
栃木県佐野市、群馬県太田市、富山県魚津市、富山県砺波市、福井県美浜町、静岡県島田市、静岡県御殿場市、静岡県伊豆市、静岡県磐田市、静岡県菊川市、静岡県牧之原市、愛知県豊田市、愛知県新城市、三重県亀山市、滋賀県湖南市、兵庫県朝来市、岡山県津山市、広島県三原市、愛媛県今治市、静岡県浜松市

【特別参加】
清水山城楽クラブ（滋賀県高島市）、吉永の里山と文化財を守る会（滋賀県湖南市）

●第19回全国山城サミット　富山県魚津市

【日時】平成24年10月13日（土）～10月14日（日）
【会場】新川文化ホール、松倉城跡
【主催】魚津市、魚津市教育委員会、財団法人自治総合センター
【テーマ】中世戦国山城を活かしたまちづくりとは
【開催内容】
①史跡現地見学会
②記念講演
講師：中井均氏（滋賀県立大学人間文化学部准教授）
演題：「戦国の山城の魅力を語る」
③シンポジウム
基調講演①
講師：高岡徹氏
演題：「松倉城とその支城群について」
基調講演②
講師：新保誠吾氏
演題：「春日山城について」
基調講演③
講師：高橋順之氏
演題：「京極氏館・上平寺城について」
パネルディスカッション
コーディネーター：中井均氏（滋賀県立大学人間文化学部准教授）
パネラー：高岡徹氏（とやま歴史的環境づくり研究会代表）
新保誠吾氏（新潟県上越市教育委員会）
高橋順之氏（滋賀県米原市教育委員会）

【参加自治体】
群馬県太田市、新潟県上越市、富山県氷見市、富山県砺波市、富山県富山市、富山県上市町、福井県美浜町、静岡県浜松市、愛知県豊田市、三重県亀山市、滋賀県湖南市、滋賀県高島市、滋賀県米原市、兵庫県朝来市、広島県三原市、愛媛県今治市、富山県魚津市

【特別参加】
清水山城楽クラブ（滋賀県高島市）、吉永の里山と文化財を守る会（滋賀県湖南市）

●第20回全国山城サミット　兵庫県朝来市

【日時】平成25年11月9日（土）～11月10日（日）
【会場】朝来市和田山ジュピターホール、竹田城跡、たけだ城下町交流館
【主催】朝来市、朝来市教育委員会
【テーマ】未来へつなぐ～山城の保存と活用
～歴史遺産への誇り、愛着を持てるまちづくり～
【開催内容】
①記念講演
講師：田辺眞人氏（園田学園女子大学名誉教授）
演題「竹田城の保存と活用～文化遺産を活かした地域振興」
②パネルディスカッション
コーディネーター：田辺眞人氏
パネラー：冨士谷英正氏（近江八幡市長）
首藤勝次氏（竹田市長）
多次勝昭氏（朝来市長）

【参加自治体】
群馬県太田市、新潟県上越市、富山県魚津市、静岡県浜松市、三重県亀山市、福井県美浜町、滋賀県東近江市、滋賀県湖南市、滋賀県近江八幡市、滋賀県甲賀市、京都府福知山市、鳥取県鳥取市、鳥取県安来市、広島県三原市、愛媛県今治市、長崎県壱岐市、大分県竹田市、兵庫県朝来市

●第21回全国山城サミット　鳥取県鳥取市

【日時】平成26年9月27日（土）～9月28日（日）
【会場】鳥取市とりぎん文化会館梨花ホール
【主催】第21回全国山城サミット鳥取大会実行委員会、財団法人自治総合センター
【テーマ】まちの礎・城跡を活かした魅力づくり
～地域観光への活用とその可能性～
【開催内容】
①記念落語
講師：春風亭昇太氏
②記念講演
講師：小和田哲男氏（静岡大学名誉教授）
演題：「軍師官兵衛の時代と鳥取城～時代考証の立場から」
③報告
報告者：佐々木孝文氏（鳥取市教育委員会文化財課課長補佐）
演題：「鳥取城跡を活かしたまちづくり」
④パネルディスカッション
司会：中井均氏（滋賀県立大学人間文化学部教授）
萩原さちこ（城郭ライター）
パネラー：小和田哲男氏
春風亭昇太氏
池野祐季氏（朝来市産業経済部竹田城課主査）
細田隆博氏（鳥取市教育委員会文化財課主任）

【参加自治体】
栃木県佐野市、富山県魚津市、富山県砺波市、福井県美浜町、滋賀県高島市、滋賀県米原市、滋賀県甲賀市、兵庫県朝来市、鳥取県鳥取市、鳥取県若桜町、島根県安来市、広島県三原市、愛媛県今治市、愛媛県松野町、大分県竹田市、佐野市観光協会

【特別参加】
番場の歴史を知り明日を考える会、上平寺戦国浪漫倶楽部、美作の中世山城連絡協議会、森の国山城の会、久松山を考える会、とっとり観光ガイドの会

●第22回全国山城サミット　滋賀県米原市

【日時】平成27年10月24日（土）～10月25日（日）
【会場】滋賀県立文化産業交流会館
【主催】米原市、米原市教育委員会
【テーマ】地域とともに！山城を舞台に！
【開催内容】

①記念講演
講師:中井均氏(滋賀県立大学教授)
演題:「城跡活用のこれから」
②講演
講師:萩原さちこ氏(城郭ライター)
演題:「城と名物」
③事例報告
報告1:富山県砺波市増山城跡
報告者:野原大輔氏
報告2:福井県美浜町国吉城跡
報告者:大野康弘氏
報告3:岐阜県可児市美濃金山城跡
報告者:長沼毅氏
報告4:滋賀県米原市鎌刃城跡・上平寺城跡
報告者:高橋順之氏
④パネルディスカッション
司会:中井均氏(滋賀県立大学教授)
パネラー:萩原さちこ氏(城郭ライター)・各報告者
安ヵ川尚司氏(増山城曲輪の会)
南完治氏(佐柿国吉会)
三好哲広氏(蘭丸振興会)
泉峰一氏(近江のろしの会)

【参加自治体】
福島県桑折町、栃木県佐野市、群馬県太田市、富山県魚津市、富山県砺波市、福井県美浜町、静岡県島田市、静岡県浜松市、静岡県牧之原市、愛知県豊田市、岐阜県可児市、三重県亀山市、滋賀県彦根医師、滋賀県長浜市、滋賀県米原市、滋賀県湖南市、滋賀県甲賀市、兵庫県朝来市、鳥取県鳥取市、島根県安来市、広島県三原市、愛媛県今治市、愛媛県松野町、大分県竹田市

●第23回全国山城サミット　大分県竹田市

【日時】平成28年10月22日(土)～10月23日(日)
【会場】大分県立竹田高等学校、岡城跡
【主催】全国山城サミット竹田大会実行委員会
【テーマ】「荒城の月」ゆかり「岡城」は18の山城が待つ
【開催内容】
①岡城の魅力解説
講師:中西義昌氏(北九州市立自然史・歴史博物館学芸員)
演題:「岡城再発見～豊後南郡衆の山城から中川氏の居城へ」
②記念講演
講師:千田嘉博氏(奈良大学教授・城郭考古学者)
演題:「山城から岡藩の歴史を読み取る～岡城石垣の魅力」
③基調講演
講師:藤原恵洋氏(九州大学大学院芸術工学研究院教授)
講師:西山徳明氏(北海道大学観光学高等研究センターセンター長)

【参加自治体】
福島県桑折町、栃木県佐野市、群馬県太田市、富山県砺波市、福井県美浜町、静岡県浜松市、岐阜県可児市、滋賀県米原市、滋賀県甲賀市、兵庫県朝来市、奈良県高取町、島根県安来市、山口県山口市、愛媛県今治市、愛媛県松野町、福岡県苅田町、佐賀県鳥栖市、大分県竹田市、大分県玖珠町、宮崎県宮崎市
【特別参加】
佐野市観光協会、苅田町観光協会、苅田町ガイドの会

●第24回全国山城サミット　栃木県佐野市

【日時】平成29年11月25日(土)～11月26日(日)
【会場】佐野市文化会館、唐沢山城
【主催】全国山城サミット佐野大会実行委員会、一般財団法人自治総合センター
【開催内容】
①事例発表
「天空の城竹田城の取り組み」
発表者:宮田夏喜氏(朝来市観光交流課)
「名城大田金山城の取り組み」
発表者:島田孝雄氏(太田市教育委員会文化財課)
②基調提言
講師:宮武正登氏(佐賀大学全学教育機構教授)
演題:「目指すべき山城の保存活用策」
③記念講演
講師:千田嘉博(奈良大学教授)
演題:「世界の城、日本の城、そして唐沢山城の魅力」
④パネルディスカッション
コーディネーター:浅野晴樹氏(元埼玉県立さきたま史跡の博物館館長)
パネラー:千田嘉博氏(奈良大学教授)
宮武正登氏(佐賀大学全学教育機構教授)
春風亭昇太氏
ダイアモンドユカイ氏
コメンテーター:峰岸純夫氏(東京都立大学名誉教授)

【参加自治体】
福島県桑折町、栃木県栃木市、栃木県佐野市、群馬県太田市、新潟県村上市、新潟県上越市、新潟県胎内市、富山県砺波市、福井県美浜町、長野県松本市、長野県上田市、岐阜県可児市、静岡県浜松市、静岡県島田市、滋賀県甲賀市、兵庫県上郡町、兵庫県朝来市、奈良県高取町、島根県安来市、愛媛県今治市、愛媛県松野町、大分県竹田市、宮崎県宮崎市

●第25回全国山城サミット　島根県安来市

【日時】平成30年9月23日(日・祝)～9月24日(月・振休)
【会場】安来市総合文化ホール「アルテピア」、月山富田城跡、京羅木山、勝山
【主催】全国山城サミット安来大会実行委員会、一般財団法人自治総合センター
【開催内容】
①基調講演
講師:小和田哲男氏(静岡大学名誉教授、(公財)日本城郭協会理事長)
演題:「月山富田城の魅力と楽しみ方」
②講演1
講師:萩原さちこ氏(城郭ライター・編集者)
演題:「山城の歩き方」
③講演2
講師:中井均氏(滋賀県立大学教授)
演題:「縄張から山城を読み解く」
④松村邦洋トークショー
出演:松村邦洋氏
鈴木智博氏(戦国魂プロデューサー)
⑤パネルディスカッション
コーディネーター:中井均氏
萩原さちこ氏
パネラー:小和田哲男氏
鈴木智博氏
平原金造氏(月山富田城跡整備を支援する会会長)

【参加自治体】
栃木県佐野市、群馬県太田市、富山県魚津市、福井県美浜町、長野県松本市、長野県上田市、岐阜県可児市、静岡県島田市、滋賀

県甲賀市、兵庫県上郡町、兵庫県朝来市、奈良県高取町、鳥取県米子市、島根県雲南市、島根県奥出雲町、岡山県津山市、広島県安芸高田市、山口県山口市、愛媛県今治市、愛媛県松野町、大分県竹田市、岐阜県中津川市、岐阜県恵那市

●第26回全国山城サミット　岐阜県可児市

【日時】令和元年11月9日(土)～11月10日(日)
【会場】可児市文化創造センターala、美濃金山城跡、久々利城跡、今城跡、明智城跡
【主催】全国山城サミット可児大会実行委員会、一般社団法人自治総合センター
【開催内容】
①基調講演
講師：中井均氏(滋賀県立大学教授)
演題：「可児の山城～その魅力発信」
②パネルディスカッション
テーマ：「全国に届け、山城を守る地域の力」
コーディネーター：クリス・グレン氏(お城好きラジオDJ)
パネラー：萩原さちこ氏(城郭ライター)
丹波隆政氏
丹羽保之氏
鈴木菊雄氏(可児市山城連絡協議会)
③トークイベント
テーマ「山城フェッショナルの頂上会議in可児」
コーディネーター：長江真和氏(可児市文化スポーツ部文化財課)
パネラー：中井均氏
演題：「可児の山城～その魅力発信」
④パネルディスカッション
テーマ：「全国に届け、山城を守る地域の力」
コーディネーター：クリス・グレン氏(お城好きラジオDJ)
萩原さちこ氏(城郭ライター)
パネラー：丹波隆政氏
丹羽保之氏
鈴木菊雄氏(可児市山城連絡協議会)
⑤トークイベント
テーマ：「山城フェッショナルの頂上会議in可児」
コーディネーター：長江真和氏(可児市文化スポーツ部文化財課)
パネラー：中井均氏
加藤理文氏(日本城郭協会理事)
萩原さちこ氏
香川元太郎氏(イラストレーター)
宮下秀樹氏(作家)
⑥トークイベント
テーマ：「山城最前線2019～我ラ、イ可児ヤマジロヲ愉シムベキカ」
出演：長谷川ヨシテル氏(歴史ナビゲーター)
晴野未子氏(歴史タレント)
鈴木智博氏(戦国魂プロデューサー)
⑦トークイベント
テーマ：「歴史の行間で物語を創る～大河ドラマの楽しみ方」
出演：吉川邦夫氏(2016年大河ドラマ「真田丸」制作統括)
⑧記念講演
講師：河合敦氏(歴史研究家)
演題：「世界一受けたい、戦国武将とお城の授業」
【参加自治体】
福島県桑折町、群馬県太田市、富山県魚津市、富山県砺波市、石川県七尾市、福井県美浜町、長野県松本市、長野県千曲市、長野県上田市、長野県坂城町、岐阜県中津川市、岐阜県恵那市、静岡県島田市、静岡県掛川市、静岡県磐田市、静岡県牧之原市、愛知県豊橋市、愛知県新城市、滋賀県長浜市、滋賀県米原市、滋賀県彦根市、滋賀県甲賀市、兵庫県朝来市、奈良県高取町、島根県米子市、島根県安来市、岡山県津山市、愛媛県今治市、愛媛県松野町、大分県竹田市、宮崎県宮崎市

●第27回全国山城サミット　長野県上田市・坂城町

【日時】令和2年10月31日(土)～11月1日(日)
【会場】オンライン講演会、葛尾城跡、和合城跡、虚空蔵城跡、飯綱山城跡、砥石・米山城跡
【主催】全国山城サミット上田・坂城大会実行委員会、全国山城サミット連絡協議会、上田市、上田市教育委員会
【開催内容】
オンライン講演会
①基調講演
講師：千田嘉博氏(奈良大学教授、史跡上田城跡整備専門家会議委員)
演題：「上田城と真田の山城」
②報告1
講師：河西克造氏(長野県埋蔵文化財センター主任調査研究員)
演題：長野県における山城の調査・研究動向～考古学の立場から
③報告2
講師：竹原学氏(松本市教育委員会文化財課長)
演題：松本地方の山城について～最新の成果から
④報告3
講師：遠藤公洋氏(長野市立豊野中学校教諭)
演題：「山城」の遺構を「資料」とする試み～北信地域から
⑤報告4
講師：尾見智志氏(上田市立信濃国分寺資料館長)
演題：「上田盆地の山城について」～虚空蔵山系山城群を中心として
⑥トークセッション
テーマ：「長野県内の山城研究の現状と課題
～山城の魅力と価値を地域と共有するために」
出演：河西克造氏
竹原学氏
遠藤公洋氏
尾見智志氏
⑦報告5
テーマ：「山城の保護活用と地域協働」
～公民館の取り組みと「保存団体連絡協議会」設立に向けて
出演：太郎山山系を楽しくつくる会
砥石伊の会
砥石・米山城跡保存会
葛尾城跡保存会
和合城跡保存会
⑧特別企画
テーマ：「山城の魅力とは
～上田・坂城地域の山城を訪ねて～」
パネラー：春風亭昇太氏(落語家)
千田嘉博氏
平山優氏(大河ドラマ『真田丸』時代考証)
萩原さちこ氏(城郭ライター、日本城郭協会理事)

●第28回全国山城サミット　福島県桑折町

【日時】令和3年10月30日(土)～10月31日(日)
【会場】オンライン開催(桑折町民体育館、史跡桑折西山城跡)
【主催】全国山城サミット桑折大会実行委員会、桑折町、桑折町教育委員会
【開催内容】
①戦国ステージ
大川義秋氏箏生演奏
奥州・仙台おもてなし集団伊達武将隊・やまがた愛の武将隊・忍城おもてなし甲冑隊演武
②歴史トーク
基調講演
講師:千田嘉博氏(城郭考古学者)
演題:「桑折西山城と戦国の山城」
歴史対談
春風亭昇太氏(落語家)
千田嘉博氏(城郭考古学者)
③桑折西山城跡現地からの配信
半田醸芳小学校4年生「半田銀山祇園ばやし」披露
片倉鉄砲隊古式銃術披露
桑折西山城跡本丸から「全国山城サミット宣言」

●第29回全国山城サミット　岐阜県恵那市

【日時】令和4年10月22日(土)～10月23日(日)
【会場】恵那文化センター、岩村城下町、日本大正村広場周辺
【主催】第29回全国山城サミット恵那大会実行委員会
【開催内容】
①記念講演
講師:中井均氏
演題:「全国に誇る、恵那の山城～その魅力と先人たちの誇り」
②古戦場おもてなし武将隊関ケ原組「演武」
③パネルディスカッション
テーマ:「恵那の山城を語り尽くす！！」
出演:中井均氏
クリス・グレン氏
萩原さちこ氏
西村知穂氏
【参加自治体】
福島県桑折町、群馬県太田市、埼玉県寄居町、新潟県村上市、新潟県胎内市、富山県砺波市、石川県七尾市、福井県美浜町、長野県上田市、長野県坂城町、岐阜県中津川市、岐阜県土岐市、岐阜県可児市、岐阜県飛騨市、岐阜県山県市、静岡県島田市、静岡県掛川市、静岡県下田市、愛知県豊橋市、愛知県豊田市、愛知県新城市、愛知県設楽町、滋賀県甲賀市、兵庫県朝来市、奈良県高取町、鳥取県米子市、愛媛県今治市

●第30回全国山城サミット　兵庫県朝来市

【日時】令和5年11月18日(土)～19日(日)
【会場】和田山ジュピターホール、山城の郷
【主催】朝来市
【実施主体】(一社)朝来市観光協会
【協力】ヴィッセル神戸
【開催内容】
①オープニングセレモニー
書道家華汀(Katei)氏書道パフォーマンス
和田山虎臥陣太鼓演奏
②記念対談
テーマ:「竹田城跡の魅力」
出演:高橋英樹氏
千田嘉博氏
③パネルディスカッション
テーマ:「山城における保存・活用の最前線」
パネラー:千田嘉博氏(名古屋市立大学高等教育院教授・奈良大学特別教授)
本岡勇一氏(ユーザック株式会社)
宮崎博司氏(佐賀県立肥前名護屋城博物館)
大川拓也氏(朝来市教育委員会文化財課)
④スペシャルトークショー
出演:槙野智章氏(サッカー元日本代表・ヴィッセル神戸エバンジェリスト)
近藤岳登氏(元プロサッカー選手・現マルチタレント)
⑤ヴィッセル神戸キックターゲット
⑥キッチンカー／戦国グッズ販売
【参加自治体】
群馬県太田市、富山県魚津市、石川県七尾市、福井県小浜市、福井県美浜町、長野県上田市、岐阜県恵那市、岐阜県可児市、岐阜県山県市、静岡県掛川市、愛知県新城市、滋賀県甲賀市、大阪府高槻市、兵庫県丹波市、兵庫県宍粟市、兵庫県赤穂郡上郡町、鳥取県米子市、島根県益田市、岡山県津山市、愛媛県今治市

●第31回全国山城サミット　島根県益田市

【日時】令和6年11月16日(土)～27日(日)
【会場】島根県芸術文化センター「グラントワ」、益田市立歴史文化交流館れきしーな、七尾城ほか
【主催】益田市、益田の歴史文化を活かした観光拠点づくり実行委員会、一般財団法人自治総合センター
【後援】総務省、島根県、島根県教育委員会
【開催内容】
①オープニングアトラクション
石見神楽(益田市石見神楽神和会)
②基調講演
講師:千田嘉博氏
演題:「七尾城の特徴」
③記念対談
テーマ:「七尾城の魅力を語ろう！七尾城は戦国最強の城なのか」
出演:石原良純氏
千田嘉博氏
④パネルディスカッション
テーマ:「中世益田城下の魅力を語ろう！」
コーディネーター:千田嘉博氏
パネラー:萩原さちこ氏(城郭ライター)
岩井賢朗氏(益田「中世の食」再現プロジェクト代表)
中司健司氏(益田市歴史文化研究センター主任)
⑤益田市立歴史文化交流館れきしーな会場
岩国藩鉄砲隊保存会演武
森山光太郎(作家)講演会「時の守人益田一族」
城・歴史館関連ブース出展
企画展「中世益田の山城」
⑥七尾城跡会場
スポットガイドによる本丸跡からの狼煙
スポーツチャンバラ体験
弓矢射的体験
飲食ブース足軽雑炊
⑦三宅土居跡会場
地元グルメ等飲食ブース出展
体験ブース(石見神楽、安来節など)

日本遺産周遊デジタルスタンプラリー
県立益田高校による甲冑乗馬体験
益田川から眺める七尾城カヌー体験等

【参加自治体】
福島県会津美里町、群馬県太田市、富山県砺波市、石川県七尾市、石川県白山市、福井県小浜市、福井県美浜町、岐阜県飛騨市、愛知県新城市、滋賀県長浜市、大阪府高槻市、兵庫県朝来市、奈良県高取町、鳥取県米子市、島根県安来市、島根県江津市、岡山県津山市、広島県安芸高田市、広島県北広島町、島根県益田市

●第32回全国山城サミット　石川県白山市

【日時】令和7年9月14日(日)～15日(月・祝)
【会場】白山市立松任文化会館ピーノ、道の駅一向一揆の里、鳥越城跡附二曲城跡
【主催】白山市、北國新聞社、第32回全国山城サミット白山大会実行委員会
【開催内容】
①オープニングアトラクション
鳥越城一向一揆物語(白山市立鳥越中学校)
②記念講演
講師:大澤研一氏
演題:「織田信長・本願寺の戦いと一向一揆
～一揆は何を求めたのか」
③パネルディスカッション
テーマ:「石川の山城～能登半島地震をふまえて」
パネラー:春風亭昇太氏(落語家)
千田嘉博氏(城郭考古学者)
宮下英樹氏(漫画家)
向井裕知氏(金沢市埋蔵文化財センター)
④鳥越センゴクフェスタ
五箇山塩硝鉄砲隊演武、城山太鼓(城山泰子保存会)、三ツ屋野ニワカ、鳥越城哀歌(北川会)、デジタル紙芝居「手取川の戦いと松任城」「山内衆と鳥越城」、「加賀一向一揆鳥越残照」(金沢琴・邦楽の会)、和太鼓集団「翔」演奏、民謡、講演(吉村正夫氏／町おこしの会)
④展覧会
会場:白山市立博物館
特別展「北陸最強の山城」展
会場:鳥越一向一揆歴史館
「一向一揆最後の砦鳥越城の40年を振り返る」展
宮下英樹「センゴク天正記」原画展

【参加自治体】
福島県桑折町、福島県会津美里町、群馬県太田市、新潟県胎内市、富山魚津市、富山県砺波市、石川県金沢市、石川県七尾市、石川県加賀市、石川県白山市、石川県宝達志水町、福井県小浜市、福井県美浜町、長野県上田市、愛知県豊田市、愛知県新城市、滋賀県米原市、滋賀県湖南市、滋賀県甲賀市、大阪府高槻市、兵庫県朝来市、奈良県高取町、鳥取県米子市、島根県益田市、愛媛県今治市、宮崎県宮崎市

●第33回全国山城サミット　愛知県新城市

【日時】令和8年11月28日(土)～29日(日)
【会場】新城文化会館、長篠城、亀山城、古宮城、新城城
【主催】新城市、新城市教育委員会、一般財団法人自治総合センター
【開催内容】
①オープニングアトラクション
長篠陣太鼓
長篠城学習発表(新城市立鳳来中部小学校)
②基調講演
講師:小和田哲男氏(静岡大学名誉教授)
演題:「三遠南信の戦国時代～今川・武田・徳川の戦い」
③シンポジウム
テーマ:「東三河の山城～新城を中心に」
パネラー:千田嘉博氏(名古屋市立大学高等教育院教授)
平山優氏(健康科学大学特任教授)
④記念講演会
講師:柴裕之氏(東洋大学非常勤講師)
演題:「戦国期奥平家の動向と信昌・亀姫」
⑤記念音楽祭
出演:奥三河音楽連盟
⑥山城など関連ブース出展
⑦演能
出演:新城能楽社
⑧火縄銃演武
出演:長篠・設楽原鉄砲隊
⑨企画展
『しんしろの城～新城』設楽原歴史資料館
『しんしろの城～鳳来』長篠城址史跡保存館
『しんしろの城～作手』作手歴史民俗資料館

【参加自治体】
福島県会津美里町、群馬県太田市、富山県砺波市、石川県金沢市、石川県七尾市、石川県白山市、石川県宝達志水町、福井県小浜市、福井県美浜町、長野県上田市、岐阜県岐阜市、岐阜県中津川市、岐阜県恵那市、岐阜県可児市、岐阜県飛騨市、岐阜県土岐市、静岡県浜松市、静岡県磐田市、静岡県菊川市、静岡県森町、愛知県豊橋市、愛知県豊田市、愛知県新城市、愛知県設楽町、滋賀県米原市、滋賀県長浜市、滋賀県湖南市、滋賀県甲賀市、大阪府高槻市、兵庫県丹波市、兵庫県朝来市、鳥取県米子市、鳥取県湯梨浜町、島根県益田市、岡山県津山市、愛媛県今治市、宮崎県宮崎市

第33回 全国山城サミット 新城大会 資料集

開催日 令和8年11月28日(土)～29日(日)
主　催 新城市・新城市教育委員会・一般財団法人自治総合センター
発行日 令和8年11月28日
発　行 新城市教育委員会
協　力 全国山城サミット連絡協議会